岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第335集

大向上平遺跡発掘調査報告書

広域農道整備事業関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

おおむかいうわだいら

大向上平遺跡発掘調査報告書

広域農道整備事業関連遺跡発掘調査

序

岩手県には旧石器時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地にあり、平成10年度の岩手県教育委員会のまとめでは10,000箇所を超えております。先人の残したこれらの埋蔵文化財を保護し、保存してゆくことは私たち県民に課せられた重大な責務であります。

一方、調査の原因となりました広域農道整備事業を例にあげるまでもなく、現代社会を豊かにし、快適な生活を送るための地域開発もまた県民の切実な願いであります。埋蔵文化財の保護・保存と地域開発という相容れない要素を持つ事業との調和の取れた施策が今日的課題となっております。

財団法人岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、埋蔵文化財保護の立場に立って、県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本書は、広域農道整備事業に関連して平成9年度～10年度にかけて行われた大向上平遺跡の調査結果をまとめたものであります。遺跡は、縄文時代後期・平安時代を主体とすることが明らかとなりました。とくに縄文時代後期の硬玉製大珠が発見されたことや、平安時代の畠跡の可能性のある畝間状遺構が確認されたことで、貴重な資料を提供することができました。本書が広く活用され、考古学の研究に寄与するとともに埋蔵文化財に対する関心と理解をいっそう深めることに役立つことを切に希望いたします。

最後になりましたが、発掘調査および報告書作成にご協力とご支援を賜りました二戸地方振興局二戸農村整備事務所や二戸市教育委員会をはじめとする多くの関係機関・関係各位に深く感謝申し上げます。

平成11年12月

財団法人岩手県文化振興事業団
理事長　船　越　昭　治

例　言

1．本報告書は岩手県二戸市大字似鳥字大向上平85ほかに所在する大向上平遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。

2．本遺跡の岩手県遺跡台帳の遺跡番号と遺跡略号は次の通りである。

遺跡番号　JE18－0199　　遺跡略号　OMK－97・OMK－98

3．本遺跡の調査は広域農道整備事業二戸地区に伴う緊急調査である。調査は二戸地方振興局二戸農村整備事務所と岩手県教育委員会事務局文化課との協議を経て、二戸地方振興局の委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

4．野外調査の期間と調査面積・調査担当者は次の通りである。

期間：　平成９年　7月1日～8月31日

平成10年　6月1日～8月31日

調査面積：　平成９年　2,000㎡　　調査担当者：大森博文・中村直美

平成10年　3,000㎡　　調査担当者：中村直美・平めぐみ

5．室内整理作業は次の期間実施した。

平成９年　12月１日～2月27日　　整理担当者：中村直美

平成10年　11月１日～3月31日　　整理担当者：中村直美・平めぐみ

6．出土品の鑑定および分析は次の個人・機関に依頼した。(敬称略)

石材鑑定：花崗岩研究会（代表：矢内桂三）

花粉分析・植物珪酸体分析・火山灰同定：パリノ・サーヴェイ株式会社

7．座標原点の測量および空中写真撮影は、次の機関に委託した。

座標原点の測量：平成9年　東日本測量設計株式会社　平成10年　有限会社下斗米測量設計

空中写真撮影：平成9年　東邦航空株式会社　平成10年　株式会社ハイマーテック

8．発掘調査において次の機関の協力を得た。

二戸地方振興局二戸土地改良事業所・二戸市教育委員会

9．野外調査では二戸市の方々のご協力を頂いた。

10．本書の執筆は、Ⅰ．調査に至る経過を高橋與右衛門が、その他を中村直美が担当した。

11．本報告書の作成にあたっては下記の方々にご指導を頂いた。(50音順・敬称略)

赤羽真由美、井上雅孝、奥山一絵、門嶋知二、木島勉、小島敦子、児玉大成、小林和彦、佐藤智雄、鈴木正志、関俊明、関豊、高橋香織、高橋智佳子、茅野嘉雄、中村哲也、能登健、秦光次郎、東本茂樹、平井進、平山明寿、福田友之、福田祐二、山口巌

12．本遺跡で出土した遺物および調査資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

13．実測図の凡例等は2.（2）整理方法に記載した。

目　　次

序
例言

〔本文目次〕

Ⅰ．調査に至る経過 …… 1
Ⅱ．遺跡の立地と環境 …… 1
1．立地と環境 …… 1
2．調査方法と整理方法 …… 7
(1) 調査方法 …… 7
(2) 整理方法 …… 7
3．基本土層 …… 9
Ⅲ．検出された遺構と遺物 …… 9
1．縄文時代 …… 9
(1) 埋設土器 …… 9
2．平安時代 …… 12
(1) 竪穴住居跡 …… 12
(2) 堀立柱建物跡 …… 53
(3) 土抗 …… 55
(4) 畝間状遺構 …… 63
(5) 柱穴列 …… 70
Ⅳ．遺構外の出土遺物 …… 74
1．縄文土器 …… 74
2．石器・石製品 …… 75
3．土師器・須恵器 …… 75
4．土製品 …… 75
5．鉄製品 …… 75
Ⅴ．まとめ …… 78
遺構 …… 78
1．縄文時代 …… 78
2．平安時代 …… 78
遺物 …… 83
1．縄文時代 …… 83
2．平安時代 …… 83
Ⅵ．おわりに …… 86
Ⅶ．鑑定・分析 …… 87
1．硬玉製大珠 …… 87
2．畝間状遺構 …… 98

〔表目次〕

第1表　周辺の遺跡一覧表 …… 5

〔図版目次〕

第1図　岩手県図に見る遺跡の位置 …… 2
第2図　遺跡周辺地形図 …… 6
第3図　遺跡周辺地形分類図 …… 3
第4図　周辺遺跡分布図 …… 4
第5図　基本土層柱状図 …… 9
第6図　1・2号埋設土器 …… 10
第7図　1・2号埋設土器出土遺物 …… 11
第8図　1号竪穴住居跡 …… 12
第9図　1号竪穴住居跡 …… 13
第10図　2号竪穴住居跡① …… 14
第11図　2号竪穴住居跡② …… 15
第12図　2号竪穴住居跡出土遺物① …… 16
第13図　2号竪穴住居跡出土遺物① …… 17
第14図　3号竪穴住居跡① …… 19
第15図　3号竪穴住居跡② …… 20
第16図　3号竪穴住居跡出土遺物① …… 21
第17図　3号竪穴住居跡出土遺物② …… 22
第18図　3号竪穴住居跡出土遺物③ …… 23
第19図　3号竪穴住居跡出土遺物④ …… 24
第20図　4号竪穴住居跡 …… 26
第21図　4号竪穴住居跡出土遺物① …… 27
第22図　4号竪穴住居跡出土遺物② …… 28
第23図　4号竪穴住居跡出土遺物③ …… 29
第24図　4号竪穴住居跡出土遺物④ …… 30

第25図　4号竪穴住居跡出土遺物⑤……31
第26図　5号竪穴住居跡……33
第27図　5号竪穴住居跡出土遺物①……34
第28図　5号竪穴住居跡出土遺物②……35
第29図　6号竪穴住居跡……36
第30図　6号竪穴住居跡出土遺物……37
第31図　7号竪穴住居跡①……39
第32図　7号竪穴住居跡②……40
第33図　7号竪穴住居跡出土遺物……41
第34図　8号竪穴住居跡①……43
第35図　8号竪穴住居跡②……44
第36図　8号竪穴住居跡出土遺物①……45
第37図　8号竪穴住居跡出土遺物②……46
第38図　8号竪穴住居跡出土遺物③……47
第39図　9号竪穴住居跡……48
第40図　9号竪穴住居跡出土遺物……49
第41図　10号竪穴住居跡……51
第42図　10号竪穴住居跡出土遺物……52
第43図　1号掘立柱建物跡……54
第44図　1~4号土坑……56
第45図　5・6号土坑……58
第46図　7~10・12号土坑……60
第47図　11・13~18号土坑……62
第48図　1号畝間状遺構……63
第49図　2・3号畝間状遺構……65
第50図　4号畝間状遺構……66
第51図　5号畝間状遺構……67
第52図　その他遺構内出土遺物①……68
第53図　その他遺構内出土遺物②……69
第54図　遺構配置図……71・72
第55図　1・2号柱穴列……73
第56図　遺構外出土遺物①……76
第57図　遺構外出土遺物②……77

〔写真図版目次〕

写真図版1　出土遺物……106
写真図版2　空中写真1……107
写真図版3　空中写真2……108
写真図版4　基本層序・埋設土器……109
写真図版5　1号竪穴住居跡……110
写真図版6　2号竪穴住居跡……111
写真図版7　3号竪穴住居跡……112
写真図版8　4号竪穴住居跡……113
写真図版9　5号竪穴住居跡……114
写真図版10　6号竪穴住居跡……115
写真図版11　7号竪穴住居跡……116
写真図版12　8号竪穴住居跡……117
写真図版13　9号竪穴住居跡……118
写真図版14　10号竪穴住居跡……119
写真図版15　1号掘立柱建物跡
1・2号土坑……120
写真図版16　3~6号土坑……121
写真図版17　7~10・12~13号土坑……122
写真図版18　11・14~18号土坑……123
写真図版19　1~3号畝間状遺構……124
写真図版20　2~3号畝間状遺構……125
写真図版21　4号畝間状遺構……126
写真図版22　5号畝間状遺構……127
写真図版23　1~2号柱穴列……128
写真図版24　1~2号埋設土器遺物
1号竪穴住居跡出土遺物……129
写真図版25　2号竪穴住居跡出土遺物……130
写真図版26　3号竪穴住居跡出土遺物①……131
写真図版27　3号竪穴住居跡出土遺物②……132
写真図版28　4号竪穴住居跡出土遺物①……133
写真図版29　4号竪穴住居跡出土遺物②……134
写真図版30　4号竪穴住居跡出土遺物③……135
写真図版31　5号竪穴住居跡出土遺物……136
写真図版32　6号竪穴住居跡出土遺物……137
写真図版33　7号竪穴住居跡出土遺物
8号竪穴住居跡出土遺物①……138
写真図版34　8号竪穴住居跡出土遺物②……139
写真図版35　9号竪穴住居跡出土遺物
10号竪穴住居跡出土遺物……140
写真図版36　その他遺構内出土遺物……141
写真図版37　遺構外出土遺物……142

Ⅰ．調査に至る経過

大向上平遺跡は「広域農道整備事業二戸地区」の道路工事施工に伴って、その事業区域内に位置することから発掘調査することとなったものである。

「広域農道整備事業二戸地区」は各営農団地に設置された農業近代化施設あるいは、広域施設を通じ東北自動車道につながり、京浜地方市場への輸送体系の確立を図るための基幹農道として実施するものである。

当事業の施行にかかる埋蔵文化財の取り扱いについては、岩手県二戸地方振興局二戸土地改良事業所から平成８年６月７日付け二土地第214号「広域農道整備事業二戸地区の施行に伴う埋蔵文化財の分布調査について（依頼）」の文書によって岩手県教育委員会に対して分布調査の依頼を実施したのが最初である。依頼を受けた岩手県教育委員会では、平成８年３月24日に分布調査を実施したが、その結果は平成8年8月12日付け教文413号「広域農道整備事業二戸地区に係る埋蔵文化財の分布調査について（回答）」で二戸土地改良事業所へ回答し、その際工事施行範囲内が大向上平遺跡の範囲内であることが付記された。

回答を受けた二戸土地改良事業所では、平成9年2月25日付け二土地第882号「広域農道整備事業二戸地区の施行に係る埋蔵文化財の試掘調査依頼について」の文書で岩手県教育委員会に依頼し、依頼を受けた岩手県教育委員会では、電話口答により平成9年3月24日に試掘調査を実施する旨の回答があった。

試掘調査の結果は平成9年4月1日付け教文第7号により回答があり、発掘調査の必要がありと判断された。

発掘調査については、平成9年度分の発掘調査の予定は決定されており対応は無理であった。しかし、当事業所で平成9年度分発掘調査予定であった一般農道整備事業赤屋敷地区の発掘調査が予算の関係上無理となったため、岩手県教育委員会に地区の変更を要望していたところ、平成9年4月22日に一般農道整備事業赤屋敷地区に相当する分の面積であれば対応可能との回答を得た。それにより、平成9年4月28日付け二土地第145号「平成9年度埋蔵文化財発掘調査事業の地区変更申請について」で、調査地区の変更を行った。通知を受けた岩手県教育委員会は、（財）岩手県分化振興事業団に連絡し、二戸土地改良事業所との間で平成9年7月1日に契約を締結し、平成9年7月7日に調査を開始し平成9年9月1日まで継続された。発掘調査必要範囲の5,000㎡の内の2,000㎡が終了し、残り3,000㎡については次年度に調査することとなった。

Ⅱ．遺跡の立地と環境

1．立地と環境

大向上平遺跡は、岩手県二戸市似鳥大向上平85他に所在し、東日本旅客鉄道東北本線二戸駅の南西約5.5ｋｍに位置し、東流する安比川が大きく北側に膨らんだ地点の右岸に形成された河岸段丘上に立地している。安比川は北側（左岸）を急な崖、南側（右岸）を非常に狭い沖積地と接しており、遺跡はこの狭い沖積地と接続する低台地上に立地する。遺跡と安比川との比高は約10ｍ、30ｍ西方では約15ｍ、30ｍ東方では約５ｍとなっている。

遺跡の立地する二戸市は、岩手県の北端部に位置して青森県に接し、北側は青森県名川町、同　三戸町、西側は青森県田子町、岩手県浄法寺町、南側は一戸町、東側は九戸村、軽米町に隣接している。二戸市は、東を北上山地、西を奥羽山脈に挟まれた馬淵川水系中流域に立地する内陸の市で、面積は238.17㎢、人口約３万人の岩手県で最も新しい市政都市である。（1972年市政施行）

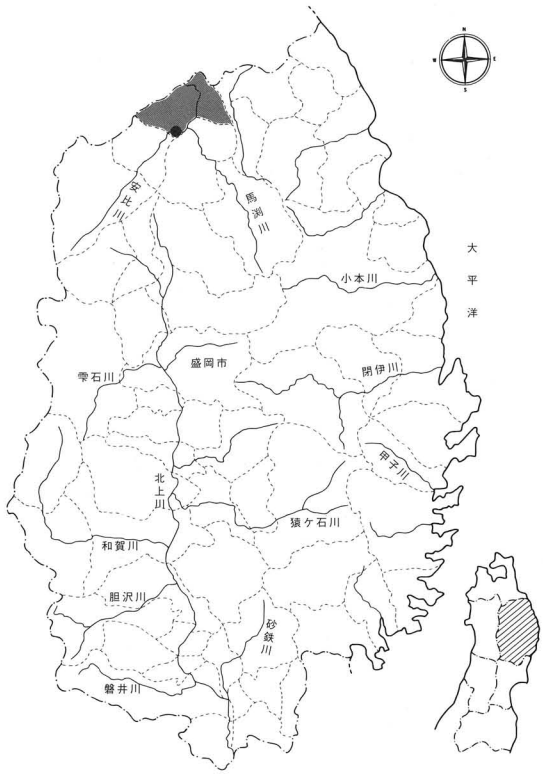
遺跡のある地域は、県道二戸―浄法寺線の沿線上にあるが、国道4号線のバイパス建設に伴って一連の発掘調査が行われた地域からはやや西側に外れており、これまで発掘調査は殆ど行われていなかった。

安比川は南西から東に向かって流れ、市の中心部に近いところで馬淵川と合流している。遺跡は馬淵川支流である安比川の下流域にあたり、谷底平野の形態をとる低地上に位置している。この低地を取り囲む丘陵地との境目には、連続性の悪い安比川段丘がところどころに分布している。そのほかは殆どが谷底平野で、河川の両岸の低地から連続する高度が低く緩やかな丘陵地に対して、網の目のように入り込んでいる。

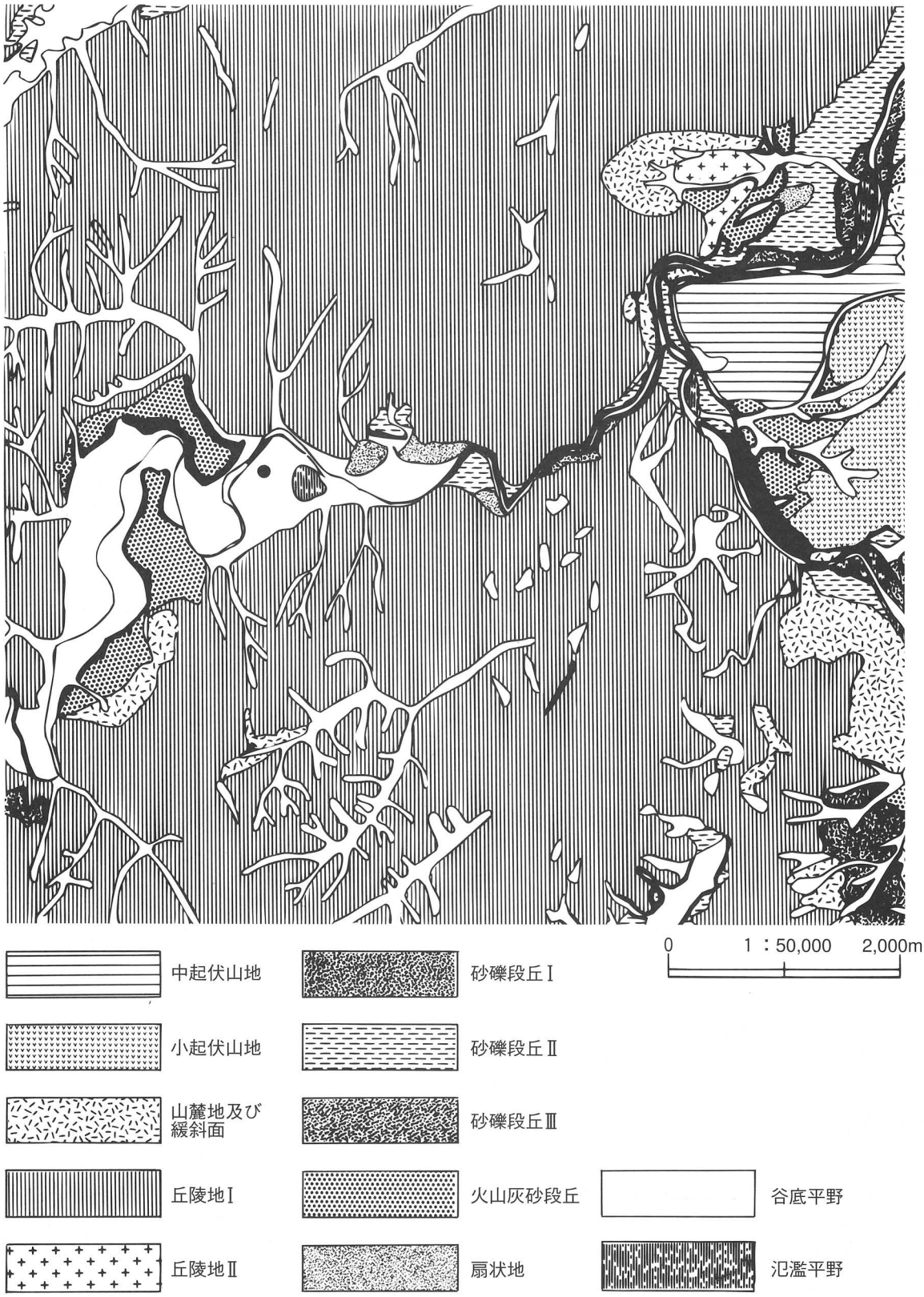
遺跡の載る火山性丘陵地帯は、八幡平の東側に位置する安比岳南麓付近を源とし、馬淵川最大の支流である安比川によって南北に二分されている。遺跡のある安比川の右岸は稲庭岳（標高1078m）を中心とした火山性の山麓丘陵（稲庭岳山麓丘陵）で、東に向かって次第に高度を下げ、東端縁は馬淵川西端に達している。また南側は、八幡平から東～北東に茶臼岳、大黒森山、前森山、七時雨山、西岳などの火山が並び、北側と同様に火山性丘陵（七時雨山山麓丘陵）が広がっている。この七時雨山山麓丘陵もまた北側と同様にその東～北東端が馬淵川西端に達している。

以上の火山性丘陵は、安山岩質岩類を主な基盤岩としているが、丘陵の北東縁の馬淵川西岸付近には新第三紀の末ノ松山層や門ノ沢層と呼ばれる凝灰岩質角礫岩や砂礫などが分布し、その上を第四紀の火山噴出物などが覆っている。

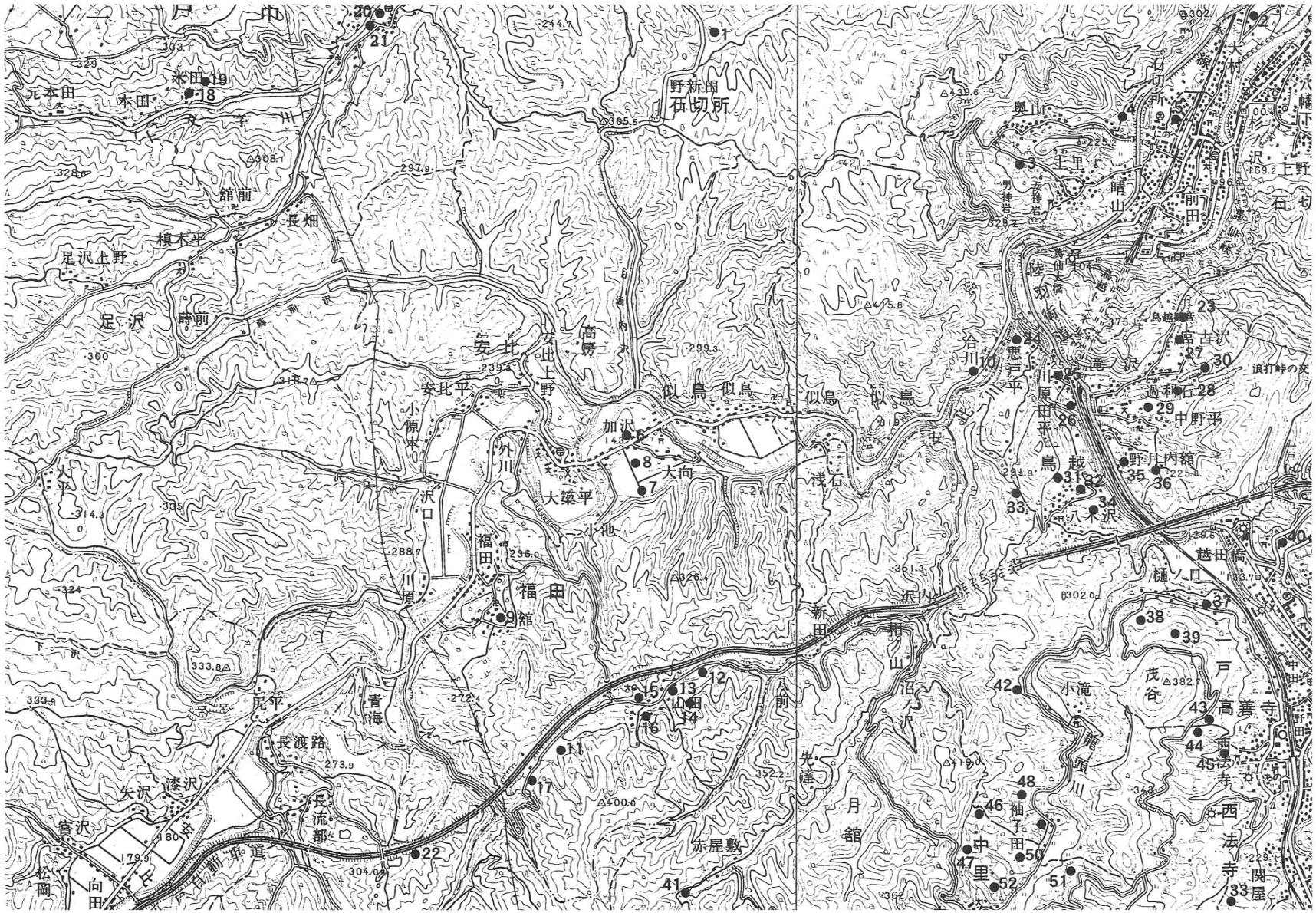
二戸市の地形は以上の馬淵川以西の火山性丘陵地、馬淵川流域、馬淵川以東の非火山性山地（北上山地）の三つの地域に大別される。この地域の北上山地には古い隆起準平原が広く分布しており、最高点は折爪岳（標高852m）である。北上山地は内陸部と沿岸部（三陸海岸地帯）との気象境界の位置も占めている。また、馬淵川流域には数段の更新世・完新世の段丘が形成されている。



第１図　岩手県図に見る遺跡の位置



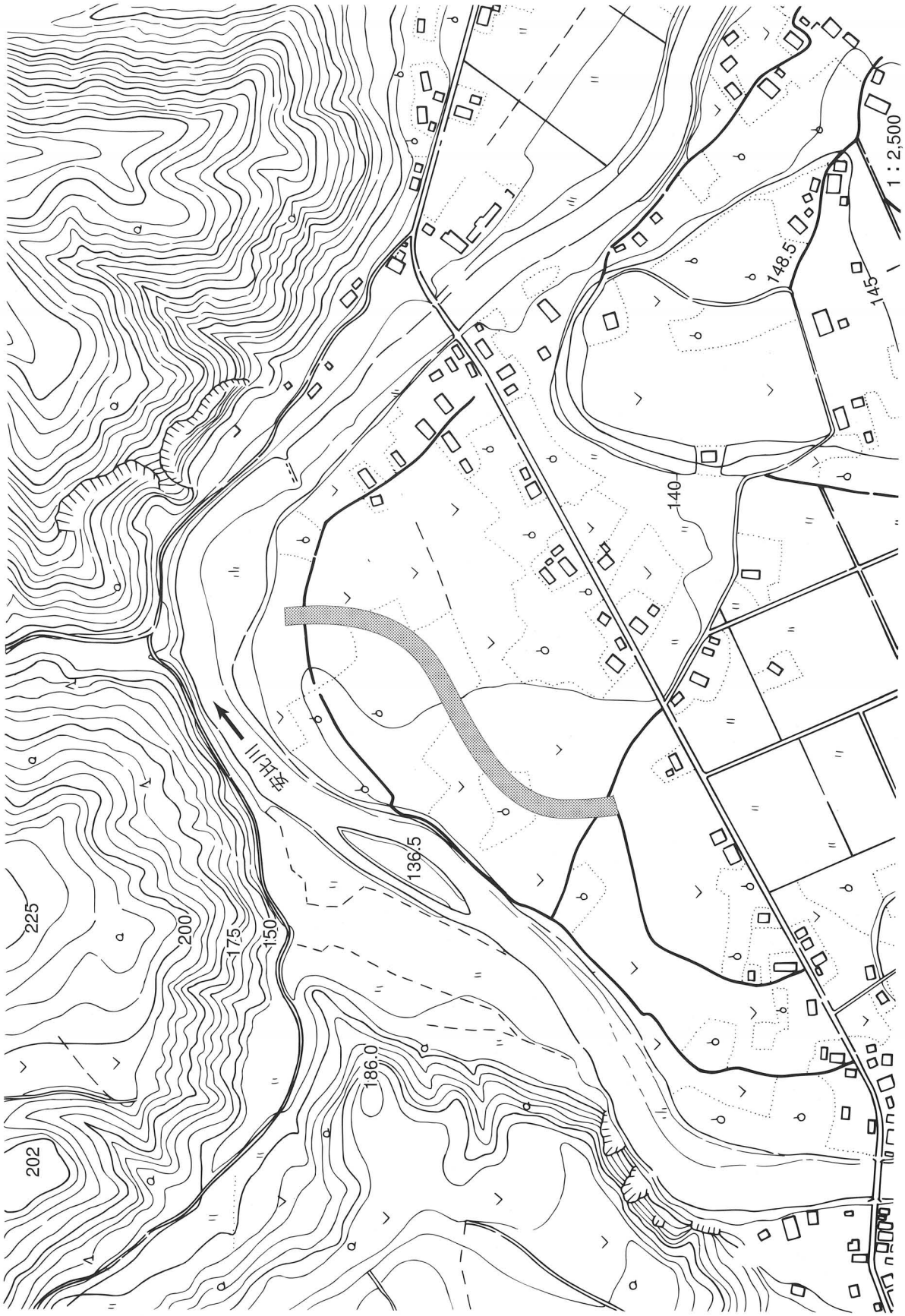
第３図　遺跡周辺地形分類図


元本田
本田
米田
足沢上野
足沢
時剛
長畑
棋木平
安比
安比上野
安比平
高房
似鳥
加沢
大向
大築平
小池
外川
福田
福田舘
沢口
川原
小原木
大平
尻平
青海
長渡路
長流部
矢沢
漆沢
宮沢
松岡
向田
赤屋敷
月舘
新田
沢内
浅石
合川
悪戸
中野平
野月内舘
越田
八木沢
樋ノ口
一戸
高善寺
西法寺
関屋
茂谷
小滝
龍頭山
袖子田
中里
上里
晴山
奥山
宮古沢
過利石
石切所
新国
上野
大林
穴幡下

第４図　周辺遺跡分布図

No.	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地	備 考
1	上野新田	縄文,古代	縄文土器、土師器		散布地
2	中曽根	縄文,古代 中世	住居跡、円形周溝、 土墳群		集落跡
3	土川Ⅱ	縄文,古代	縄文土器、土師器		散布地
4	火行塚	縄文,弥生 古代	住居跡,弥生包含層、 弥生土器,玉類,土師器		集落跡
5	森合	縄文,古代	縄文土器、土師器	福岡	散布地
6	大向上平	縄文,平安	縄文土器(晩期)、 土師器	似鳥字 加沢	集落跡
7	大向Ⅱ	縄文,平安	縄文土器、土師器	似鳥字 大向	散布地
8	大向	古代	土師器		集落跡
9	福田館	縄文,古代 中世	縄文土器、土師器 空堀、平場	福田字 館	城館跡 散布地
10	合川	縄文,古代 中世	縄文土器、土師器	似取字 合川	散布地
11	仲口	縄文,古代	縄文土器、土師器		集落跡
12	大倉Ⅱ	縄文,古代	縄文土器、土師器		散布地
13	大倉A	縄文,古代	縄文土器、土師器		散布地
14	野場塚Ⅰ	縄文,古代	縄文土器、土師器		散布地
15	福田久保	縄文,古代	縄文土器、土師器		散布地
16	大倉B	縄文,古代	縄文土器、土師器		集落跡
17	大久保	縄文,古代	縄文土器、土師器		集落跡
18	米田Ⅱ	縄文,古代	縄文土器、土師器		散布地
19	米田Ⅰ	縄文,古代	縄文土器、土師器		散布地
20	元六	縄文,古代	縄文土器、土師器		散布地
21	前田	縄文,古代	縄文土器、土師器		散布地
22	縊沢	古代	土師器	御山字 縊沢	散布地
23	首戸Ⅱ	縄文,平安	縄文土器(晩期)、 土師器	鳥越字 宮古沢	散布地
24	悪戸平Ⅰ	縄文,平安	縄文土器(後・晩期)、 土師器	鳥越字 悪戸平	集落地
25	川原田平Ⅰ	奈良,平安	土師器	鳥越字 川原田平	散布地
26	川原田平Ⅱ	平安	土師器	鳥越字 川原田平	散布地
27	過利石	縄文,平安	縄文土器(後期)、 土師器	鳥越字 過利石	散布地
28	上ミ平	縄文,弥生 平安	縄文土器(前・晩期)、 弥生土器、土師器	鳥越字 上ミ平	散布地
29	中野平	縄文,平安	縄文土器(後～晩期)、 土師器	鳥越字 中野平	集落跡
30	戸屋森	弥生,奈良	弥生土器、土師器	鳥越字 戸屋森	散布地
31	八木沢Ⅰ	縄文,平安	縄文土器、土師器	鳥越字 八木沢	散布地
32	八木沢館	縄文,平安 中世	縄文土器(前・中期)、 土師器、主郭、平場	鳥越字 八木沢	散布地 城館跡
33	和由	縄文,弥生 奈良,平安	縄文土器(後・晩期)、 弥生土器、土師器	鳥越字 和山	散布地
34	竹森Ⅱ	奈良,平安	土師器	鳥越字 竹林	散布地
35	野月内館	縄文,弥生 平安	縄文土器(早・後期)、 弥生土器、土師器	鳥越字 野月内館	集落跡
36	野月道ノ下	縄文,弥生 平安	縄文土器(後期)、 弥生土器、土師器	鳥越字 野月道ノ下	散布地
37	樋ノ口Ⅲ	縄文,弥生 奈良,平安	石匙,縄文土器(中・後・晩期),弥生土器,土師器	一戸字 樋ノ口	散布地
38	樋ノ口Ⅲ	縄文,平安	縄文土器(中期)、 土師器	一戸字 樋ノ口	散布地
39	樋ノ口Ⅲ	縄文,弥生 奈良,平安	縄文土器(前～晩期)、 弥生土器、土師器	一戸字 樋ノ口	散布地
40	小井田Ⅲ	縄文,弥生 平安	縄文土器(後・晩期)、 弥生土器、平安土器	一戸字 小井田	集落地
41	赤屋敷	縄文,平安	縄文土器(晩期)、 土師器	月舘字 赤屋敷	散布地
42	小滝Ⅱ	縄文,平安	縄文土器(後・晩期)、 土師器	一戸字 小滝	散布地
43	茂谷	縄文,平安	縄文土器	高善寺 字茂谷	散布地
44	寺屋敷	縄文,平安	縄文土器、土師器	高善寺字 寺屋敷	散布地
45	毘沙門堂	平安,鎌倉	塚	西法寺字 西法寺	城館跡
46	袖子田Ⅲ	縄文,平安	縄文土器(中期)、 土師器	中里字 袖子田	散布地
47	馬場野Ⅱ	縄文,平安	縄文土器(後期)、 土師器、須恵器	中里字 馬場野	散布地
48	袖子田Ⅱ	縄文,弥生 平安	縄文土器(早・前期)、 弥生時代、土師器	中里字 袖子田	散布地
49	袖子田	縄文,平安	縄文土器(後・晩期)、 土師器,須恵器,鉄滓	中里字 袖子田	散布地
50	馬場野	縄文,平安	縄文土器(後期)、 土師器、須恵器	中里字 馬場野	散布地
51	小荒木	縄文,平安	縄文土器(後期)、 土師器	中里字 小荒木	散布地
52	袖越	縄文,弥生 平安	縄文土器(前・晩期)、 弥生土器、土師器	中里字 袖越	散布地
53	大平	縄文,弥生 平安	縄文土器(中～後期)、 弥生土器、土師器	西法寺 字大平	集落跡

第１表　周辺遺跡一覧表



第２図　遺跡周辺地形図

2．調査方法と整理方法

（1） 調査方法

〔グリッドの設定と遺構名〕

大向上平遺跡では平面直角座標（第Ｘ系）、Ｘ＝+26.250ｍ、Ｙ＝+34.070ｍを基準点１、Ｘ＝+26.200ｍ、Ｙ＝+34.070ｍを基準点２として、この2点を結んだ線を基準線とした。そしてこの基準および基準線を延長し、50×50ｍのメッシュで全調査区を区画した。このメッシュの北東端を基準として、南北方向には北からＡ，Ｂのアルファベットを与え、東西方向には東からⅠ、Ⅱ、Ⅲの番号を付し、ＩＡ区、ⅡＢ区と表示した。さらにこの大区画を10等分して５×５ｍに小区画し、北からａ～ｊ、東から０～９を付し、ⅡＡ３ａ区、ＩＢ９ｅ区と表示した。遺構名は検出順に種別ごとに１号竪穴住居跡、3号土坑というように名称を付した。

〔粗掘りと遺構検出・遺構の精査と遺物の取り上げ〕

検出面までの深さおよび層序の確認のため、調査区に地形に沿うかたちでトレンチを入れた。この結果基本層序の第Ⅱ層と第Ⅲ層の上面が遺構の検出面であることが確認された。このため、基本層序第Ⅱ層上面までの除去には重機を使用した。この後、人力によって遺構の有無を確認しながら第Ⅳ層まで掘り下げた。遺構が検出された場合には二分法を原則として精査を行ったが、必要に応じて他の方法も併用した。精査の各段階において必要図面の作成や写真撮影を適宜行った。遺構内出土の遺物は、埋土では上位・下位にわけて取り上げ、遺構外出土の遺物についてはグリッド別に出土した層位を記して取り上げた。

〔実測方法・写真撮影〕

各遺構とも平面実測はグリッド軸に合わせた１ｍのメッシュを基本とした。原則として１/20の縮尺を用い、必要に応じて任意の縮尺を用いた。写真撮影は35㎜モノクロームとカラースライド各1台と６×９㎝モノクローム1台を使用した。撮影は埋土堆積状態や遺物の出土状況、遺構の完掘状況などについて行い、調査終了時点でセスナにより空中写真を撮影した。

（2） 整理方法

室内での整理作業は、遺物の仕分けと復元、遺物写真撮影・実測・拓本を優先させて行い、これと並行して図版・写真図版の作成を行った。個々の整理方法および図版の凡例は下記の通りである。

〔遺構〕

遺構配置図は発掘調査時に作成した図面を基本に１/400の縮尺図を作成して１/1000で掲載した。各遺構図面は以下の縮尺を原則としたが、一部に縮尺の変更もあり、図版にはそれぞれスケールを付した。

埋設土器の平・断面図―１/10、竪穴住居跡の平・断面図―１/50、掘立柱建物跡の平・断面図―１/40、土坑の平・断面図―１/40、溝状遺構の平・断面図―１/100・１/50、柱穴列の平・断面図―１/100・１/50。

〔遺物〕

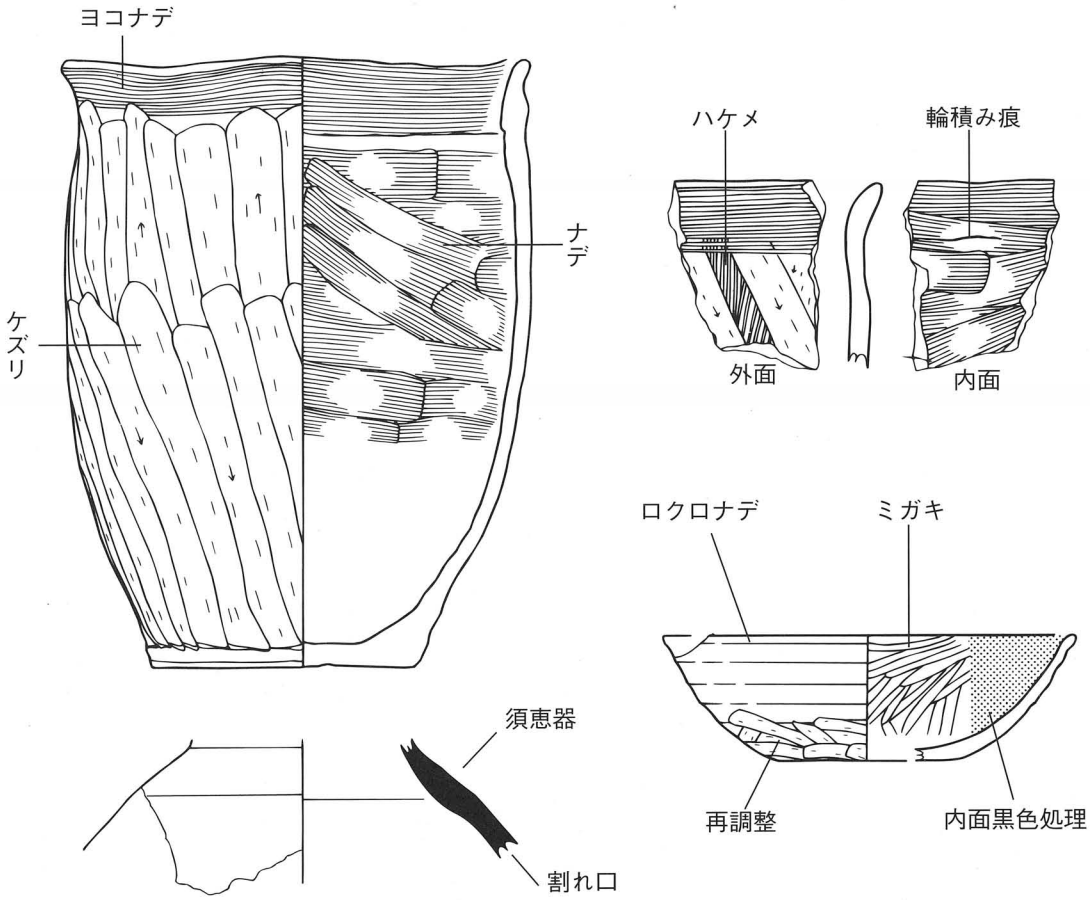
土器のうち、口縁部・底部が１/６以上残存するものについては反転実測を行った。反転実測に適さない破片については平面実測・拓本をとった。鉄製品・石器はすべて掲載した。

掲載遺物の縮尺率・個々の凡例は以下の通りである。

土器の実測図―１／３、拓本―１／３、剥片石器―１／２、礫石器―１／３、石製品―１／２、土製品―１／２、鉄製品―１／２、鉄滓―１／２、貝製品―1／1。遺物写真については、土器≒１／３、その他の遺物≒１／２で掲載した。実測図・写真とも、これに反する場合は個々にスケールを付した。

〔図版〕

図版中の遺物実測図およびスクリーントーンの表示は以下に示すとおりである。



〈遺構〉

焼　土　　堅くしまる床面　　礫　　土　器

〈遺物〉

粘土等付着物　　内面黒色処理　　磨　面　　剥　落

3．基本土層

遺跡の主要部分の基本土層は図のようになる。

Ⅰ層　10YR 2/1　黒色土　表土 耕作土

Ⅱ層　10YR 2/1　黒色土　層厚12～22㎝

Ⅲ層　10YR 3/2　黒褐色土　中振浮石を含んでいる。層厚13～20㎝

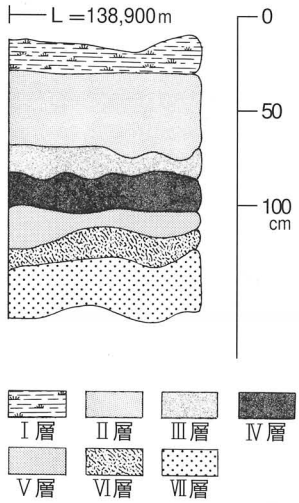
Ⅳ層　10YR 3/3　暗褐色土　中振浮石の層　層厚23～26㎝

Ⅴ層　10YR 3/4　暗褐色土　層厚18～22㎝

Ⅵ層　10YR 4/4　褐色シルト　層厚43～50㎝

Ⅶ層　10YR 6/8　明黄褐色砂礫　層厚50㎝

調査区は南側から北側に向かってごく緩やかに傾斜する平坦な低台地に立地している。畑地として利用されていた北端部と南端部は削平されており、北端部では表土の下がⅣ層褐色シルト面、南端部では、Ⅳ層上面となっていた。



第５図　基本土層柱状図

Ⅲ．検出された遺構と遺物

縄文時代の埋設土器2基、古代の竪穴住居跡10棟、土坑18基、畝間状遺構５群、柱穴列2列を検出した。縄文時代の埋設土器はいずれも後期初頭、古代の竪穴住居跡はすべて平安時代のものと思われる。以下、時代別に記載する。

1．縄文時代

（1）埋設土器

1号埋設土器

遺構（第６図・写真図版４）

調査区中央北側、ⅢＥ７ｉグリッドの平坦面に位置する。Ⅲ層中で検出された。西方6.5ｍには２号埋設土器がある。土器は周囲を23×24㎝・深さ14㎝の楕円形に掘り込んだピットの中に、東に傾くように正立の状態で埋設されていた。土器上端部は検出時には欠損していた。埋土は黒褐色土主体で、しまりはない。住居跡に伴うような形跡はない。

遺物（第７図・写真図版24）

遺物は埋設された土器と、土器の内部から炭化物の付着した深鉢土器破片3点、その下位から硬玉製大珠２点、中央から貝製(?)の平玉２点と貝製品(?)１点、アマオブネ貝製の玉73点以上が得られた。

土器に施文された文様の特徴から、この遺構の時期は縄文時代後期初頭と考えられる。

2号埋設土器

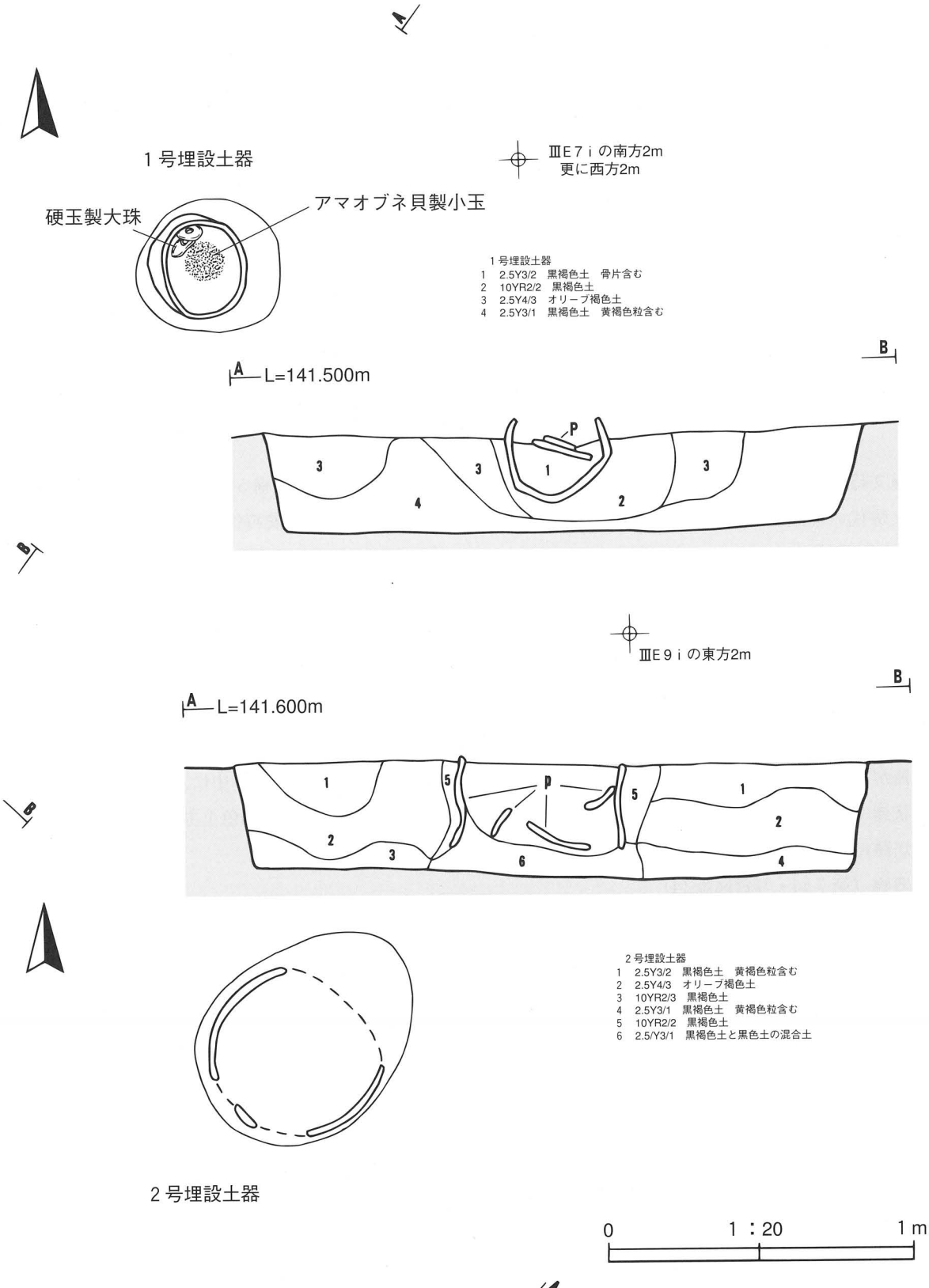
遺構（第６図・写真図版４）

調査区中央部北側、ⅢＥ８ｈグリッドの平坦面に位置する。Ⅲ層中で検出された。東方6.5ｍには１号埋設土器がある。土器は周囲を31×40㎝・深さ18㎝の楕円形に掘り込んだピットの中に、ほぼ垂直に倒立した状態で埋設されている。検出時に土器底部～胴部下半が欠損していたため、底部の形態は不明である。埋土は黒褐色土主体で、しまりはない。住居跡に伴うような形跡はない。

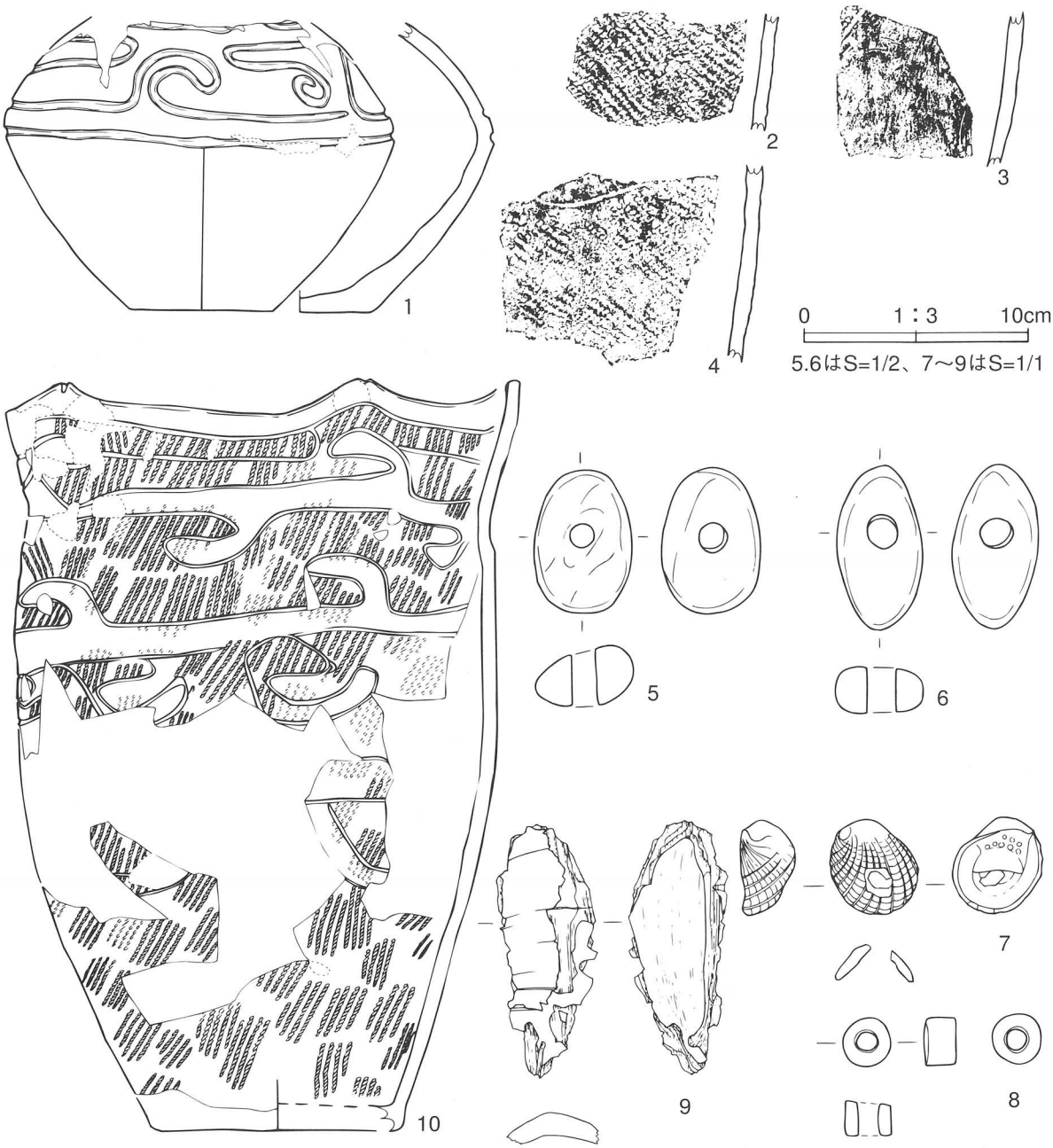
遺物（第７図・写真図版24）

遺物は埋設されていた土器だけである。同一個体の胴部破片数点が、土器内部から得られた。

土器に施文された文様の特徴から縄文時代後期初頭の遺構と考えられる。



第６図　1・2号埋設土器



No.	出土地点	器種	部位	原体	文様の特徴	分類
1	1号埋設土器	壷	胴～底部	沈線	沈線により横位に連繋するフック状モチーフが描かれる。器面は丁寧に磨かれている。	2類
2	2号埋設土器	深鉢	口～胴部	ＲＬ	沈線によりフック状モチーフが描かれる。	1類
3	2号埋設土器	深鉢	胴部			1類
4	2号埋設土器	深鉢	胴部			1類
10	2号埋設土器	深鉢	胴部			1類

No.	出土地点	種類	長さ	幅	厚さ	重量	備考	石質
5	1号埋設土器	硬玉製大珠	4.3	2.9	1.7	36.2		硬玉
6	1号埋設土器	硬玉製大珠	5	2.6	1.4	30.7		硬玉
7	1号埋設土器	貝玉	1.5	1.3	0.8		器厚は０．２cm	
8	1号埋設土器	臼玉					貝製？	
9	1号埋設土器	貝製品？	3.9	1.4	0.35		素材不明	

（）：推定値　－：残存値

第７図　1・2号埋設土器出土遺物

2．平安時代

（1）竪穴住居跡

1号竪穴住居跡

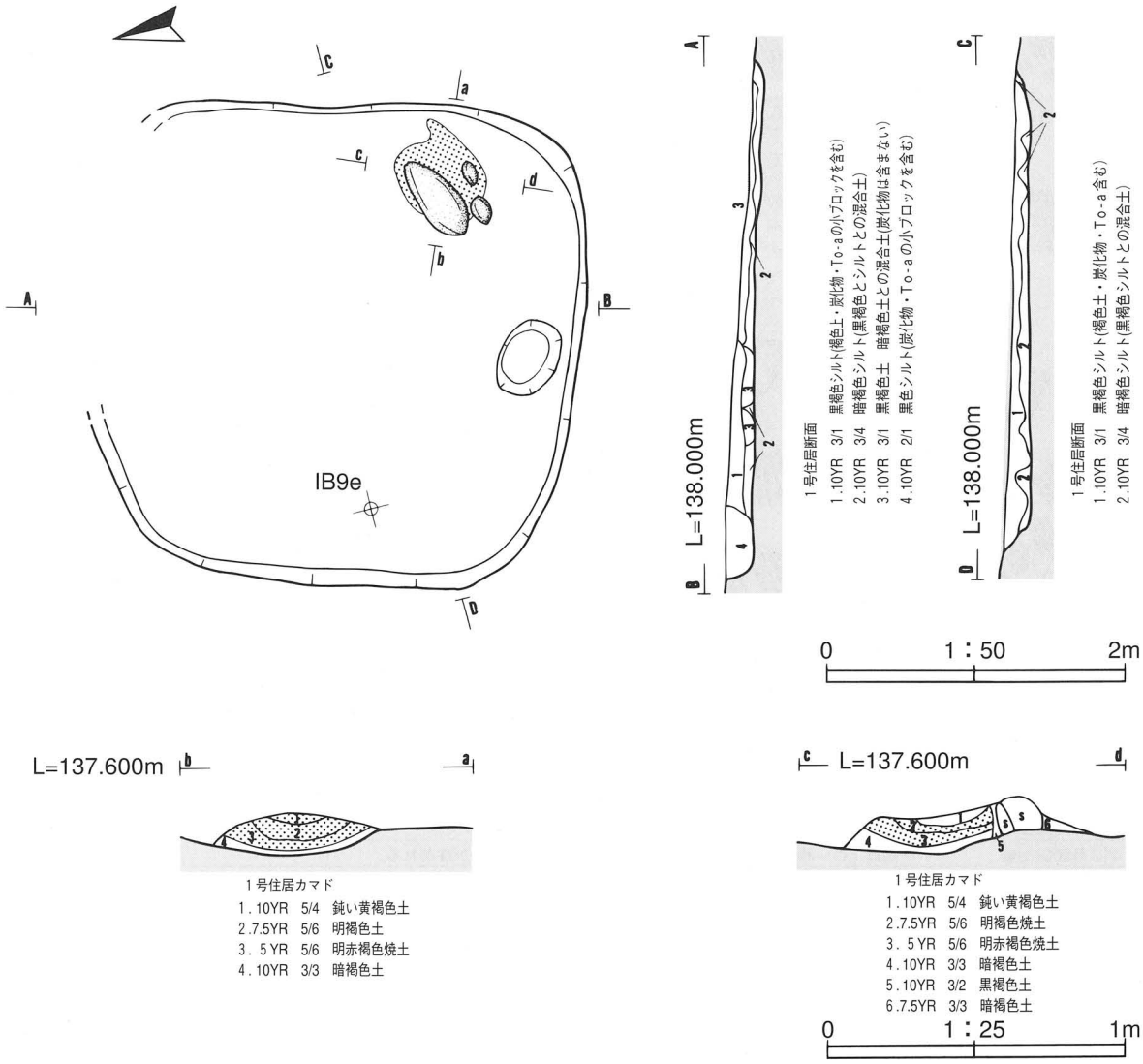
遺構(第８図・写真図版５)

［位置・重複関係］ＩＢ８ｅグリッドに位置する。表土除去後のⅥ層褐色シルト面で検出した。

［規模・平面形・方向］東辺2.94m、西辺2.54m、南辺3.26m、北辺3.12mのほぼ正方形を呈する。床面積は約8.7㎡、主軸方向はＥ－22°－Ｓである。

［埋土・壁］残存しない。

［床面］耕作による削平が深くまで及んでいる為、検出した時点で床面しか残存していなかった。プラン全面に掘り方をもち、炭化物を少量含む暗褐色シルトを主体として貼り床されている。残存する厚さは10



第８図　1号竪穴住居跡

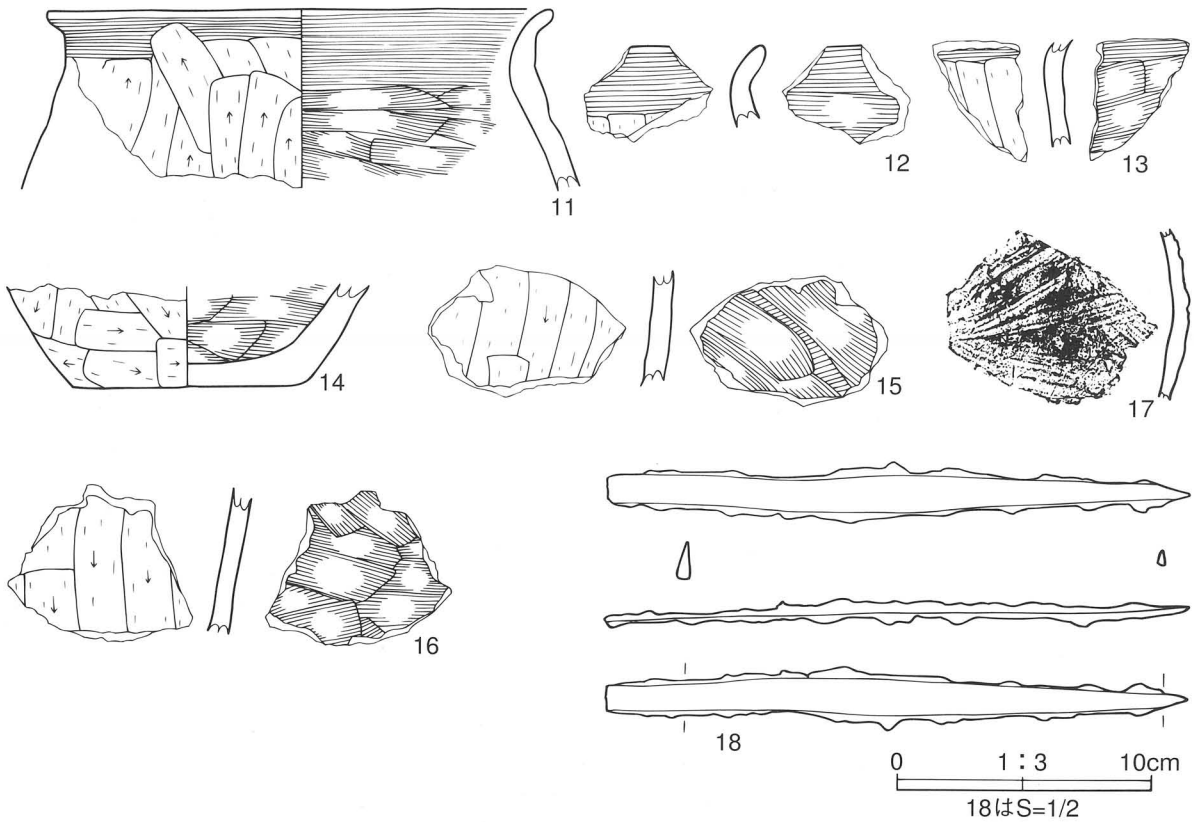
～20cmほどである。床下砂質シルト面に凹凸をみるが顕著なものではない。

［カマド］東壁南よりに位置する。残存状態は悪い。燃焼部には44×51㎝・厚さ９～11㎝の焼土が形成されている。この焼土面に接するようなかたちで25×61㎝の巨礫が検出された。位置から推測して、礫が天井石として使用されていた可能性が考えられる。煙道部は削平により残存しない。

〔柱穴・ピット〕南側よりピットを1基検出した。規模は38×58㎝・深さ13㎝である。埋土中からは刀子が１点出土しており、住居内の貯蔵穴として使用されていたと考えられる。

遺物（第９図・写真図版24）

削平された住居跡であるため、出土遺物は少ない。すべて床面、土坑の埋土から出土した。内訳は土師器の甕破片７点、刀子1点である。17は土師器甕胴部破片で器面に不規則なケズリ調整をもつ。

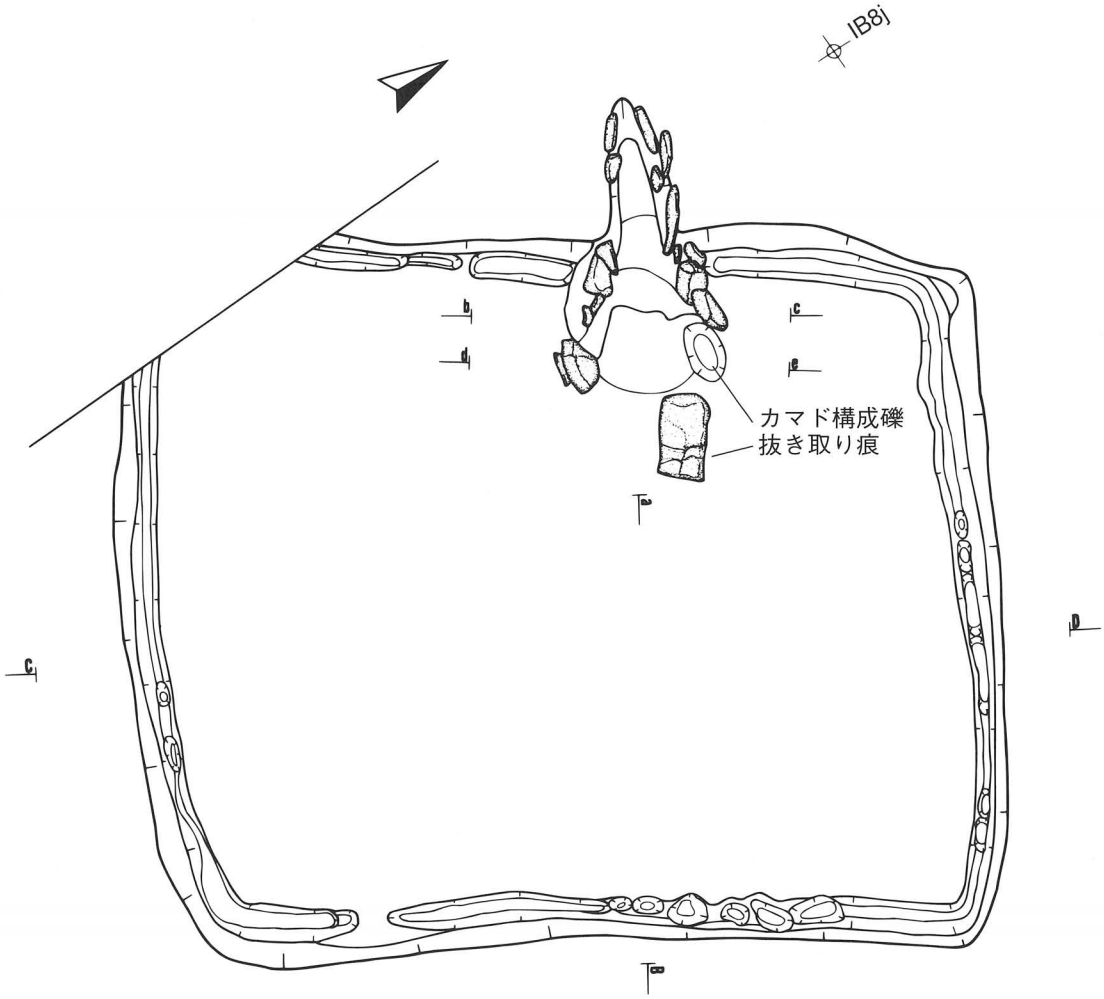


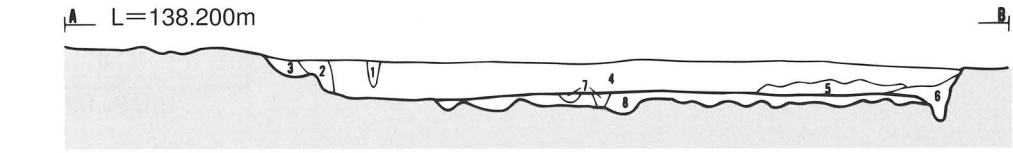
図No.	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量（cm） 口径	底径	器高	備考
11	1号住　床面	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(20.0)	—	-7.0	
12	1号住　床面	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	—	—	—	
13	1号住　床面	土師器	甕	B3	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ	—	—	—	
14	1号住　床面	土師器	甕	B3	〔体〕ケズリ〔底〕ケズリ	〔体〕ナデ〔底〕ナデ	—	(9.2)	-4.1	
15	1号住　床面	土師器	甕	B3	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ	—	—	—	
16	1号住　床面	土師器	甕	B3	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ	—	—	—	
17	1号住　床面	土師器	甕	B3	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ	—	6.4	−13.2	

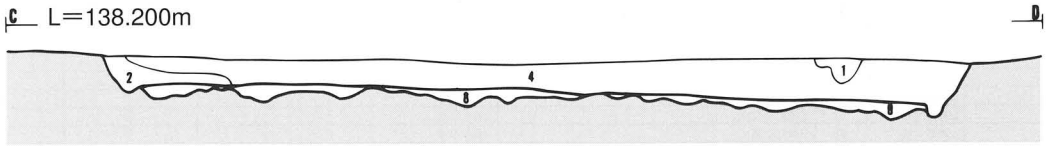
—：残存値　（）：推定値

No.	出土地点	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
18	1号住　床面	刀子	15.1	1.7	0.7	20.1	

第９図　1号竪穴住居跡出土遺物





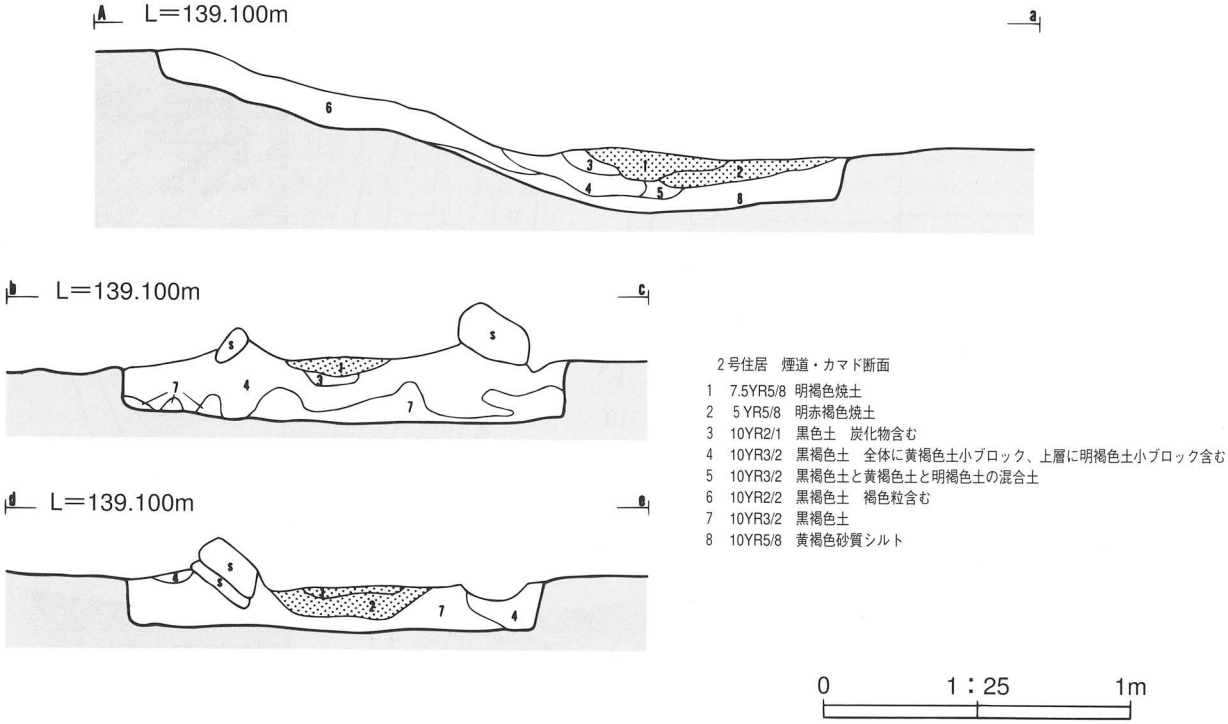


2号住居　断面

1　10YR2/1　黒色土
2　10YR2/1　黒色土　褐色粒含む
3　10YR2/2　黒褐色土と褐色土・粒の混合土
4　10YR2/2　黒褐色土と灰黄褐色土(To-a火山灰）の混合土
5　10YR2/1　黒色土と灰黄褐色土(To-a火山灰）の混合土
6　10YR2/2　黒褐色土　灰黄褐色土ブロック含む
7　10YR2/1　黒色土　褐色粒・灰黄褐色土小ブロック含む
8　10YR3/4　暗褐色土（貼り床）

0　1：50　2m

第10図　2号竪穴住居跡①



第11図　2号竪穴住居跡②

2号竪穴住居跡

遺構（第10・11図・写真図版6）

［位置・重複関係］ＩＢ７ｊグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、十和田ａ降下火山灰（以後、十和田ａ火山灰と記述する。）をまばらに含む黒色土の広がりとして確認した。

［規模・平面形・方位］北東辺4.48㎝、南西辺4.80㎝、南東辺5.20㎝、北西辺5.62㎝のほぼ正方形を呈する。床面積は約25.1㎡、主軸方向はＷ－31°－Ｎである。

［埋土］検出面から床面直上まで十和田ａ火山灰を含んだ黒褐色土が堆積する。

［壁］壁高の残存値は18～22㎝前後である。

［床面］ほぼ平坦でややしまる。全面に掘り方をもち、暗褐色シルトを主体として貼り床されている。厚さは壁近くで10～12㎝、中央では２㎝ほどでである。柱穴は確認されていない。

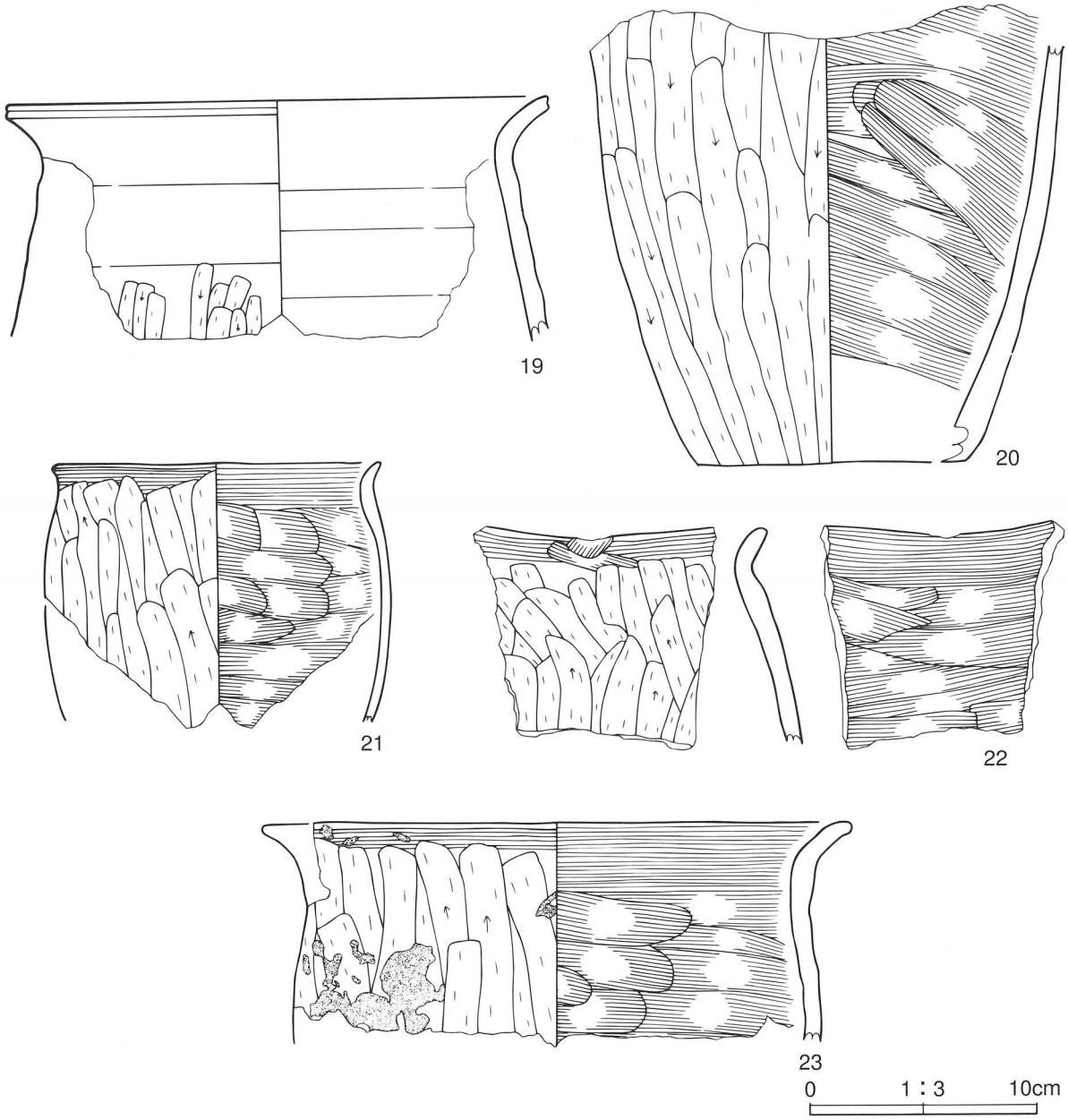
［カマド］西壁の中央やや北よりに構築されている。燃焼部には52×83㎝・厚さ12㎝の焼土が形成されている。煙道部は掘り込み式の構造で、壁から92㎝外方へ延びており、底面は約17°の角度で緩やかに立ち上がっている。

［壁溝］壁溝は一周するものと思われ、幅13～21㎝、深さ10～16㎝である。

〔柱穴・ピット〕確認できなかった。

遺物（第12・13図・写真図版25）

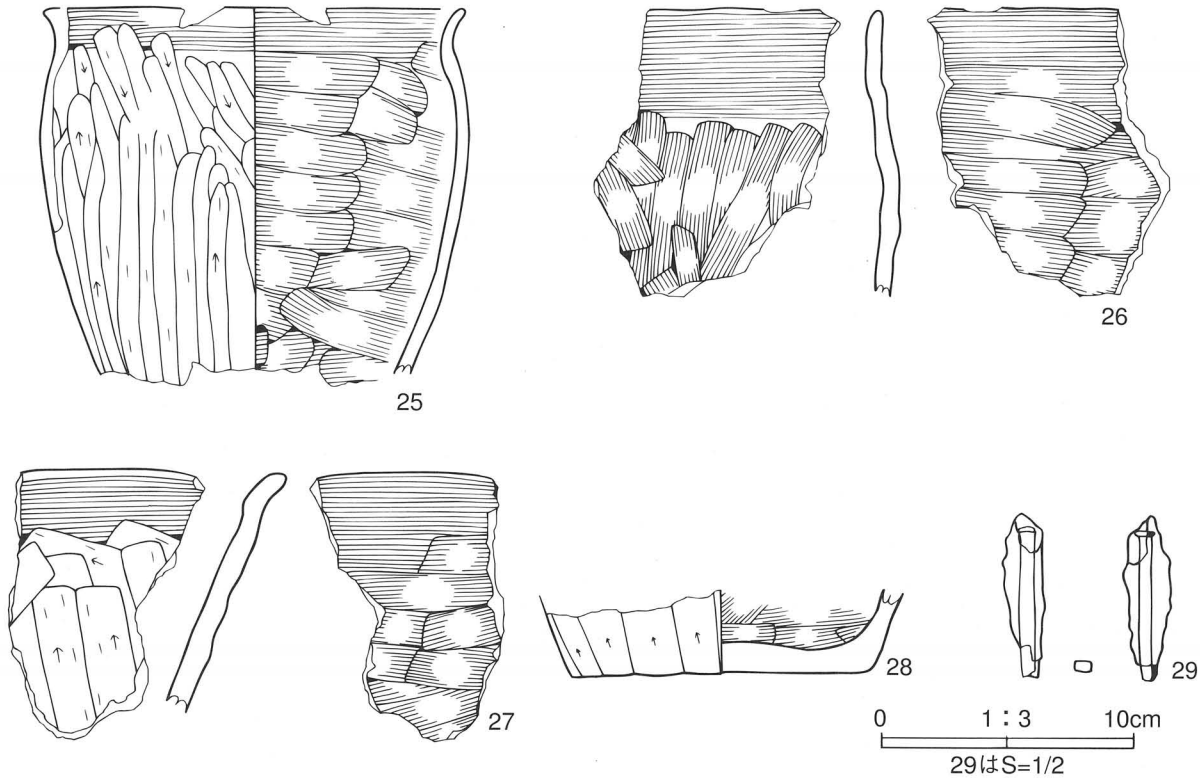
カマドとその周辺の床面から土師器の甕片６点、埋土中から土師器甕片３点と堝の口縁部片1点、形態不明の鉄製品1点が出土している。19はロクロ調整の甕である。23・24はカマド周辺の床面から出土した甕口縁部で、器面に粘土が付着している。



図No.	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量（cm）			備考
							口径	底径	器高	
19	2号住　カマド構成	土師器	甕	A1	〔口〕ヨコナデ〔体〕ロクロナデ+ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ロクロナデ	(23.8)	—	-10.3	
20	2号住　カマド構成	土師器	甕	B3	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ	—	(11.9)	-20.2	
21	2号住　カマド構成	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(14.3)	—	-11.8	
22	2号住　カマド構成	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	—	—	—	
23	2号住　床面カマド付近	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(25.6)	—	-9.7	器面粘土付着
24	2号住　床面カマド付近	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ				写真のみ掲載

—：残存値　（）：推定値

第12図　2号竪穴住居跡出土遺物①



図No.	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量（cm）			備考
							口径	底径	器高	
25	2号住　Q1埋土	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(16.6)	—	-15.0	
26	2号住　Q2埋土	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	—	—	—	
27	2号住　埋土	土師器	鍋	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	—	—	—	
28	2号住　埋土	土師器	甕	B3	〔体〕ケズリ〔底〕ケズリ	〔体〕ナデ〔底〕ナデ	—	12.0	-3.3	

—：残存値　（）：推定値

No.	出土地点	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
29	2号住　埋土	鉄製品	4.4	1	1.3	4.9	器種不明

第13図　2号竪穴住居跡出土遺物 ②

３号竪穴住居跡

遺構（第14・15図・写真図版７）

［位置・重複関係］ＩＣ６ｄグリッドに位置している。検出面はⅢ層で、十和田ａ火山灰をまばらに含む黒褐色土の広がりとして検出した。10号竪穴住居跡と北―東辺を同じくして重複している。10号竪穴住居の掘りこみを利用して拡張を行った住居跡と考えられる。

［規模・平面形・方位］北東辺6.38ｍ、南西辺6.46ｍ、南東辺6.24ｍ、北辺5.88ｍのほぼ正方形を呈する。床面積は約38.9㎡、主軸方向はＷ－17°－Ｎである。

［埋土］埋土は黒色土～黒褐色土を主体としている。十和田ａ火山灰小ブロックや、炭化物の混入量などによって13層に細分される。埋土は全般に自然堆積の状況を呈する。

［壁］壁高の残存値は14～42㎝前後である。

［床面］ほぼ平坦で堅くしまっている。全面に掘り方をもち、暗褐色シルト主体で貼り床されている。厚さは壁近くで12～28㎝、中央部では10㎝ほどである。北東側で45×23㎝の不整楕円形の範囲に灰・粘土ブロック、焼土粒、炭化物が集中して認められた。この部分の床面はそれほど堅くしまらない。

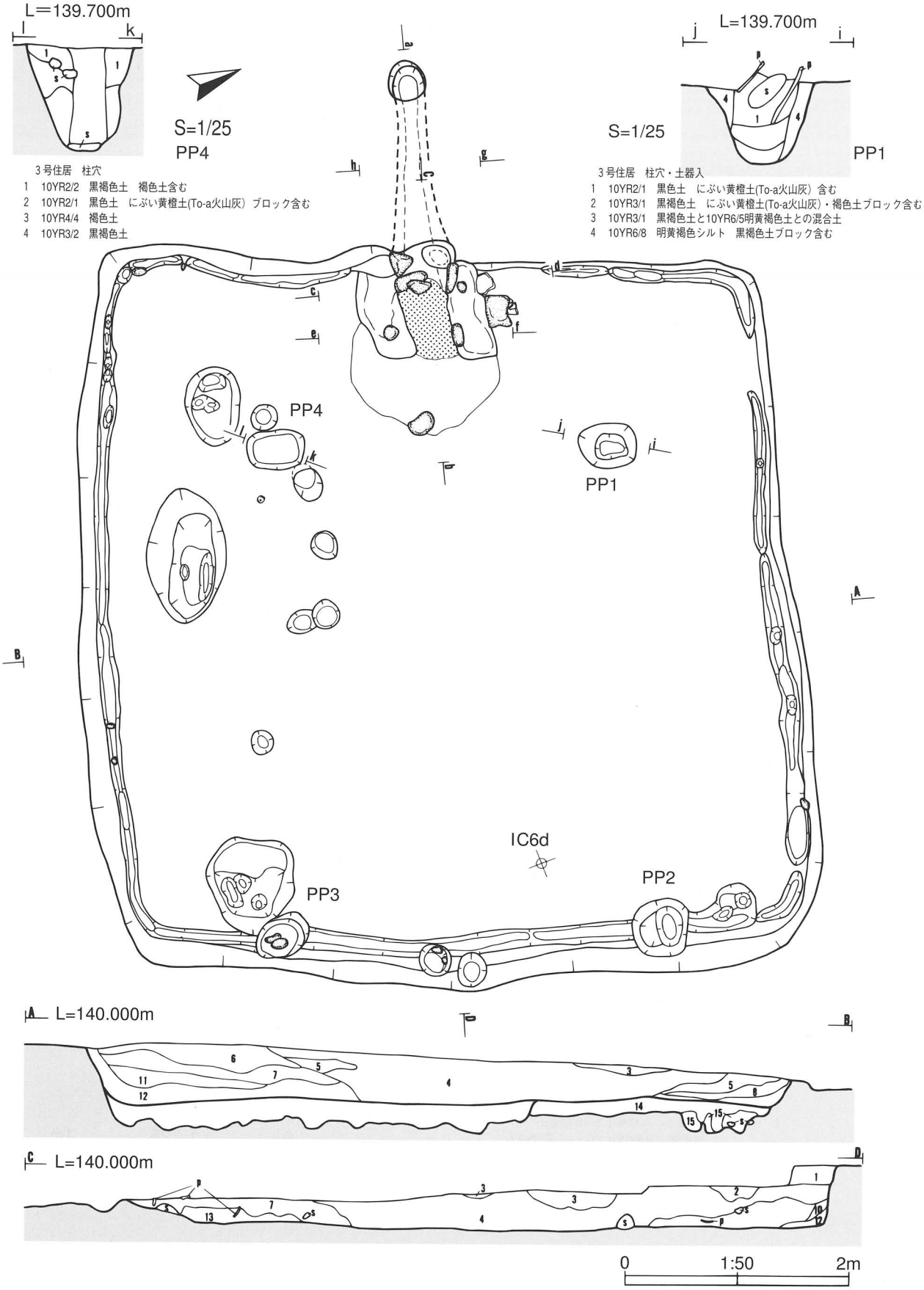
［カマド］西壁の中央部に構築されている。本体は粘性のある褐色シルトで構築されている。燃焼部には56×66㎝・厚さ19㎝の焼土が形成されている。煙道部は刳り貫き式の構造で、外側に向かい18°の傾斜をもって緩やかに下る。煙出し孔は33×36㎝のほぼ円形で、深さ68㎝である。

［壁溝］壁溝は、幅が11～28㎝前後、床面からの深さ13.1～23.4㎝で、住居内を一周するものと思われる。

［柱穴・ピット］床面から４個の柱穴を検出した。規模は、P1が40×46㎝・深さ18.7㎝、P2が44×50㎝・深さ49.5㎝、P3が34×45㎝・深さ41㎝、P4が36×50㎝・深さ46㎝である。埋土は４層に細分され、記録を行ったPP１・４はいずれも柱穴痕跡が認められた。そのほか南側から径20～30㎝の小柱穴を６個検出した。

遺物（第16～19図・写真図版26～27）

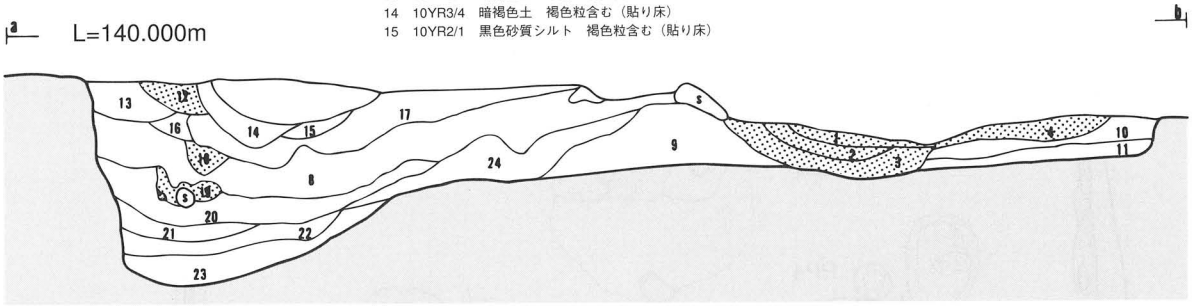
カマド～床面にかけて多くの遺物が出土している。カマド～カマド周辺の床面からは土師器の坏2点と甕片11点が出土した。床面からは土師器甕片6点と鉢の体部破片１点、須恵器甕片1点、鉄製紡錘車1点、鉄鏃1点、埋土中からは土師器坏1点、土師器甕片約13点、鉢の口縁部破片１点、柱穴埋土上部からは甕1点が出土した。

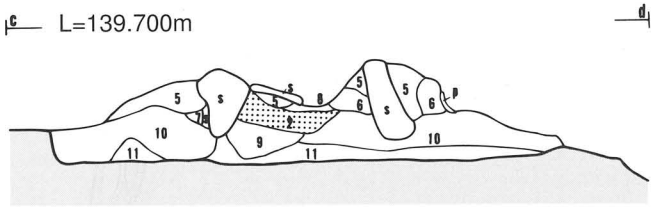


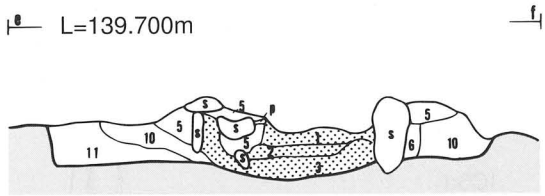
第14図　3号竪穴住居跡①

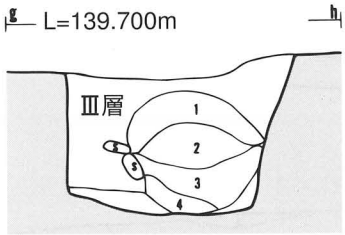
3号住居　断面

1　10YR1.7/1　黒色土
2　10YR2/2　黒褐色土　灰黄褐色土(To-a火山灰）ブロック含む
3　10YR3/2　黒褐色土　灰黄褐色土(To-a火山灰）ブロック含む
4　10YR2/2　黒褐色土　黄褐色土・褐色粒・し白色土(To-a火山灰）ブロック含む
5　10YR2/1　黒色土　灰白色土(To-a火山灰）ブロック含む
6　10YR2/1　黒色土　褐色粒含む
7　10YR2/1　黒色土黄褐色ブロック・灰白色土(To-a火山灰）ブロック含む
8　10YR2/1　黒色土　灰白色土(To-a火山灰）小ブロック僅かに含む
9　10YR2/3　黒褐色土　灰白色土(To-a火山灰）・褐色土・黒色土ブロック含む
10　10YR3/3　暗褐色土　灰白色土(To-a火山灰）小ブロック僅かに含む
11　10YR2/2　黒褐色土　下層に明褐色土・炭含む
12　10YR2/2　黒褐色土　下層に褐色土・明褐色土含む
13　10YR3/4　暗褐色土　下層に明黄褐色土ブロック含む
14　10YR3/4　暗褐色土　褐色粒含む（貼り床）
15　10YR2/1　黒色砂質シルト　褐色粒含む（貼り床）









3号　住居　煙道横断面

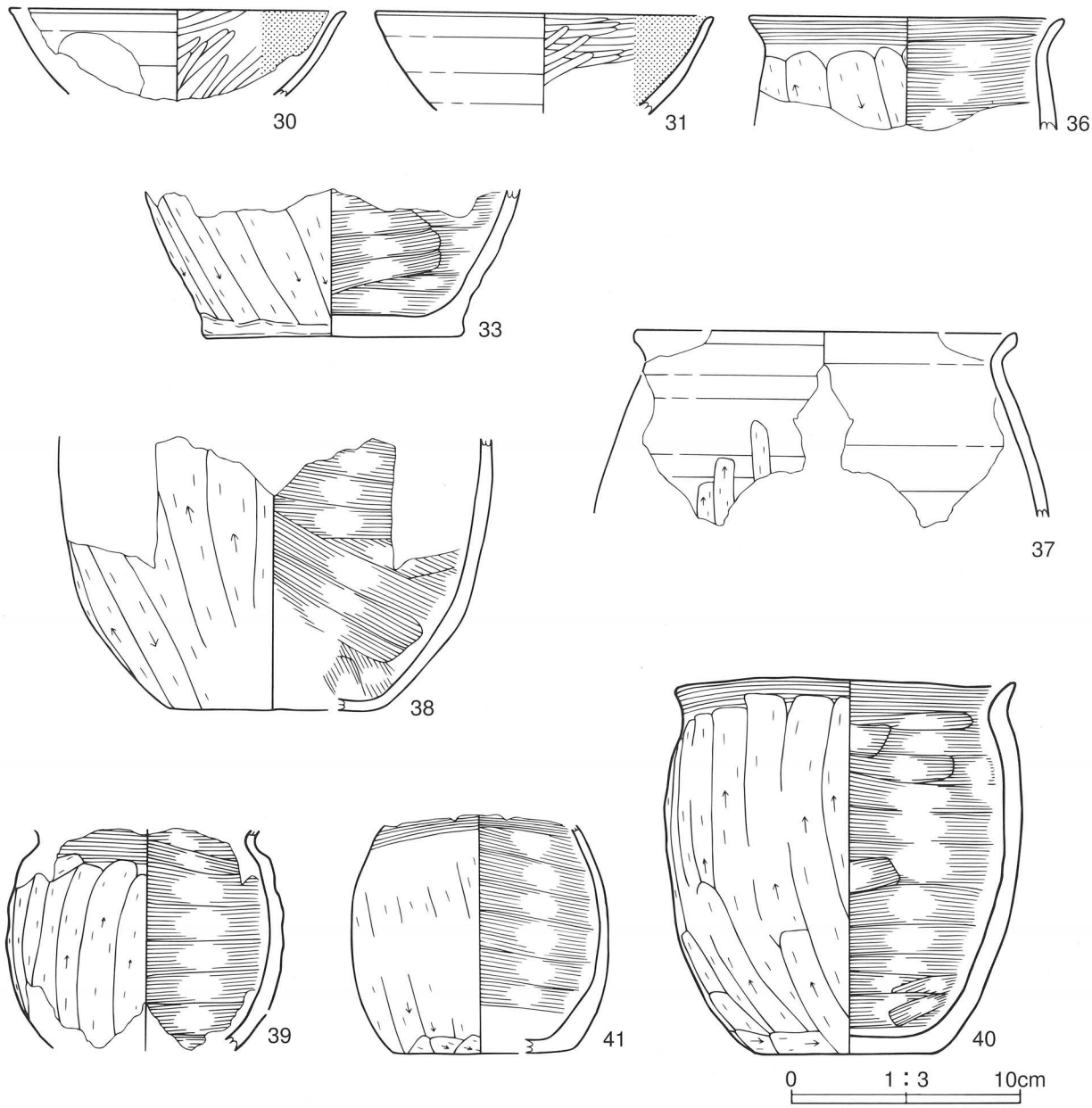
1　10YR2/2　黒褐色土　褐色土うっすらと含む
2　10YR2/2　黒褐色土とにぶい黄橙土(To-a)の混合土
　　明黄褐色・黄褐色焼土ブロック、炭化粒含む
3　10YR4/6　褐色土　黒色土含む
4　10YR2/1　黒色土　褐色土粒含む

3号住居　煙道・カマド断面

1　7.5YR5/8　明褐色焼土
2　7.5YR6/8　橙焼土
3　5 YR5/8　明赤褐色土焼土
4　10YR7/6　明黄褐色焼土　非常に硬い
5　2.5YR5/4　黄褐色土　粘性あり　明褐色焼土・黒色土ブロック状に含む
6　10YR2/3　黒褐色土　赤褐色土・褐色土小ブロック含む
7　10YR2/1　黒色土と黄褐色土の混合土
8　10YR2/2　黒褐色土とにぶい黄橙土(To-a火山灰）の混合土
　　明黄褐色・黄褐色焼土ブロック、炭化粒含む
9　10YR2/3　黒褐色土　褐色粒含む
10　10YR2/2　黒褐色土　褐色粒含む
11　10YR3/2　黒褐色土　褐色粒含む
12　10YR4/4　褐色土
13　10YR4/4　褐色焼土とにぶい黄橙土(To-a火山灰）の混合土
14　10YR2/2　黒褐色土土褐色焼土の混合土
15　10YR4/6　褐色土
16　10YR2/2　黒褐色土　暗赤褐色土すじ状に含む
　　にぶい黄橙土(To-a火山灰）ブロック少量含む
17　10YR2/2　黒褐色土　褐色土うっすらと含む
18　2.5Y5/4　黄褐色焼土　粘性あり
19　10YR5/9　黄褐色焼土　粘性あり
20　10YR3/3　暗褐色土　褐色土・黒色土すじ状に含む
21　10YR2/1　黒色砂質シルト　褐色土含む
22　10YR4/6　褐色砂質シルト　黒色土うっすら含む　粘性あり
23　7.5YR4/1　褐灰砂質シルト　炭化物含む
24　10YR4/6　褐色土　黒色土含む

0　1：25　1m

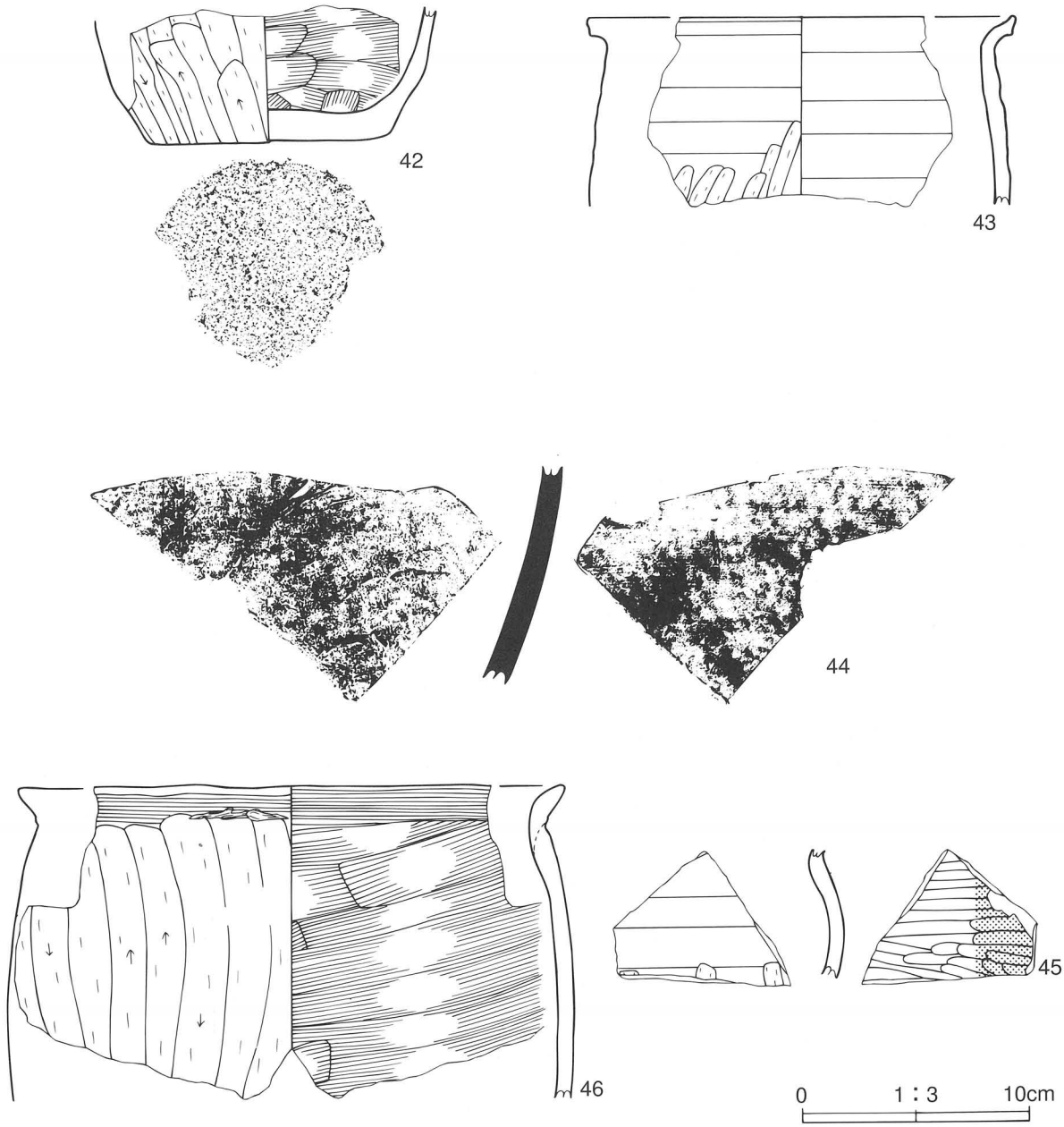
第15図　3号竪穴住居跡 ②



図No.	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量（cm）			備考
							口径	底径	器高	
30	3号住　カマド燃焼部	土師器	坏	3a	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ミガキ	(15.0)	—	-3.8	内面黒色処理
31	3号住　カマド構成	土師器	坏	3a	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ミガキ	(15.0)	—	-4.4	内面黒色処理
32	3号住　カマド煙道	土師器	甕	B3	〔体〕ケズリ〔底〕ケズリ	〔体〕ヨコナデ〔底〕ナデ				写真のみ掲載
33	3号住　カマド袖部奥	土師器	甕	B3	〔体〕ケズリ〔底〕ケズリ	〔体〕ナデ〔底〕ナデ	—	11.1	-6.6	
34	3号住　カマド構成	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ				写真のみ掲載
35	3号住　カマド構成	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ				写真のみ掲載
36	3号住　カマド構成	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(13.9)	—	-4.9	
37	3号住　カマド構成	土師器	甕	A1	〔口〕ロクロナデ〔体〕ロクロナデ+ケズリ	〔口〕ロクロナデ〔体〕ロクロナデ	(16.8)	—	-8.7	
38	3号住　カマド構成	土師器	甕	B3	〔体〕ケズリ〔底〕ケズリ	〔体〕ナデ〔底〕ナデ	—	(9.2)	-12.1	
39	3号住　カマド構成	土師器	甕	B3	〔体〕ナデ+ケズリ	〔体〕ナデ	—	—	-9.8	
40	3号住　カマド構成	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ〔底〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ〔底〕ケズリ	15.0	7.9	16.7	
41	3号住　床面カマド付近	土師器	甕	B3	〔体〕ケズリ〔底〕ケズリ	〔体〕ナデ〔底〕ナデ	(8.4)	7.8	-10.6	

—：残存値　（）：推定値

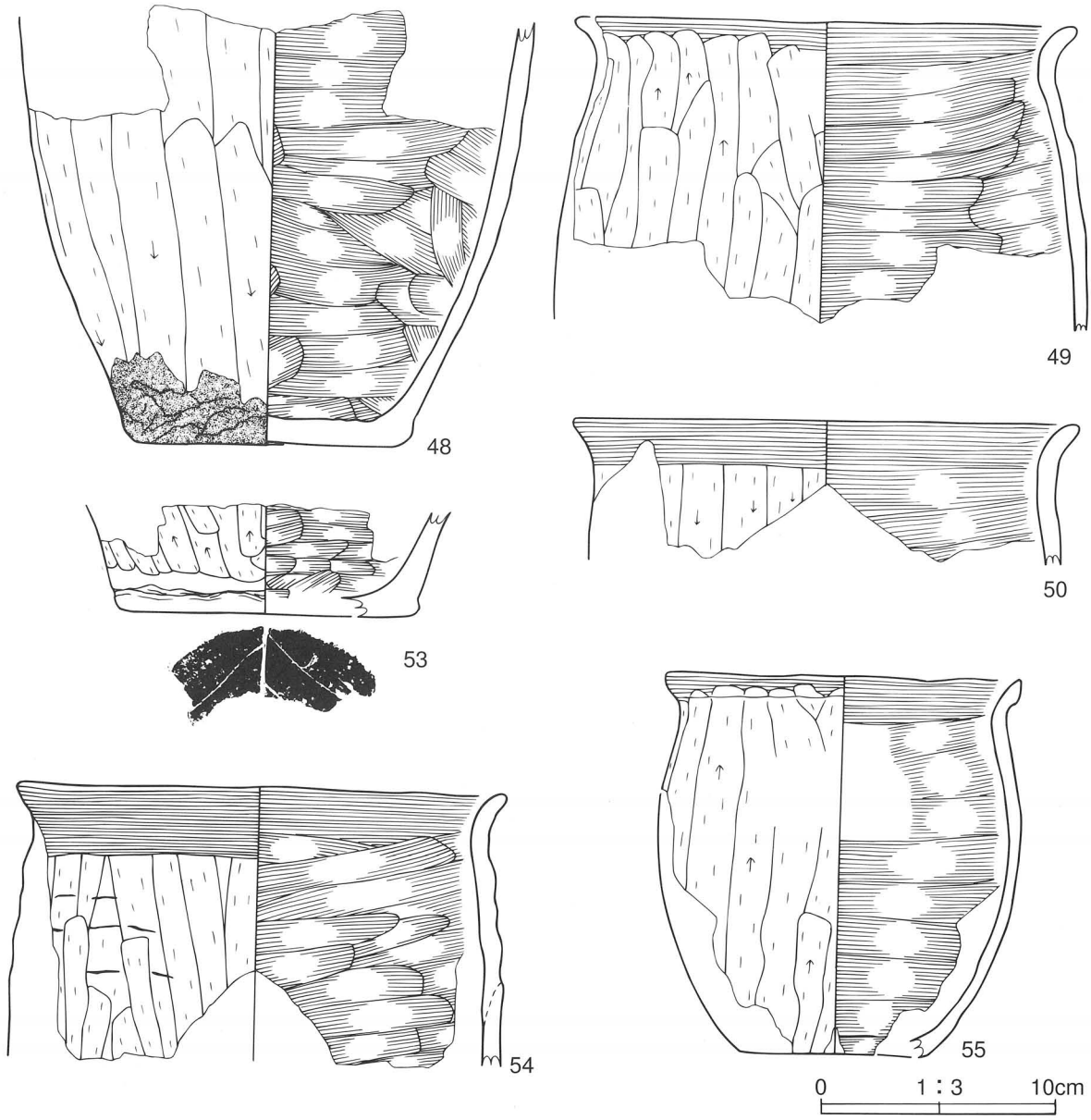
第16図　3号竪穴住居跡出土遺物①



図No.	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量（cm）			備考
							口径	底径	器高	
42	3号住　床面カマド付近	土師器	甕	B3	〔体〕ナデ〔底〕スナゾコ	〔体〕ナデ〔底〕ナデ	—	(10.4)	-5.7	砂底土器
43	3号住　Q1床面	土師器	甕	A1	〔口〕ロクロナデ〔体〕ロクロナデ+ケズリ	〔口〕ロクロナデ〔体〕ロクロナデ	(18.5)	—	-8.4	
44	3号住　Q2床面	須恵器	甕		〔体〕ロクロナデ	〔体〕ロクロナデ				
45	3号住　Q3床面	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ				写真のみ掲載
46	3号住　Q3床面	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(24.1)	—	-14.3	
47	3号住　Q3床面	土師器	鉢	2	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ミガキ	—	—	—	内面黒色処理

—：残存値　（）：推定値

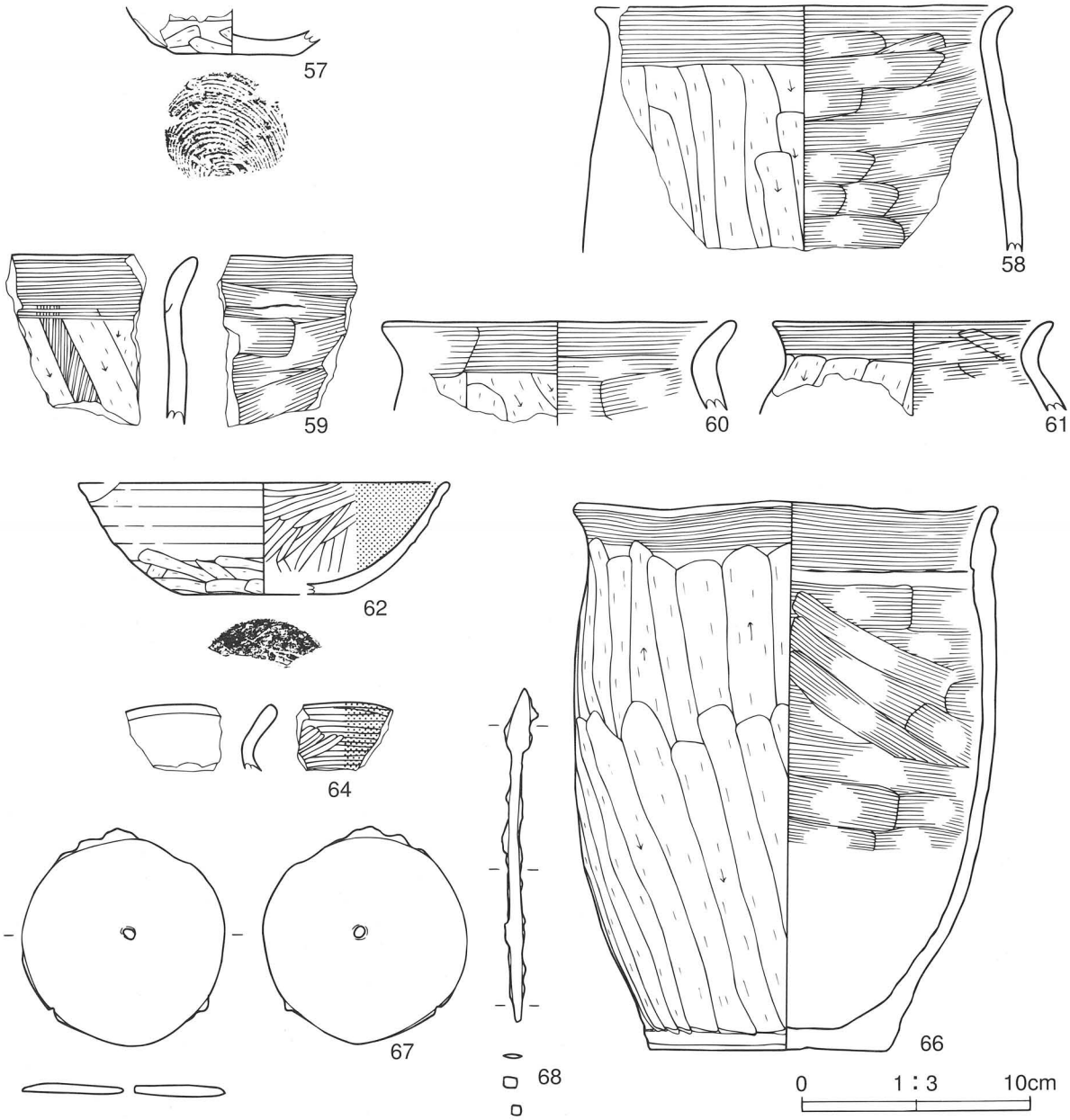
第17図　3号竪穴住居跡出土遺物②



図No.	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量（cm）			備考
							口径	底径	器高	
48	3号住　Q3床面	土師器	甕	B3	〔体〕ナデ+ケズリ〔底〕ケズリ	〔体〕ナデ〔底〕ナデ	—	12.4	-18.6	
49	3号住　Q4床面	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(21.2)	—	-12.9	
50	3号住　Q4床面	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(21.4)	—	-6.1	
51	3号住　Q4床上3cm	土師器	甕	B3	〔体〕ケズリ〔底〕ケズリ	〔体〕ナデ〔底〕ナデ				写真のみ掲載
52	3号住　Q4床上3cm	土師器	甕	B3	〔体〕ケズリ〔底〕ケズリ	〔体〕ナデ〔底〕ナデ				写真のみ掲載
53	3号住　Q1埋土下部	土師器	甕	B3	〔体〕ケズリ〔底〕モクヨウコン	〔体〕ナデ〔底〕ナデ	—	(12.2)	-4.8	
54	3号住　Q2埋土下部	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(20.9)	—	-11.9	
55	3号住　Q2埋土下部	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(15.0)	(7.8)	16.2	

—：残存値　（）：推定値

第18図　3号竪穴住居跡出土遺物③



図No.	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量（cm）			備考
							口径	底径	器高	
56	3号住　Q２埋土下部	土師器	甕	B3	〔体〕ケズリ〔底〕ケズリ	〔体〕ケズリ〔底〕ケズリ				写真のみ掲載
57	3号住　Q２埋土中～下	土師器	甕	A2	〔体〕ロクロナデ〔底〕回転イトキリ	〔体〕ロクロナデ〔底〕ロクロナデ	—	5.2	2.0	底部縁辺にケズリ
58	3号住　Q２埋土中～下	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(18.2)	—	-10.8	
59	3号住　埋土上部	土師器	甕	B4	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ＋ナデ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	—	—	—	
60	3号住　埋土上部	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(14.6)	—	-4.4	
61	3号住　埋土上部	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(12.2)	—	-4.1	
62	3号住　Q４埋土上部	土師器	坏	2a	〔体〕ロクロナデ＋下位ケズリ〔底〕ケズリ	〔体〕ミガキ	(16.3)	(6.8)	5.0	内面黒色処理
63	3号住　Q３埋土	土師器	甕	B3	〔底〕ケズリ	〔底〕ナデ				写真のみ掲載
64	3号住　埋土	土師器	鉢	2	〔口〕ロクロナデ	〔口〕ミガキ	—	—	—	内面黒色処理
65	3号住　埋土	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ				写真のみ掲載
66	3号住　ＰＰ１	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	18.6	10.4	24.1	

—：残存値　（）：推定値

No.	出土地点	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
67	3号住　床面	鉄製紡錘車	5.9	6	0.3	28.9	
68	3号住　床面	鉄鏃	9.9	0.5	0.4	4.4	
69	3号住　床面	鉄製品	-2.9	0.7	0.5	4	写真のみ掲載
70	3号住　床面	鉄滓				11.5	写真のみ掲載　重量は２ケ辺

（）：推定値　—：残存値

第19図　３号竪穴住居跡出土遺物④

４号竪穴住居跡

遺構（第20図・写真図版８）

［位置・重複関係］　ＩＣ７ｈグリッドに位置している。検出面はⅢ層で、十和田ａ火山灰をまばらに含む黒色土の広がりとして検出した。西半部が調査区域外にかかっている。

［規模・平面形・方位］東辺5.20ｍ、南辺（2.12)ｍ、北辺（1.26)ｍを測る。西半部は調査区域外にかかり、東西方向の規模は残存値である。主軸方向はＮ－80°－Ｅである。

［埋土］黒色土を主体とした堆積土で、十和田ａ火山灰の混入量によって9層に細分される。

［壁］壁高の残存値は29～55㎝前後である。

［床面］ほぼ平坦でしまっている。中央部をのぞいて全面に掘り方を持ち、２～６㎝大の礫を多く含む黒褐色土を主体として貼り床されている。厚さは壁近くで20～24㎝、中央部で２～３㎝ほどである。

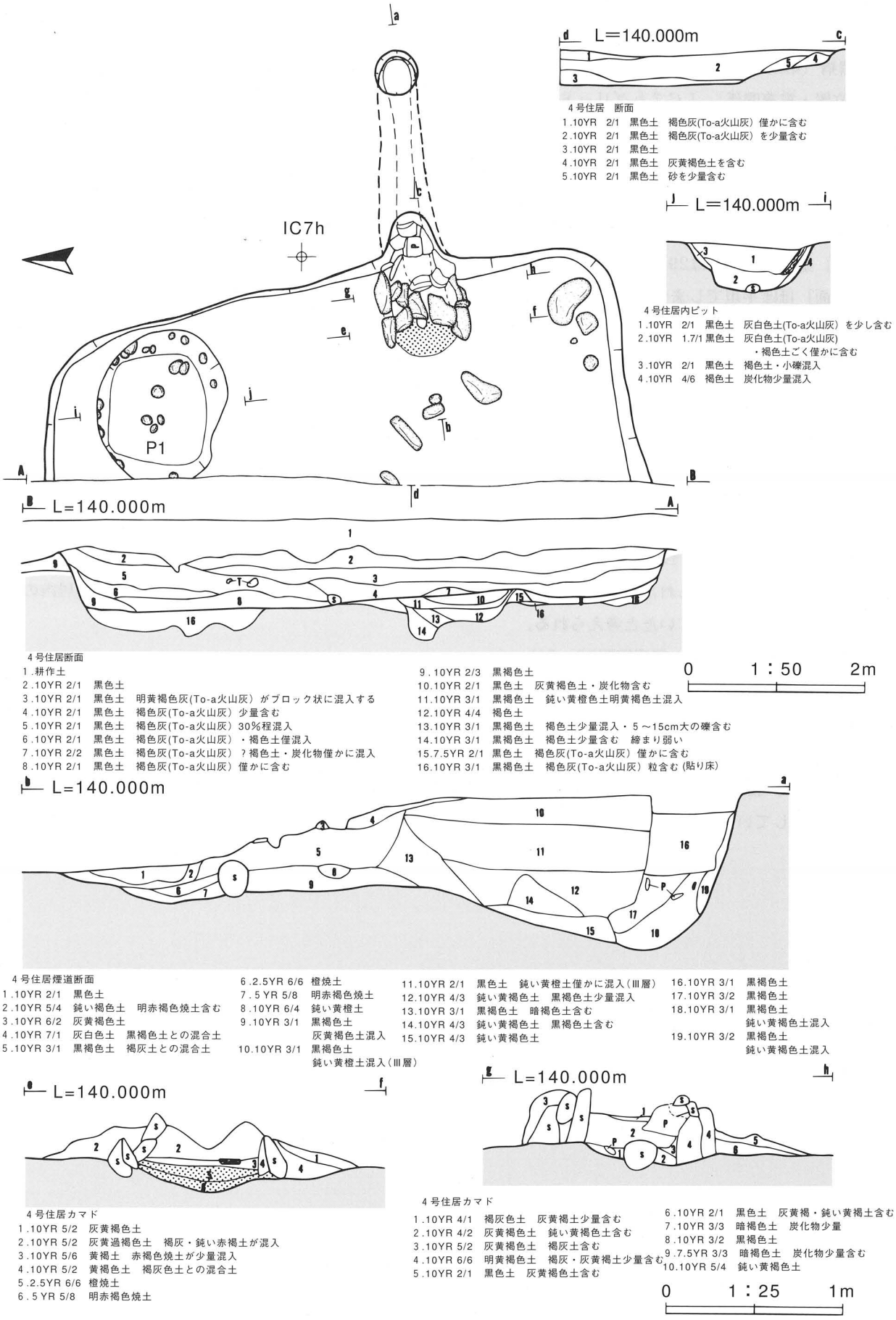
［カマド］東壁の中央部に位置する。本体は芯材となる礫や土器片を多量に用いて褐色粘土・焼土粒を含む灰黄褐色粘土主体で覆って構築されている。燃焼部は強い火熱を受け、よく焼けており130×130㎝・厚さ24㎝の焼土が形成されている。煙道部は刳り貫き式の構造で、外側に向かい16°の傾斜をもって緩やかに下る。煙出し孔は40×41㎝のほぼ円形で、深さ71㎝である。

［壁溝］確認できなかった。

［柱穴・ピット］北東隅の床面が一部貼り床されておらず、やわらかかったことからピットを1基（P1）検出した。規模は118×135㎝・深さ51.5㎝で、円形を呈する。埋土は中振浮石を含む黒褐色土で、壁面には炭化物の堆積が認められた。底面より装着式の手鎌が1点出土している。出土した遺物などから住居内の貯蔵穴として使用されていたと考えられる。

遺物　（第21～25図・写真図版28～30）

カマド～煙出しにかけて多くの遺物が出土している。煙出し埋土からは甕が２点出土した。71ａ、71ｂは接合しないが同一個体である。カマドからは土師器甕６点、鍋片１点、鉢片1点、須恵器甕片２点、大甕片２点が出土している。床面Ｐ１からは土師器甕片1点と装着式手鎌1点が出土した。甕は口縁部付近に補修孔を持つ。装着式の手鎌は木質の把手が良く残り、保存状態が良い。埋土中からは土師器坏片4点、甕片3点が出土している。



4号住居　断面
1.10YR　2/1　黒色土　褐色灰(To-a火山灰）僅かに含む
2.10YR　2/1　黒色土　褐色灰(To-a火山灰）を少量含む
3.10YR　2/1　黒色土
4.10YR　2/1　黒色土　灰黄褐色土を含む
5.10YR　2/1　黒色土　砂を少量含む

4号住居内ピット
1.10YR　2/1　黒色土　灰白色土(To-a火山灰）を少し含む
2.10YR　1.7/1 黒色土　灰白色土(To-a火山灰)
・褐色土ごく僅かに含む
3.10YR　2/1　黒色土　褐色土・小礫混入
4.10YR　4/6　褐色土　炭化物少量混入

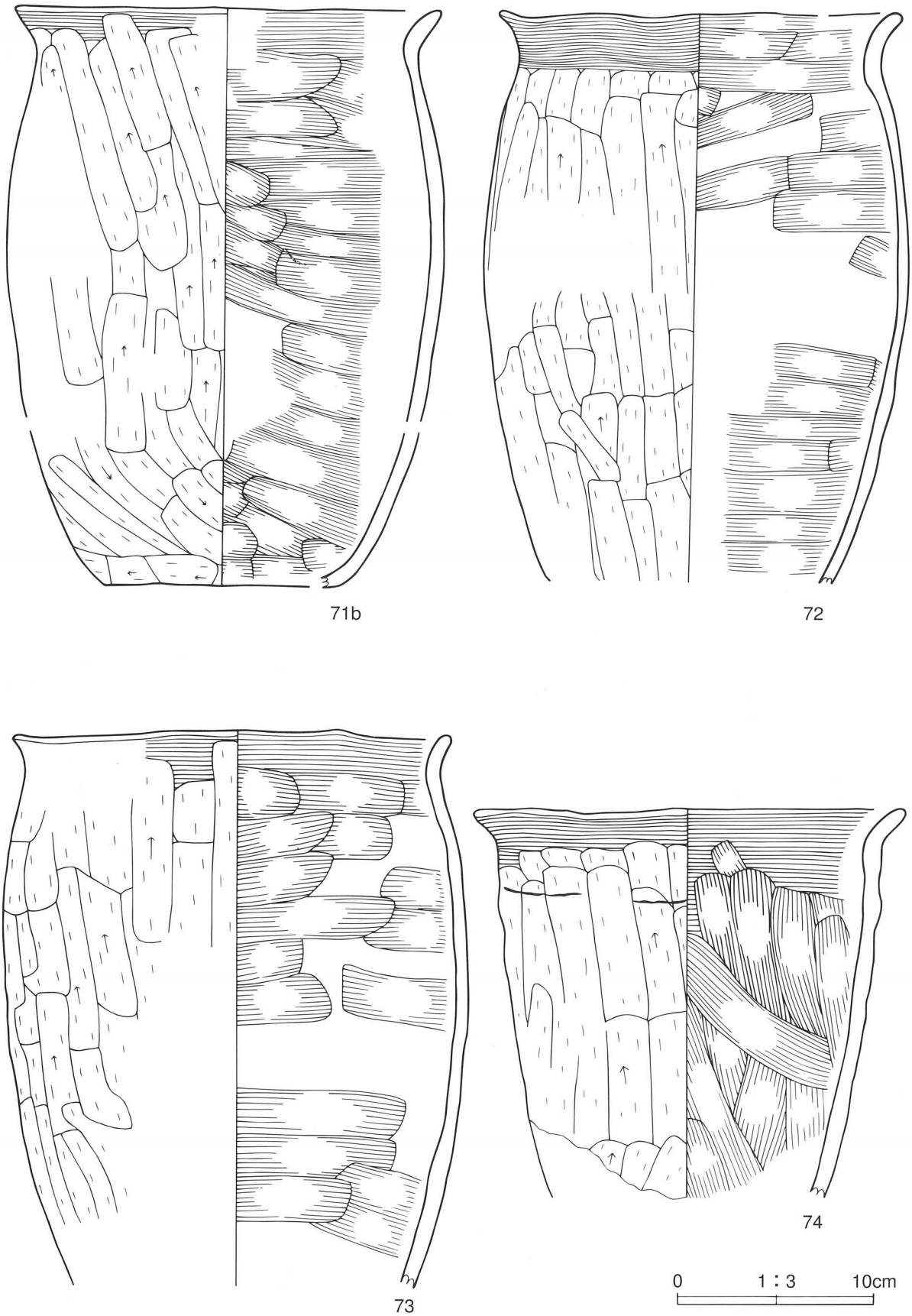
4号住居断面
1.耕作土
2.10YR 2/1　黒色土
3.10YR 2/1　黒色土　明黄褐色灰(To-a火山灰）がブロック状に混入する
4.10YR 2/1　黒色土　褐色灰(To-a火山灰）少量含む
5.10YR 2/1　黒色土　褐色灰(To-a火山灰）30%程混入
6.10YR 2/1　黒色土　褐色灰(To-a火山灰）・褐色土僅混入
7.10YR 2/2　黒色土　褐色灰(To-a火山灰）？褐色土・炭化物僅かに混入
8.10YR 2/1　黒色土　褐色灰(To-a火山灰）僅かに含む
9.10YR 2/3　黒褐色土
10.10YR 2/1　黒色土　灰黄褐色土・炭化物含む
11.10YR 3/1　黒褐色土　鈍い黄橙色土明黄褐色土混入
12.10YR 4/4　褐色土
13.10YR 3/1　黒褐色土　褐色土少量混入・5～15cm大の礫含む
14.10YR 3/1　黒褐色土　褐色土少量含む　締まり弱い
15.7.5YR 2/1　黒色土　褐色灰(To-a火山灰）僅かに含む
16.10YR 3/1　黒褐色土　褐色灰(To-a火山灰）粒含む(貼り床)

4号住居煙道断面
1.10YR 2/1　黒色土
2.10YR 5/4　鈍い褐色土　明赤褐色焼土含む
3.10YR 6/2　灰黄褐色土
4.10YR 7/1　灰白色土　黒褐色土との混合土
5.10YR 3/1　黒褐色土　褐灰土との混合土
6.2.5YR 6/6　橙焼土
7.5YR 5/8　明赤褐色焼土
8.10YR 6/4　鈍い黄橙土
9.10YR 3/1　黒褐色土
灰黄褐色土混入
10.10YR 3/1　黒褐色土
鈍い黄橙土混入（Ⅲ層）
11.10YR 2/1　黒色土　鈍い黄橙土僅かに混入（Ⅲ層）
12.10YR 4/3　鈍い黄褐色土　黒褐色土少量混入
13.10YR 3/1　黒褐色土　暗褐色土含む
14.10YR 4/3　鈍い黄褐色土　黒褐色土含む
15.10YR 4/3　鈍い黄褐色土
16.10YR 3/1　黒褐色土
17.10YR 3/2　黒褐色土
18.10YR 3/1　黒褐色土
鈍い黄褐色土混入
19.10YR 3/2　黒褐色土
鈍い黄褐色土混入

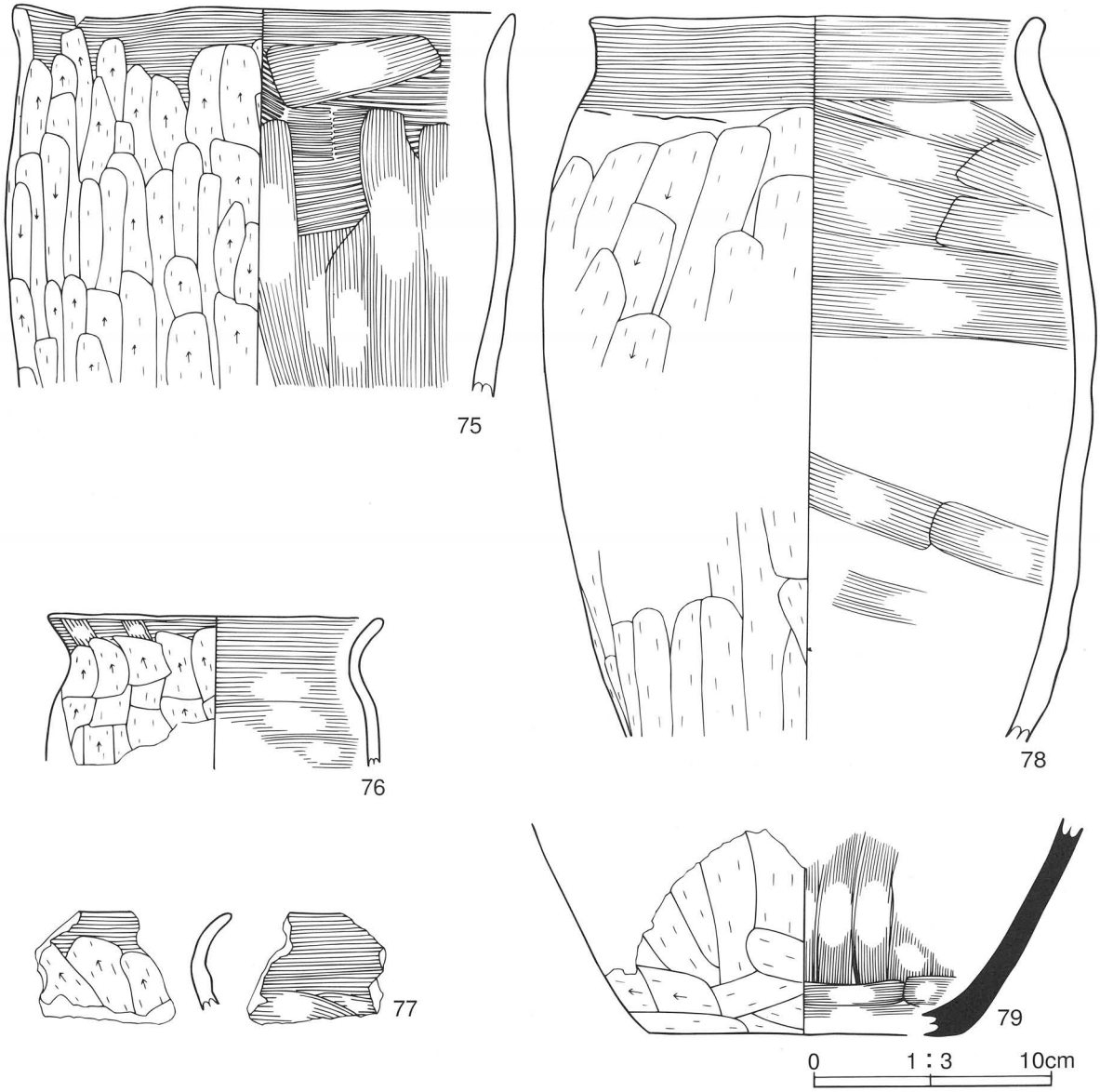
4号住居カマド
1.10YR 5/2　灰黄褐色土
2.10YR 5/2　灰黄過褐色土　褐灰・鈍い赤褐土が混入
3.10YR 5/6　黄褐土　赤褐色焼土が少量混入
4.10YR 5/2　黄褐色土　褐灰色土との混合土
5.2.5YR 6/6　橙焼土
6.5YR 5/8　明赤褐色焼土

4号住居カマド
1.10YR 4/1　褐灰色土　灰黄褐土少量含む
2.10YR 4/2　灰黄褐色土　鈍い黄褐色土含む
3.10YR 5/2　灰黄褐色土　褐灰土含む
4.10YR 6/6　明黄褐色土　褐灰・灰黄褐土少量含む
5.10YR 2/1　黒色土　灰黄褐色土含む
6.10YR 2/1　黒色土　灰黄褐・鈍い黄褐土含む
7.10YR 3/3　暗褐色土　炭化物少量
8.10YR 3/2　黒褐色土
9.7.5YR 3/3　暗褐色土　炭化物少量含む
10.10YR 5/4　鈍い黄褐色土

第20図　4号竪穴住居跡



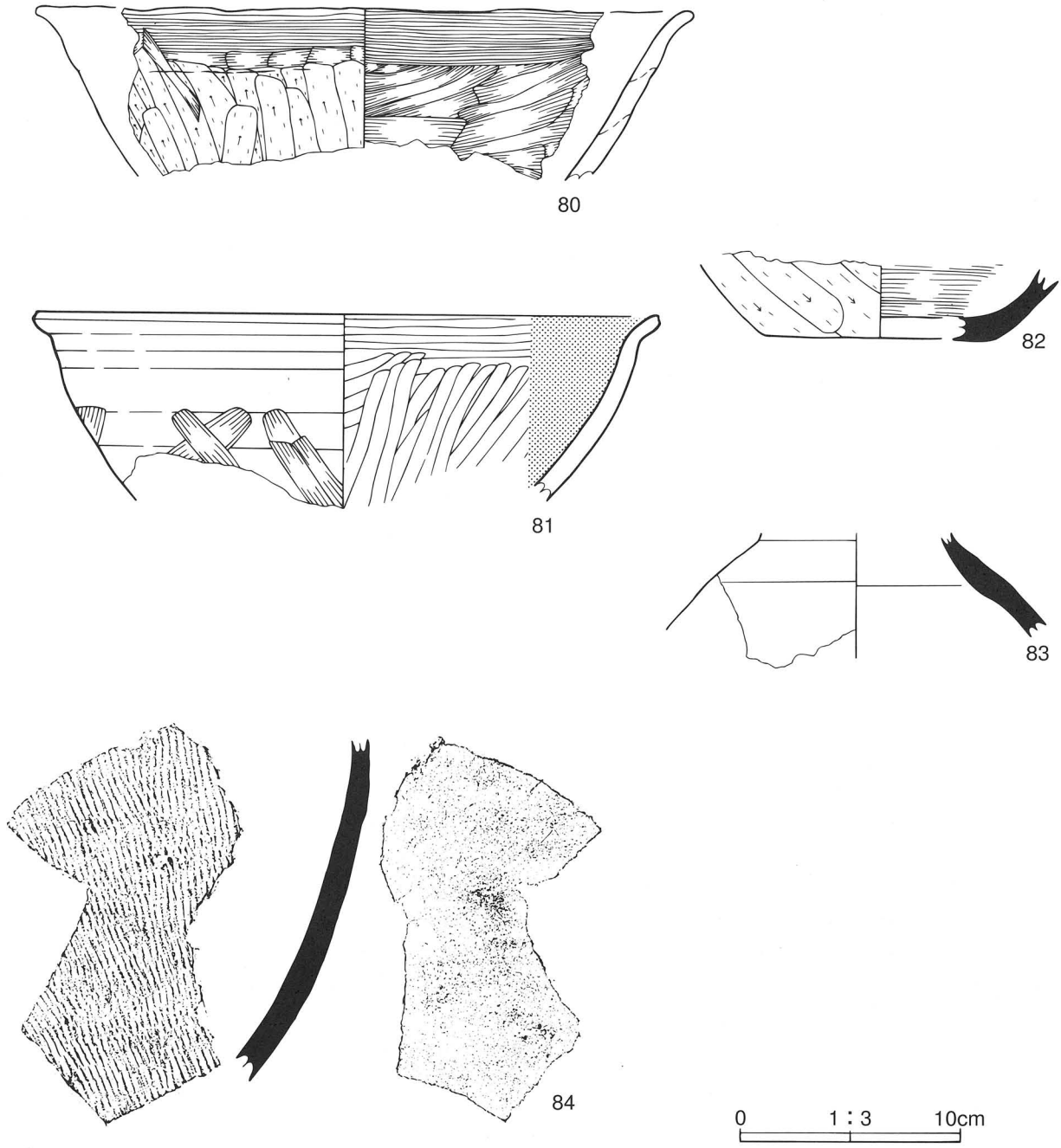
第21図　４号竪穴住居跡出土遺物①



図No.	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量（cm）			備考
							口径	底径	器高	
71a	4号住　煙出し埋土	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(22.0)	(12.0)	-30.1	bと同一個体
71b	4号住　煙出し埋土	土師器	甕	B3	〔体〕ケズリ〔底〕ケズリ	〔体〕ナデ〔底〕ナデ				aと同一個体
72	4号住　煙出し埋土	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	20.8	14.5	29.5	
73	4号住　カマド構成	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	22.7	17.6	28.8	
74	4号住　カマド構成	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(21.6)	—	-20.1	
75	4号住　カマド構成	土師器	甕	B4	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(21.2)	—	-16.4	
76	4号住　カマド構成	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(14.4)	—	-6.3	
77	4号住　カマド構成	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	—	—	—	
78	4号住　カマド構成	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	19.3	17.0	30.8	
79	4号住　カマド構成	須恵器	甕	B3	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	—	(13.2)	-9.0	

—：残存値　（）：推定値

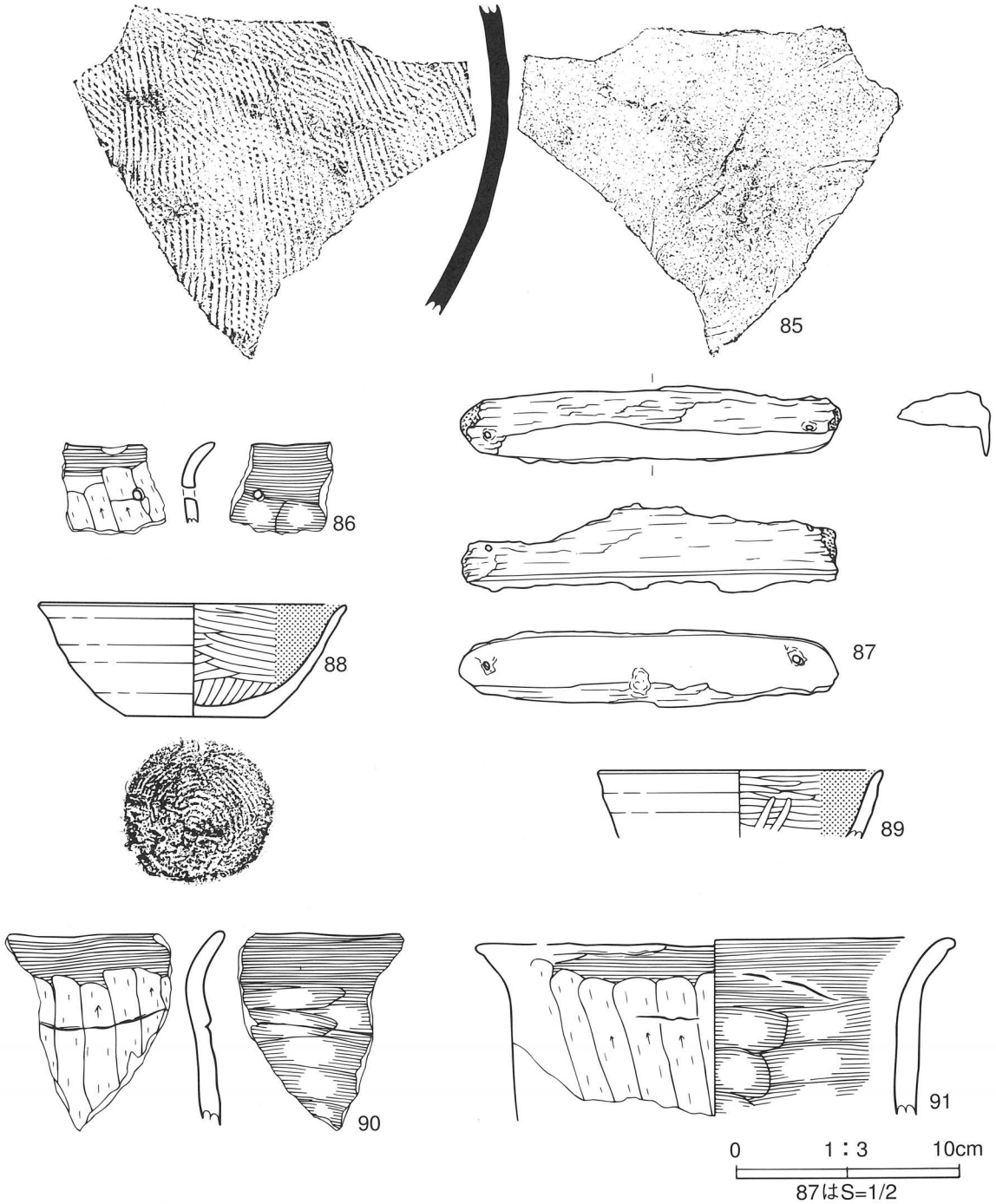
第22図　4号竪穴住居跡出土遺物②



図No.	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量（cm）			備考
							口径	底径	器高	
80	4号住　カマド構成	土師器	塝		〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(30.0)	—	-7.8	
81	4号住　カマド構成	土師器	鉢	1	〔口〕ロクロナデ〔体〕ロクロナデ+ナデ	〔口〕ミガキ〔体〕ミガキ	(27.7)	—	-8.9	内面黒色処理
82	4号住　カマド構成	須恵器	甕		〔体〕ケズリ〔底〕ケズリ	〔体〕ナデ〔底〕ナデ	—	(10.6)	-3.8	
83	4号住　カマド構成	須恵器	甕?		〔体〕ロクロナデ	〔体〕ロクロナデ	—	—	-4.4	
84	4号住　カマド構成	須恵器	大甕		〔体〕タタキメ	〔体〕ナデ				平行タタキ

—：残存値　（）：推定値

第23図　4号竪穴住居跡出土遺物③

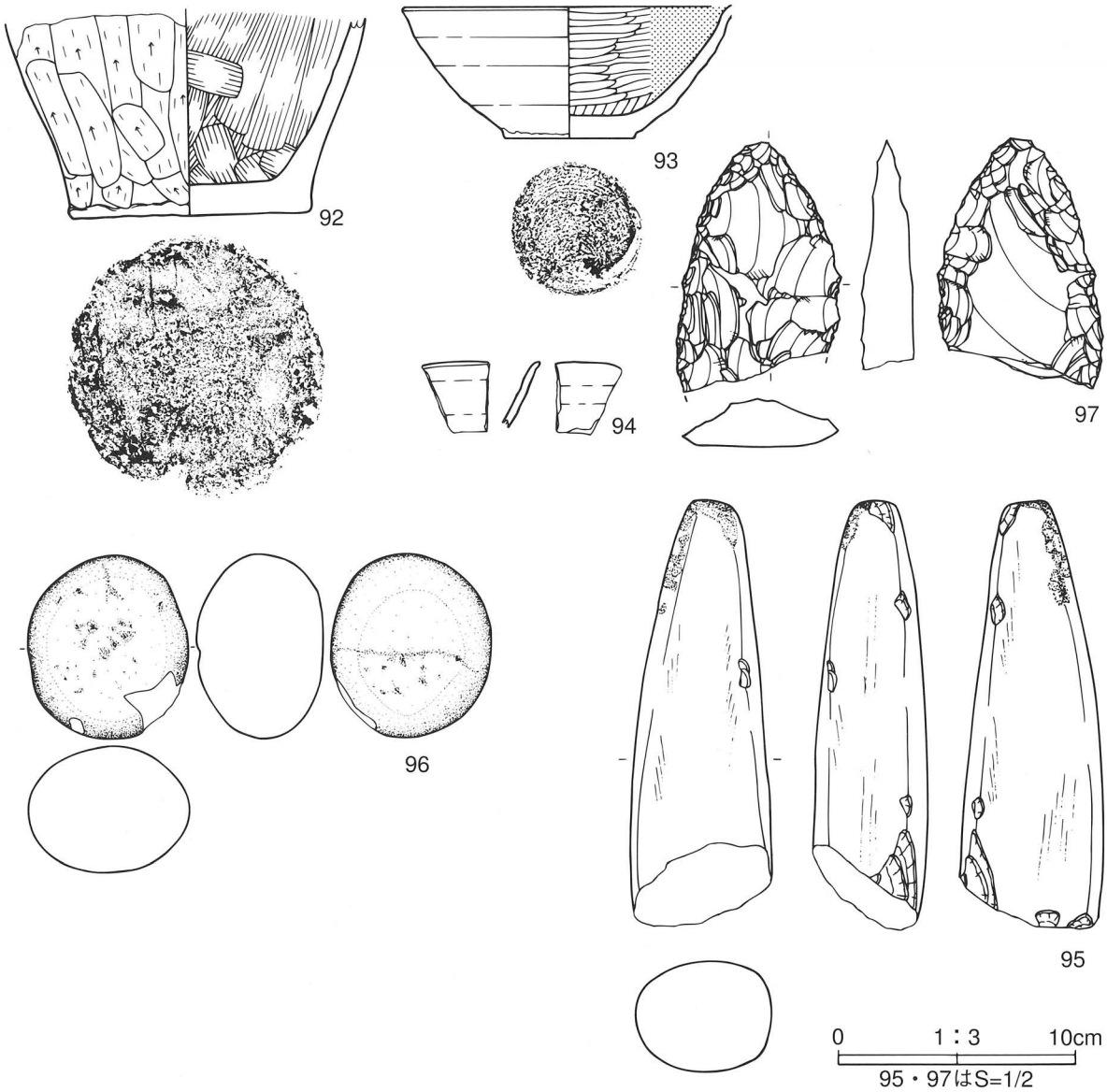


図No.	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量（cm）			備考
							口径	底径	器高	
85	4号住　カマド構成	須恵器	大甕		〔体〕タタキメ	〔体〕				平行タタキ
86	4号住　P1	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	—	—	—	口縁部付近に補修孔
88	4号住　埋土下部	土師器	坏	1a	〔体〕ロクロナデ〔底〕回転イトキリ＋手持ちヘラケズリ	〔体〕ミガキ〔底〕ミガキ	14.0	6.2	5.2	内面黒色処理
89	4号住　埋土中位	土師器	坏	3a	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ミガキ	(13.0)	—	-3.1	内面黒色処理
90	4号住　埋土中位	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	—	—	—	
91	4号住　埋土中位	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(21.9)	—	-8.1	

—：残存値　（）：推定値

No.	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
87	4号住　P1床面	装着式手鎌	11.4	2.4	1.3	28.6	刃部の厚さ0.1cm

第24図　4号竪穴住居跡出土遺物④



図No.	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量（cm）			備考
							口径	底径	器高	
92	4号住　埋土中位	土師器	甕	B3	〔体〕ケズリ〔底〕ケズリ（スナゾコ）	〔体〕ナデ〔底〕ナデ	—	10.4	-8.2	底部砂底
93	4号住　埋土	土師器	坏	1a	〔体〕ロクロナデ〔底〕回転イトキリ	〔体〕ミガキ〔底〕ミガキ	(14.2)	-5.6	5.6	
94	4号住　埋土	土師器	坏	3b	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ロクロナデ	—	—	—	

—：残存値　（）：推定値

No.	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	石質
95	4号住　床面	磨製石斧	12.1	3.8	3.1	242.7		橄欖岩
96	4号住　床面	磨石	7.7	6.8	5.3	350		安山岩
97	4号住　埋土下部	ポイント	6.9	4.6	1.4	43		珪質頁岩

（）：推定値　—：残存値

第25図　4号竪穴住居跡出土遺物⑤

５号竪穴住居跡

遺構（第26図・写真図版９）

［位置・重複関係］　ＩＤ６ｃグリッドに位置している。検出面はⅢ層で、十和田ａ火山灰をまばらに含む黒色土の広がりとして検出した。

［規模・平面形・方位］北東辺4.23ｍ、南西辺4.10ｍ、南東辺4.30ｍ、北西辺4.20ｍのほぼ正方形を呈する。床面積は約17.7㎡である。主軸方向はＷ－51°－Ｎである。

［埋土］黒色土主体で構成され、十和田ａ火山灰小ブロックの混入量によって６層に細分される。

［壁］壁高の残存値は22～41㎝前後である。

［床面］ほぼ平坦であるが、北側はとくに貼り床が厚いために、周囲より若干せりあがっている。全体的に非常にかたくしまっており、特に中央部の土坑脇がガリガリに堅い。貼り床は西側をのぞく全面に施され、厚さは壁近くで12～23㎝、中央部で10～23㎝ほどである。

［カマド］北西壁辺に新旧ふたつのカマドを検出した。ここでは新しいほうのカマドを新カマド、古いほうのカマドを旧カマドとし、以後そのように記述する。新カマドは北西壁の北よりに構築されている。本体は芯材となる礫を黒褐色土と鈍い黄橙色粘土の混合土で覆って構築されている。燃焼部には120×180㎝・厚さ39㎝の焼土が形成されている。煙道部は掘り込み式で、壁辺から138㎝外方へ延びており、底面は32°の傾斜をもって下っている。旧カマドは新カマドの東隣に位置している。本体は残存しない。煙道部は刳り貫き式の構造で、外側に向かって20°の傾斜をもって下る。煙出し孔は37×39㎝のほぼ円形を呈し、深さ81㎝である。

［壁溝］幅16～24㎝前後、床面からの深さ20～22㎝前後で住居内を一周するものと思われる。

［柱穴・ピット］床面からピット1基を検出した。規模は68×82㎝・深さ38㎝で、ほぼ円形を呈する。遺物は土師器甕片1点が出土している。住居に伴う貯蔵穴といった性格のものと思われる。

遺物（第27～28図・写真図版31）

カマド煙道～煙出しにかけて多くの遺物が出土した。旧カマドからは土師器甕片が1点のみ出土した。新カマド煙道～煙出し埋土にかけては土師器甕が5点、袖部から1点出土している。埋土中からは土師器坏片２点と甕片1点が出土した。床面ピット埋土から土師器甕片1点が出土している。

６号竪穴住居跡

遺構（第29図・写真図版10）

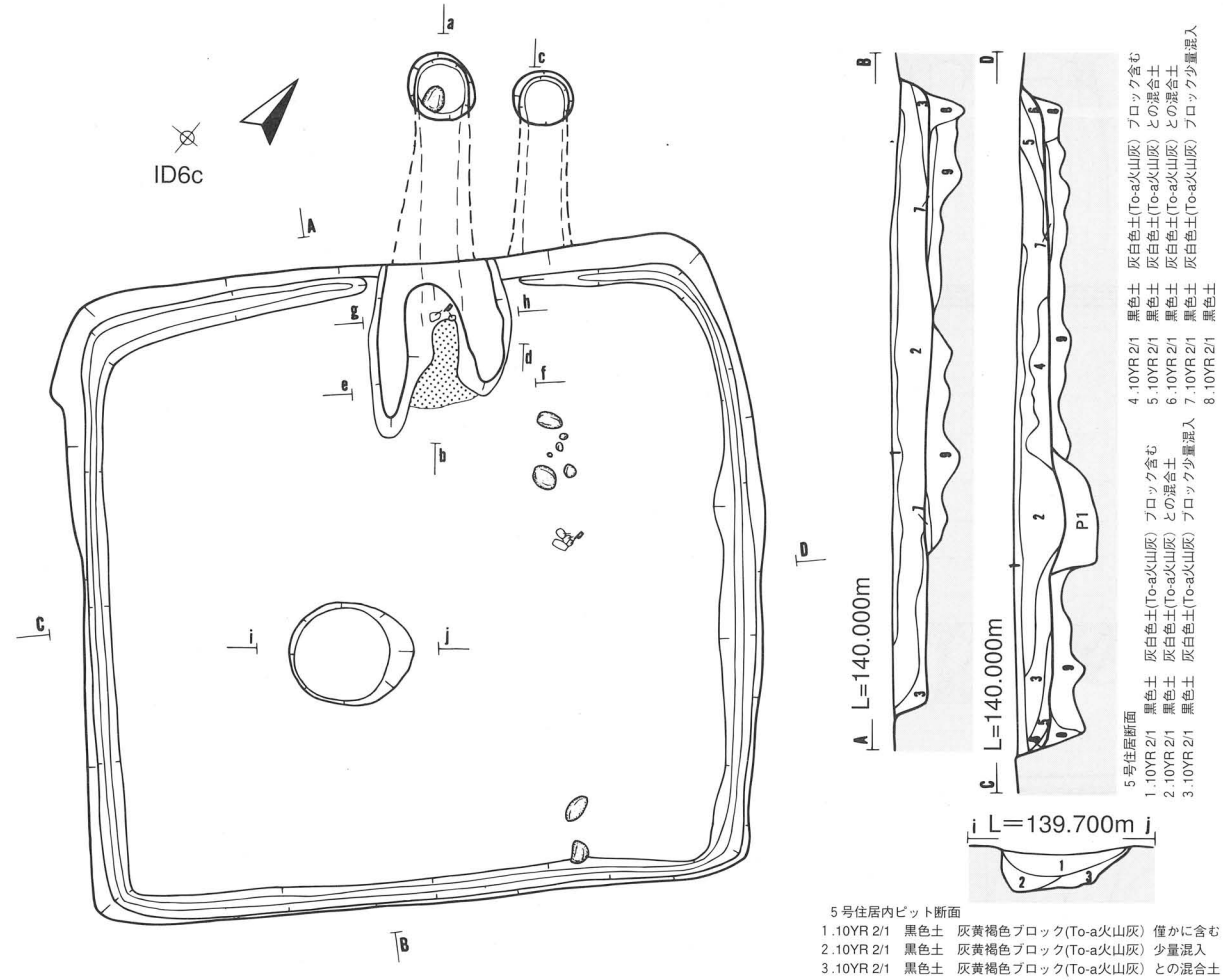
［位置・重複関係］　ⅡＥ２ａグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、十和田ａ火山灰を含む黒色土の広がりとして検出した。調査前の試掘トレンチによって南北方向の一部が削平を受けている。

［規模・平面形・方位］北東辺3.60ｍ、南西辺3.50ｍ、南東辺3.30ｍ、北西辺3.36ｍのほぼ正方形を呈する。床面積は約11.8㎡である。主軸方向はＮ－22°－Ｅである。

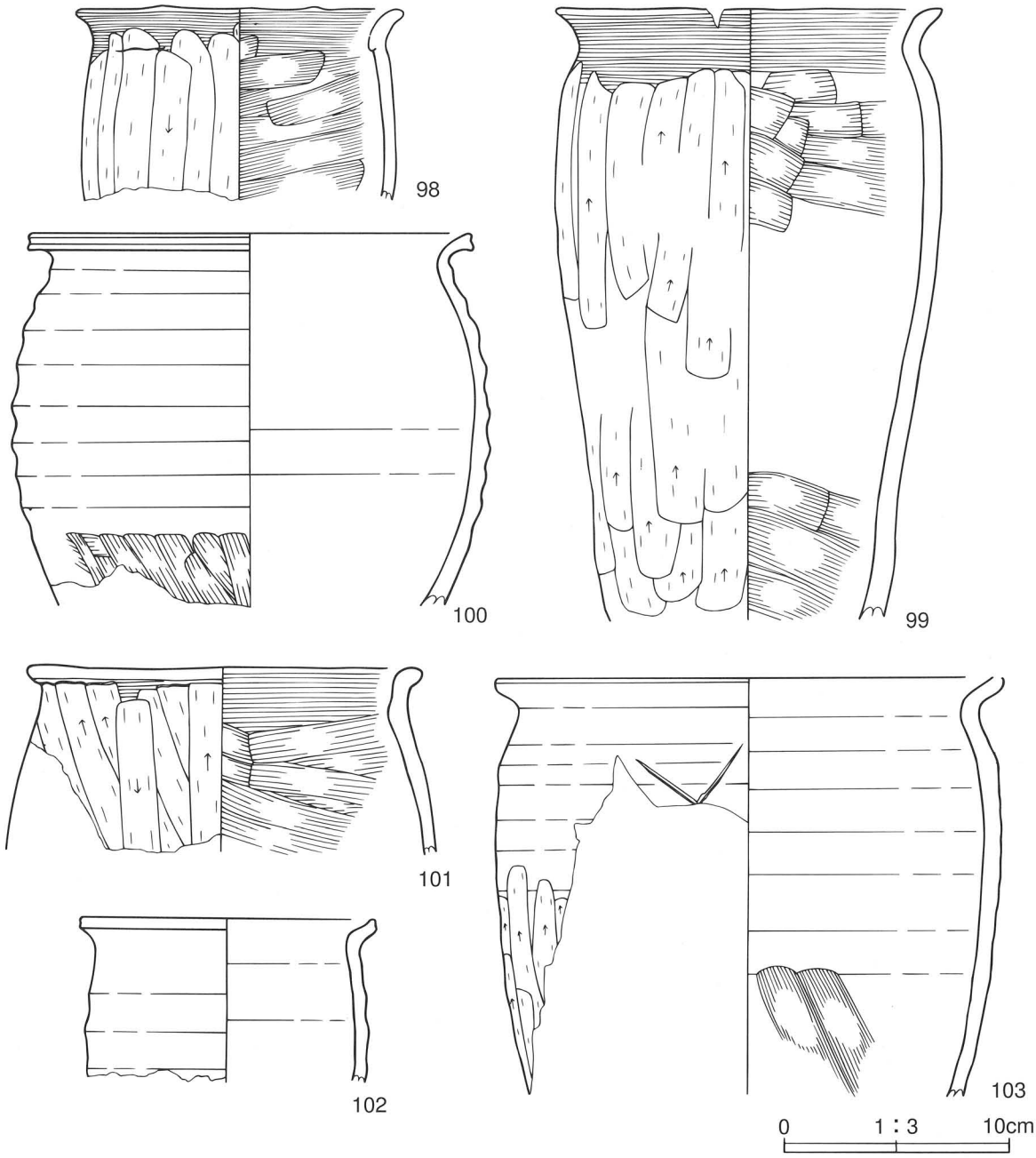
［埋土］十和田ａ火山灰ブロックを多量に含む黒色土～黒褐色土を主体して構成され、十和田ａブロック・黄褐色土ブロックの混入量により19層に細分される。全体としてレンズ状の堆積状況を示し、自然堆積であったと推測される。

［壁］壁高の残存値は53～65㎝前後である。南東壁上端が僅かに外方に張り出し、テラス状を呈している。

［床面］ほぼ平坦で、全体的に非常に堅い。カマド周辺をのぞく全面に掘り方を持ち、小礫を含む褐色砂質シルトで貼り床されている。厚さは壁近くで12㎝、中央で８㎝程である。ほぼ中央部に76×121㎝の範囲で小礫を含み、特に堅く締まる箇所が認められた。南壁辺中央から十和田ａ火山灰が約20×60㎝の扇状に



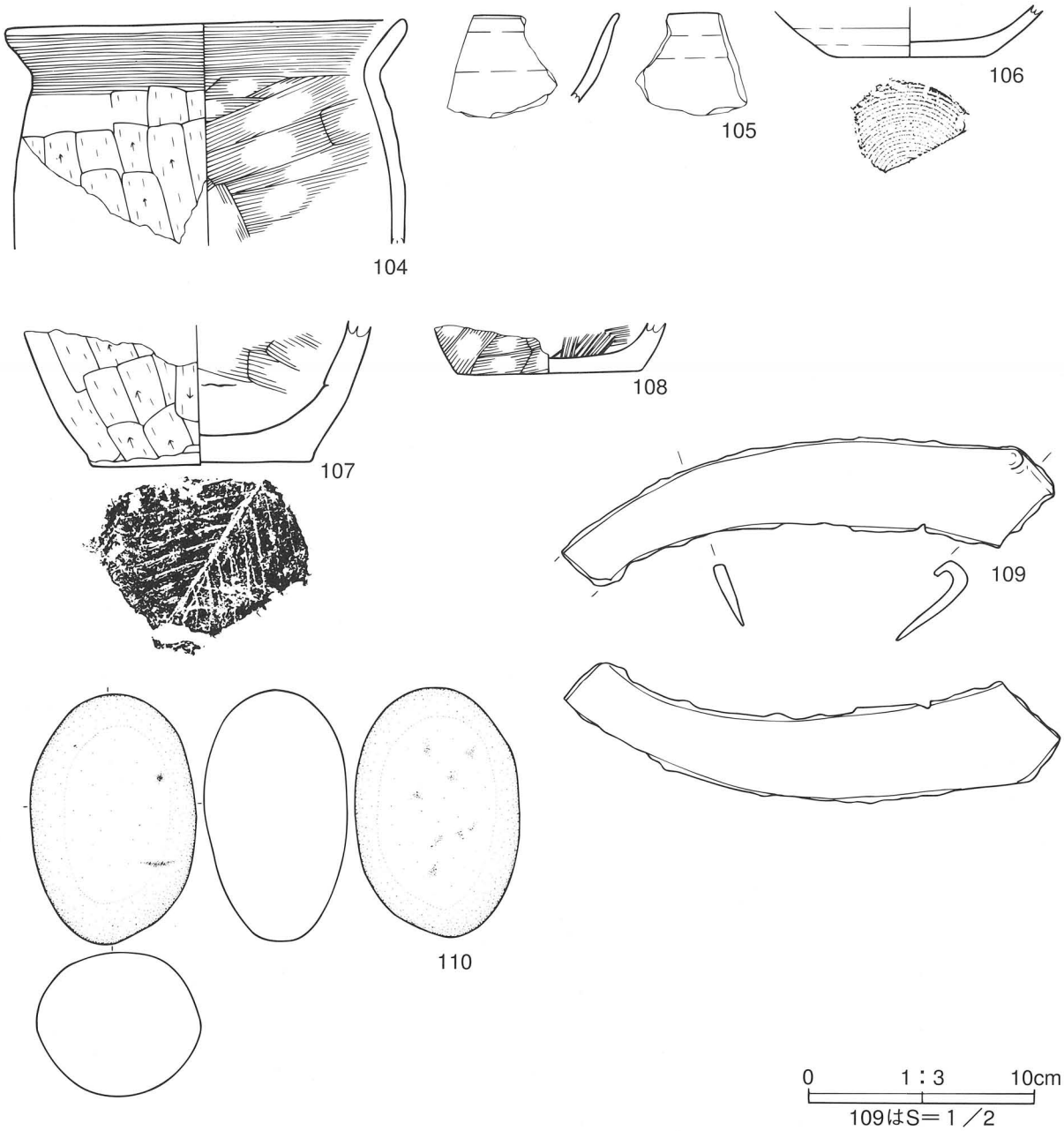
第26図　5号竪穴住居跡



図No.	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量（cm）			備考
							口径	底径	器高	
98	5号住　（旧）煙道埋土	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(14.4)	—	-8.5	
99	5号住　（新）煙道～煙出し	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	17.0	—	-27.3	
100	5号住　（新）煙道～煙出し	土師器	甕	A1	〔口〕ロクロナデ〔体〕ロクロナデ+ナデ	〔口〕ロクロナデ	(19.4)	—	-16.7	
101	5号住　（新）煙道～煙出し	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(17.4)	—	-8.2	
102	5号住　（新）煙道～煙出し	土師器	甕	A	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	(13.2)	—	-7.2	
103	5号住　（新）煙道～煙出し	土師器	甕	A1	〔口〕ロクロナデ〔体〕ロクロナデ+ケズリ	〔口〕ロクロナデ〔体〕ロクロナデ	22.6	—	-18.5	胴上部にヘラ描き「×」

—：残存値　（）：推定値

第27図　5号竪穴住居跡出土遺物①



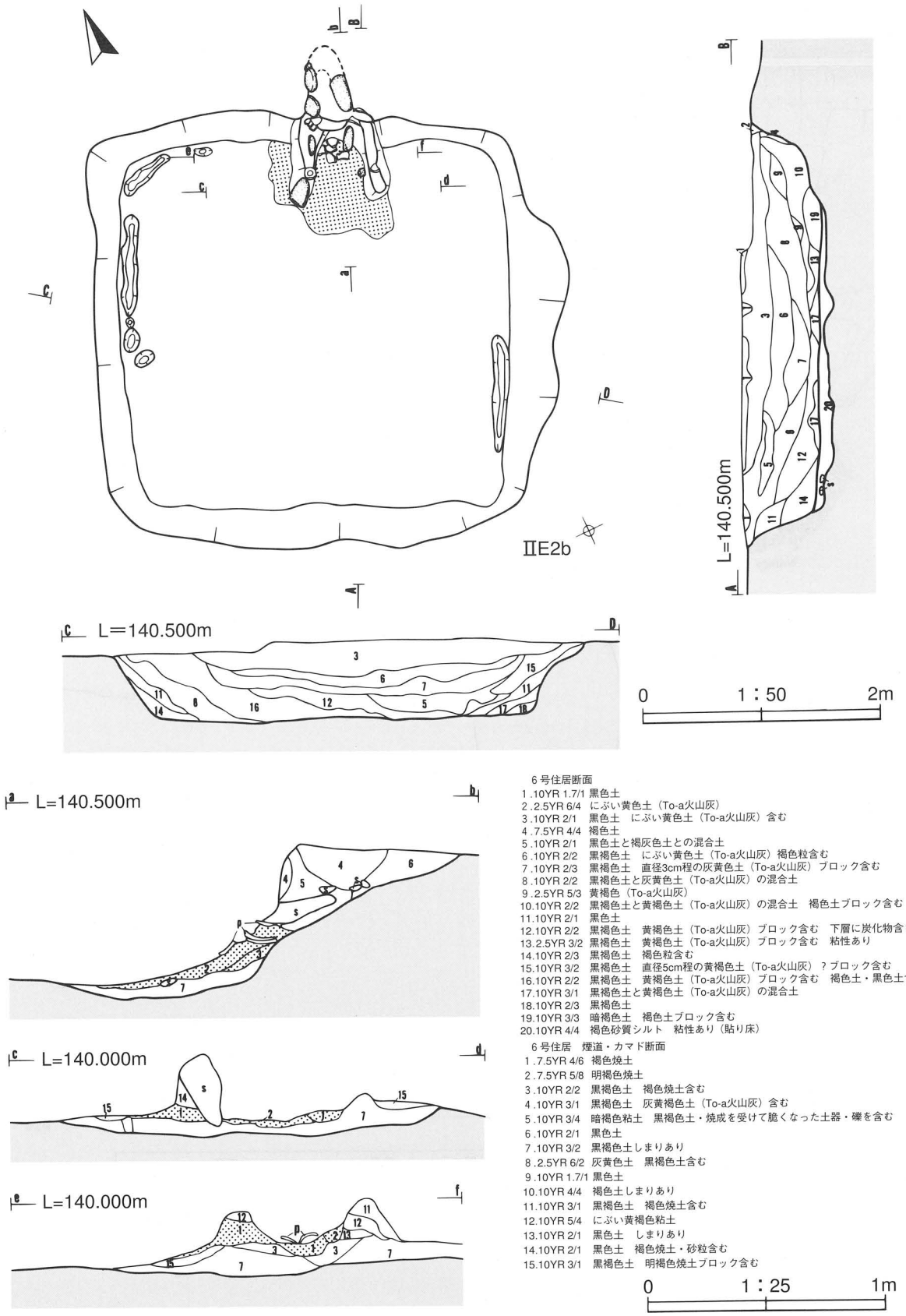
図No.	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量（cm）			備考
							口径	底径	器高	
104	5号住　（新）カマド袖	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(18.0)	—	-9.9	
105	5号住　埋土中位	土師器	坏	3b	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	—	—	—	
106	5号住　埋土中位	土師器	坏	1b	〔体〕ロクロナデ〔底〕回転イトキリ	〔体～底〕ロクロナデ	—	7.0	-2.3	
107	5号住　埋土中位	土師器	甕	B3	〔体〕ケズリ〔底〕モクヨウコン	〔体〕ナデ〔底〕ナデ	—	(9.8)	-6.3	底部木葉痕
108	5号住　ピット埋土	土師器	甕	B4	〔体〕ナデ〔底〕ケズリ	〔体〕ハケメ〔底〕ナデ	—	8.4	-2.2	

—：残存値　（）：推定値

No.	出土地点	種類・器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
109	5号住　床面	鎌	14.6	3.4	1	41.9	
110	5号住　床面	磨石	11.3	7.4	6.3	685	石質：安山岩

（）：推定値　—：残存値

第28図　5号竪穴住居跡出土遺物②



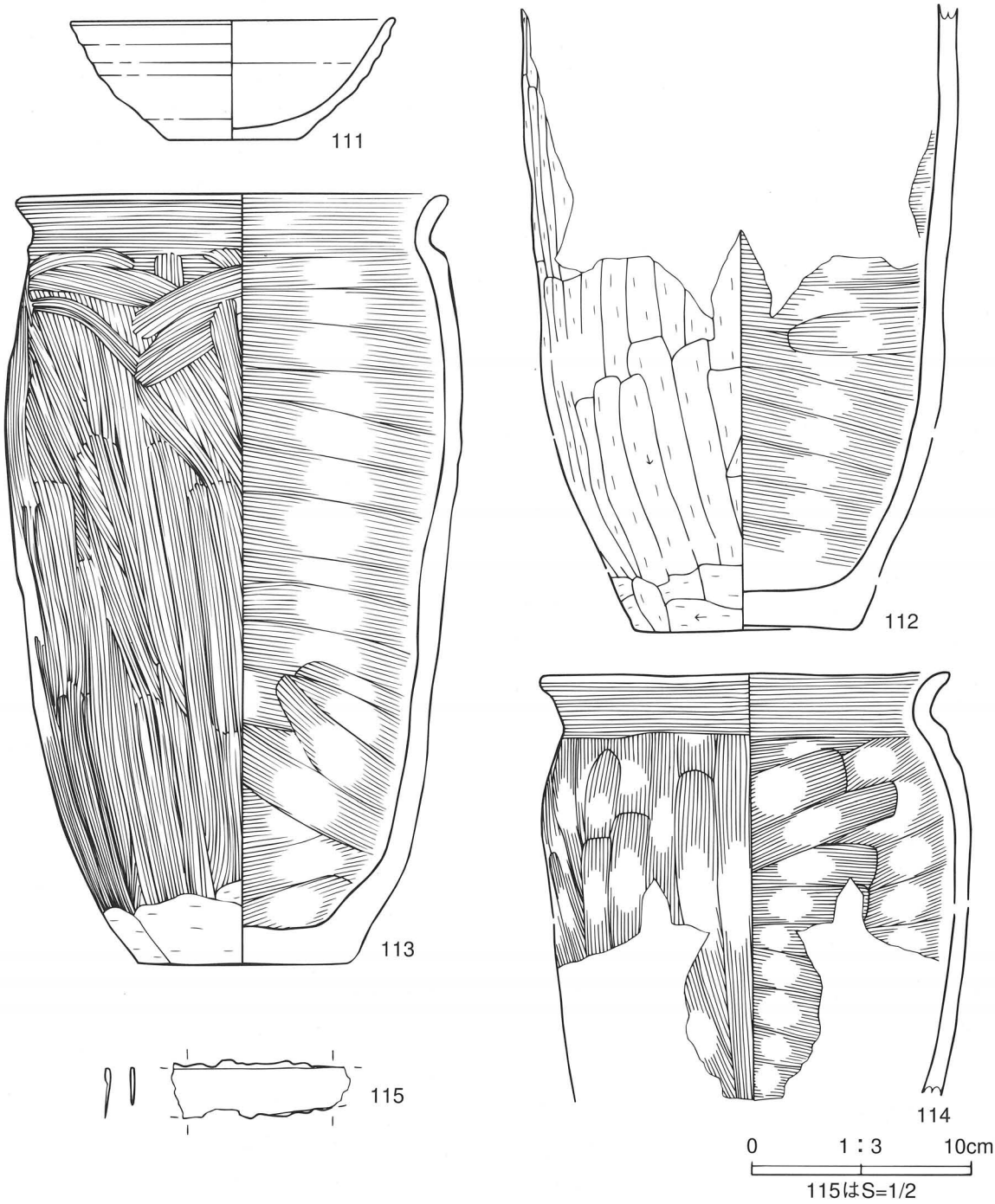
6号住居断面

1.10YR 1.7/1 黒色土
2.2.5YR 6/4 にぶい黄色土（To-a火山灰）
3.10YR 2/1 黒色土 にぶい黄色土（To-a火山灰）含む
4.7.5YR 4/4 褐色土
5.10YR 2/1 黒色土と褐灰色土との混合土
6.10YR 2/2 黒褐色土 にぶい黄色土（To-a火山灰）褐色粒含む
7.10YR 2/3 黒褐色土 直径3cm程の灰黄色土（To-a火山灰）ブロック含む
8.10YR 2/2 黒褐色土と灰黄色土（To-a火山灰）の混合土
9.2.5YR 5/3 黄褐色（To-a火山灰）
10.10YR 2/2 黒褐色土と黄褐色土（To-a火山灰）の混合土 褐色土ブロック含む
11.10YR 2/1 黒色土
12.10YR 2/2 黒褐色土 黄褐色土（To-a火山灰）ブロック含む 下層に炭化物含む
13.2.5YR 3/2 黒褐色土 黄褐色土（To-a火山灰）ブロック含む 粘性あり
14.10YR 2/3 黒褐色土 褐色粒含む
15.10YR 3/2 黒褐色土 直径5cm程の黄褐色土（To-a火山灰）？ブロック含む
16.10YR 2/2 黒褐色土 黄褐色土（To-a火山灰）ブロック含む 褐色土・黒色土含む・
17.10YR 3/1 黒褐色土と黄褐色土（To-a火山灰）の混合土
18.10YR 2/3 黒褐色土
19.10YR 3/3 暗褐色土 褐色土ブロック含む
20.10YR 4/4 褐色砂質シルト 粘性あり（貼り床）

6号住居 煙道・カマド断面

1.7.5YR 4/6 褐色焼土
2.7.5YR 5/8 明褐色焼土
3.10YR 2/2 黒褐色土 褐色焼土含む
4.10YR 3/1 黒褐色土 灰黄褐色土（To-a火山灰）含む
5.10YR 3/4 暗褐色粘土 黒褐色土・焼成を受けて脆くなった土器・礫を含む
6.10YR 2/1 黒色土
7.10YR 3/2 黒褐色土しまりあり
8.2.5YR 6/2 灰黄色土 黒褐色土含む
9.10YR 1.7/1 黒色土
10.10YR 4/4 褐色土しまりあり
11.10YR 3/1 黒褐色土 褐色焼土含む
12.10YR 5/4 にぶい黄褐色粘土
13.10YR 2/1 黒色土 しまりあり
14.10YR 2/1 黒色土 褐色焼土・砂粒含む
15.10YR 3/1 黒褐色土 明褐色焼土ブロック含む

第29図 6号竪穴住居跡



図No.	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量（cm）			備考
							口径	底径	器高	
111	6号住　カマド構成	土師器	坏	1b	〔体〕ロクロナデ〔底〕回転イトキリ	〔体〕ロクロナデ〔底〕ロクロナデ	(14.9)	6.0	5.5	
112	6号住　カマド構成	土師器	甕	B3	〔体〕ケズリ〔底〕モクヨウコン	〔体〕ナデ〔底〕ナデ	—	0.0	-28.6	底部ケズリ再調整
113	6号住　カマド構成	土師器	甕	B4	〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメ〔底〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ〔底〕ナデ	19.3	9.5	35.1	底部ケズリ再調整
114	6号住　カマド構成	土師器	甕	B4	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	18.6	—	-19.5	体部弱いケズリ

—：残存値　（）：推定値

No.	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
115	6号住　埋土	刀子？	5.5	1.6	0.1	4.0	
116	6号住　床面	鉄滓				120.0	写真のみ掲載　重量は２ケ分

（）：推定値　—：残存値

第30図　６号竪穴住居跡出土遺物

観察された。

［カマド］北東壁中央東よりに位置する。残存状態は悪く、大礫と土器片、鈍い黄褐色粘土が一部に認められるのみである。大礫や土器片を芯材に用い、その上を粘土で覆って構築されたものと考えられる。

［壁溝］確認できなかった。

［柱穴・ピット］確認できなかった。

遺物（第30図・写真図版32）

残存状態の良好な住居跡であったが遺物の出土量は少ない。カマドから土師器の坏片１点、甕片3点が出土した。床面からは鉄滓２点、埋土中からは刀子状の鉄製品1点が出土している。

7号竪穴住居跡

遺構（第31～32図・写真図版11）

［位置・重複関係］ⅣＦ３ｂグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、十和田ａ火山灰をまばらに含む黒色土の広がりとして検出した。調査区東側と西側が近年ホップ栽培を行った際の添え木による撹乱を受けている。

［規模・平面形・方位］北東辺5.10ｍ、南西辺5.40ｍ、南東辺5.88ｍ、北西辺5.63ｍのほぼ長方形を呈する。床面積は約30.2㎡である。主軸方向はＷ－31°－Ｎである。

［埋土］黒褐色土を主体として構成され、上位には黒色土、下位には十和田ａ火山灰小ブロックを含む黒褐色土が堆積する。第４層に先述の火山灰とは様相の異なる黄褐色火山灰ブロックが認められた。

［壁］壁高の残存値は31～52.9㎝である。

［床面］全般に凹凸があり、カマドの前の北西部分は大きく凹むような様相を呈する。全体に人頭大の礫が散乱している。南側壁よりに火熱を受けて赤変した礫が認められた。カマド周辺を除く全面に掘り方を持ち、黒褐色土を主体として貼り床されている。厚さは壁近くで８～23㎝、中央部で12～17㎝程である。

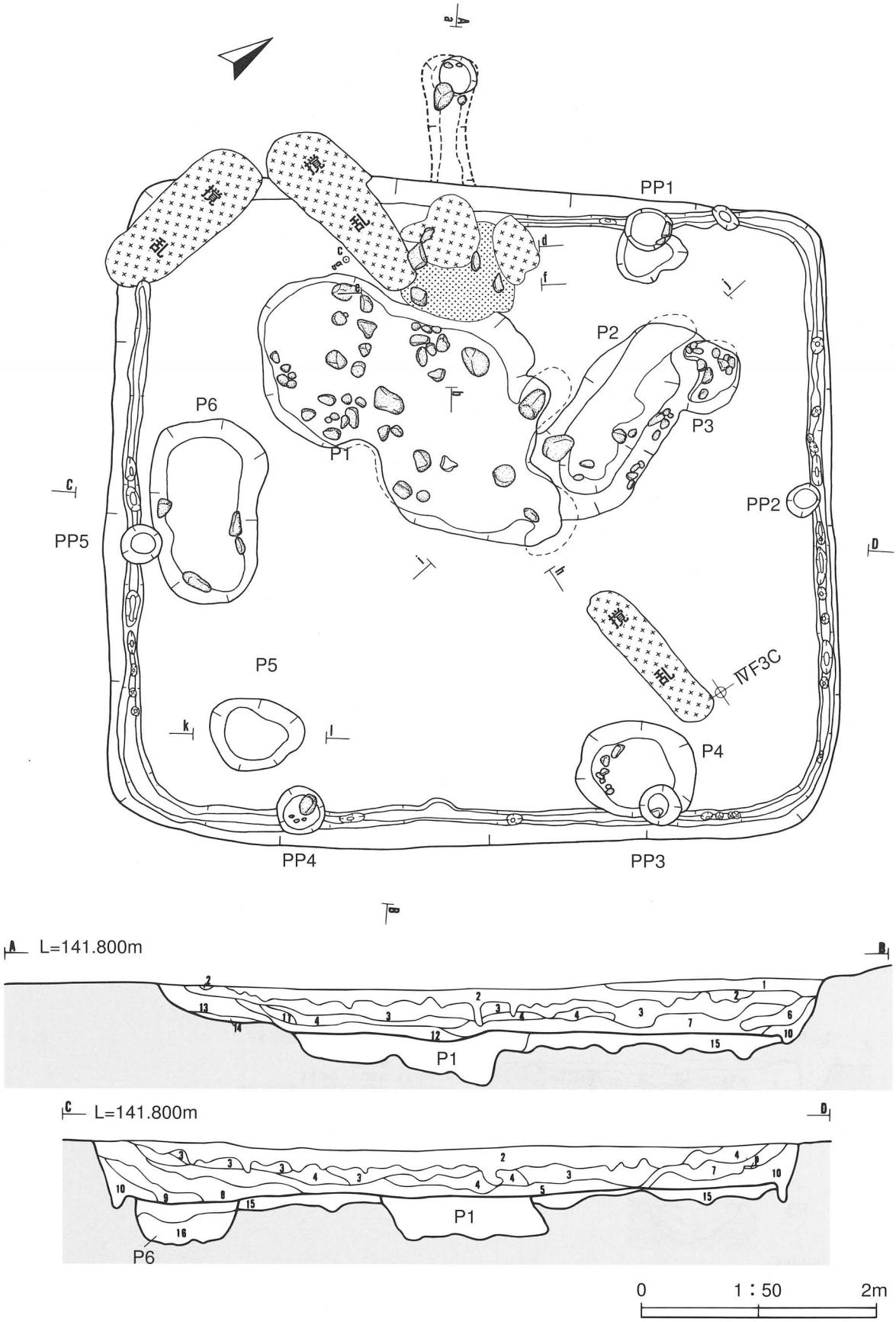
［カマド］カマドは北西壁の中央部に構築されている。カマド本体の残存状況はきわめて悪い。袖部・燃焼部ともほとんど残っておらず、カマド周辺部から拳～手のひら大の礫数個が、赤色の粘土とともに認められた。これらの礫が芯材として用いられていた可能性がある。

［壁溝］壁溝は一周するものと思われ、幅10～22㎝、深さ8.9～21.5㎝ほどである。

［柱穴・ピット］柱穴は５個検出した。深さは21～47㎝前後で、底面は地山の砂質シルトまで掘り込んでいる。柱穴壁面～底面に接して大礫を認めるものがあり、根固め石として設置されてあったものと考えられる。北西側にも柱穴があることが想定されたが、地山深くまで及んだ撹乱をクリーニング後も痕跡を認めることができなかった。ピットは６基検出した。規模は、Ｐ１が150×310㎝・深さ37㎝、Ｐ２が83×190㎝・深さ42㎝、Ｐ３が52×62㎝・深さ45㎝、Ｐ４が81×97㎝・深さ28㎝、Ｐ５が60×79㎝・深さ30㎝、Ｐ６は90×150㎝・深さ37㎝である。

遺物（第33図・写真図版33）

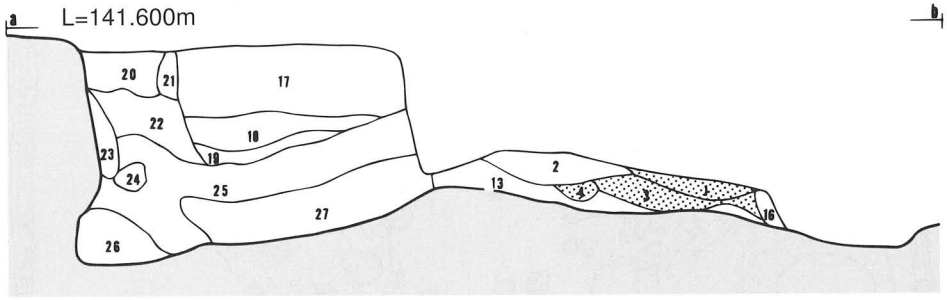
カマドの残存状況が不良であるため、カマドから出土した遺物はない。カマド周辺～床面にかけて土師器の甕片2点が出土している。カマド前の土坑からは小形鉢片1点、甕片1点が出土した。また、第33図117の小形鉢と119の甕が６号住埋土出土の破片とそれぞれ接合した。

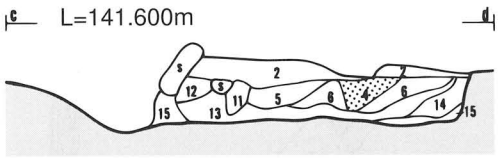


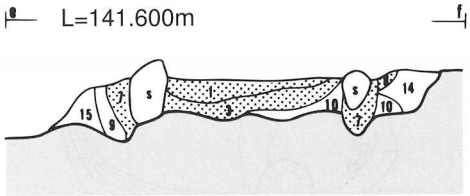
第31図　７号竪穴住居跡①

7号住居断面

1.10YR 2/3　黒褐色土　褐色粒含む
2.7.5YR 2/1　黒色土
3.10YR 2/3　黒褐色土
4.10YR 2/3　黒褐色土黄褐色土（火山灰）？含む
5.10YR 3/3　暗褐色土　にぶい黄色土（To-a火山灰）？ブロック含む
6.10YR 2/2　黒褐色土　にぶい黄色土（To-a火山灰）？ブロック含む
7.10YR 3/3　暗褐色土とにぶい黄色土（To-a火山灰）？の混合土
8.10YR 3/4　暗褐色土とにぶい黄色土（To-a火山灰）？の混合土
9.10YR 2/2　黒褐色土　にぶい黄色土（To-a火山灰）？と黒色土ブロック含む
10.10YR 3/4　暗褐色土　褐色粒含む
11.10YR 2/2　暗褐色土
12.10YR 3/2　黒褐色土　にぶい黄色土（To-a火山灰）？ブロック含む
13.10YR 3/2　黒褐色土　下層に黄褐色土含む
14.10YR 2/2　黒褐色土
15.10YR 3/2　黒褐色土　上層ににぶい黄色土（To-a火山灰）？ブロック含む（貼床埋土）
16.10YR 3/3　暗褐色シルト（P6埋土）

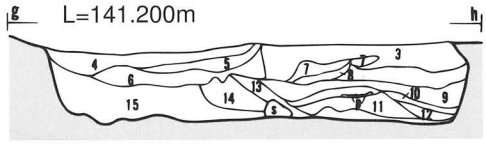


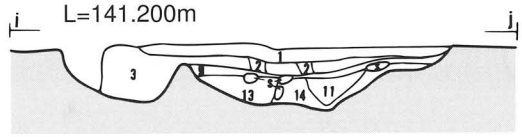




7号住居カマド煙道断面

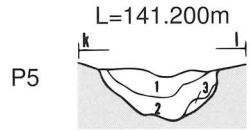
1.7.5YR 5/6　明褐色焼土
2.2.5YR 6/4　にぶい黄色粘土
3.5 YR 5/6　明赤褐色焼土
4.5 YR 4/8　赤褐色焼土　暗褐色土ブロック含む
5.7.5YR 3/4　暗褐色土と赤褐色焼土と明褐色焼土の混合土
6.10YR 4/4　褐色土　黒色土含む
7.10YR 5/6　黄褐色焼土
8.7.5YR 5/6　明褐色焼土
9.10YR 3/2　黒褐色土　褐色土含む
10.10YR 4/3　にぶい黄色土
11.10YR 2/1　黒色土　赤褐色焼土含む
12.10YR 4/2　灰黄褐色土　粘性あり
13.10YR 3/4　暗褐色土　黒褐色土含む
14.10YR 3/3　暗褐色土　明褐色焼土含む
15.10YR 4/4　褐色土
16.10YR 3/1　黒褐色土　にぶい黄色土（To-a火山灰）？ブロック含む
17.10YR 3/2　黒褐色土（Ⅲ層）褐色粒含む
18.10YR 2/3　黒褐色土
19.10YR 2/3　黒褐色土
20.10YR 2/2　黒褐色土　褐色粒含む
21.10YR 2/1　黒色土
22.10YR 2/1　黒色土　褐色土含む
23.10YR 3/2　黒褐色土　しまりあり
24.10YR 3/4　暗褐色土
25.10YR 2/2　黒褐色土　黒色粒含む
26.10YR 3/3　暗褐色土　褐色土ブロック含む・黒色土下層に含む





7号住居ピット群

1.10YR 2/1　黒色土　にぶい黄色土（To-a火山灰）？ブロック含む
2.10YR 4/6　褐色土
3.10YR 3/2　黒褐色土　にぶい黄色土（To-a火山灰）？ブロック含む
4.10YR 3/1　黒褐色土　にぶい黄色土（To-a火山灰）？ブロック含む
5.10YR 3/2　黒褐色土と褐色土の混合土　にぶい黄色土（To-a火山灰）？ブロック含む
6.10YR 3/2　黒褐色土　褐色土含む
7.10YR 3/1　黒褐色土
8.10YR 3/2　黒褐色土　粘性あり
9.10YR 3/2　黒褐色土　砂礫含む
10.10YR 4/6　褐色土
11.10YR 4/6　褐色土　黄褐色土ブロック含む
12.10YR 4/6　褐色土
13.10YR 3/3　暗褐色土
14.10YR 3/3　暗褐色土　砂礫含む
15.10YR 3/4　黒褐色土と黒色土が葉離状に堆積

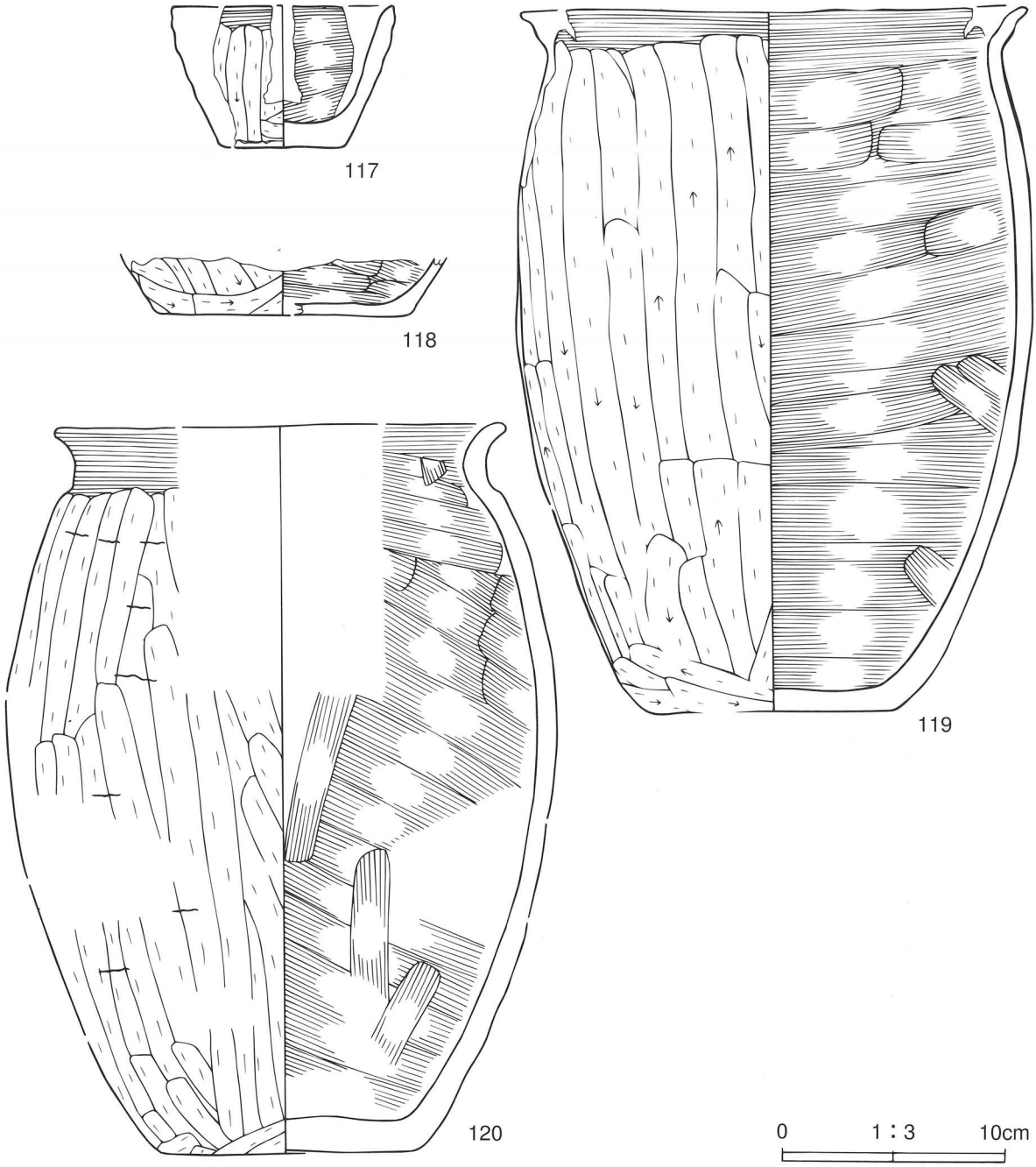


7号住居P5

1.10YR 2/1　黒色シルト　にぶい黄色土（To-a火山灰）？ブロック含む
2.10YR 3/2　黒褐色シルト　炭含む
3.10YR 4/4　褐色土

0　1：25　1m

第32図　7号竪穴住居跡②



図No.	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量（cm）			備考
							口径	底径	器高	
117	7号住　カマド前ピット	土師器	小形鉢	1	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ〔底〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ〔底〕ナデ	(10.0)	5.3	6.4	
118	7号住　カマド前ピット	土師器	甕	B3	〔体〕ケズリ〔底〕ケズリ	〔体〕ナデ〔底〕ナデ	―	(11.3)	-2.7	
119	7号住　Q4床面	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ〔底〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ〔底〕ナデ	(22.7)	10.9	31.7	
120	7号住　床面カマド周辺	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ〔底〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ〔底〕ナデ	20.3	11.4	32.9	

―：残存値　（）：推定値

第33図　7号竪穴住居跡出土遺物

８号竪穴住居跡

遺構（第34～35図・写真図版12）

［位置・重複関係］　ＩＤ８ｇグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、十和田ａ火山灰ブロックを含む黒色土の広がりとして検出した。

［規模・平面形・方位］北東辺4.03ｍ、南西辺3.94ｍ、南東辺4.48ｍ、北西辺4.30ｍのほぼ正方形を呈する。床面積は約17.5㎡、主軸方向はＮ－24°－Ｅである。

［埋土］おおむね2層に大別され、上位は十和田ａ火山灰ブロックを含む黒褐色土、下位は十和田ａ火山灰ブロックを含む黒色土主体で構成される。

［壁］壁高の残存値は32～46㎝前後である。

［床面］ほぼ平坦で、南東側に一部堅い個所が見られる。全面に掘り方をもち、黒褐色土を主体として貼り床されている。厚さは壁近くで11～32㎝、中央では９㎝である。床下シルト面に緩やかな凹凸が認められる。

［カマド］北壁東よりと西壁中央部から新旧ふたつのカマドを検出した。新カマドは北壁の東よりに構築されている。本体は芯材となる礫を褐色粘土で覆って構築されている。燃焼部には60×60㎝、厚さ10～14㎝の焼土が形成されている。煙道部は掘り込み式の構造で、壁から120㎝外方に延びており、底面は約13°の角度で緩やかに下る。旧カマドは西壁中央部に位置している。本体は残存せず、燃焼部焼土のみが48×58㎝・厚さ６～８㎝の範囲で認められる。煙道部は刳り貫き式の構造で、外側に向かって18°の傾斜をもって下る。煙出し孔は37×39cmのほぼ円形で、深さは81cmである。

［壁溝］幅12～31㎝前後、床面からの深さ6.3～18.5㎝前後で住居内を一周するものと思われる。

［出入り口？］東壁中央に接した、85×137㎝の方形状の範囲で床面が特に堅く締まる箇所が確認された。また、この部分の床面は深さ32㎝にわたって掘り込まれており、特に厚く貼り床が施されていた。

［柱穴・ピット］東壁に近接して32×38㎝・深さ20㎝の小ピット(PP1)と、径15㎝、深さ20㎝程度の小柱穴(PP2)を検出した。PP2は出入り口状の施設に伴う可能性がある。

遺物（第36～38図・写真図版33～34）

旧カマド煙道部～燃焼部にかけて比較的多くの遺物が出土した。内訳は土師器坏片1点、甕片7点である。新カマドからは完形の土師器坏が1点、磨石が1点、甕片2点が出土した。このうち第36図122の土師器ロクロ甕が6号住居カマド構築材の破片と接合した。坏と磨石はカマド支脚で、磨石の上に坏を覆い被せて用いていたものと思われる。床面からは土師器甕片２点が出土した。このうち第37　図133の甕が、6号住居カマド構築材の破片と接合した。埋土中からは土師器の甕片4点、小形鉢片１点、須恵器甕片2点、長頸壷？片1点が出土している。

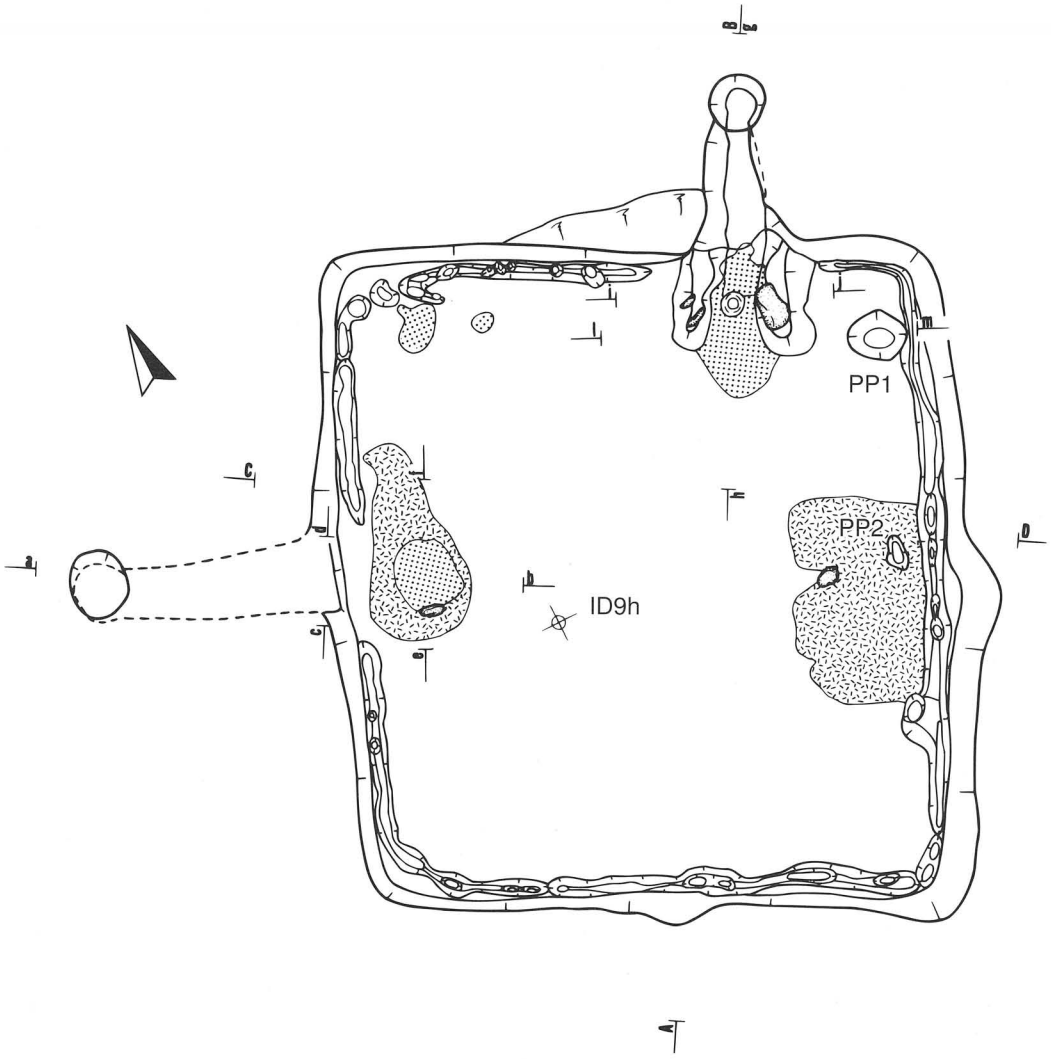
９号竪穴住居跡

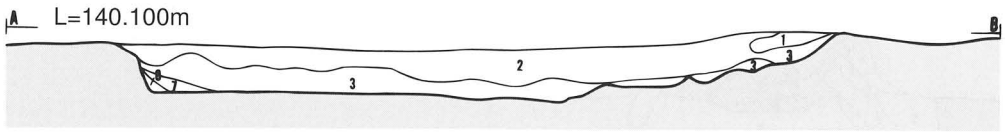
遺構（第39図・写真図版13）

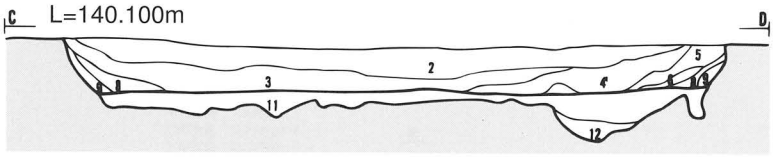
［位置・重複関係］　ⅡＥ１ｂグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、十和田a火山灰を全体に含む黒色土の広がりとして検出した。

［規模・平面形・方位］東辺2.52ｍ、西辺3.03ｍ、南辺2.08ｍ、北辺2.60ｍのほぼ正方形を呈する。床面積は約6.5㎡、主軸方向はＷ－81°－Ｎである。

［埋土］検出面から床面直上まで十和田ａ火山灰小ブロックを含んだ黒色土の堆積がみられる。堆積の状況は不明である。





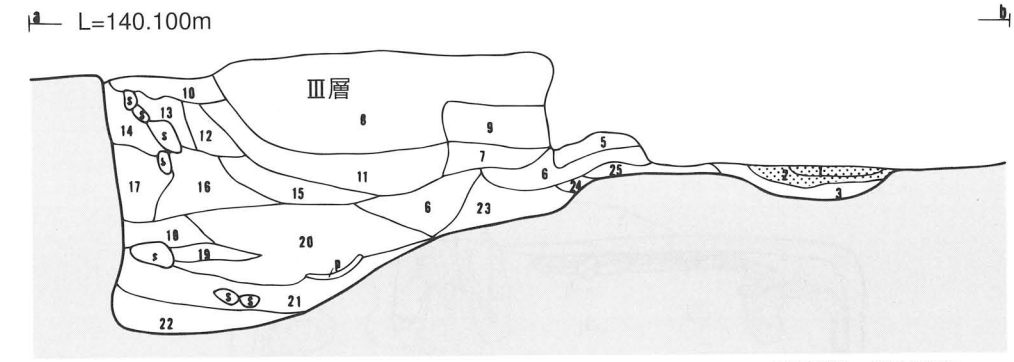


8号住居跡断面

1.10YR 3/1　黒褐色土
2.10YR 3/1　黒褐色土　にぶい黄色土（To-a火山灰）ブロック含む
3.10YR 2/1　黒色土　にぶい黄色土（To-a火山灰）ブロック含む
4.10YR 2/2　黒褐色土　にぶい黄色土（To-a火山灰）ブロック含む
5.10YR 2/2　黒褐色土
6.10YR 2/2　黒褐色土　褐色土すじ状に含む
7.2.5YR 6/4　にぶい黄色土（To-a火山灰）
8.10YR 2/1　黒色土
9.10YR 2/2　黒褐色土
10.10YR 5/6　黄褐色土
11.10YR 2/1　黒色土　褐色粒含む（貼り床）
12.10YR 4/3　にぶい黄色土と黒色土の混合土（貼り床）

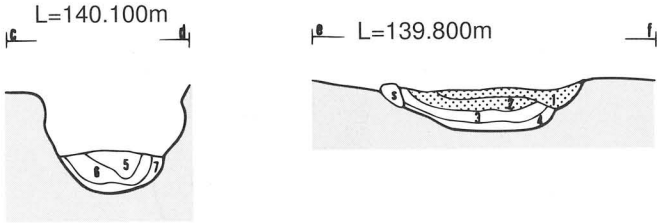
0　1：50　2m

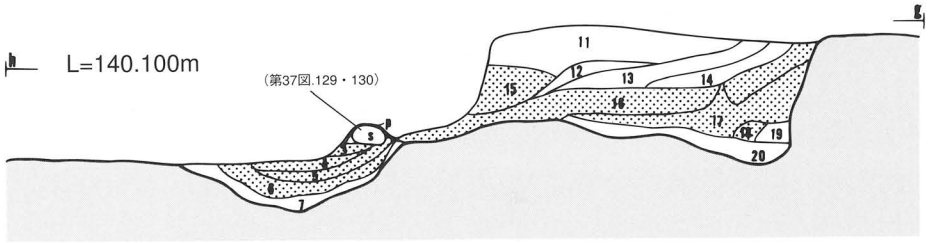
第34図　8号竪穴住居跡①

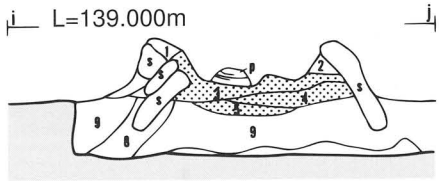


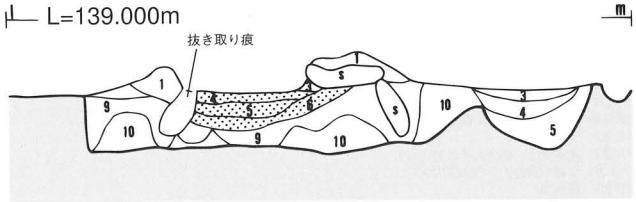
8号住居西側カマド(旧)煙道断面

1.10YR 5/6　黄褐色焼土
2.10YR 5/8　黄褐色焼土
3.5 YR 4/8　赤褐色土
4.5 YR 3/4　暗赤褐色土
5.10YR 2/2　黒褐色土　黄褐色焼土ブロック含む
6.10YR 2/1　黒色土　黄褐色焼土ブロック含む
7.10YR 3/4　暗褐色土
8.10YR 3/2　黒褐色土（Ⅲ層）褐色粒含む
9.10YR 3/2　黒褐色土　褐色土ブロック含む
10.10YR 3/1　黒褐色土　褐色粒含む
11.10YR 2/1　黒色土　上層に褐色土混入
12.10YR 3/4　暗褐色土　にぶい黄色土（To-a火山灰）ブロック含む
13.2.5YR 6/4　にぶい黄色土（To-a火山灰）
14.10YR 2/2　黒褐色土
15.10YR 2/1　黒色土　上層ににぶい黄色土（To-a火山灰）ブロック含む
16.10YR 3/4　暗褐色土とにぶい黄色土（To-a火山灰）の混合土
17.10YR 3/1　黒褐色土　にぶい黄色土（To-a火山灰）ブロック含む
18.10YR 2/1　黒色土
19.10YR 2/2　黒褐色土
20.10YR 4/6　褐色土
21.10YR 2/1　黒色土　褐色土すじ状に含む・砂礫含む
22.10YR 6/8　明黄褐色シルト
23.10YR 3/3　暗褐色土
24.10YR 3/3　暗褐色土　黄褐色焼土ブロック含む
25.10YR 3/4　暗褐色土　黄褐色焼土ブロック含む







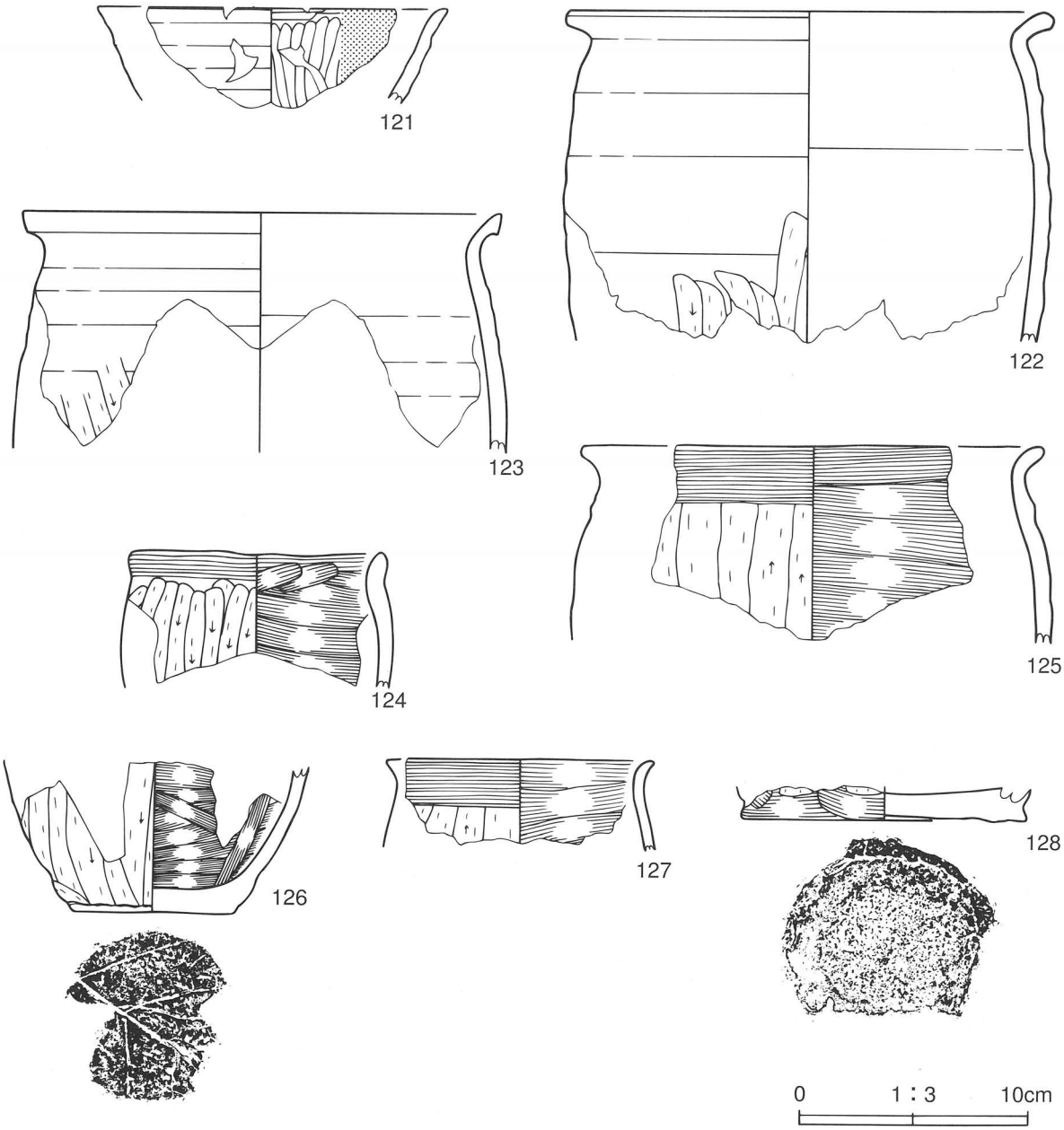


8号住居北側カマド(新)煙道断面

1.10YR 4/6　褐色土
2.10YR 4/6　褐色土と明赤褐色焼土の混合土
3.2.5YR 5/8　明赤褐色焼土
4.10YR 7/6　明黄褐色焼土
5.10YR 8/4　浅黄橙色焼土
6.2.5YR 4/8　赤褐色焼土
7.10YR 4/1　褐灰色土
8.10YR 2/2　黒褐色土
9.10YR 3/3　暗褐色土
10.10YR 4/4　褐色土　黄褐色粒含む
11.10YR 5/6　黄褐色土　しまりあり
12.10YR 4/4　褐色土　黒色土混入
13.10YR 3/1　黒褐色土　褐色土含む
14.10YR 3/1　黒褐色土
15.10YR 5/6　黄褐色焼土
16.7.5YR 5/8　明褐色焼土
17.7.5YR 5/6　明褐色焼土　黒褐色土ブロック含む
18.7.5YR 6/8　橙色焼土
19.10YR 2/2　黒褐色土　橙色焼土ブロック含む
20.10YR 2/2　黒褐色土　黄褐色粒含む

0　1：25　1m

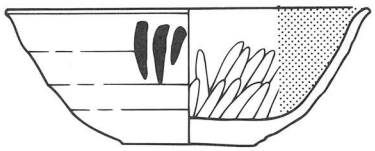
第35図　8号竪穴住居跡②



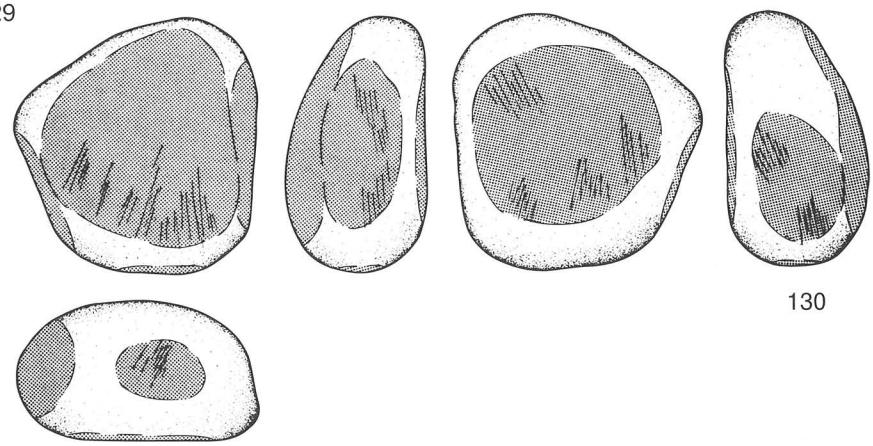
図No.	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量（cm）			備考
							口径	底径	器高	
121	8号住　カマド（旧）煙道	土師器	坏	3a	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ				
122	8号住　カマド(旧）煙道底	土師器	甕	A1	〔口〕ロクロナデ〔体〕ロクロナデ+ケズリ	〔口〕ロクロナデ〔体〕ロクロナデ	(21.4)	—	-14.6	
123	8号住　カマド（旧）煙道底	土師器	甕	A1	〔口〕ロクロナデ〔体〕ロクロナデ+ケズリ	〔口〕ロクロナデ〔体〕ロクロナデ	(20.4)	—	-10.5	
124	8号住　カマド（旧）煙道基部	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(11.1)	—	-5.9	
125	8号住　カマド（旧）燃焼部	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(20.2)	—	-8.5	
126	8号住　カマド（旧）燃焼部	土師器	甕	B3	〔体〕ケズリ〔底〕モクヨウコン	〔体〕ナデ〔底〕ナデ	—	7.2	-6.1	底部木葉痕
127	8号住　カマド（旧）燃焼部	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(11.8)	—	-3.9	9号住埋土からも出土
128	8号住　カマド（旧）燃焼部	土師器	甕	B3	〔底〕スナゾコ	〔底〕ナデ	—	12.4	-1.5	底部砂底

—：残存値　（）：推定値

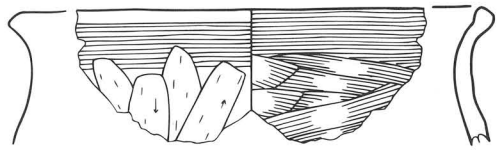
第36図　8号竪穴住居跡出土遺物①



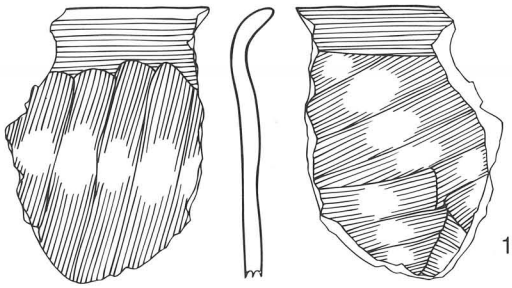
129



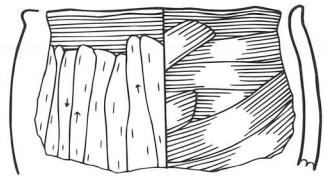
130



131



132



133

0　1：3　10cm

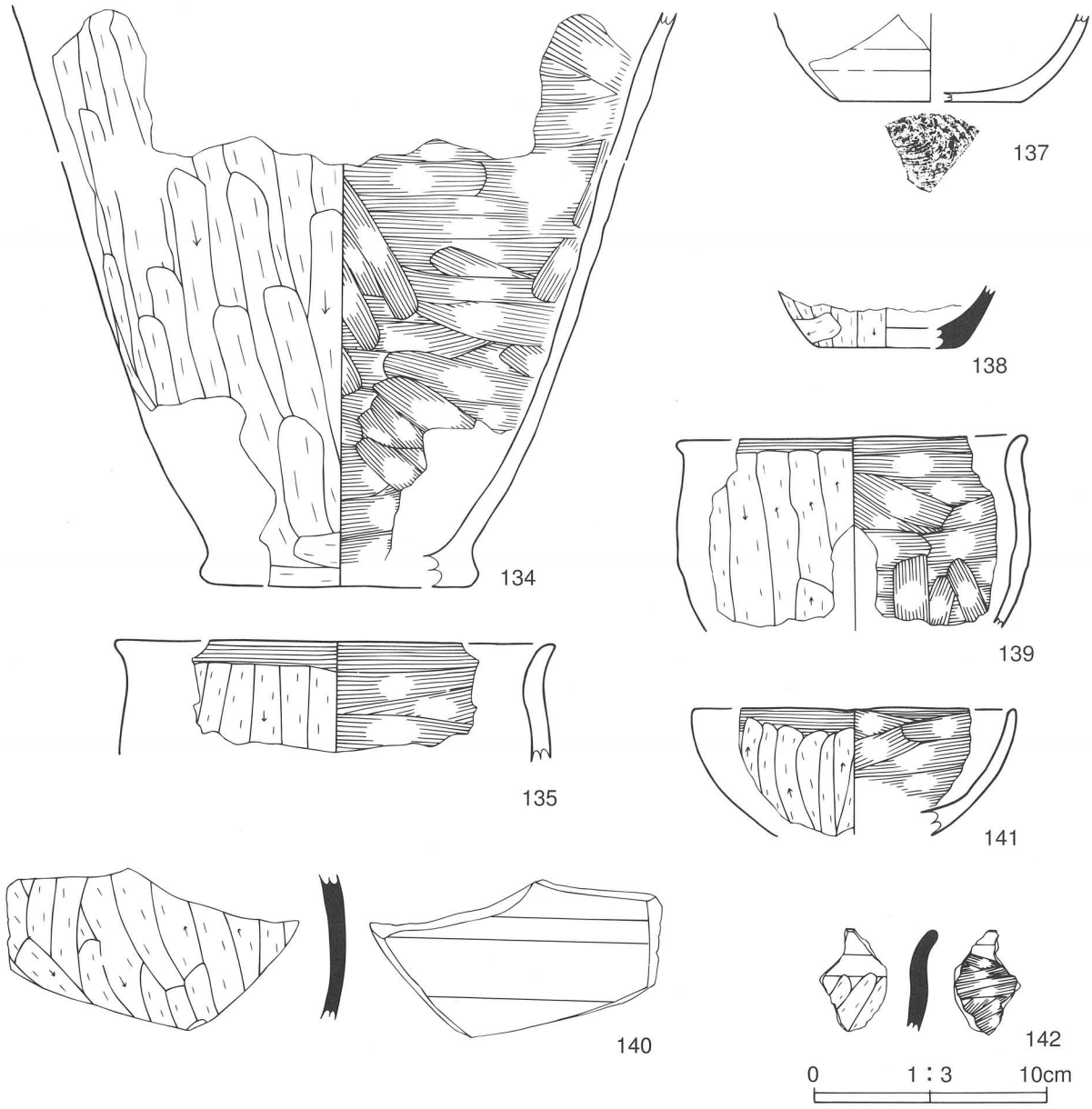
図No.	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量（cm）			備考
							口径	底径	器高	
129	8号住　カマド支脚	土師器	坏	1a	〔体〕ロクロナデ〔底〕回転イトキリ	〔体〕ミガキ〔底〕ミガキ	14.2	4.9	5.4	内面黒色処理
131	8号住　カマド構成	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(18.2)	—	-5.3	
132	8号住　カマド構成	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	—	—	—	
133	8号住　Q２床面	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(11.0)	—	-6.4	

—：残存値　（）：推定値

No.	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	石質
130	8号住　新カマド支脚	磨石	10.1	9.6	5.6	800.0		ヒン岩

（）：推定値　—：残存値

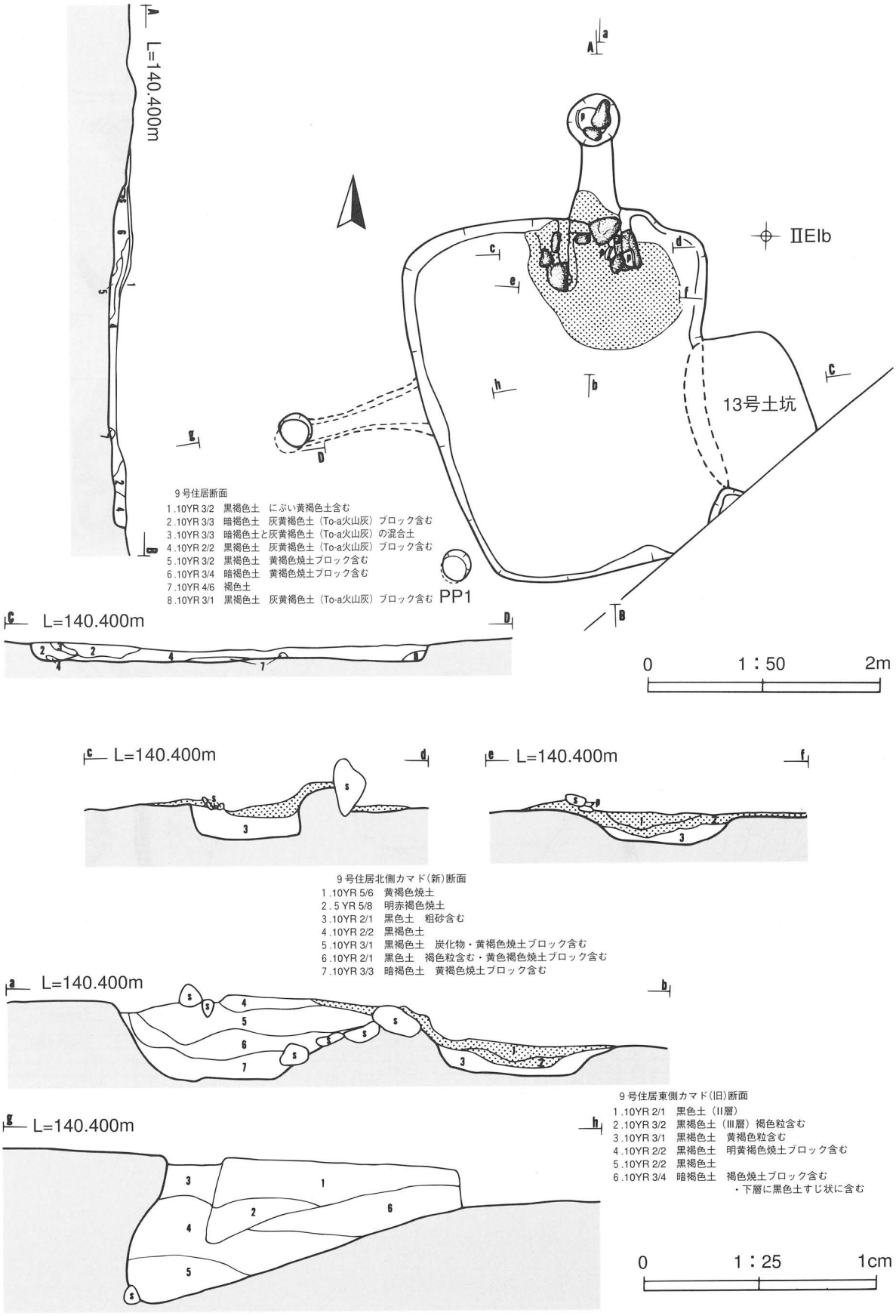
第37図　８号竪穴住居跡出土遺物②



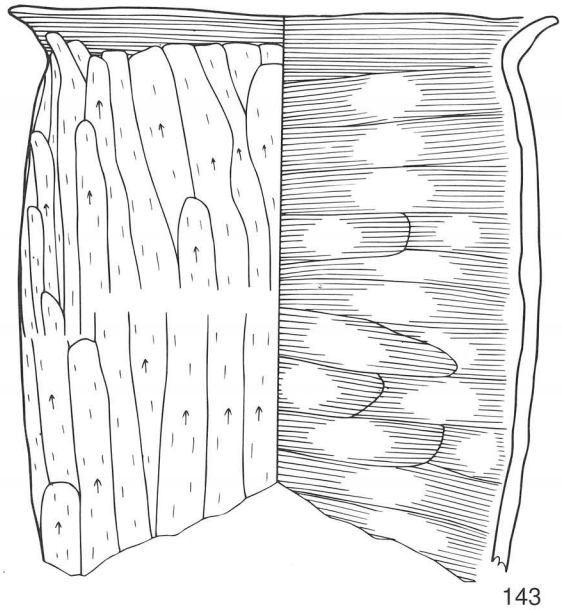
図No.	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量（cm）			備考
							口径	底径	器高	
134	8号住　Q３床面	土師器	甕	B3	〔体〕ケズリ〔底〕スナゾコ	〔体〕ナデ〔底〕ナデ				底部砂底
135	8号住　Q３埋土	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(18.2)	—	-5.1	
136	8号住　Q１埋土下部	土師器	甕	B4	〔体〕ケズリ	〔体〕ハケメ	—	—	—	写真のみ掲載
137	8号住　Q２埋土下部	土師器	甕	A2	〔体〕ロクロナデ〔底〕回転イトキリ	〔体〕ロクロナデ〔底〕ロクロナデ	—	—	-3.8	
138	8号住　Q４埋土下部	須恵器	壺？		〔体〕ケズリ〔底〕ケズリ	〔体〕				
139	8号住　埋土上部	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(15.0)	—	-8.3	
140	8号住　埋土上部	須恵器	長頸瓶		〔体〕ケズリ	〔体〕ロクロナデ	—	—	—	
141	8号住　Q３埋土	土師器	小形鉢	2	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(14.0)	—	-5.5	
142	8号住　Q３埋土	須恵器	甕		〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	—	—	—	

—：残存値　（）：推定値

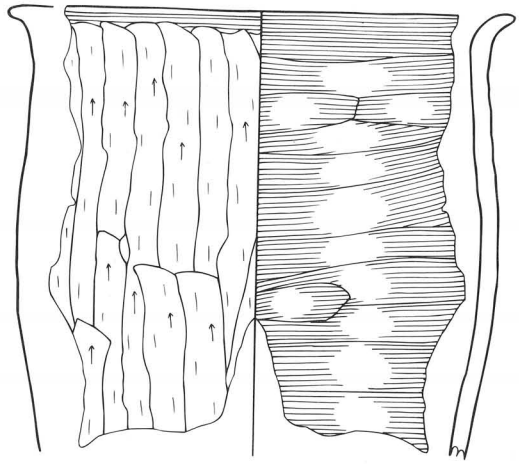
第38図　８号竪穴住居跡出土遺物③



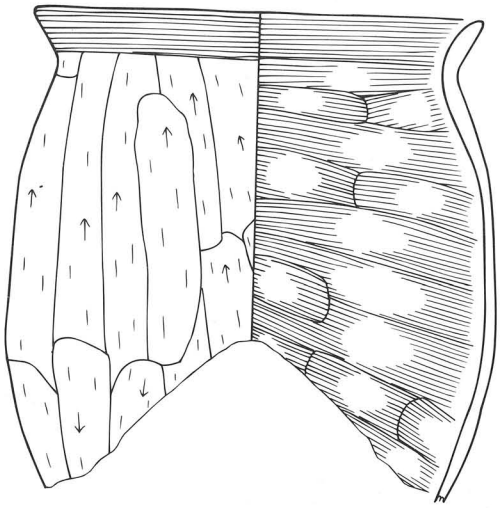
第39図　9号竪穴住居跡



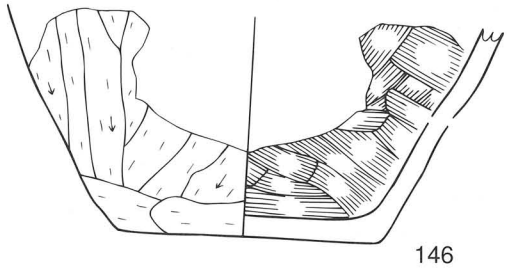
143



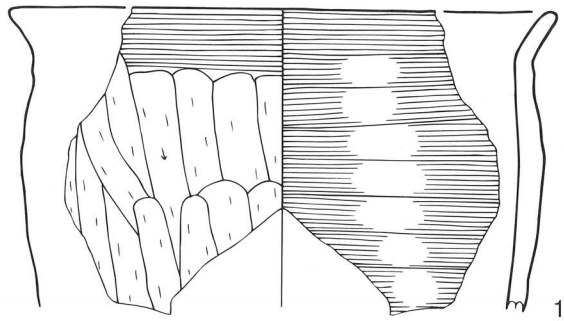
144



145



146



148

0　1：3　10cm

図No.	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量（cm）			備考
							口径	底径	器高	
143	9号住　カマド（旧）煙道埋土	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	21.8	—	-22.4	
144	9号住　カマド(新）煙出口	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(20.0)	—	-17.3	
145	9号住　カマド（新）構成	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(17.7)	—	-19.1	
146	9号住　カマド（新）構成	土師器	甕	B3	〔体〕ケズリ〔底〕ケズリ	〔体〕ナデ〔底〕ナデ	—	10.2	-8.7	
147	9号住　埋土	土師器	甕	A	〔口〕ロクロナデ	〔口〕ロクロナデ				写真のみ掲載
148	9号住　西側ＰＰ	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(21.4)	—	-12.1	

—：残存値　（）：推定値

第40図　９号竪穴住居跡出土遺物

［壁］壁高の残存値は７～17㎝前後である。

［床面］全般に平坦で堅緻である。

［カマド］北壁と西壁に新旧ふたつのカマドを検出した。新カマドは北壁の東よりに構築されている。本体は礫を芯材とし、その上を黄褐色粘土で覆って構築されている。燃焼部には61×77㎝、厚さ７～11㎝の焼土が形成されている。煙道部は掘り込み式の構造で、壁から105㎝外方に延びており、底面は約30°の傾斜を持って下る。旧カマドは西壁やや北よりに構築されている。本体は残存しない。煙道部は刳り貫き式の構造で、外側に向かって18°の傾斜をもって下る。煙出し孔は28×31㎝のほぼ円形で、深さ65㎝である。

［壁溝］壁溝は確認できなかった。

［柱穴・ピット］柱穴は床面からは確認できなかったが、西壁から14㎝はなれたところに24×27㎝・深さ44㎝の円形を呈する柱穴状小ピットを検出した。埋土は十和田ａ火山灰をブロック状に含む黒色土である。埋土から甕片１点が出土した。

遺物（第40図・写真図版35）

削平された住居跡であるため埋土からの遺物は少ない。旧カマド煙道埋土からは土師器甕片1点のみが出土した。新カマドからは土師器甕片2点、煙出し孔からは土師器甕片1点が出土している。このうち第40図145の甕片が、8号住居埋土から出土した破片と接合している。埋土中からは土師器の甕片1点のみ出土した。また、住居西方の柱穴埋土から土師器甕片１点が出土している。

10号竪穴住居跡

遺構（第41図・写真図版14）

［位置・重複関係］ＩＣ６ｃグリッドに位置する。3号竪穴住居跡の床面より、十和田ａ火山灰を全体に含む黒色土の広がりとして検出した。3号竪穴住居跡と北―東辺を同じくして重複し、これにより全体を削平されている。

［規模・平面形・方位］北東辺4.00ｍ、南西辺3.84ｍ、南東辺3.68ｍ、北西辺3.50ｍのほぼ正方形を呈する。床面積は約14㎡、主軸方向はＷ－22°－Ｎである。

［埋土］3号竪穴住居構築時に人為的に埋め戻されたものと考えられる。十和田ａ火山灰ブロックと明黄褐色焼土ブロックを含む黒色土を主体としており、上位に堅くしまる箇所が認められる。

［壁］３号竪穴住居構築時にほとんど失われている。壁高の残存値は17～18㎝前後である。

［床面］全般に平坦でしまっている。東側で142×196㎝の不整形に堅くしまる範囲を確認した。貼り床は全面に施され、厚さは壁近くで７～15㎝、中央部で10㎝ほどである。

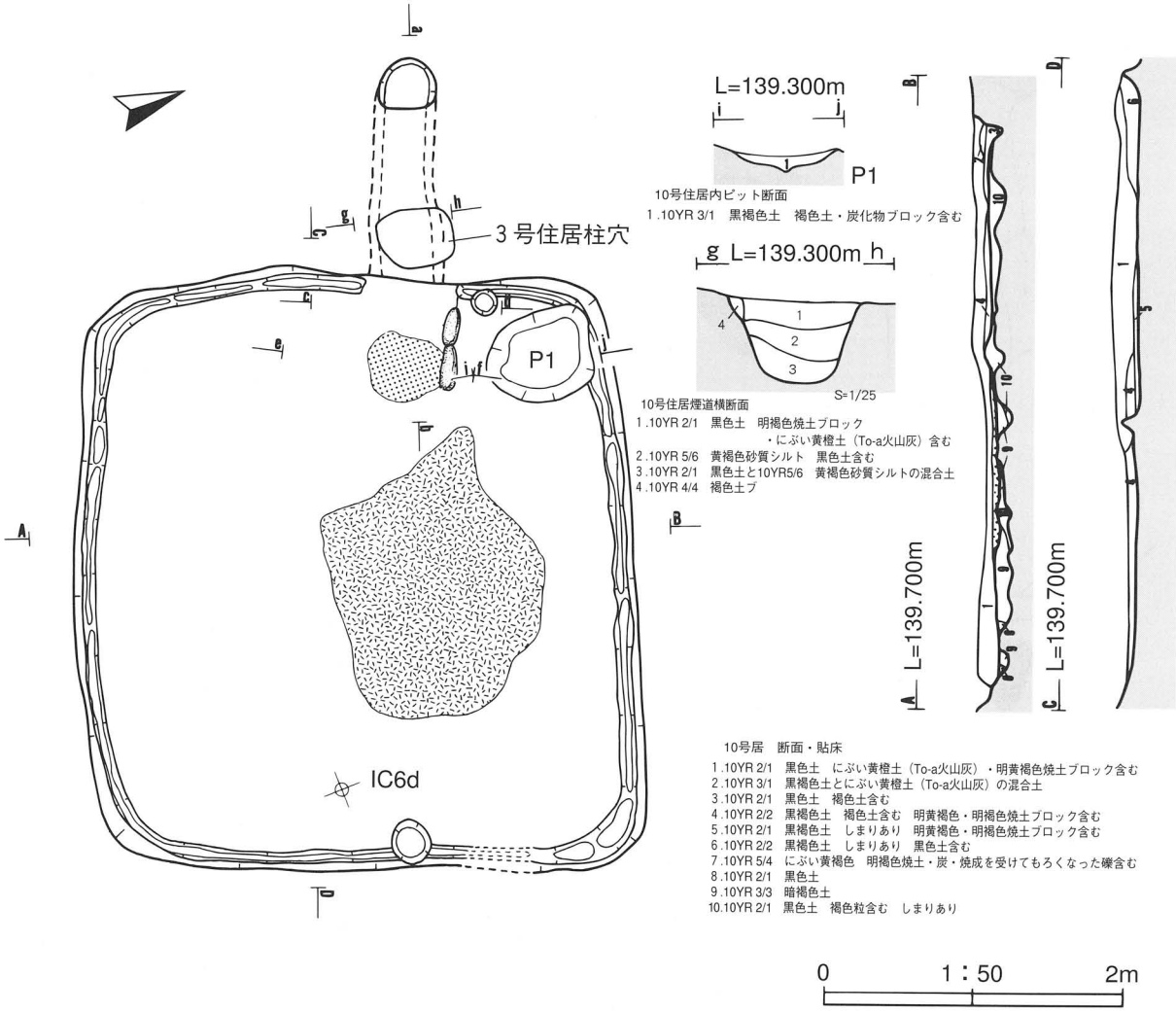
［カマド］北西壁の北よりに構築されている。カマド本体は粘土質の黄褐色土で構築されているが、3号竪穴住居跡により上部を削平されているため、残存状態は不良である。燃焼部には46×51㎝・厚さ９㎝の焼土が形成されている。煙道は刳り貫き式の構造を呈するものと思われ、煙出し孔に向かって急斜度に深く掘りこまれている。煙出し孔は壁から50㎝離れたところにつくられ、33×40㎝の円形で、残存する深さは41㎝である。

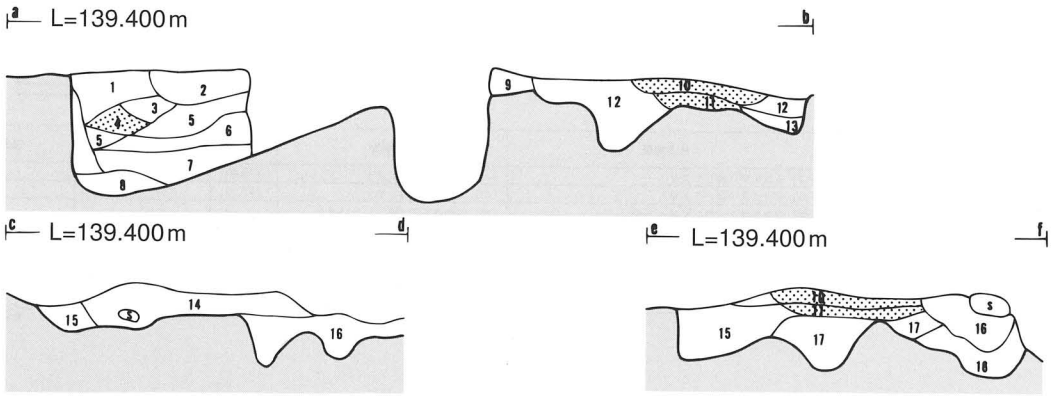
［壁溝］壁溝は一周するものと思われ、幅９～20㎝、床面からの深さ9.5～11.0㎝ほどである。

［柱穴・ピット］カマド脇よりピットを1基検出した。（Ｐ１）規模は60×67㎝・深さ10㎝である。

遺物（第42図・写真図版35）

3号住に上部を削平されているため、出土遺物量は少ない。床面からは土師器甕片6点が出土している。カマド脇のＰ１埋土上部から土師器甕片２点が出土した。



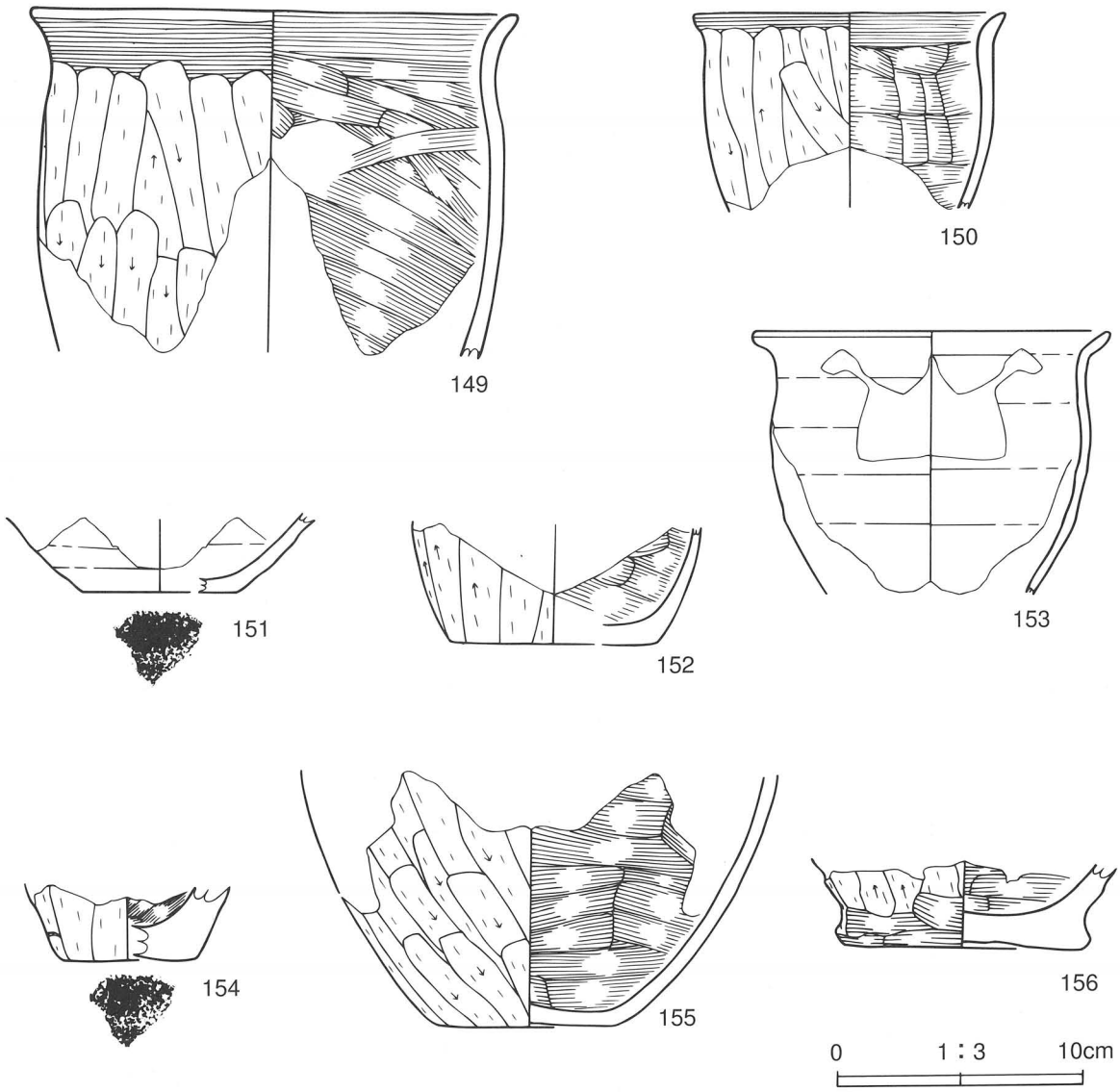


10号住居　煙道断面・カマド横断面

1.10YR 2/1　黒色土　褐色土(粘性あり)・にぶい黄橙土（To-a火山灰）・含む
2.10YR 2/1　黒色土　褐色砂質シルト・にぶい黄橙土（To-a火山灰）含む
3.10YR 2/1　黒色土　明黄褐色焼土ブロック含む
4.10YR 6/6　明黄褐色焼土
5.10YR 4/4　褐色土砂質シルト　黒色土含む
6.10YR 5/8　黄褐色土砂質シルト
7.10YR 3/1　黒褐色土　褐色土含む　粘性あり
8.10YR 3/3　暗褐色土　褐色土含む　粘性あり
9.10YR 3/4　暗褐色土　褐色粒含む
10.7.5YR 5/8　明褐色焼土
11.5 YR 3/4　赤褐色焼土
12.10YR 2/2　黒褐色土　明褐色焼土ブロック・にぶい黄橙土（To-a火山灰）含む
13.10YR 2/1　黒色土　にぶい黄橙土（To-a火山灰）含む
14.10YR 2/1　黒色土　にぶい黄橙土（To-a火山灰）・明黄褐色焼土ブロック含む
15.10YR 3/4　暗褐色土　にぶい黄橙土（To-a火山灰）褐色粒含む
16.10YR 3/3　暗褐色土　にぶい黄橙土（To-a火山灰）・赤褐色焼土含む
17.10YR 5/8　黄褐色砂質シルト　黒色土ブロック含む
18.10YR 2/2　黒褐色土　褐色土すじ状に含む

0　1：25　1m

第41図　10号竪穴住居跡



図No.	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量（cm）			備考
							口径	底径	器高	
149	10号住　Q１床面	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(20.0)	—	-14.1	
150	10号住　Q２床面	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(12.5)	—	-8.1	
151	10号住　Q３床面	土師器	甕	A2	〔体〕ロクロナデ〔底〕回転イトキリ	〔体〕ロクロナデ〔底〕ロクロナデ	—	6.4	-3.1	
152	10号住　Q４床面	土師器	甕	B3	〔体〕ケズリ〔底〕スナゾコ	〔体〕ナデ〔底〕ナデ	—	(8.2)	-4.9	
153	10号住　Q４床面	土師器	甕	A2	〔口〕ロクロナデ〔体〕ロクロナデ	〔口〕ロクロナデ〔体〕ロクロナデ	(14.6)	—	-10.8	
154	10号住　Q４床面	土師器	甕	B3	〔体〕ケズリ〔底〕スナゾコ	〔体〕ナデ〔底〕ナデ	—	(5.6)	-3.1	底部砂底
155	10号住　P１埋土上部	土師器	甕	B3	〔体〕ケズリ〔底〕ケズリ	〔体〕ナデ〔底〕ナデ	—	7.6	-10.2	
156	10号住　P１埋土上部	土師器	甕	B3	〔体〕ケズリ〔底〕ケズリ	〔体〕ナデ〔底〕ナデ	—	9.8	-3.6	

—：残存値　（）：推定値

第42図　10号竪穴住居跡出土遺物

（2）掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡

遺構（第43図・写真図版15）

［位置］調査区北端ＩＢ７ｅグリッドに位置する。検出面はⅣ層にあたる褐色シルト面で十和田ａ降下火山灰を含む黒褐色シルトのプランとして検出した。北西側は削平のため、柱穴を検出できなかった。

［規模・構造・方向］北西－南東5.7ｍ２間、南西－北東3.6ｍ２間の建物である。建物方向は北西－南東でW－21°－Nである。

［柱配置・柱間］柱配置は全体としては長方形をなしているが、北側は柱穴が検出されておらず不明である。柱間はＰ１―Ｐ２：２ｍ、Ｐ２―Ｐ３：2.8ｍ、Ｐ４―Ｐ５：2.06ｍ、Ｐ５―Ｐ６：2.93ｍ、Ｐ1―Ｐ４：1.22ｍ、Ｐ２―Ｐ５：1.24ｍ、Ｐ３―Ｐ６：1.5ｍで、ばらつきが多く、西側は柱間が狭くなる。

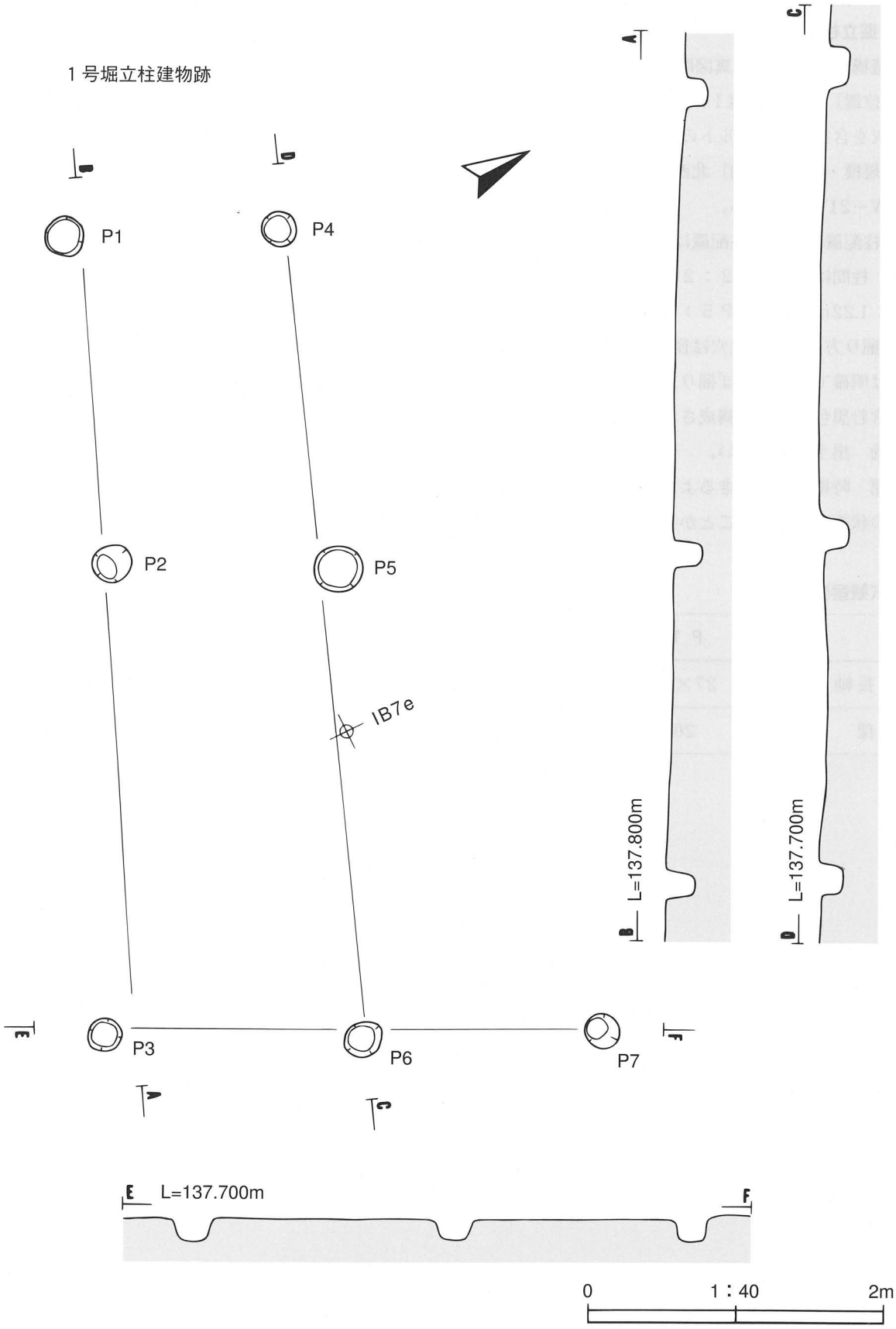
［掘り方・柱痕］柱穴は径22～32㎝の円形を呈し、深さは14～20㎝である。掘り込みは全体に浅い。柱痕は明確でなく、ほぼ掘り方と同規模であったと考えられる。埋土はすべて十和田ａ火山灰をブロック状に含む黒色土主体で構成される。

遺物　出土遺物はない。

時期　時期を決定できるような遺物を欠き、詳細は不明であるが、周辺部から検出された竪穴住居跡と埋土の状態が類似することから、当遺構もこれらと同時期の可能性が高い。

柱穴観察表　(cm)

	Ｐ１	Ｐ２	Ｐ３	Ｐ４	Ｐ５	Ｐ６	Ｐ７
長軸×短軸	27×26	26×26	24×24	24×23	33×32	25×24	24×23
深　　さ	20	18	16	14	18	17	18



第43図　1号堀立柱建物跡

（3） 土坑

1号土坑

遺構（第44図・写真図版15）

〔位置・重複関係〕ＩＢ６ｇグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

〔規模・平面形〕開口部径122×(56)㎝、底部径74×(37)㎝の楕円形を呈する。深さは最深部で24㎝である。東半部が調査区域外にかかり、東西方向の規模は残存値である。埋土は5層に細分され、黒色土主体で構成される。下位に十和田ａ火山灰の小ブロックを含む。

〔出土遺物・時期〕遺物は出土していない。時期は埋土の状況から判断して平安時代である可能性が高い。

2号土坑

遺構（第44図・写真図版15）

〔位置・重複関係〕ＩＢ8ｉグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

〔規模・平面形〕開口部径（216)×42㎝、底部径（206)×32㎝の長楕円形を呈する。深さは最深部で32㎝である。南西部が調査区域外にかかり、北東－南西方向の規模は残存値である。埋土は２層に細分され、十和田ａ火山灰を含む黒色土主体で構成される。

〔出土遺物・時期〕遺物は出土していない。時期は埋土の状況から判断して平安時代の可能性が高い。

3号土坑

遺構（第44図・写真図版16）

〔位置・重複関係〕ＩＢ８ｆグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

〔規模・平面形〕開口部径198×129㎝、底部径167×129㎝の楕円形を呈する。深さは最深部で29㎝である。埋土は５層に細分され、黒色～黒褐色土主体で構成される。埋土上位に十和田ａ火山灰小ブロックを含む。底面には52×60㎝・層厚17㎝の焼土が形成されている。

〔出土遺物・時期〕遺物は出土していない。時期は埋土の状況から平安時代の可能性が高い。

4号土坑

遺構（第44図・写真図版16）

〔位置・重複関係〕ＩＣ４ｈグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

〔規模・平面形〕開口部径222×(115)㎝、底部径148×(86)㎝の楕円形を呈する。深さは最深部で33㎝である。埋土は11層に細分され、十和田ａ火山灰小ブロックを含む黒色土主体で構成される。
底面には(10)×33㎝・深さ９㎝の焼土が形成されている。

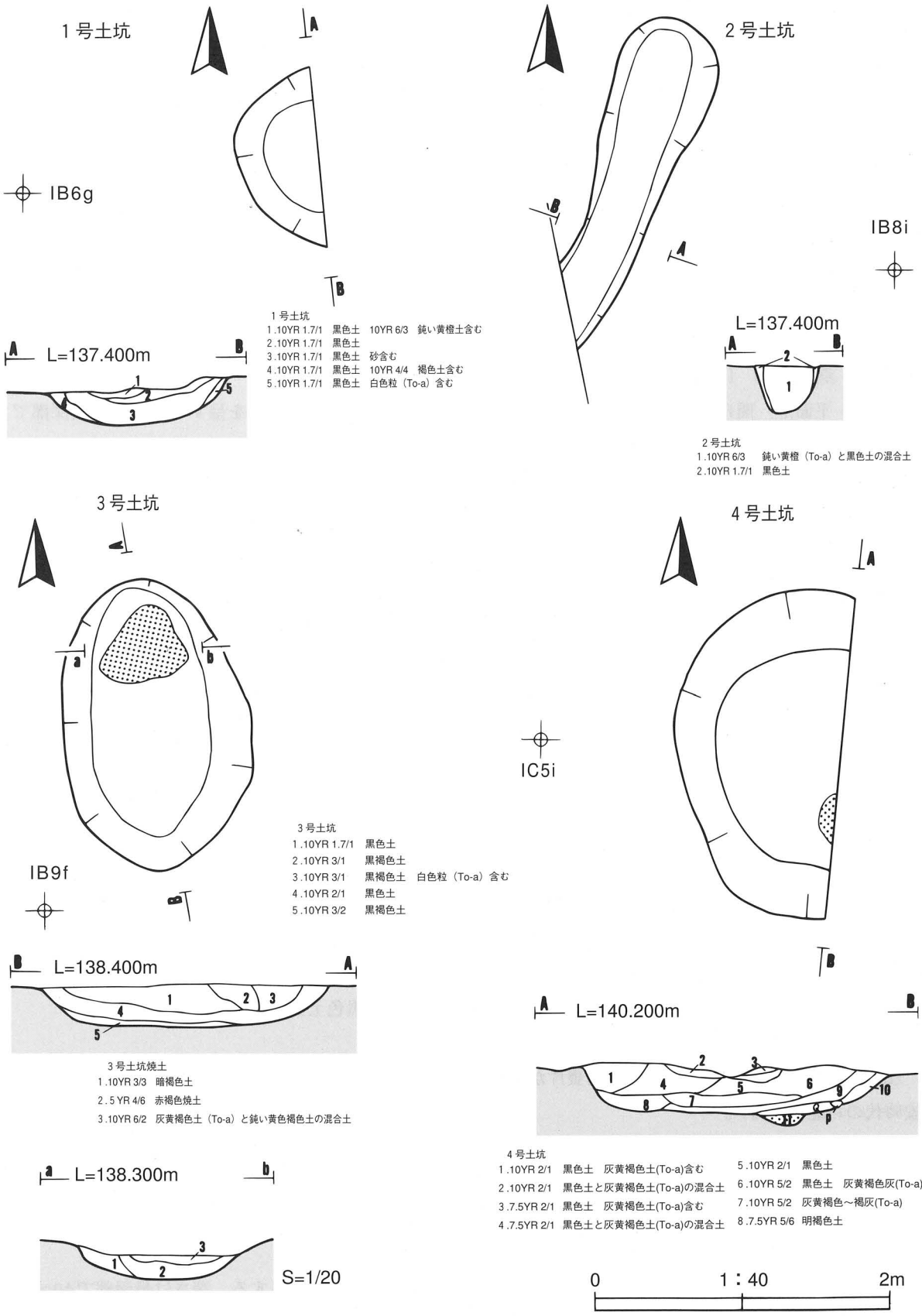
〔出土遺物・時期〕埋土中から土師器甕片が5点出土している。時期は出土した遺物や埋土の状況から平安時代の可能性が高い。

5号土坑

遺構（第45図・写真図版16）

〔位置・重複関係〕ＩＤ7aグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

〔規模・平面形〕開口部径258×206㎝、底部径201×136㎝の楕円形を呈する。深さは最深部で44㎝である。埋土は９層に細分され、十和田ａ火山灰小ブロックを含む黒色土主体で構成される。


1号土坑
IB6g
A
B
L=137.400m
1
2
3
4
5
1号土坑
1.10YR 1.7/1 黒色土 10YR 6/3 鈍い黄橙土含む
2.10YR 1.7/1 黒色土
3.10YR 1.7/1 黒色土 砂含む
4.10YR 1.7/1 黒色土 10YR 4/4 褐色土含む
5.10YR 1.7/1 黒色土 白色粒（To-a）含む
2号土坑
IB8i
L=137.400m
1
2
2号土坑
1.10YR 6/3 鈍い黄橙（To-a）と黒色土の混合土
2.10YR 1.7/1 黒色土
3号土坑
IB9f
a
b
L=138.400m
1
2
3
4
5
3号土坑
1.10YR 1.7/1 黒色土
2.10YR 3/1 黒褐色土
3.10YR 3/1 黒褐色土 白色粒（To-a）含む
4.10YR 2/1 黒色土
5.10YR 3/2 黒褐色土
3号土坑焼土
1.10YR 3/3 暗褐色土
2.5YR 4/6 赤褐色焼土
3.10YR 6/2 灰黄褐色土（To-a）と鈍い黄色褐色土の混合土
L=138.300m
1
2
3
S=1/20
4号土坑
IC5i
L=140.200m
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
p
4号土坑
1.10YR 2/1 黒色土 灰黄褐色土(To-a)含む
2.10YR 2/1 黒色土と灰黄褐色土(To-a)の混合土
3.7.5YR 2/1 黒色土 灰黄褐色土(To-a)含む
4.7.5YR 2/1 黒色土と灰黄褐色土(To-a)の混合土
5.10YR 2/1 黒色土
6.10YR 5/2 黒色土 灰黄褐色灰(To-a)
7.10YR 5/2 灰黄褐色～褐灰(To-a)
8.7.5YR 5/6 明褐色土
0
1：40
2m

第44図　1～4号土坑

底面に38×104cm・深さ14cmの焼土を伴っている。

〔出土遺物・時期〕埋土中から土師器甕片が1点出土した。時期は出土した遺物や埋土の状況から平安時代の可能性が高い。

6号土坑

遺構（第45図・写真図版16）

〔位置・重複関係〕ＩＣ６ｉグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

〔規模・平面形〕開口部径237×232cm、底部径197×170cmの楕円形を呈する。深さは最深部で25cmである。埋土は９層に細分され、十和田ａ火山灰小ブロックを含む黒色土主体で構成される。

〔出土遺物・時期〕埋土中から土師器甕片3点が出土した。時期は埋土の状況から平安時代の可能性が高い。

7号土坑

遺構（第46図・写真図版17）

〔位置・重複関係〕ⅡＥ７ｃグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

〔規模・平面形〕開口部径131×(58)cm、底部径117×(48)cmの楕円形を呈する。深さは最深部で35cmである。西半部が調査区域外にかかっており、東西方向の規模は残存値である。埋土は６層に細分され十和田ａ火山灰の小ブロックを含む黒色～黒褐色土主体で構成される。

〔出土遺物・時期〕遺物は出土していない。時期は埋土の状況から平安時代の可能性が高い。

8号土坑

遺構（第46図・写真図版17）

〔位置・重複関係〕ⅢＥ４ｆグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

〔規模・平面形〕開口部径146×(52)cm、底部径120×(39)cmの楕円形を呈する。深さは最深部で59cmである。西半部が調査区域外にかかっており、東西方向の規模は残存値である。埋土は12層に細分され、十和田ａ火山灰小ブロックを含む黒色～黒褐色土主体で構成される。

底面には26×(18)cm・層厚10cmの灰が形成されている。

〔出土遺物・時期〕遺物は出土していない。時期は埋土の状況から平安時代の可能性が高い。

9号土坑

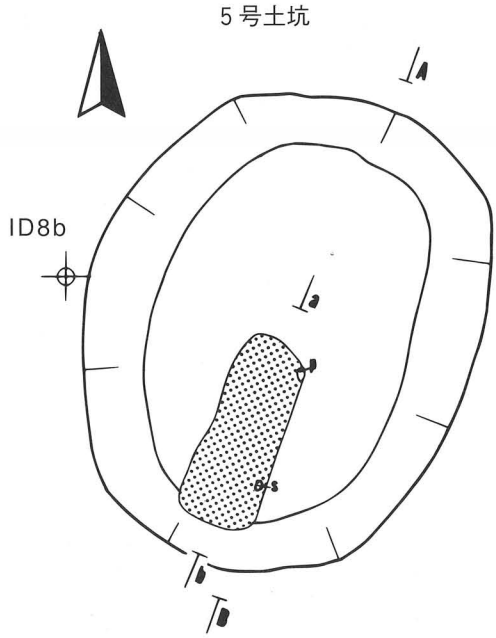
遺構（第46図・写真図版17）

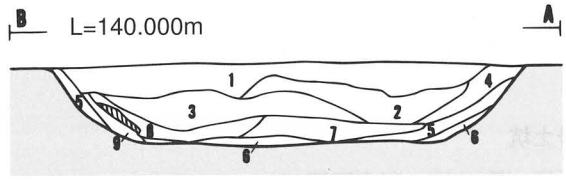
〔位置・重複関係〕ⅣＥ２ｊグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

〔規模・平面形〕開口部径180×123cm、底部径164×104cmの楕円形を呈する。深さは最深部で18cmである。埋土は６層に細分され、十和田ａ火山灰ブロックを含む黒褐色土主体で構成される。

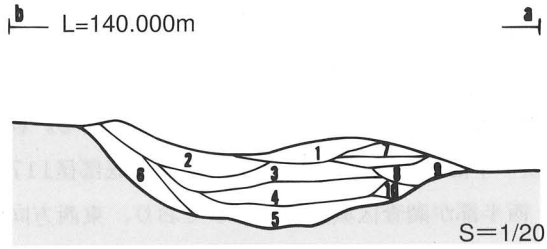
底面には67×68cm・層厚９cmの焼土が形成されている。

〔出土遺物・時期〕埋土上部より鋤先が出土している。時期は出土した遺物や埋土の状況から平安時代の可能性が高い。

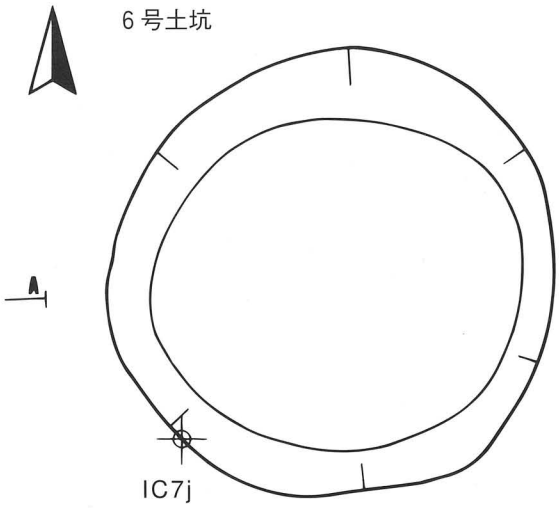


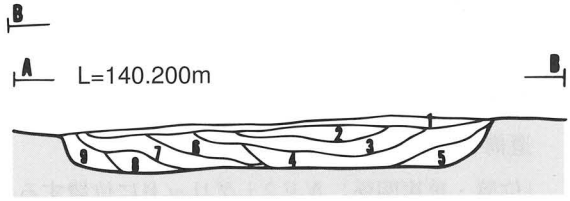


5号土坑
1.10YR 2/1　黒色土　褐灰色土少量含む
2.10YR 2/1　黒色土　白色火山灰(To-a)・炭化物ブロック含む
3.10YR 2/1　黒色土　白色火山灰(To-a)僅かに含む
4.10YR 2/1　黒色土
5.10YR 6/2　灰黄褐色土　灰多量に含む
6.10YR 2/1　黒色土　褐色シルト・褐灰・明褐色焼土が混入する
7.10YR 2/1　黒色土　上部に褐灰色灰少量含む
8.10YR 2/1　黒色土褐灰色灰・オレンジがかった肌色の灰混入
9.10YR 2/1　黒色土中火山灰少量含む



5号土坑焼土
1.10YR 5/1　褐灰色灰
2.7.5YR 6/6　橙焼土と灰白色灰の混合土
3.7.5YR 6/6　橙焼土　灰白色灰少量
4.10YR 5/1　褐色灰と橙焼土の混合土　炭化物含む
5.10YR 5/1　褐色灰と灰白色灰の混合土
6.10YR 2/1　黒色土
7.7.5YR 2/1　黒色土
8.10YR 7/1　灰白色灰
9.10YR 2/1　黒色土　褐灰～褐灰色灰が混入
10.7.5YR 2/2　黒褐色土





6号土坑
1.10YR 6/1　褐灰色土
2.10YR 2/1　黒色土　灰黄褐色土(To-a)含む
3.10YR 2/1　黒色土と灰黄褐色土(To-a)の混合土
4.10YR 2/1　黒色土
5.7.5YR 2/1　黒色土
6.7.5YR 2/1　黒色土　灰黄褐色土(To-a)含む
7.7.5YR 2/1　黒色土　灰黄褐色土(To-a)の混合土
8.10YR 2/1　黒色土　灰黄褐色土(To-a)少量含む
9.10YR 2/2

0　1：40　2m

第45図　5・6号土坑

10号土坑

遺構（第46図・写真図版17）

〔位置・重複関係〕ⅡＥ５ｂグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

〔規模・平面形〕開口部径242×129㎝、底部径195×110㎝の楕円形を呈する。深さは最深部で51㎝である。埋土は18層に細分され、十和田ａ火山灰ブロックを含む黒色～黒褐色土主体で構成される。

底面には（24)×72㎝・層厚18㎝の焼土が形成されている。

〔出土遺物・時期〕底面の焼土内から土師器長胴甕の胴部破片が６点出土している。時期は出土した遺物や埋土の状況から平安時代であると考えられる。

11号土坑

遺構（第47図・写真図版18）

〔位置・重複関係〕ＩＤ９ｆグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。北側で15号土坑と、南側で14号土坑と重複し、これらを切っている。

〔規模・平面形〕開口部径244×(175)㎝、底部径225×(146)㎝の不整な円形を呈する。深さは最深部で26㎝である。埋土は十和田ａ火山灰ブロックを含む黒褐色土主体で構成される。

〔出土遺物・時期〕遺物は出土していない。時期は埋土の状況から平安時代である可能性が高い。

12号土坑

遺構（第46図・写真図版17）

〔位置・重複関係〕ⅣＦ１ｂグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

〔規模・平面形〕開口部径80×87㎝、底部径73×55㎝のほぼ円形を呈する。深さは最深部で35㎝である。埋土は10層に細分され、十和田ａ火山灰小ブロックを含む黒色～暗褐色土主体で構成される。

〔出土遺物・時期〕埋土下部より土師器長胴甕の口縁部～胴部破片が2点出土している。時期は出土した遺物や埋土の状況から平安時代と考えられる。

13号土坑

遺構（第47図・写真図版17）

〔位置・重複関係〕ⅡＥ１ｂグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。北東部で9号竪穴住居跡と重複し、これを切っている。

〔規模・平面形〕開口部径128×(120)㎝、底部径(114)×(90)㎝の楕円形を呈する。深さは最深部で54㎝である。埋土は５層に細分され、上位は暗褐色土、下位は黒褐色土主体で構成される。

底面には35×60㎝の焼土が形成されている。層厚は記録がないが５㎝程度である。

〔出土遺物・時期〕遺物は出土していない。

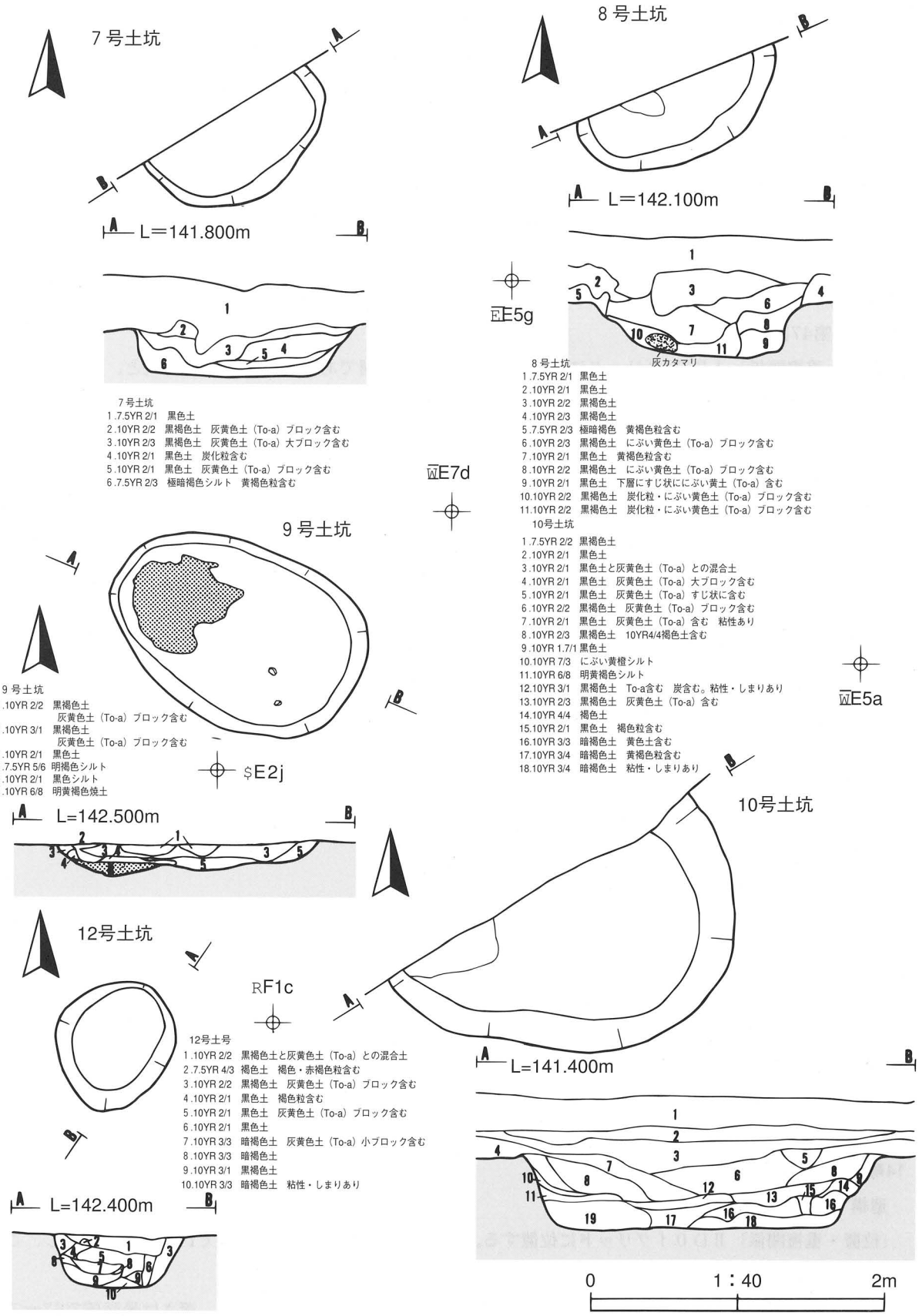
14号土坑

遺構（第47図・写真図版18）

〔位置・重複関係〕ⅡＤ０ｆグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。北西側で11号土坑と重複し、これに切られている。

〔規模・平面形〕開口部径－178×－72㎝、底部径110×－25㎝の円形を呈する。深さは最深部で67㎝で

※－は残存値を表す。



第46図　7～10・12号土坑

ある。埋土は十和田ａ火山灰小ブロックを含む黒褐色土主体で構成される。
底面には29×72㎝・層厚17㎝の焼土が形成されている。
〔出土遺物・時期〕遺物は出土していない。時期は埋土の状況から平安時代の可能性が高い。

15号土坑

遺構（第47図・写真図版18）
〔位置・重複関係〕ＩＤ９ｅグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。南西側で11号土坑と重複し、これに切られている。
〔規模・平面形〕開口部径－149×(54)㎝、底部径107×(33)㎝の円形を呈する。深さは最深部で38㎝である。北西半部が調査区域外にかかっており、北西―南東方向の直径は残存値である。埋土は十和田ａ火山灰小ブロックを含む黒褐色土主体で構成される。
〔出土遺物・時期〕遺物は出土していない。時期は埋土の状況から平安時代の可能性が高い。

16号土坑

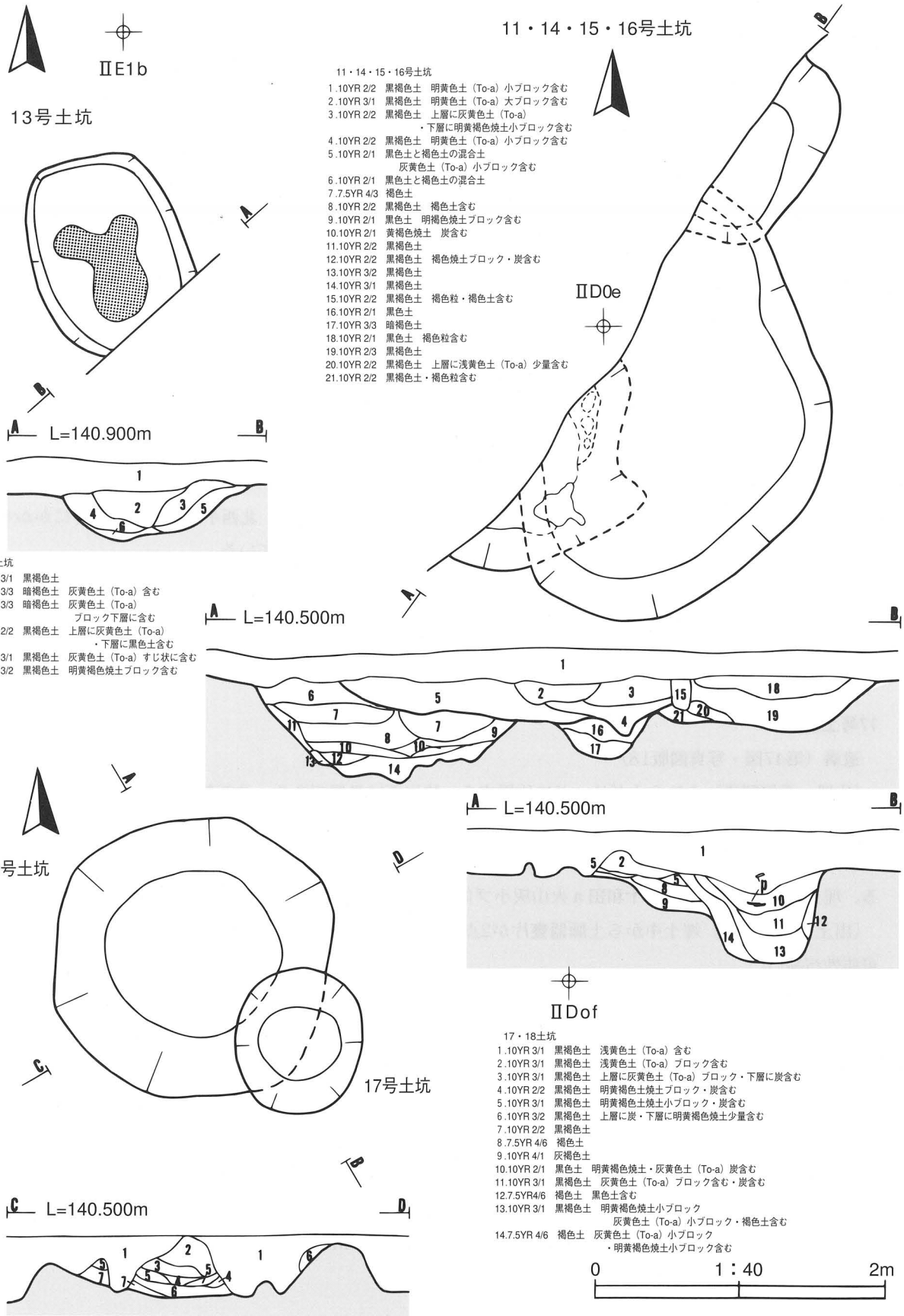
遺構（第47図・写真図版18）
〔位置・重複関係〕ＩＤ９ｅグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。北西半部が調査区域外にかかる。11・14・15号土坑と重複し、11号土坑に切られ、14・15号土坑を切っている。
〔規模・平面形〕不手際により平面の記録はない。長軸60×短軸30㎝の円形を呈する。深さは最深部で31㎝である。埋土は十和田ａ火山灰を含む黒褐色土主体で構成される。
〔出土遺物・時期〕遺物は出土していない。時期は埋土の状況から平安時代の可能性が高い。

17号土坑

遺構（第47図・写真図版18）
〔位置・重複関係〕ＩＤ９ｆグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。北西側で18号土坑と重複しこれを切っている。
〔規模・平面形〕開口部径100×－90㎝、底部径54×－52㎝の円形を呈する。深さは最深部で65㎝である。埋土は5層に細分され、十和田ａ火山灰小ブロックを多量に含む黒褐色土主体で構成される。
〔出土遺物・時期〕埋土中から土師器甕片が2点出土した。時期は出土遺物や埋土の状況から平安時代の可能性が高い。

18号土坑

遺構（第47図・写真図版18）
〔位置・重複関係〕ⅡＤ０ｇグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。南東側で17号土坑と重複し、これに切られる。
〔規模・平面形〕開口部径300×280㎝、底部径174×170㎝の円形を呈する。深さは最深部で44㎝である。埋土は6層に細分され十和田ａ火山灰小ブロックを含む黒褐色土主体で構成される。
〔出土遺物・時期〕埋土中から土師器長胴甕の体部破片が３点出土している。時期は出土した遺物や埋土の状況から平安時代であると考えられる。



13号土坑

1.10YR 3/1　黒褐色土
2.10YR 3/3　暗褐色土　灰黄色土（To-a）含む
3.10YR 3/3　暗褐色土　灰黄色土（To-a）
　　ブロック下層に含む
4.10YR 2/2　黒褐色土　上層に灰黄色土（To-a）
　　・下層に黒色土含む
5.10YR 3/1　黒褐色土　灰黄色土（To-a）すじ状に含む
6.10YR 3/2　黒褐色土　明黄褐色焼土ブロック含む

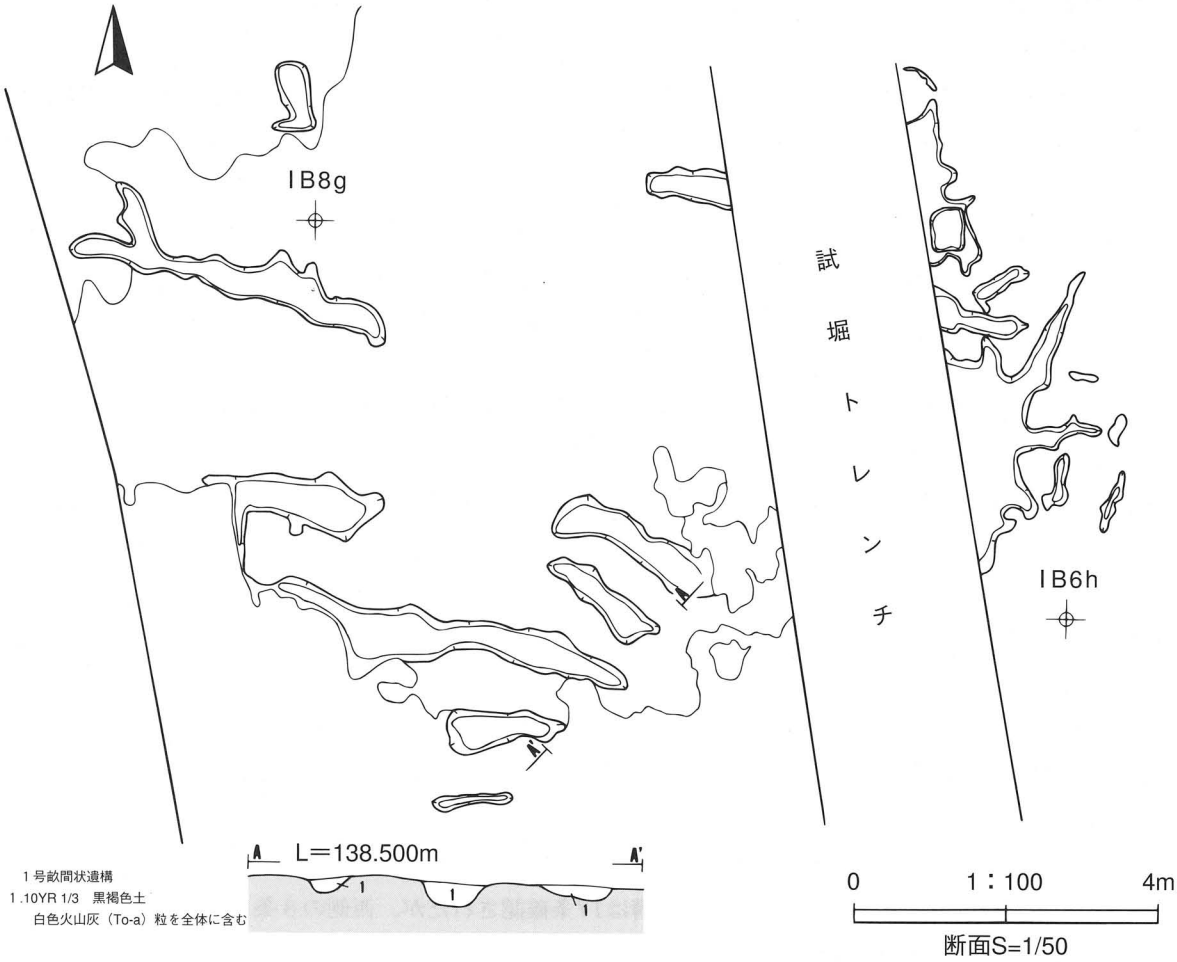
11・14・15・16号土坑

1.10YR 2/2　黒褐色土　明黄色土（To-a）小ブロック含む
2.10YR 3/1　黒褐色土　明黄色土（To-a）大ブロック含む
3.10YR 2/2　黒褐色土　上層に灰黄色土（To-a）
　　・下層に明黄褐色焼土小ブロック含む
4.10YR 2/2　黒褐色土　明黄色土（To-a）小ブロック含む
5.10YR 2/1　黒色土と褐色土の混合土
　　灰黄色土（To-a）小ブロック含む
6.10YR 2/1　黒色土と褐色土の混合土
7.7.5YR 4/3　褐色土
8.10YR 2/2　黒褐色土　褐色土含む
9.10YR 2/1　黒色土　明褐色焼土ブロック含む
10.10YR 2/1　黄褐色焼土　炭含む
11.10YR 2/2　黒褐色土
12.10YR 2/2　黒褐色土　褐色焼土ブロック・炭含む
13.10YR 3/2　黒褐色土
14.10YR 3/1　黒褐色土
15.10YR 2/2　黒褐色土　褐色粒・褐色土含む
16.10YR 2/1　黒色土
17.10YR 3/3　暗褐色土
18.10YR 2/1　黒色土　褐色粒含む
19.10YR 2/3　黒褐色土
20.10YR 2/2　黒褐色土　上層に浅黄色土（To-a）少量含む
21.10YR 2/2　黒褐色土・褐色粒含む

17・18土坑

1.10YR 3/1　黒褐色土　浅黄色土（To-a）含む
2.10YR 3/1　黒褐色土　浅黄色土（To-a）ブロック含む
3.10YR 3/1　黒褐色土　上層に灰黄色土（To-a）ブロック・下層に炭含む
4.10YR 2/2　黒褐色土　明黄褐色土焼土ブロック・炭含む
5.10YR 3/1　黒褐色土　明黄褐色土焼土小ブロック・炭含む
6.10YR 3/2　黒褐色土　上層に炭・下層に明黄褐色焼土少量含む
7.10YR 2/2　黒褐色土
8.7.5YR 4/6　褐色土
9.10YR 4/1　灰褐色土
10.10YR 2/1　黒色土　明黄褐色焼土・灰黄色土（To-a）炭含む
11.10YR 3/1　黒褐色土　灰黄色土（To-a）ブロック含む・炭含む
12.7.5YR4/6　褐色土　黒色土含む
13.10YR 3/1　黒褐色土　明黄褐色焼土小ブロック
　　灰黄色土（To-a）小ブロック・褐色土含む
14.7.5YR 4/6　褐色土　灰黄色土（To-a）小ブロック
　　・明黄褐色焼土小ブロック含む

第47図　11・13～18号土坑



第48図　1号畝間状遺構

（4）畝間状遺構

1号畝間状遺構

遺構（第48図・写真図版19）

［位置・検出状況］ＩＢ7ｇグリッド、調査区北側の安比川に接する緩斜面上に位置する。検出面は表土除去後の黒褐色土（Ⅱ層）中で、十和田ａ火山灰の淡い分布範囲の中に、南東―北西方向に連続する微かな溝のプランを確認した。検出直後の激しい降雨のため再検出後には明確な筋としてとらえることができなくなってしまった。

［規模・形状］約100㎡の範囲に、黒褐色土（Ⅱ層）中の畝間に堆積したと思われる淡い白色火山灰が筋状に列をなすもので、遺存状態がきわめて悪い。畝間溝(以後、畝溝)の長軸方向はほぼ南東―北西である。畝溝の幅は確認できた所で10～90㎝、深さ８～15㎝、長さ1.1～4.8ｍ、畝溝間の間隔は20～80㎝で、断面形は皿形である。

［埋土］遺存状態が悪く、火山灰が明瞭に残っているところは少ない。断面の観察では十和田ａ火山灰粒を含む黒褐色土が堆積する。

［出土遺物・時期］遺物は出土していない。時期は火山灰の鑑定結果から判断して、平安時代の遺構であると考えられる。

2号畝間状遺構

遺構（第49図・写真図版19～20）

［位置・検出状況］ＩＣ６ｊグリッド、調査区中央部北側の平坦面に位置する。検出面は表土除去後の黒褐色土（Ⅱ層）中で、東西方向に連続する溝の分布を確認した。3号畝間状遺構と重複し、これを切っている。

［規模・形状］約32.5㎡の範囲に、黒褐色土中の畝間に堆積したと思われる淡い白色火山灰が筋状に列をなすもので、6条の畝溝がほぼ一定の間隔で並行している。畝溝の長軸方向はほぼ東西で、溝の幅は約６～19㎝、深さ約5.6～14.2ｍ、長さ約5.65～6.35ｍを測り、溝間の間隔は約0.6～0.9ｍである。断面形は皿形を呈する。

［埋土］おおむね2層に大別され、上位に黒褐色土小ブロックを含む火山灰、下位に火山灰を含む黒褐色土が堆積する。部分的に火山灰の薄層が葉離状に堆積している様子が観察された。

［出土遺物・時期］遺物は出土していない。時期は火山灰の鑑定結果から判断して、平安時代の遺構であると考えられる。

3号畝間状遺構

遺構（第49図・写真図版19～20）

［位置・検出状況］ＩＤ７ａグリッド、調査区中央部北側の平坦面に位置する。検出面は表土除去後の黒褐色土（Ⅱ層）中で、南北方向に連続する溝の分布を確認した。2号畝間状遺構と重複し、これにより切られている。

［規模・形状］約45.5㎡の範囲に黒褐色土（Ⅱ層）中の畝間に堆積したと思われる白色火山灰が筋状に列をなすもので、長軸方向はほぼ南北である。畝溝は17条確認されたが、西側の８条を除いては遺存状態が悪く不明瞭なもので、明確な数字ではない。確認できた溝の幅は9～29㎝、深さ4.5～14.4㎝、長さ1.15～2.6ｍ、間隔６～24㎝で、断面形は皿形である。

［埋土］溝により若干の違いがあるが、2層に大別できる。上位に火山灰ブロックを含む黒褐色土、下位に黒褐色土が堆積する。

［出土遺物・時期］埋土の状況から判断して、平安時代の遺構であると考えられる。

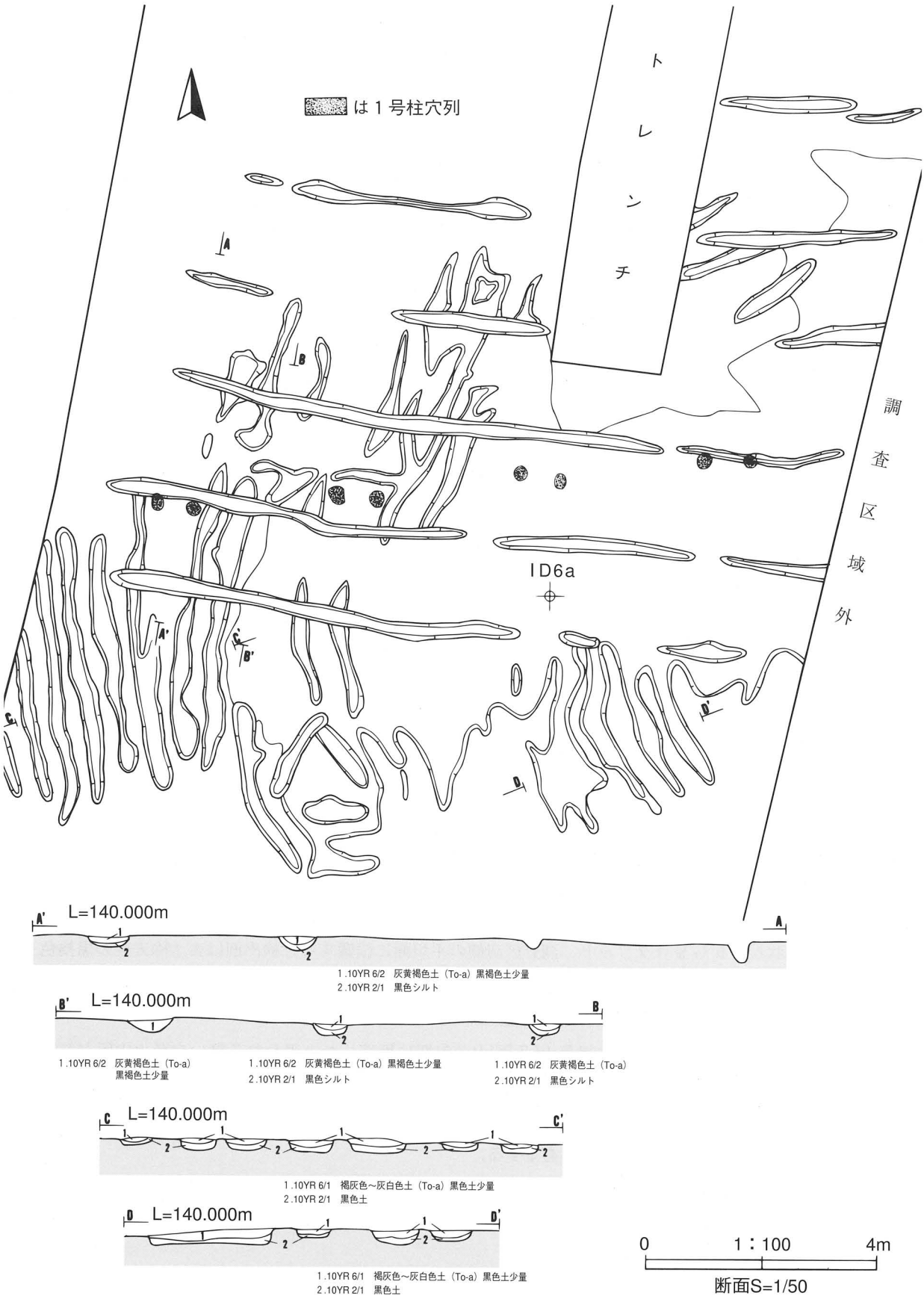
4号畝間状遺構

遺構（第50図・写真図版21）

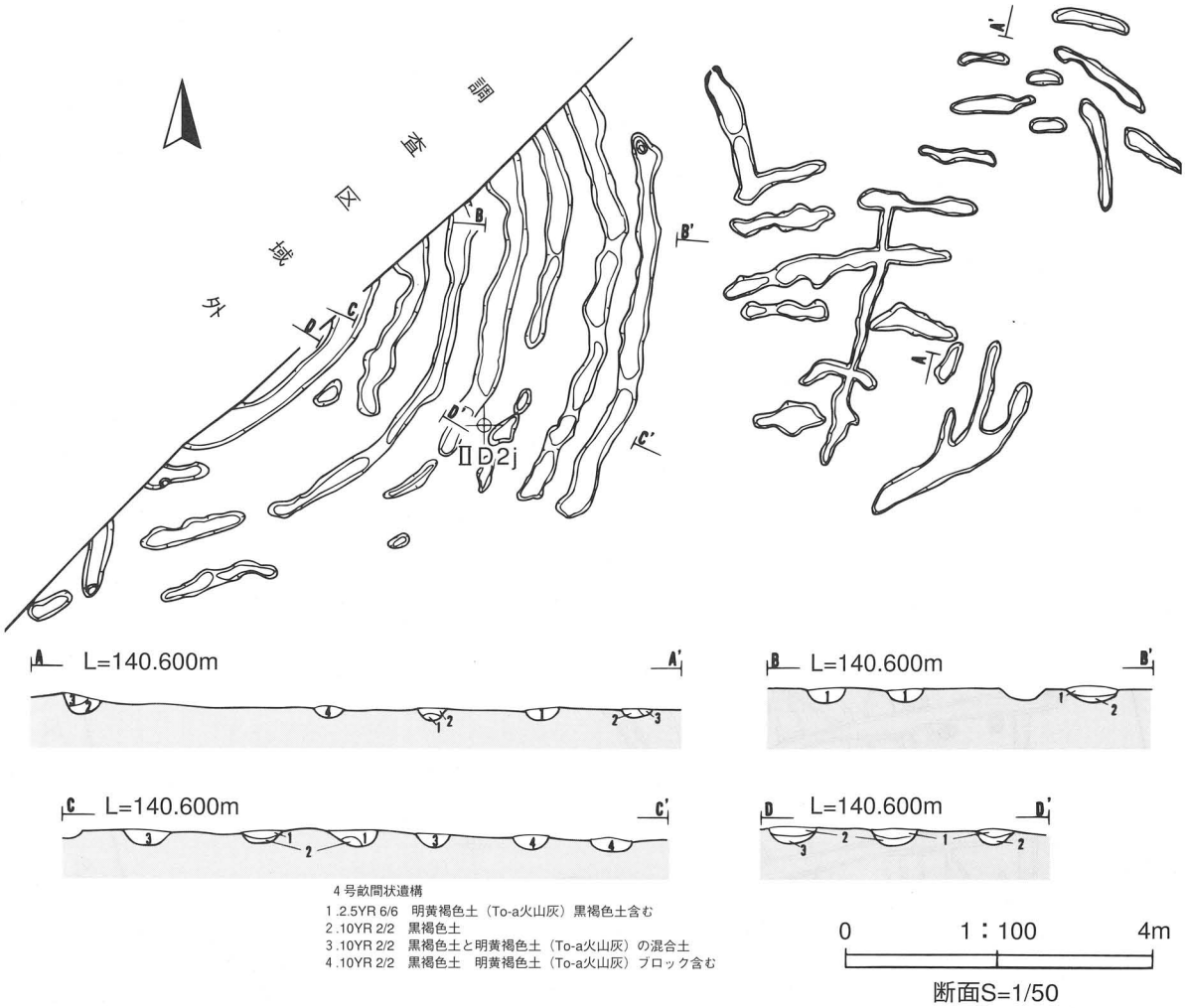
［位置・検出状況］ⅡＤ０ｉグリッド、調査区中央部の平坦面に位置する。検出面は表土除去後の黒褐色土(Ⅱ層)中で、緩い弧状に連続する溝と、それと直交して東西方向に連続する溝を確認した。

［規模・形状］約120㎡の範囲に黒褐色土(Ⅱ層)中の畝間に堆積したと思われる鈍い白色火山灰が筋状に列をなすもので、畝溝の長軸方向はほぼ南―北と東―西である。弧状を呈する南―北方向の溝は、溝の幅が14～50㎝、深さ８～12㎝、長さ5.2～6.3ｍ、溝間の間隔は10～50㎝を測る。東―西方向の溝は、溝の幅８～26㎝、深さ６～10㎝、長さ0.7～3.0ｍ、溝間の間隔10～50㎝を測る。これらの断面形はいずれも皿形を呈する。

［埋土］おおむね2層に大別され、上位に黒褐色土ブロックを含む火山灰、下位には火山灰ブロックを含む黒褐色土が堆積している。



第49図　２・３号畝間状遺構



第50図　４号畝間状遺構

［出土遺物・時期］埋土中から土師器甕片3点が出土している。時期は出土した遺物や火山灰の分析結果から判断して、平安時代の遺構であると考えられる。

５号畝間状遺構

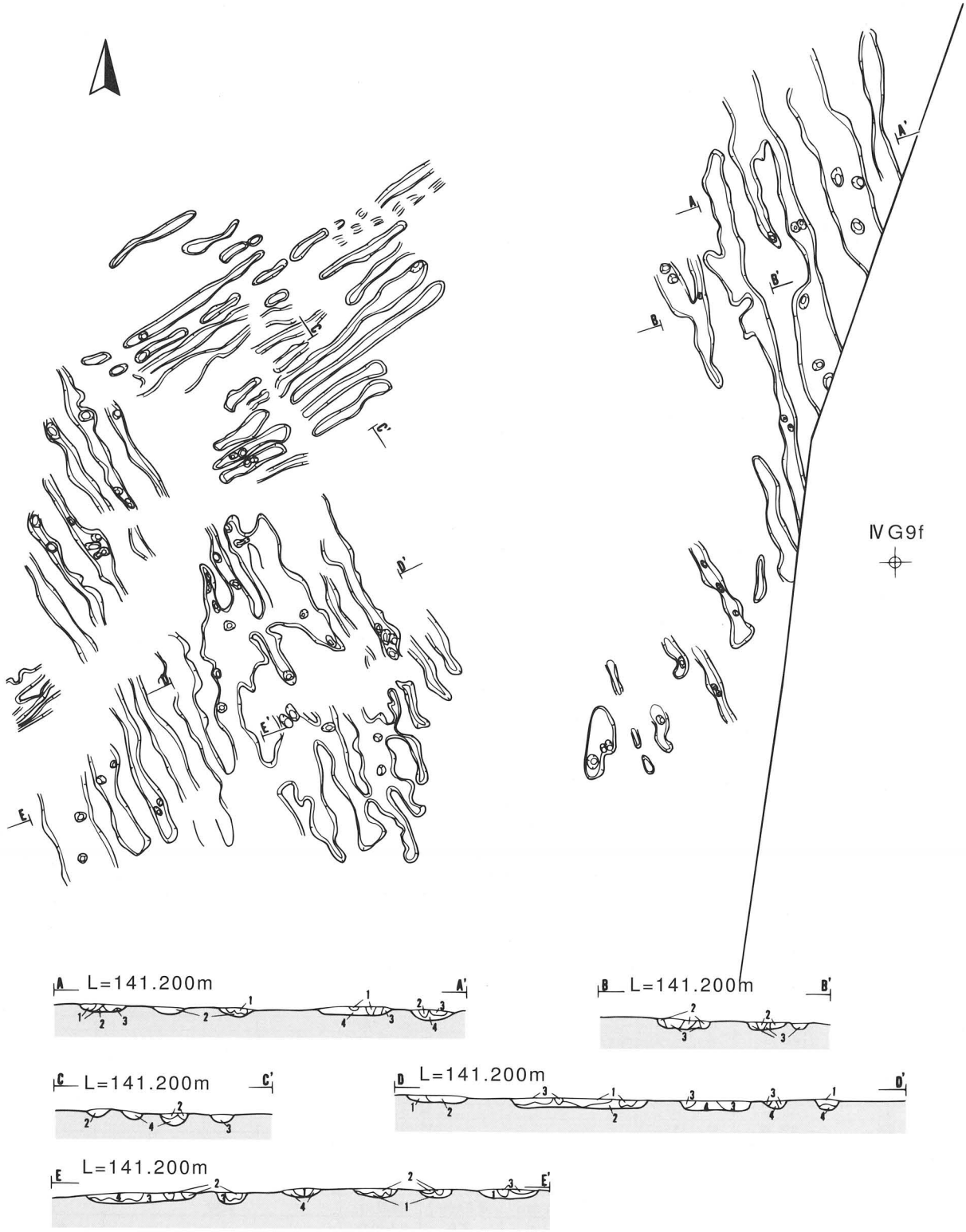
遺構（第51図・写真図版22）

［位置・検出状況］ⅣＧ９ｄグリッド、調査区南側の平坦面に位置する。検出面は表土除去後の黒褐色土（Ⅱ層）上面で、東西方向に連続する溝と、それと直交して南北方向に連続する溝の分布を確認した。調査区南側は後世の削平を受けており、溝の残存状態は不良であった。

［規模・形状］約209㎡の範囲に黒褐色土(Ⅱ層)中の畝間に堆積したと思われる鈍い白色火山灰が筋状に列をなすものである。南西―北東の畝溝は溝の幅12～37㎝、深さ８～12㎝、長さ0.8～6.3ｍ、溝間の間隔９～22㎝を測る。北西―南東方向の畝溝は溝の幅16～80㎝、深さ４～９㎝、長さ3.5～6.4ｍ、溝間の間隔14～70㎝を測る。いずれも断面形は皿形を呈する。

［埋土］削平のため遺存状態は悪い。火山灰ブロックを含んだ黒褐色土主体で構成されるものと、黒褐色土ブロックを含み火山灰主体で構成されるものの両者が認められる。部分的に葉離状に堆積する火山灰が観察される。

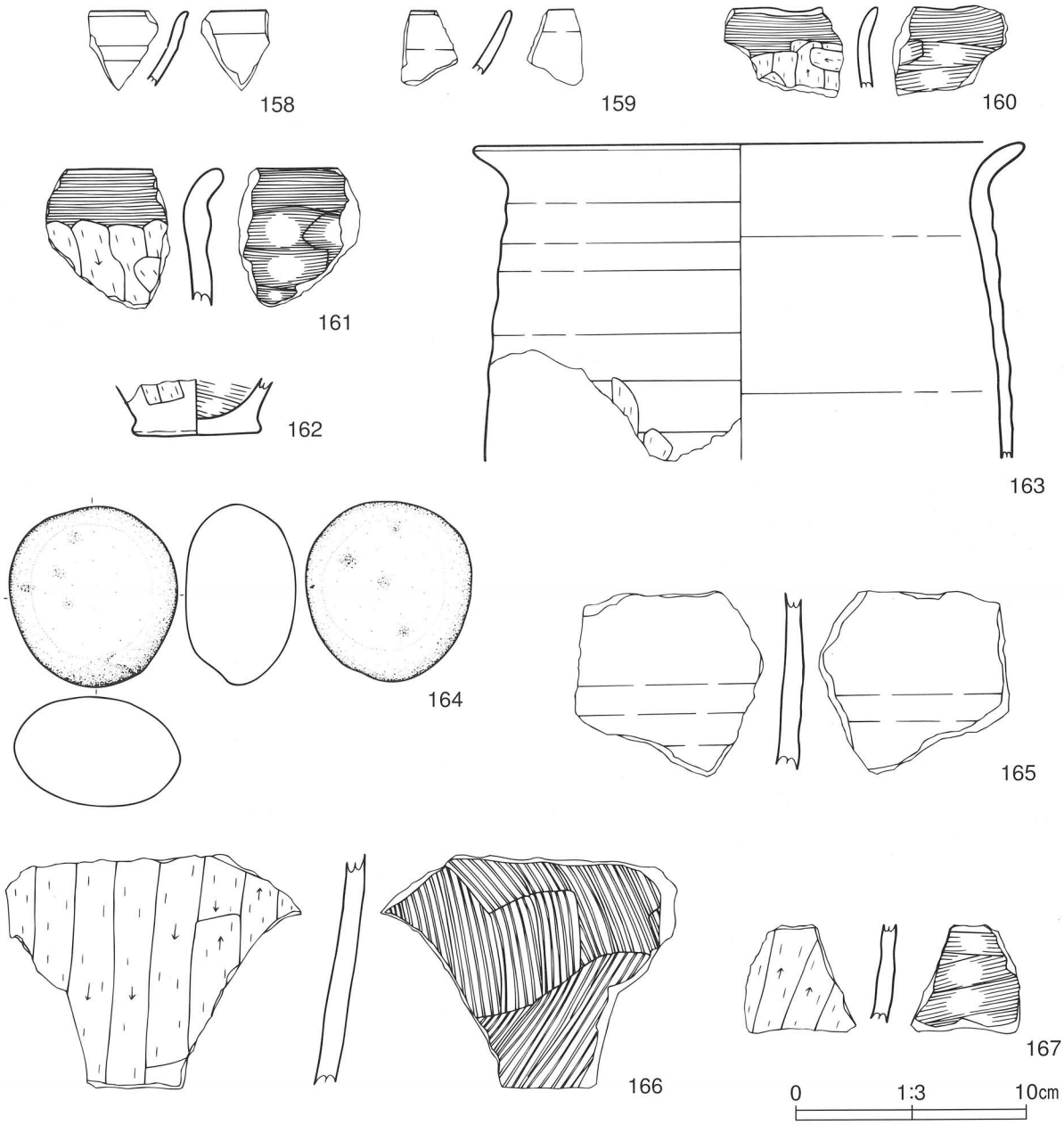
［時期］埋土の状況から判断して、平安時代の遺構であると考えられる。



5号畝間状遺構
1.10YR 3/1　黒褐色土
2.10YR 3/1　黒褐色土とにぶい黄色土（To-a火山灰）の混合土
3.10YR 3/1　黒褐色土　にぶい黄色土（To-a火山灰）ブロック含む
4.2.5YR 6/4　にぶい黄色土（To-a火山灰）

0　1：100　4m

第51図　5号畝間状遺構

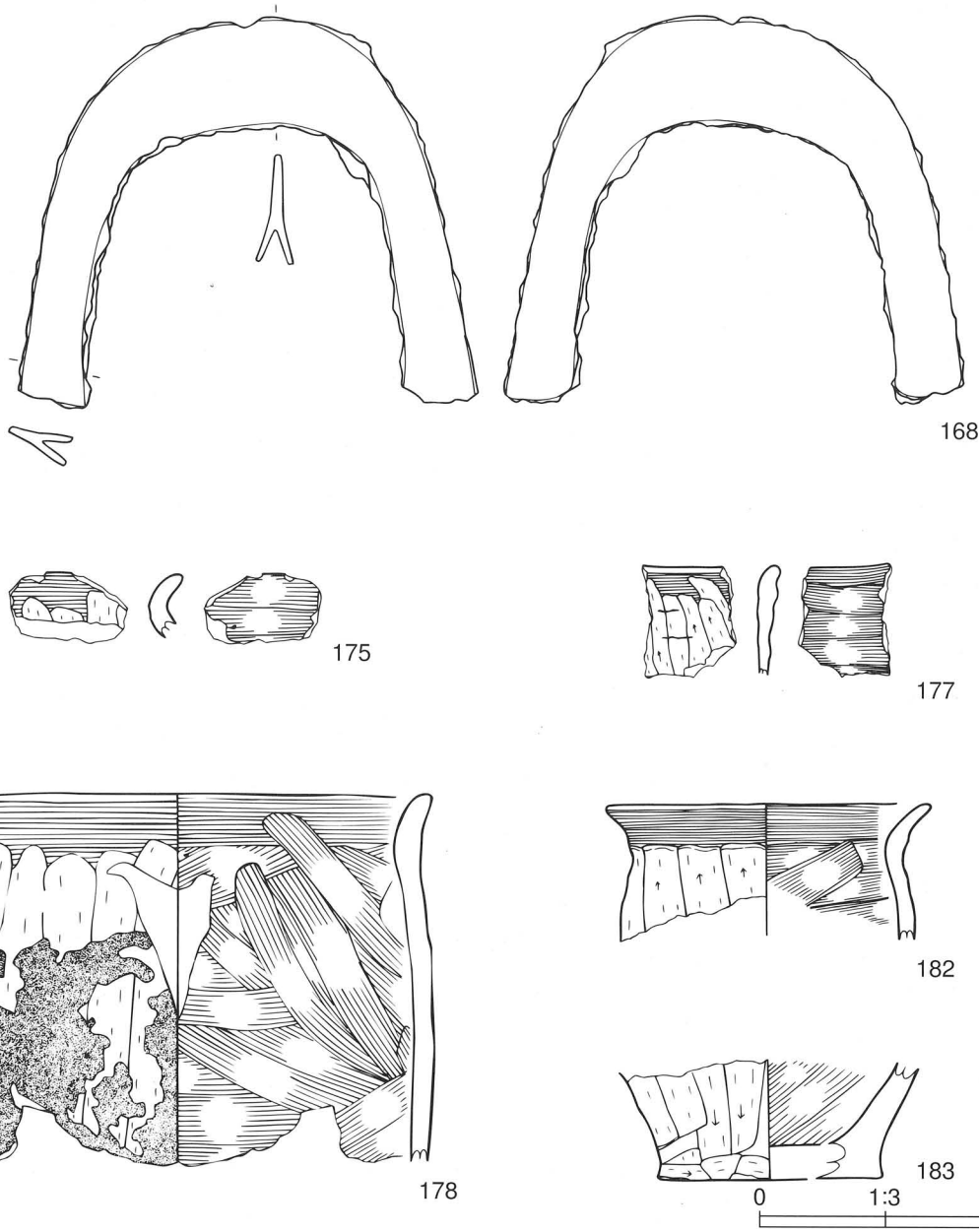


図No.	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量（cm）			備考
							口径	底径	器高	
158	4号土坑　埋土	土師器	坏	3b	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	—	—	—	
159	4号土坑　埋土	土師器	坏	3b	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	—	—	—	
160	4号土坑　埋土	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	—	—	—	
161	4号土坑　埋土	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	—	—	—	
162	4号土坑　埋土	土師器	甕	B3	〔体～底〕ケズリ	〔体～底〕ナデ	—	(5.8)	-2.4	
163	5号土坑　埋土	土師器	甕	A1	〔口〕ロクロナデ〔体〕ロクロナデ＋ケズリ	〔口〕ロクロナデ〔体〕ロクロナデ・ナデ	(24.2)	—	-14.0	
165	6号土坑　埋土	土師器	甕	A1	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ロクロナデ	—	—	—	
166	6号土坑　埋土	土師器	甕	B4	〔体〕ケズリ	〔体〕ハケメ	—	—	—	
167	6号土坑　埋土	土師器	甕	B3	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ	—	—	—	

—：残存値　（）：推定値

No.	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	石質
164	5号土坑　床面	磨石	8.0	7.4	4.9	420.0		安山岩

第52図　その他遺構内出土遺物①



No.	出土地点	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
168	9号土坑　埋土	鋤先	15.5	18.5	0.5	281.4	

図No.	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量（cm）			備考
							口径	底径	器高	
169	10号土坑　焼土内	土師器	甕	B3?	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ				写真のみ掲載
170	10号土坑　焼土内	土師器	甕	B3?	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ				写真のみ掲載
171	10号土坑　焼土内	土師器	甕	B3?	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ				写真のみ掲載
172	10号土坑　焼土内	土師器	甕	B3?	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ				写真のみ掲載
173	10号土坑　焼土内	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ				写真のみ掲載
174	10号土坑　焼土内	土師器	甕	B3?	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ				写真のみ掲載
175	１２号土坑　埋土下部	土師器	甕	B3?	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	—	—	—	
176	１２号土坑　埋土下部	土師器	甕	B3?	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ				写真のみ掲載
177	17号土坑　埋土	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	—	—	—	
178	17号土坑　埋土	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(20.2)	—	-14.9	器面に粘土付着
179	18号土坑　埋土	土師器	甕	B3?	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ				写真のみ掲載
180	18号土坑　埋土	土師器	甕	B3?	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ				写真のみ掲載
181	18号土坑　埋土	土師器	甕	B3?	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ				写真のみ掲載
182	3号溝状遺構	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(13.0)	—	-5.3	
183	3号溝状遺構	土師器	甕	B3	〔体〕ケズリ〔底〕ケズリ	〔体〕ナデ〔底〕ナデ	—	(9.0)	-4.8	

—：残存値　（）：推定値

第53図　その他遺構内出土遺物②

（5）柱穴列

1号柱穴列

遺構（第55図・写真図版23）

［位置・重複関係］調査区中央部ＩＣ６ｊグリッドに位置する。周辺部には1号・3号溝状遺構が分布する。1・3号溝状遺構完掘後、十和田ａ火山灰ブロックを含む黒色土のプランを確認した。3号溝状遺構との新旧関係は判別できなかった。

［規模・方向・構造］Ｐ１～Ｐ８の８個の柱穴状小土坑が、２個１対の等間隔で並ぶ。全長は10.7ｍである。各柱間の距離はＰ１―Ｐ２：55㎝、Ｐ２―Ｐ３：227㎝、Ｐ３―Ｐ４：50㎝、Ｐ４―Ｐ５：231㎝、Ｐ５―Ｐ６：45㎝、Ｐ６―Ｐ７：227㎝、Ｐ７―Ｐ８：42㎝である。それぞれ対をなす柱穴の方向の平均はＷ－８°－Ｎで、柱穴列全体としての方向はＮ－88°－Ｅである。

［埋土］いずれも十和田ａ火山灰をブロック状に含む黒色土主体で構成され、柱痕跡は認められない。

遺物　出土遺物はない。

時期　不明である。

柱穴計測表

(cm)

	Ｐ１	Ｐ２	Ｐ３	Ｐ４	Ｐ５	Ｐ６	Ｐ７	Ｐ８
長軸×短軸	25×24	32×27	29×25	26×25	30×28	32×27	28×26	28×21
深　　さ	29	27	26	20	26	28	24	22

2号柱穴列

遺構（第55図・写真図版23）

［位置］調査区中央部ⅡＤ４ａグリッドに位置する。周辺部には6号竪穴住居跡がある。Ⅲ層黒色土面で、十和田ａ火山灰ブロックを含むプランとして確認した。

［規模・方向・構造］Ｐ１～Ｐ５の５個の柱穴状小土坑が、全長13ｍにほぼ等間隔で並ぶ。各柱間の距離はＰ１―Ｐ２：３ｍ、Ｐ２―Ｐ３：2.9ｍ、Ｐ３―Ｐ４：3.1ｍ、Ｐ４―Ｐ５：2.9ｍで、方向はＷ－２°－Ｎである。

［埋土］いずれも十和田ａ火山灰をブロック状に含む黒色土主体で構成され、柱穴痕は認められない。

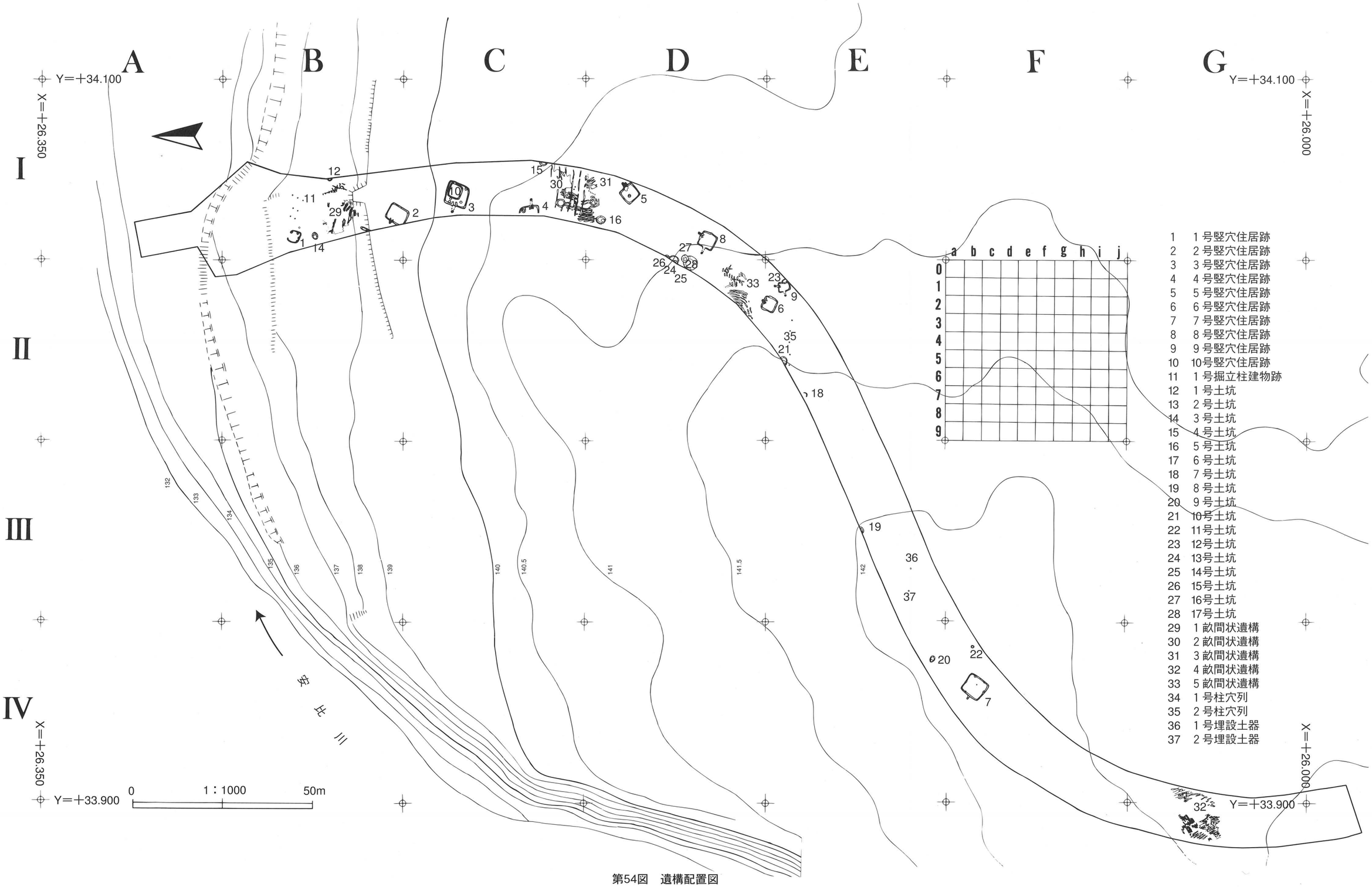
遺物　出土遺物はない。

時期　不明である。

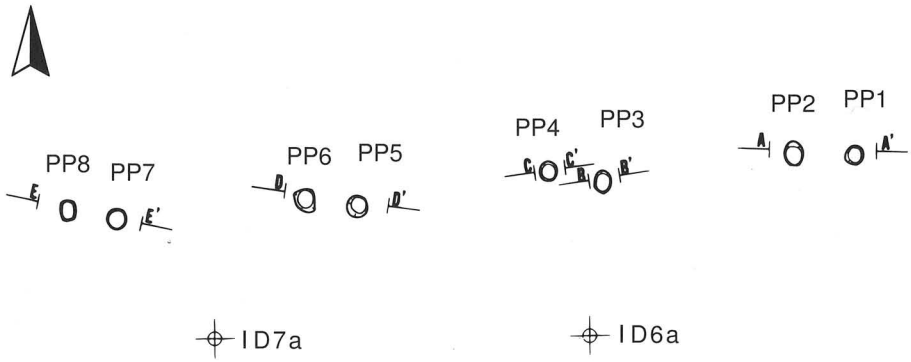
柱穴計測表

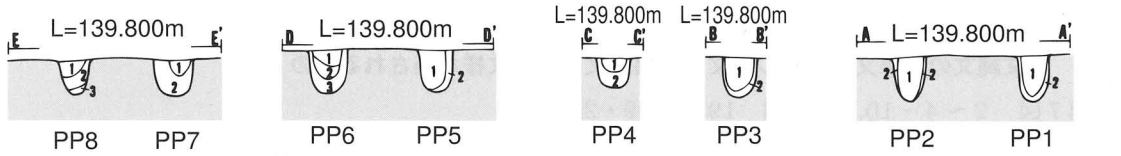
(cm)

	Ｐ１	Ｐ２	Ｐ３	Ｐ４	Ｐ５
長軸×短軸	19×18	17×17	26×23	21×18	21×20
深　　さ	21	19	18	21	26


A
B
C
D
E
F
G
I
II
III
IV
Y=+34.100
X=+26.350
X=+26.000
Y=+33.900
0
1：1000
50m
a b c d e f g h i j
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9
1 1号竪穴住居跡
2 2号竪穴住居跡
3 3号竪穴住居跡
4 4号竪穴住居跡
5 5号竪穴住居跡
6 6号竪穴住居跡
7 7号竪穴住居跡
8 8号竪穴住居跡
9 9号竪穴住居跡
10 10号竪穴住居跡
11 1号掘立柱建物跡
12 1号土坑
13 2号土坑
14 3号土坑
15 4号土坑
16 5号土坑
17 6号土坑
18 7号土坑
19 8号土坑
20 9号土坑
21 10号土坑
22 11号土坑
23 12号土坑
24 13号土坑
25 14号土坑
26 15号土坑
27 16号土坑
28 17号土坑
29 1畝間状遺構
30 2畝間状遺構
31 3畝間状遺構
32 4畝間状遺構
33 5畝間状遺構
34 1号柱穴列
35 2号柱穴列
36 1号埋設土器
37 2号埋設土器
好井川

第54図　遺構配置図





PP7
1.10YR 3/1　黒褐色土と10YRと5/3
　　鈍い黄褐色土（To-a）の混合土
2.10YR 3/1　黒褐色土灰黄褐色土少量含む

PP8
1.10YR 5/2　灰黄色褐色土（To-a）
　　と10YR4/1褐灰色土の混合土
2.10YR 3/1　黒褐色土と10YR5/2灰黄褐色土の混合土
3.10YR 3/1　黒褐色土

PP5
1.10YR 3/1　黒褐色土と10YRと5/2
　　灰黄褐色土（To-a）の混合土
2.10YR 3/1　黒褐色土

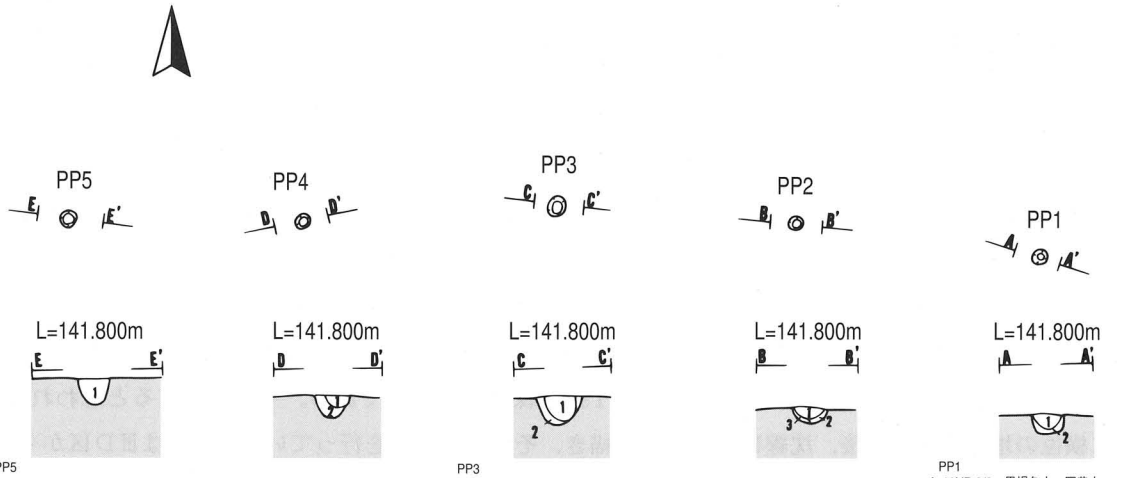
PP6
1.10YR 5/2　灰黄褐色土（To-a）と
　　10YR4/1褐灰色土の混合土
2.10YR 3/1　黒褐色土　灰黄褐色土少量含む
3.10YR 3/1　黒褐色土

PP3
1.10YR 3/1　黒褐色土と10YRと5/2
　　灰黄褐色土（To-a）の混合土
2.10YR 3/1　黒褐色土

PP4
1.10YR 3/1　黒褐色土と10YRと5/2
　　灰黄褐色土（To-a）の混合土
2.10YR 3/1　黒褐色土

PP1
1.10YR 3/1　黒褐色土と10YRと5/2
　　灰黄褐色土（To-a）の混合土
2.10YR 3/1　黒褐色土

PP2
1.10YR 5/2　灰黄褐色土（To-a）と
　　10YR4/4褐灰色土の混合土
2.10YR 3/1　黒褐色土



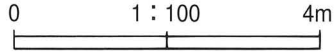
PP5
1.10YR 2/2　黒褐色土灰黄土
　　（To-a火山灰）ブロック含む

PP4
1.10YR 2/2　黒褐色土　灰黄土
　　（To-a火山灰）ブロック含む
2.10YR 2/2　黒褐色土と灰黄土
　　（To-a火山灰）の混合土

PP3
1.10YR 2/2　黒褐色土と灰黄土
　　（To-a火山灰）の混合土
2.10YR 2/1　黒色土　褐色粒含む

PP2
1.10YR 2/2　黒褐色土　灰黄土
　　（To-a火山灰）ブロック含む
2.10YR 2/2　黒褐色土と灰黄土
　　（To-a火山灰）の混合土
3.10YR 2/2　黒色土　褐色粒含む

PP1
1.10YR 2/2　黒褐色土　灰黄土
　　（To-a火山灰）ブロック含む
2.10YR 2/2　黒褐色土と灰黄土
　　（To-a火山灰）の混合土



第55図　1・2号柱穴列

Ⅳ．遺構外の出土遺物

遺構外からの出土遺物には、縄文土器・石器・石製品、土師器・須恵器・金属製品がある。比率では縄文土器が多いが、いずれも量は少量である。

１．縄文時代

（１） 縄文土器（第56図・写真図版37）

遺構外出土の縄文土器は小コンテナ１箱分出土した。特に調査区中央部からは畑の耕作時に一括して廃棄されたと見られる土器片がビニール紐などと共に出土している。出土した土器は、地文縄文の沈線文・磨消縄文・充填縄文により文様が施されるものがほとんどで、時期は後期初頭に位置付けられている蛍沢式に比定されるものと考えられる。

分類は遺構内出土のもの（１・２号埋設土器）も含め、土器の施文手法に主眼を置いて3つに大別した。以下ではそれぞれの特徴を述べる。

１類　地文縄文の沈線文・磨消し縄文・充填縄文により文様が施されるもの

（第７図　２～４・10、第56図　193～199・203）

２～４は1号埋設土器内から出土した深鉢土器の体部破片である。10は2号埋設土器の深鉢である。口縁部は5単位の大波状を呈し、波頂部はゆるやかなM字状に成形されている。口縁～胴部文様帯は横位に器面を一周する2重の沈線により３段に分割される。文様帯には地文を施した後、沈線によるフック状モチーフを描き、その後区画内の磨消しを行っている。193～199・203は調査区中央部の試掘時に出土した。193は深鉢の口縁部である。口縁は山形を呈し、頂部下方及び頂部間に刺突を伴う粘土貼り付けが施される。口唇部は粘土紐の貼り付け+沈線によりやや肥厚する。胴部文様帯は縦位の地文を施文後、沈線により区画文を描き、区画外の磨消しを行っている。194は深鉢口縁部で、山形を呈し、山形頂部下方に粘土瘤の貼り付けを持つ。器面全体に横位方向の地文を施文後、蛇行沈線により区画を描き、磨消しを行っている。195は深鉢の口縁部である。胴上部でやや内傾し、頸～口縁部にかけて外反する器形を呈する。口縁部は波状である。全体に縦位に地文を施文後、波頂部を中心として沈線により三角形区画を施し、内部にフック状モチーフを描く。196は深鉢の口縁部で、山形を呈する。器面には粘土紐貼り付け後横位に地文が施文される。その後、沈線により粘土紐に沿う区画文が描かれている。197は深鉢の口縁部である。器形は胴上部から直線的に立ち上がり口縁部に至って短く外傾する。口縁部は山形を呈すると思われる。器面に縦位の地文を施した後、ダイナミックな蛇行沈線文が描かれる。その後区画内の磨消しを行っている。198は深鉢の口縁部である。口縁は平縁を呈すると思われる。器面に縦位の地文を施した後、2重の沈線とフック状沈線の組み合わせにより区画文を描く。199は深鉢の口縁部である。平縁を呈すると思われる。器面に横位の地文を施した後、沈線により区画を描き、その後磨消しを行っている。200はⅢＤ区から出土した壷形土器の口縁部である。外面はナデ、内面はミガキ調整される。201はＩＣ５ｊグリッドⅢ層から出土した深鉢の胴部片である。沈線により胴部に曲線的なモチーフが描かれる。202はＩＤ６ａグリッドⅡ層下～Ⅲ層上から出土した壷の胴部片である。地文施文後、2重の沈線によって文様が描かれる。203は壷の底～胴下部で、ＬＲの単節斜縄文が縦位・横位に施文されている。沈線によって区画文様を描き、内部を丁寧に磨消している。

2類　無文地に沈線が施されるもの

（第７図　１、第56図　204）

１は1号埋設土器の壷である。胴部文様帯には沈線により横位に連繋するフック状のモチーフが描かれ、その後に区画内の磨消しが行われている。204はⅢＤ区Ⅲ層下から出土した切断糸切り壷の口縁部である。胴上部まで大きく外傾したのち、強く屈曲して口縁部に至る器形を呈する。屈曲部には小さな橋状把手が付けられ紐通し孔が穿たれている。把手の下位には沈線がめぐっている。

３類　地文のみが施されるもの

（第56図　205～207）

205～207は調査区中央部の試掘時に出土した。205は深鉢の胴部片である。206は深鉢の口縁部である。粘土紐の貼り付けにより2重口縁を呈している。207は深鉢の底～胴下部で、Ｌ1段撚糸文が縦位に施されている。

（２）　石器・石製品（第56図・写真図版37）

石鏃が２点出土している。219はＩＢ５ｆグリッドⅡ層から出土した。石質は珪質頁岩である。220は試掘の際に出土した。石質は頁岩である。石製品は1点出土している。221は調査区南の試掘時に出土した垂飾品で、中央部が穿孔されている。石質は細粒砂岩である。

２．平安時代

（１）　土師器・須恵器（第57図・写真図版37）

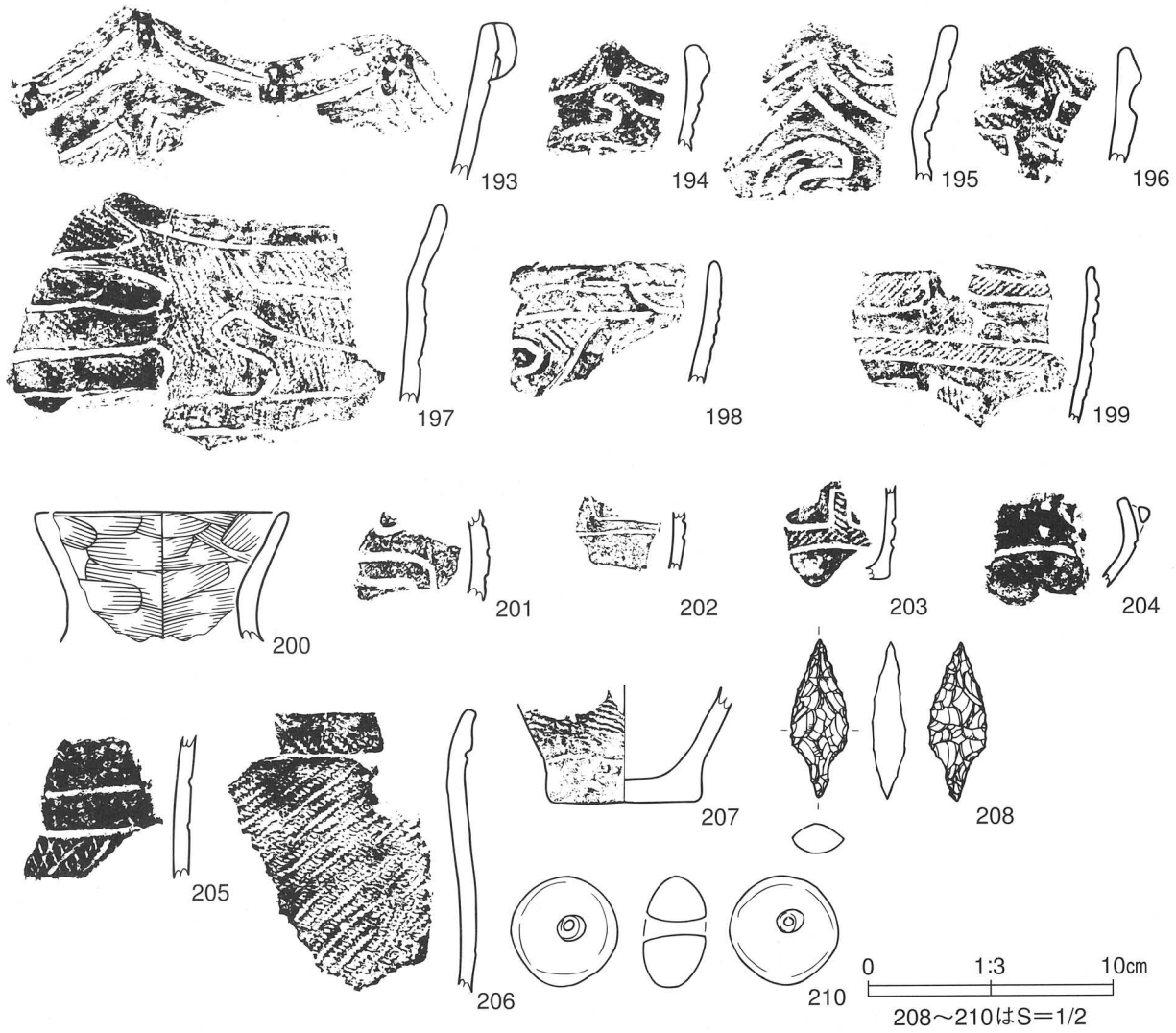
211は土師器内黒坏で、内面ミガキ調整される。切り離しの技法は回転イトキリで、再調整は施されていない。212は土師器小形甕で、内外面ともロクロ調整される。切り離しの技法は回転イトキリである。213はロクロ調整の土師器甕で、外面ロクロ、内面ナデ調整される。214～216は土師器甕で、外面ヨコナデ＋ケズリ、内面ナデ調整される。217は土師器甕で、外面ケズリ、内面ナデ調整される。底面木葉痕を持つ。218・219は須恵器長頸壷破片である。220は須恵器大甕の胴部破片で、外面タタキ目、内面ナデ調整される。

（２）　土製品（第57図・写真図版37）

1点のみの出土である。221は調査区中央部Ⅲ層から出土した土師質の土製品で碁石状の形状を呈する。

（３）　鉄製品（第57図・写真図版37）

鉄製品は2点出土した。222・223は試掘の際に出土したものであるが小破片のため形態は不明である。

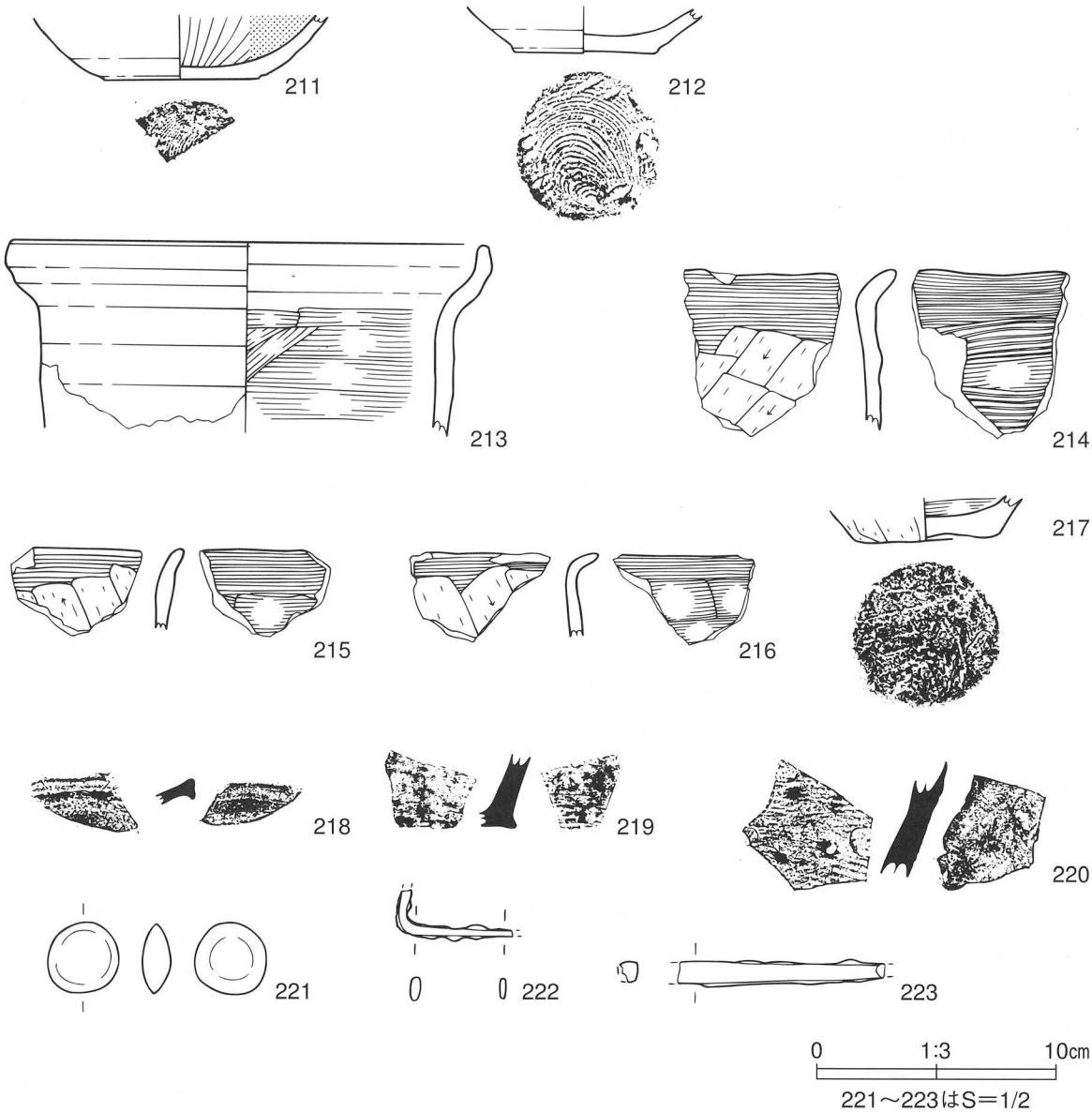


図No.	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量（cm） 口径	底径	器高	備考
184	4号溝状遺構	土師器	甕	B3	〔口〕ロクロナデ	〔口〕ロクロナデ				写真のみ掲載
185	4号溝状遺構	土師器	甕	B3	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ				写真のみ掲載
186	4号溝状遺構	土師器	甕	B4	〔体〕ハケメ	〔体〕ナデ				写真のみ掲載
187	4号溝状遺構	土師器	甕	B3?	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ				写真のみ掲載
188	4号溝状遺構	土師器	甕	B3?	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ				写真のみ掲載
189	4号溝状遺構	土師器	甕	B3?	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ				写真のみ掲載
190	5号溝状遺構	土師器	甕	B3?	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ				写真のみ掲載
191	5号溝状遺構	土師器	甕	B3?	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ				写真のみ掲載
192	5号溝状遺構	土師器	甕	B3?	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ				写真のみ掲載

No.	出土地点	器種	部位	原体	文様の特徴	分類
193	調査区中央部試掘	深鉢	口縁部	ＲＬ	地文施文後、区画沈線を描く。その後磨消し。口縁部に太沈線巡る。	１類
194	調査区中央部試掘	深鉢	口縁部	ＬＲ	地文施文後、蛇行沈線により区画を描き、磨消しを行う。	１類
195	調査区中央部試掘	深鉢	口縁部	ＲＬ	沈線により三角区画を施し、内部にフック状モチーフを描く。	１類
196	調査区中央部試掘	深鉢	口縁部	ＲＬ	区画沈線を描いた後、磨消しを行う。	１類
197	調査区中央部試掘	深鉢	口縁部	ＬＲ	蛇行沈線文施文後、磨消しを行う。	１類
198	調査区中央部試掘	深鉢	口縁部	ＬＲ	地文施文後、区画沈線を描く。その後磨消し。	１類
199	調査区中央部試掘	深鉢	口縁部	ＬＲ	地文施文後、区画沈線を描く。その後磨消し。	１類
200	調査区中央部試掘	壷	口縁部		内外共にナデ調整される。	－
201	ＩＣ５ｊ　Ⅲ	壷	胴部		２重沈線により区画文が描かれる。	－
202	ＩＤ６ａ　Ⅱ下～Ⅲ上	壷	胴部	不明	２重沈線により区画文が描かれる。	－
203	調査区中央部試掘	壷	底～胴下	ＬＲ	地文施文後、区画沈線を描く。その後磨消し。	１類
204	ⅢＤ区　Ⅲ下	壷	口縁部		把手下位に平行沈線が巡る。	２類
205	調査区南側試掘	深鉢	胴部	撚糸	平行沈線＋撚糸文。	３類
206	調査区中央部試掘	深鉢	口縁部		貼り付けによる２重口縁を呈する。	３類
207	調査区中央部試掘	深鉢	底～胴下	Ｌ	Ｌ１段撚糸文が縦位に施文される。	３類

No.	出土地点	器種・種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	石質
208	ＩＢ５ｆ　Ⅱ	石鏃				4.2		珪質頁岩
209	中央部試掘	石鏃	-2.7	1.4	0.5	1.3		頁岩
210	調査区南	垂飾品				17.9		砂岩

第56図　遺構外出土遺物①



図No.	出土地点	種類	器種	分類	外面調整	内面調整	法量（cm）			備考
							口径	底径	器高	
211	ⅠＤ６ａ　Ⅱ下　捨て場	土師器	坏	1a	〔体〕ロクロナデ〔底〕回転イトキリ	〔体～底〕ミガキ	—	6.5	-2.7	内面黒色処理
212	ⅠＣ５ｊ　Ⅲ	土師器	坏	1b	〔体〕ロクロナデ〔底〕回転イトキリ	〔体〕ロクロナデ〔底〕ロクロナデ	—	6.1	-2.1	
213	ⅠＣ６ｊ　Ⅲ下	土師器	甕	A	〔口～体〕ロクロナデ	〔口〕ロクロナデ〔体〕ナデ	(20.0)	—	-8.1	
214	ⅠＤ６ａ　Ⅱ下　捨て場	土師器	甕	B4	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメ＋ナデ	—	—	—	
215	ⅠＣ５ｊ　Ⅲ	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	—	—	—	
216	ⅠＢ区南　Ⅰ	土師器	甕	B3	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	—	—	—	
217	調査区南側　表土除去後	土師器	甕	B3	〔体〕ケズリ〔底〕モクヨウコン	〔体～底〕ナデ	—	6.1	-1.7	
218	ⅠＤ６ａ　Ⅱ下　捨て場	須恵器	長頸壺		〔口〕ロクロナデ	〔口〕ロクロナデ				
219	北側試掘	須恵器	長頸瓶		〔体～底〕ケズリ	〔体～底〕ナデ				
220	ⅠＤ６ａ　Ⅱ下　捨て場	須恵器	大甕		〔体〕タタキメ	〔体〕ナデ				

—：残存値　（）：推定値

No.	出土地点	器種・種類	長さ	幅	厚さ	重量	備考
221	IC5j　Ⅲ	土製品	2	1.9	0.7	2.3	
222	北側試掘	鉄製品	-3.2	0.7	0.3	1.9	
223	地点不明	鉄製品	-5.8	0.6	0.6	6.3	

（）：推定値　—：残存値

第57図　遺構外出土遺物②

V. まとめ

遺構

1. 縄文時代

(1) 埋設土器

調査区中央部から2基を検出した。時期はどちらも縄文時代後期初頭のものである。2基は約6.5m離れた位置から、近接する形で検出された。周辺部からは同時期の遺構は全く見つかっておらず、これらは居住域から離れた地点に埋設された可能性が高い。遺構の性格としては1号埋設土器内から硬玉製大珠、貝製品等が出土しており、本埋設土器は何らかの儀式を伴う埋葬施設である可能性が想定されるが、それを裏付けるような骨片等は確認されていない。また、成人骨を埋葬したと考えるには埋設されていた壷形土器はかなり小さく、蔵骨器と解釈するには不自然な感を抱く。1号埋設土器の西方約6.5mには2号埋設土器が位置しており、人骨はこちらに埋葬された可能性も考えられる。2基の埋設土器は土器の施文手法の特徴等を同じくしており同時期のものであると考えられるが、両者を結ぶ接点をこれより見出すことはできない。この硬玉製大珠・貝玉の所有者としては、糸魚川産のヒスイ・南海産の貝玉が、かなり希少価値の高い占有品であったであろうことを考慮すれば、当時の二戸地区を強い権力と経済力で支配していた人物であったと推測できる。

2. 平安時代

(1) 竪穴住居跡

今回の調査で検出された平安時代の竪穴住居跡(以下、住居跡)は10棟である。これらについて事実記載の項目についてまとめる。

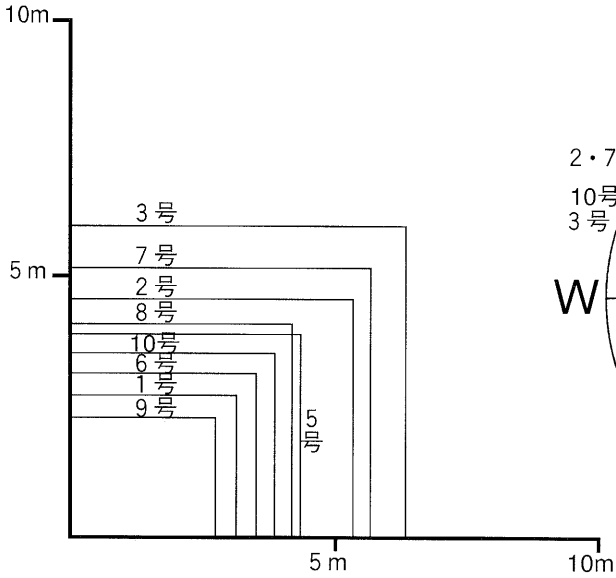
占地　調査区が細長く、蛇行する形状であることから内容の一部分しか明らかにできなかったが、10棟の住居跡はいずれも安比川の右岸に形成された河岸段丘上に分布している。住居跡はいずれも第Ⅲ層の中掘浮石層まで掘り込んで構築されている。例外は1号竪穴住居跡で、中掘浮石層が削平されて存在しない安比川沿いの北側緩斜面に位置するため、柔らかく不安定なシルト面を掘り込んでいる。住居跡の位置する低台地の上はほぼ平坦で、周辺の地形より微かに高まっており、本来は調査の行われなかった西側縁辺部などにも更に竪穴住居跡が分布しているものと推測される。

平面形　住居跡の平面形には、ほぼ方形のものと長方形のものとがある。2号竪穴住居跡・9号竪穴住居跡は長辺と短辺にやや差があり長方形状を呈するが、他の住居跡に大きな差異はなく、いずれも正方形を基調としているものと考えられる。

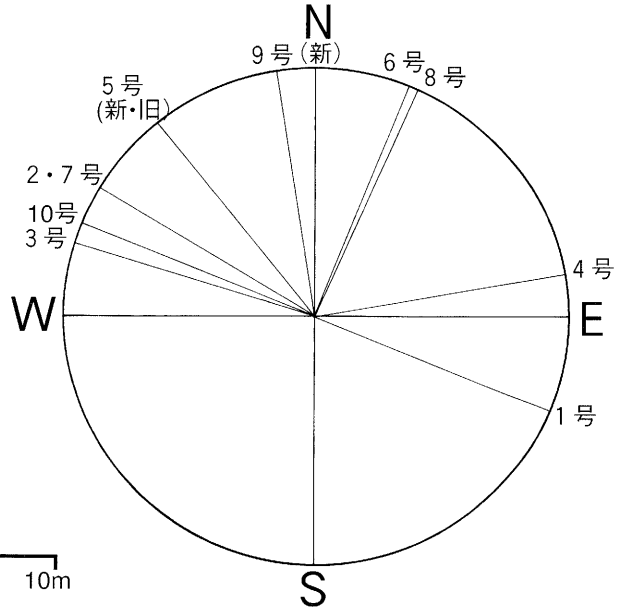
規模　各住居跡の床面積の分布を図①に示した。最大は3号住居跡の38.9㎡、最小は9号住居跡の6.5㎡となり、全体としてばらつきがある。また、規模により住居跡の構造に差異が見られ、床面積30㎡以上の大型住居跡(3号・7号住居跡)には床面の柱穴が認められるのに対し、それ以下のものでは柱穴が認められなかった。

軸方向　カマドを持つ壁に直行する線と、座標軸との角度を軸方向とし、図②に示した。これを見ると同一の角度を持つものはないが、北西方向を向くもの(2・3・5・7・10号住居跡)、ほぼ北方向を向くもの(6・8・9号住居跡)、西方向を向くもの(1・4号住居跡)と、3つのまとまりが見られた。

カマド　図②は、住居の主軸方位図である。これを見るとカマドは北西側に構築されるものと北東側に構築されるもの、東側に構築されるものに大別できる。例外として9号竪穴住居跡が挙げられ、カマドは西



図① 住居跡の床面積



図② 住居跡の軸方向

側と北側に造られている。また、５号・８号・９号竪穴住居ではカマドの造り替えが行われており、それぞれ北東壁中央→北東壁東寄り(5号住居跡)、北西壁中央→北東壁東寄り(8号住居跡)、西壁中央→北壁中央(9号住居跡）に造り替えられている。

カマドの形態には、掘り込み式のものと刳り貫き式のものとの２種類がある。検出された10棟の住居跡についてみると、掘り込み式のものが２棟、刳り貫き式のものが３棟、刳り貫き式から掘り込み式に造り替えが行われたものが３棟、プランの西半部が調査区域外に出るため不明のものが１棟、削平のため不明なものが１棟である。このことから、集落が営まれていた間にカマドの形態が刳り貫き式→掘り込み式へと変わっていったと推測され、カマドのつくられる位置には時期差があるものと考えられる。

出入り口？　検出された10棟の住居跡のうち、出入り口の施設らしきものが検出されたのは5号竪穴住居跡、6号竪穴住居跡、8号竪穴住居跡の３棟ある。5号竪穴住居跡ではカマド脇の北東側床面が周囲より若干せりあがり、特にガリガリにしまっていた状況から、カマドが設置された北東壁際に出入り口があった可能性が高いと考えられる。6号住居跡では南側床面中央に約20×60㎝に広がる扇状の火山灰の分布(吹き込みのようなもの？）が認められており、最初に埋土の堆積が始まった箇所であった可能性がある。8号竪穴住居跡では南東壁中央部にテラス状の張り出しが認められ、小柱穴状ピットが１基検出された。また、張り出し部の壁に接する床面が85×137㎝の隅丸長方形状の範囲で特に堅く締まっており、その部分だけが厚く貼り床されていたことから出入り口であった可能性が高いと推測できる。

柱穴および配置　10棟の住居跡のうち、柱穴が確認されたものは3号竪穴住居跡、7号竪穴住居跡の２棟だけである。３号住居跡は主柱穴が４本あるタイプで補助柱穴を持たない。７号竪穴住居跡は主柱穴が４本、その他主軸方向とは異なる壁際中央に補助柱穴を２本持っている。このうち柱の抜き取り痕が確認できたものはない。柱穴にはいずれも柱痕跡が確認された。

埋土　10号住居跡を除いて顕著な人為的埋土は認められない。いずれの埋土中にも灰白色～灰黄褐色の火山灰(十和田ａ降下火山灰）がブロック状に堆積し、ブロックの混入量によって層を異にしている。全体的にはレンズ状の堆積状況を示しており、自然堆積であると考えられる。十和田ａ降下火山灰が同様の堆積状況を示すのは二戸市に分布する大向上平遺跡以外の遺跡においても認められており、長瀬Ｂ遺跡においてはブロック状の火山灰が混入する住居跡からは、いずれもロクロ使用以後の土師器が得られている。

（２）　掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は北側沢部で１棟のみ検出した。今回検出した遺構のなかでは最も北に位置している。埋土には十和田ａ火山灰をブロック状に含んでおり、竪穴住居跡と同時期に位置付けられると考えられる。周辺には、1号竪穴住居跡、1号畝間状遺構、3号土坑などが位置しており、これらとの同時存在も考えられる。用途や時期を推測できる遺物等は出土しなかったが、立地や在り方からは物置小屋等の機能を持つ施設であったと推測できる。

（３）　土坑

19基の土坑のほとんどは円形～楕円形を基調とするもので、底面に焼土を伴うものが８基ある。住居跡との重複は見られず、竪穴住居の周辺に点在するような在り方を呈する。形態や出土遺物などから用途の推測できるものはないが、住居と近接してあるものが多く、ムロなどの貯蔵用の穴として使用されたものである可能性がある。底面に焼土を伴うものは、楕円形を基調とするものが多く、現地性の焼土が長軸方向のどちらか一方の底面に、偏って形成されている。焼土は比較的厚く、その上を灰が覆うものがあり、使用は比較的長期間であったと推測される。また、土坑同士で重複があることから繰り返し使用されたものであった可能性が考えられる。底面に焼土が形成される土坑についての類例は、県内では二戸市中曽根Ⅱ遺跡、青森県では八戸市岩ノ沢平遺跡などに求められ、本遺跡と同様に甕片が得られているが、用途が明確に示された類例を見つけることはできなかった。

（４）　畝間状遺構

畝間状遺構の調査例

畝間状遺構の県内における類例は、現在までで軽米町皀角子久保遺跡(1988)、浄法寺町コアスカ館遺跡(注１)、北上市上鬼柳遺跡(1992)、岩崎台地遺跡群(1995)、江刺市後中野遺跡(1996)・宮地ⅢＡ遺跡(注２)・宮地ⅡＢ遺跡(1997)・愛宕林遺跡(注２)・岩谷堂城跡(1996)の例が知られ、二戸市大向上平遺跡で13例目となる。隣県の青森県においては青森市野木遺跡(1998)、五所川原市隠川(4)・隠川(12)遺跡（1998)、東北町往来ノ上(1)遺跡(1996)、下田町中野平遺跡(1996)、南郷村砂子遺跡、畑内遺跡(注３)、浪岡町野尻(4)遺跡(1996）などで同様の例が知られており、畝間遺構についての資料は近年増加しつつある。

しかしながら、畠跡として認定されるまでに至ったものは多くない。その理由としては、①検出される畝間遺構の多くが後世の耕作などで撹乱されている場合が多く遺存不良であること、その上、②はっきりした畝間溝が認められる場合でも作物を栽培していた確証が得られない限り畠としての認定が難しいということ等が挙げられる。本県においても皀角子久保遺跡と上鬼柳、遺跡で種子とプラントオパールについての分析が行われているが、上記の理由から良好な資料は得られていない。

本遺跡の畝間状遺構

本遺跡の畝間状遺構はすべて十和田ａ火山灰が帯状に検出されたことによってその存在が確認できたも

のである。形状は直線状を呈するもの、弧状を描くもの、それらの溝が重複するものと多彩な様相を呈している。確認した畝間溝の埋土は、いずれも上層が隙間に黒褐色土の挟まった十和田ａ火山灰のブロック主体で構成され、下層は黒褐色土のなかに火山灰の小ブロックが混ざりこむという状態を呈する。また、一部には黒褐色土と火山灰が混ざり合って灰色を呈する土壌も見られる。このことからは、火山灰の堆積が一時的なものではなく人為的な撹乱を受けている可能性が考えられる。火山灰のブロックの中には、部分的ではあるが葉離状の堆積を示す縞模様の見られるものがある。この堆積状態は従来から水成堆積と考えられているが、このように考えるならば、本遺跡の立地地点と安比川との間に10m以上の比高があることから、河川の氾濫によって洪水を被る可能性が低いと考えられ、疑問が生じる。また、台地一帯に堆積した火山灰が雨水によって流されたものと考えても、堆積物の中に土砂などの混入物が無いことが気にかかるところである。

更に「畝間状」という言葉について若干述べておく。すなわち、検出される溝が畝間であったとすれば、従来の見解では火山噴火後に洪水によって埋まった畠ということになろう。そして、放置されたことになる。しかし、その火山灰が人為的な撹乱を受けていることと、火山灰の堆積状況が洪水に起因するもので無いとすれば、「洪水性の火山灰によって埋まった畝間」としての説明について再考が必要になるかも知れない。さらに、この溝を畝間と考えた場合でも、畝間どうしの間隔が狭すぎることも疑問のひとつである。とりあえず、ここでは疑問が未解決のままであるために「畝間状遺構」の名称を用いている。しかし、人為的な撹乱がみられることから何らかの耕作痕跡とは考えられるが、畝間としての断定を躊躇させるものもある。

直交する畝間溝と溝の濃淡について

本遺跡では２・３・４・５号畝間状遺構において直交する畝間溝(以後、溝)が確認されている。重複する溝間には、切っているほう(新しい溝)のプランは、切られるほう(古い溝)のプランよりはっきりしているという傾向が認められた。直交する溝については、①地力の弱まりによる連作障害を避けるための天地返し(切り替え畠)、②火山灰降下後の災害復旧の際など、下位の火山灰を混ぜ込んで再び耕作土を作る場合に下位の土の偏在を防いだ(復旧畠)、等の解釈がなされている。また、溝間の濃淡の違いについては、耕作と休耕を繰り返した結果形成された痕跡とする解釈が示されている(東日本の水田跡を考える会　1998)。しかしながら、本遺跡では検出した時点で上部の耕作土が失われた状態であったため、これらの詳細は明らかではない。また、本遺跡では直行する二つの溝に堆積している火山灰は濃淡の差異こそあれ、ともに十和田ａ火山灰であることがわかっている。このことは、直交する二つの溝がともに「畝間」か「何らかの耕作痕跡」であるとすれば、十和田ａ火山灰の降下に若干の時間差を持った二時期があることになる。前者が降下火山灰で後者が洪水による水成堆積であったと考えれば理屈が合うが、水成堆積のメカニズムについては不明な点があることは前項で述べた。このことについては類例を待って再考したい。ここでは、本遺跡の畝間状遺構が、同じ場所で若干方向を変えながら何度も耕作が繰り返された様子を示すものと考えられ、このことから畠地とされる空間がある程度限定されていた可能性があることについてのみ指摘しておきたい。

分析結果

本遺跡では平安時代の畠でどんなものが栽培されていたかを調査する目的で４号、５号畝間状遺構の埋土のプラントオパール分析、花粉分析を行った。その結果、畝間の堆積物にわずかにイネ属の珪酸体が認められたが、検出されたイネ属がごく僅かであり、ムギ類、キビ類の珪酸体も認められなかった。種子・花粉分析についても同様で、結果として畠跡となるような裏付けは得られていない。

（５） 柱穴列

柱穴列はＩＣ６ｊとⅡＤ４ａグリッドに位置し、竪穴住居、土坑、畝間状遺構の集中するエリアで検出した。検出された２列の主軸はいずれも東―西方向で、60ｍほど離れて斜めに対峙するような形をとっている。1号柱穴列は埋土に3号畝間状遺構と同様の十和田ａ火山灰が堆積している。そのために畝間状遺構の完掘時まで気づかず、畝間状遺構との新旧関係を明らかにできなかった。しかしながら重複する2号・3号畝間遺構と１号柱穴列との位置関係を見てみると、２号畝間状遺構の分布と、その中央部を東西に縦断する柱穴の配列には何らかの相関関係があるものと推測される。

参考文献一覧

『赤城山麓における遺跡群研究』能登健・石坂茂・小島敦子・徳江秀夫「信濃」1983
『皀角子久保遺跡』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第129集　1988
『上鬼柳Ⅳ遺跡』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第160集　1992
『岩崎台地遺跡群』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第214集　1995
『岩手県における平安時代の防御性集落』
高橋與右衛門・室野秀文・本堂寿一「考古学ジャーナルNo.387」1995
『岩谷堂城跡』岩手県江刺市埋蔵文化財調査報告書第13集　1996
『後中野遺跡』岩手県江刺市埋蔵文化財調査報告書第14集　1996
『宮地遺跡』岩手県江刺市埋蔵文化財調査報告書第15集　1997
『畑の畝間と耕作痕について』佐藤甲二「人類史集報」1998
『青森県内で検出された「畠跡」について』木村鐵次郎
「青森県埋蔵文化財調査センター研究紀要第３号」1998
『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第311集　1999
『古代の畑状遺構について』及川洵・佐藤靖「岩手考古学第11号」1999

注

（注１）平成５・６年度発掘調査。情報は新聞報道等による。
参考文献「考古学ジャーナルNo.387」1995

（注２）畑状遺構については「岩手考古学第11号」1999に掲載されている。
本報告は1999年刊行予定である。

（注３）本報告は、砂子遺跡（2000）・畑内遺跡（2001）それぞれ刊行予定である。

遺物

1．縄文時代

（1） 縄文土器

縄文土器は、埋設土器を除いてすべて遺構外から出土した。小破片が多く、出土の状況も一括して廃棄されたようなもので、遺構に伴っていた形跡はない。出土した土器は、地文縄文の沈線文・磨消縄文・充填縄文により文様が施されるものがほとんどで、太い沈線によって大柄な磨消文様が描かれるのが特徴的である。この地方の後期初頭の土器は、上村式→韮久保式→蛍沢式というように変遷すると捉えられており(本間　1987、1988、金子　1995)、本遺跡の資料は土器の文様の特徴から蛍沢式に比定されるものと考えられる。蛍沢式期の資料は今まで県北地方の多くの遺跡で確認されており、二戸市長瀬Ａ遺跡の竪穴住居跡のほか、特に一戸町馬立Ⅰ、馬立Ⅱ遺跡で多くの竪穴住居跡とそれに伴う遺物が出土している。

なお、その他同地域の縄文時代後期初頭～前葉の土器については、二戸市寺久保遺跡報告書(岩手県埋蔵文化財センター　1996）が、「周辺の遺跡：縄文時代後期初頭」で詳しく触れているので参照されたい。

（4） 硬玉製大珠

硬玉製大珠は、1号埋設土器の埋土から２点見つかっている。５は楕円形の原石の形をそのまま生かして穿孔を行っている。穿孔方向は片面穿孔である。６は原石の形状に若干手を加えて整形し、穿孔を行っている。穿孔方向は片面穿孔である。

（5） 貝製品・その他

１号埋設土器の内部から貝製品が出土した。内訳は貝玉73点以上、臼玉３点である。

巻貝製小玉（第７図・写真図版24)

アマオブネガイの背面を穿孔したもので、断面形は半円状を呈する。貝の表面の筋(螺肋)が目立たず、磨耗しており、殻表面研磨の工程を経て穿孔されたものと思われる。

殻頂部は73個分残存する。出土の状況から埋設時の状況を読み取ることはできなかったが、小玉の形状から推測すると2個の巻貝の殻口部同士を合わせて1対とし、連珠状に紐で繋いで使用していた可能性が考えられる。(写真図版１参照)

臼玉（第７図・写真図版24)

合わせて３点が出土した。完全に残存するもの1点、2分割のもの１点、40％程度残存するもの１点である。断面には薄い層が何層にも重なって観察される。使用された素材は不明である。

その他（第７図・写真図版24)

1号埋設土器内部から貝製品であると思われる小片(９)が1点得られている。全体の形状は破片からは不明である。加工の痕跡が特に認められない為、素材であった可能性もある。

2．平安時代

平安時代の遺物には土師器、須恵器、鉄製品等がある。ここでは出土総数の大部分を占める土師器と須恵器について整理し、まとめとしたい。本遺跡の遺構内・遺構外から出土した土師器は破片数約163点、

須恵器は約12点で土師器が圧倒的多数を占めている。このうち復元実測できた遺物を器種別にみると土師器甕142点、坏14点、堝２点、鉢３点、小形鉢2点、須恵器大甕３点、甕６点、長頸壷３点である。本稿では大量に出土した土師器の坏・甕については分類を行い、その他の土師器と須恵器については特徴を述べるのみとする。分類にあたっては土師器・須恵器を主要な識別形式とし、これに器種・調整技法を付け加える形で行った。

（1） 土師器

〔甕〕

甕は製作に際してロクロが使用されているものとロクロを使用していないものとに大別される。以下では更に底部や体部内外面の調整技法によって分類を行った。器高については、破片が多く、全体の大きさがわかるものが少ないことから、主な識別項目としては扱わなかった。

(製作技法)

Ａ：製作に際してロクロを使用するもの　　Ｂ：製作に際してロクロを使用しないもの

(体部の調整技法)

１：上部ロクロ調整、下半部ケズリ調整されるもの

２：体部全体がロクロ調整されるもの

３：体部全体がケズリ調整されるもの

４：その他の調整技法を持つもの

〔坏〕

坏の製作に際してはいずれもロクロが使用されており、ロクロ不使用のものはない。ほとんどが小破片で全体の形状がわかるものは少ないが、底部の切り離しの技法、体部内面の調整技法に違いが認められることから一応分類を行う。

(底部の切り離し技法)

１．底部切り離し技法が回転糸切りで再調整が施されないもの

２．回転糸切り後手持ちヘラケズリにより再調整が行われるもの

３．底部を欠き、切り離し技法が不明であるもの

(体部内面の調整技法)

ａ：内面にミガキ・黒色処理が施されるもの

ｂ：ロクロ痕以外の調整を持たないもの

〔堝〕

堝は２点出土している。製作に際してはいずれも輪積み成形後、口縁部ヨコナデ、胴部ケズリ調整される。体部外面にはいずれも炭化物の付着が認められる。

〔鉢〕

３点出土している。製作に際してはいずれも輪積み後ロクロ調整が行われ、内面は丁寧なミガキ＋黒色処理が施される。器形により2つに大別できる

１．底部から口縁部にかけて緩やかに外傾するもの

２．体部から口頸部にかけて一旦内傾し、その後短く外反するもの

〔小形鉢〕

2点出土している。製作に際してはロクロは用いられず、口縁部ヨコナデ、体部ケズリ調整される。作り

はかなり粗雑で、体部外面に炭化物が付着するものもある。器形により２つに大別できる。

１．底部から急激に直線的に立ち上がるもの（浅鉢状のもの）

２．底部から口縁部にかけて緩やかに湾曲しながら立ち上がるもの（椀状のもの）

（２）須恵器

今回の調査で出土した須恵器のうち、図示したものは12個体である。そのうち甕は６点、大甕は３点、長頸壷は３点である。ほとんどは破片資料で、全体の器形の特徴などがわかるものはほとんどない。以下では各器種の特徴を述べるのみとする。

〔大甕〕

3点出土した。体部の破片資料のみで、全体の器形がわかるものはない。外面タタキ目、内面アテグ痕を持つ。外面のタタキ目は平行文が多く、内面はナデ調整されるものが多い。

〔甕〕

体部の破片が６点出土している。全体の器形がわかるものはない。外面はタタキ後ロクロ調整、内面はロクロ調整される。

〔長頸壷〕

口縁部の破片1点と体部の破片２点が出土している。全体の器形がわかるものはない。内外面ともにロクロナデ調整されるものと、ケズリ調整されるものがある。

（３）鉄製品・鉄滓

住居跡および土坑から１４点が出土した。18・29・67～70・87・109・115～116・157は竪穴住居跡の床面～埋土から出土した。168は9号土坑埋土からの出土である。18は刀子である。29はもとの形状が不明である。68は鉄鏃である。69は鉄鏃となる可能性がある。70は鉄滓である。87は装着式の手鎌で、木質の柄が良く残存する。柄の両端に刃部を取り付けた際の釘孔が穿たれている。109は鎌である。115は短刀である。116・157は鉄滓である。168はU字形農具の刃先である。

Ⅵ. おわりに

大向上平遺跡は平成9年・10年の2年間にわたる調査で、平安時代の10世紀中葉を主体とする集落遺跡であったことが明らかとなった。検出した遺構は、竪穴住居10棟、掘立柱建物1棟、土坑18基、畝間状遺構5群、柱穴列2列である。調査区が安比川の河岸段丘を細長くうねるような形であるため集落構成を知ることは難しいが、調査区中央部を空白地帯として南北に遺構の分布が見られ、特に北半部で竪穴住居跡が集中して検出された。検出した竪穴住居のカマドは北西壁に認められるものが多く、次いで北東壁、1号と４号竪穴住居のみ東～南東側に構築されている。カマドの造り替えが見られた３棟の住居(5号、8号、9号)からは、「煙道部」が「刳り貫き式」から「掘り込み式」へと変わっていく様子が看取された。柱穴配置は2種類ほど確認できた。住居埋土は10号竪穴住居跡を除きすべて自然堆積で、十和田ａ火山灰ブロックを全体に含んでいる。7号住居は上位に周辺の十和田ａ火山灰とは様相の異なる黄褐色火山灰ブロックの堆積が見られた。(白頭山火山灰か？)このことと住居の変遷から調査区内の住居の間にはいくつかの時期差が存在することが想定できる。また、複数の住居内から鉄滓が見つかっており、(3号、6号、7号)集落内で小鍛冶が行われていた可能性がある。

以上のことから本遺跡を調査区内に限定して考えれば、おおよそ10世紀前葉頃に営まれた畠作集落であると言うことができるかも知れない。しかしながら、今回発掘することのなかった自然堤防の南東側(現在の宅地および水田の部分)は発掘調査区より微かに低まっており、南側の山地の谷からの沢水がある程度供給できた立地にある。このことから、自然堤防上よりも水が容易に確保できたと考えられる谷地形のほうに水田が営まれていた可能性も否めず、また、そのような観点に立つならば同じように自然堤防の西側へりの部分には、これらの生産域に関係した居住域(住居)が更に広がっている可能性もあると推察される。これらのことから、現段階における本集落の性格付けは、発掘の行われた限られた範囲だけを見て単純に行われるべきではないと考えている。また、畠跡と推測される畝間状遺構が自然堤防上の複数の地点で重複して見つかったこと、それに近接するようにして竪穴住居が見つかったことは、当時の土地の空間利用や社会構造を推測する上で貴重な資料である。

Ⅶ. 鑑定・分析

1. 二戸市大向上平遺跡出土の硬玉製大珠について

藁 科 哲 男（京都大学原子炉実験所）

はじめに

玉類の観察は、一般的に肉眼観察で岩石の種類を決定し、それが真実のように思われているのが実態である。岩石製では玉類の原材料として硬玉、滑石、軟玉(角閃石)、蛇紋岩、結晶片岩、碧玉などが推測される。それぞれの岩石の命名定義に従って岩石名を決定するが、非破壊で命名定義を求めるには限度があり、若干の傷を覚悟しなければ硬度、光沢感、比重、結晶性、主成分組成を求めるなどで非破壊で命名の主定義の結晶構造、屈折率などを正確には求められない。原石名が決定されたのみでは考古学の資料としては不完全で、どこの産地の原石が使用されているかの産地分析が行われて初めて、考古学に寄与できる資料となる。遺跡から出土する勾玉、管玉など玉類の産地分析というのは、玉類の製品がどこの玉造遺跡で加工されたかということを調査するのではなくて、何箇所かあるヒスイ(硬玉・軟玉)とか碧玉の原産地のうち、どこの原産地の原石を使用しているかを明らかにするのが、玉類の原産地推定である。玉類の原石の産地を明らかにすることは考古学上重要な意味を持っている。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国、雲南、ビルマ説、発見後はもっぱら国内説で、岩石学的方法および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光X線分析で行う元素比法が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析で系統的に行った研究は蛍光X線分析法と電子スピン共鳴法を併用し産地分析より正確に行った例が報告されている。石鏃など石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。

（1）石器の原産地推定で明らかになる、遺跡から石材原産地までの移動、活動範囲は、石器は生活必需品であるため、生活上必要な生活圏と考えられる。

（2）玉類は古代人が生きるために必ずいるものではない。勾玉、管玉は権力の象徴、お祭り、お守り、占いの道具、アクセサリーとして、精神的な面に重要な作用を与えると考えられる。従って、玉類の産地分析で明らかになるヒスイ製玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を現わしているかも知れない。お祭り、お守り、占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏が考えられる。石器の原材産地分析で得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。

今回分析を行った玉類は岩手県二戸市似鳥大向上平85ほかに位置する大向上平遺跡出土の縄文時代中期の2個の大珠で産地分析結果が得られたので報告する。

非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組み合わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければ分からない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。

ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が行え

る方法でなければ発展しない。石器の原材産地分析で成功している非破壊で分析を行う蛍光X線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠、勾玉、玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。ヒスイ製玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をとり、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。碧玉製玉類はＥＳＲ法を併用するが試料を全く破壊することなく、碧玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から碧玉地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。

ヒスイの原産地

分析したヒスイ原石は、日本国内産では(１)新潟県糸魚川市と、それに隣接する同県西頸城郡青海町から産出する糸魚川産、(２)軟玉ヒスイと言われる北海道沙流郡日高町千栄の日高産、鳥取県八頭郡若桜町角谷の若桜産、(４)岡山県阿哲郡大佐町の大佐産、(５)長崎県長崎市三重町の長崎産であり、さらに(６)西黒田ヒスイと呼ばれている静岡県引佐郡引佐町の引佐産の原石、(７)兵庫県養父郡大屋町ｋらの原石、(８)北海道旭川市神居町の神居コタン産、(９)岐阜県大野郡丹生川村の飛騨産原石、また、肉眼的にヒスイに類似した原石で玉類等の原材になったのではないかと考えられる(10)長崎県西彼杵郡大瀬戸町雪浦からの原石である。国内産のヒスイ原産地は、これでほぼ尽くされていると思われる。これら原石の原産地を図１に示す。これに加えて外国産として、ミャンマー産の硬玉と台湾産軟玉および韓国、春川産軟玉などのヒスイのぶんせきも行われている。

ヒスイ試料の蛍光X線分析

ヒスイの主成分元素はナトリュウム(Na)、アルミニュウム(A1)、珪素(Si) などの軽元素で、次いで比較的含有量の多いカルシウム(Ca)、鉄(Fe)、ストロンチウム(Sr) である。また、ヒスイに微量含有されている、カリウム(K)、チタニウム(Ti)、クロム(Cr)、マンガン(Mn)、ルビジウム (Rb)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)、ニオビウム(Nb)、バリウム(Ba)、ランタニウム(La)、セリウム(Ce) の、各元素を分析した。主成分の珪素など軽元素の分析を行わないときには励起線源のX線が試料によって散乱されたピークを観測し、そのピークの大きさが主に試料の分析面積に比例することに注目し、そのピークを含有元素と同じく産地分析の指標として利用できる。ナトリュウム元素はヒスイ岩を構成するヒスイ輝石に含有される重要な元素で、出土した遺物が硬玉か否かを判定するには直接ヒスイ輝石を観測すればよい。しかし、ヒスイ輝石を非破壊で検出する方法が確立されるまでは、蛍光X線分析でNa元素を分析し間接的にヒスイ輝石の存在を推測する方法に頼るほかないのではなかろうか。各原産地の原石の中で、確実にNa元素の含有が確認されるヒスイ産地は糸魚川、大屋、若桜、大佐、神居コタン、長崎の各原産地の原石で、これらは硬玉に属すると思われる。Na元素の含有量が分析誤差範囲の産地は日高、引佐、飛騨の各産地の原石である。糸魚川産原石のうち緑色系の硬玉に、肉眼的に最も似た原石を産出する産地は他の硬玉産地よりも後述した日高、飛騨、引佐の原石に見られる。各原産地の原石の他の特徴を以下に記述する。若桜産のヒスイの原石はSrのピークがFeのピークに比べて相当大きく、またZrの隣に非常に小さなNbのピークが見られ、Baのピークも大きく、糸魚川産では見られないLa、Ceのピークが観測されている。このCeのピークは大佐産と長崎産ヒスイ原石のスペクトルにも見られ、これらCeを含有する原石の産地は、糸魚川の産地と区別するときに有効な判定基準になる。長崎産ヒスイは、Tiの含有量が多く、Yのピークが見られるのが特徴的である。日高産、引佐産、飛騨産ヒスイ原石は、CaピークにTiとかK、またFeピークに比べてSrなどのピークが小さいのが特徴で糸魚川産のものと区別するときの判定基準になる。

春川軟玉原石は、優白色の工芸加工性に優れた原石で、軟玉であるが、古代では勾玉などの原材料とな

った可能性も考えられることから分析を行った。この原石には、Sr、Zrのピークが全く見られないため、糸魚川産などのSr、Zrを含有する原石と容易に区別できる。また、長崎県雪浦のヒスイ類似岩をヒスイの代替品として勾玉、大珠などの原材料に使用している可能性が考えられ、分析を行った。この岩石は比重が2.91と小さく、比重でもって他の産地のものと区別できる。また、砒素(As)のピークが見られる個体が多いのも特徴である。

これら各原産地の原石は同じ産地の原石であっても、原石ごとに元素の含有量には異同がある。したがって、一つの原産地について多数の原石を分析し、各元素の含有量の変動の範囲を求めて、その産地の原石の特徴としなければならない。

糸魚川産のヒスイは、白色系が多いが、緑色系の半透明の良質のもの、青色系、コバルト系、およびこれらの色が白地に縞となって入っているものなど様々である。分析した糸魚川産原石の比重を調べると、硬玉の3.2～3.4の範囲のものと、3.2に達しない軟玉に分類される原石もある。若桜産、大佐産の分析した原石には、半透明の緑色のものはないが、全体が淡青緑かかった乳白色のような原石、また、大屋産は乳白色が多い。このうち大佐産、大屋産の原石では比重が3.20に達したものはなく、これらの原石は比重からは軟玉に分類される。しかし、ヒスイ輝石の含有量が少ない硬玉とも考えられる。長崎産のヒスイ原石は３個しか分析できなかったが良質である。このうち1個は濃い緑色で、他の2個は淡い緑色で、少しガラス質である。日高産ヒスイの原石は肉眼観察では比較的糸魚川産のヒスイに似ている。ミャンマー産のヒスイ原石は、質、種類とも糸魚川産のヒスイ原石と同じものが見られ、肉眼では両産地の原石を区別することは不可能と考えられる。分析した台湾産のヒスイは軟玉に属するもので、暗緑色のガラス質な原石である。これら各原産地の原石の分析結果から各産地を区別する判断基準を引き出し、産地分析の指標とする。

ヒスイ原産地の判別基準

原石産地の判定を行うときの判断基準を原石の分析データーから引き出すが、分析個数が少ないため、必ずしもその原産地の特徴を十分に反映したといえない産地もある。表１－１、２に各原産地ごとの原石の比重と元素比重をまとめた。元素比重の数値は、その原産地の分析した原石の中での最小値と最大値の範囲を示し、判定基準(１)とした。ヒスイで比重が3.19未満の軽い原石は、硬玉ヒスイではない可能性があるが、糸魚川産の原石で比重が3.19未満のものも分析を行った。大佐産のヒスイは比重が3.17未満であった。したがって、遺物の比重が3.3以上を示す場合は判定基準(１)により大佐産のヒスイでないと言える。日高産、引佐産の両ヒスイではＳｒ／Ｆｅの比の値が小さくて、糸魚川産と区別する判定基準(１)になる。表１の判定基準(２)にはCr、Mn、Rb、Y、Nb、Ba、La、Ceの各元素の蛍光Ｘ線ピークが観測できた個体数を％で示した表である。例えば遺物を分析してBaのピークが観測されなかったとき、その遺物は、若桜、大佐、長崎産のヒスイでないといえる。

図２はヒスイ原石のSr／Feの比の値とSr／Zrの比の値の分布を各原産地ごとにまとめて分布範囲を示したものである。●は糸魚川産のヒスイで、分布の範囲を実線で囲み、この枠内に遺物の測定点が入れば糸魚川産の原石である可能性が高いと判断する。□はミャンマー産のヒスイの分布で、その範囲を短い破線で囲む。糸魚川産の実線の範囲とミャンマーの破線の範囲の大部分は重なり両者は区別できないが、ミャンマーと糸魚川が区別される部分がSr／Feの値(横軸)2.5以上の範囲で見られる。この範囲の中に、遺物の測定点が入ればミャンマー産と考えるより、糸魚川産である可能性のほうが高いと考えられる。▲は大佐産の、△は若桜産の、▽は大屋産のヒスイの分布を示している。

糸魚川と大佐、若桜、大屋のヒスイが重なる部分に遺物の測定店が入った場合、これら複数の原産地を考えなければならない。しかし、この遺物にBaの蛍光Ｘ線スペクトルのピークが見られなかった場合、表

１－２の判定基準(２)に従えば糸魚川産または大屋産のヒスイであると判定でき、その遺物の比重が3.2以上あれば大屋産でなくて、糸魚川産と推定される。■は長崎産ヒスイの分布で、独立した分布の範囲を持っていて他の産地のヒスイと容易に区別できる。台湾産の軟玉はグラフの左下に外れる。★印の日高産および＊印の引佐産ヒスイの分布の一部分が、糸魚川産と重なり区別されない範囲がみられる。しかし、Ca ／Si比とSr／Fe比を指標とすることにより(図３)、糸魚川産ヒスイは日高産および引佐産の両ヒスイと区別することができる。Na／Si比とMg／Si比を各原産地の原石について分布を示すことにより(図４)、遺物がどこの原産地の分布内に帰属するかにより、硬玉か軟玉かの判別の手段の一つになると考えられる。

大向上平遺跡出土の大珠の分析結果

これら大珠の比重は3.3以上(アルキメデス法)で、硬玉の可能性の範囲に入り、大珠の蛍光Ｘ線スペクトル(図８、９)には硬玉の主成分の一つのＮａ元素が観測されることから、これら玉類を硬玉と測定しても矛盾しない。これら玉類の原石産地を明らかにするために、K／Ca、Ti／Ca、Sr／Fe、Zr／Sr、Ca／Si、Na／Si、Mg／Siなどの各比値を求め表２に示した。これら分析値を各原産地の原石の元素比重Sr／Fe対Zr／Srの分布範囲と比較すると、すべての大珠は糸魚川産の範囲に入り、遺物番号２(№ 59915) は大屋産の範囲にも入り、入った原石産地のヒスイの可能性を示す結果を図５に示す。また、Sr／Fe対Ca／Siでも糸魚川産の範囲に入り、遺物番号１(№ 59914)若桜産の原石の重なる範囲にも入っている(図６)。また、Na／Si対Mg／Siでは両大珠ともに糸魚川産原石の範囲および若桜、神居コタン産の原石範囲に入っている(図７)。この大珠の蛍光Ｘ線スペクトルではＢａ元素が観測されないことから若桜、大佐、長崎産の原石の可能性を考える必要は無く、また、比重などヒスイ製遺物の判定基準(１)、(２)を参考に丸玉の原石産地を推測すると、判定のすべての条件を満たす原石産地は糸魚川原産地のみであることから、これら大珠には糸魚川地域産軟玉が使用されていると推測した(表４)。

結論

今回分析した大向上平遺跡出土の縄文時代後期の大珠2個には糸魚川産ヒスイの使用が確認された。ヒスイは日本各地の遺跡で縄文時代、弥生時代に使用され、これら遺跡では糸魚川産ヒスイが尊重される共通の基盤を持っていたと思われ、糸魚川産地から遠くなるにしたがって、希少価値が増すと推測され本遺跡がヒスイの玉類を入手できる力(経済力)が大きかったことが推測される(図１)。

参考文献

１）茅原一也（1964)、長者ヶ原遺跡産のヒスイ（翡翠）について（概報)。長者ヶ原、新潟県糸魚川市教育委員会：63－73

２）藁科哲男・東村武信（1987)、ヒスイの産地分析。富山市考古資料館紀要　６：１－18

３）藁科哲男・東村武信（1990)、奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析。橿原考古学研究所紀要『考古学論考』，14：95－109

４）藁科哲男・東村武信（1983)、石器原材の産地分析。考古学と自然科学，16：59－89

５）Tetsuo Warashina (1992), Alloction of Jasper Archeological Implements By Means of ESR and XRF. Journal of Archaeological Science 19：357－373

６）番場猛夫（1967)、北海道日高産軟玉ヒスイ。調査研究報告会講演要旨録　』18：11－15

７）河野義礼（1939)、本邦における翡翠の新産出及び其科学的性質。岩石礦物鉱床学雑誌22：195－201

表１－１　ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準(1)

原産地名	分析個数	蛍光X線法による元素比の範囲					
		比重	K/Ca	Ti/Ca	Sr/Fe	Zr/Sr	Ca/Si
糸魚川産	41	3.00～3.35	0.01～0.17	0.01～0.56	0.15～30	0.00～2.94	0.72～27.6
若桜産	12	3.12～3.29	0.01～0.91	0.03～0.59	3.45～47	0.00～0.25	4.33～48.4
大佐産	20	2.85～3.17	0.01～0.07	0.00～1.01	3.18～61	0.00～12.4	3.47～28.6
長崎産	3	3.16～3.23	0.01～0.14	0.17～0.33	0.02～0.06	4.30～16.0	
日高産	22	2.98～3.29	0.00～0.01	0.00～0.02	0.00～0.37	0.00～0.063	5.92～51.6
引佐産	8	3.15～3.36	0.04～0.04	0.00～0.03	0.03～0.33	0.00～0.018	36.3～65.9
大屋産	18	2.96～3.19	0.03～0.08	0.04～0.16	1.08～79	0.02～0.48	0.95～4.81
神居コタン産	9	2.95～3.19	0.02～0.49	0.09～0.17	0.04～0.22	0.12～0.85	2.22～17.3
飛騨産	40	2.85～3.15	0.01～0.04	0.00～0.00	0.02～0.10	0.00～1.24	12.7～28.5
ミャンマ産	26	3.15～3.36	0.02～0.14	0.01～0.26	0.09～2.5	0.01～23	
台湾産	1	3.00	0.003	ND	ND	ND	

ND：検出限界以下の濃度

表１－２　ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準(2)

原産地名	蛍光X線法による分析元素（かく元素が確認できた固体数の百分率）							
	Cr	Mn	Rb	Y	Nb	Ba	La	Ce
糸魚川産	26%	6%	20%	ND	13%	33%	ND	ND
若桜産	ND	ND	16%	ND	100%	100%	67%	67%
大佐産	ND	ND	44%	ND	33%	100%	67%	67%
長崎産	ND	ND	ND	100%	100%	100%	100%	100%
日高産	tr	tr	ND	ND	ND	tr	ND	ND
引佐産	88%	75%	ND	ND	ND	ND	ND	ND
大屋産	tr	ND	31%	ND	6%	90%	100%	100%
神居コタン産	ND	100%	22%	100%	ND	55%	ND	ND
飛騨産	100%	100%	ND	ND	ND	ND	ND	ND
ミャンマ産	13%	4%	ND	ND	ND	35%	ND	ND
台湾産	tr	tr	ND	ND	ND	ND	ND	ND

ND：検出限界以下　　tr：検出確認

表２－１　大向上平遺跡出土の硬玉大珠の元素分析値の比量と比重

遺物番号	分析番号	元素分析値の比量									
		Na/Si	Mg/Si	Al/Si	K/Ca	Ca/Si	Ti/Ca	Cr/Fe	Mn/Fe	Ni/Fe	Sr/Fe
1	59914	0.151	0.421	0.14	0.00	8.598	0.03	0.014	0.006	0.016	2.012
2	59915	0.149	0.355	0.14	0.01	8.186	0.01	0.015	0.020	0.020	0.707
	JG－1	0.001	0.030	0.06	1.25	4.840	0.27	0.002	0.022	0.000	0.378

表２－２　大向上平遺跡出土の硬玉大珠の元素分析値の比量と比重

遺物番号	分析番号	元素分析値の比量					試料比重	試料重量(gr)	遺物種類
		Zr/Sr	Nb/Sr	Ba/Sr	Rb/Sr	Y/Sr			
1	59914	0.170	0.00	0.00	0.02	0.00	3.314	36.23116	大珠
2	59915	0.075	0.00	0.20	0.01	0.00	3.320	30.69575	大珠
	JG－1	0.790	0.05	5.53	0.77	0.16			

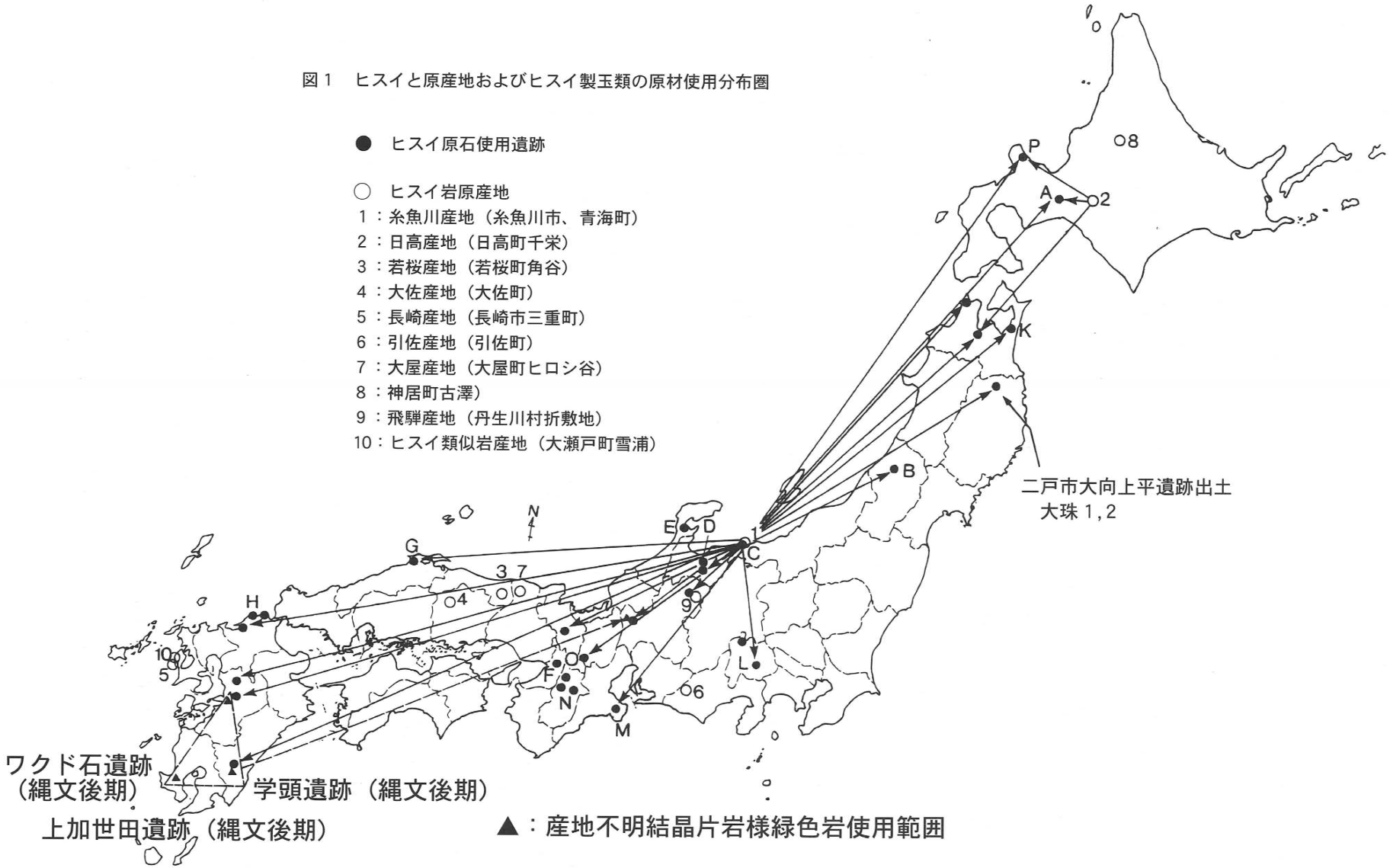
JG－１：標準試料、Ando, A., Kurasawa, T. &Takeda, E. (1974).
1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG－1 granodiorite and JB－1 basalt. Geochemical Journal, Vol.8 175－192.

表３　大向上平遺跡出土の硬玉大珠の原石産地分析結果

遺物番号	分析番号	各分類基準による判定					原材産地総合判定	遺物種類
		図５判定	図６判定	図７判定	比重&基準(2)	Ni/Fe判定[a]		
1	59914	IT, OY	IT, WK	IT,KM,WK	IT, IN		糸魚川産	大珠
2	59915	IT	IT	IT,KM,WK	IT, IN		糸魚川産	大珠

IT：糸魚川　WK：若桜　OS：大佐　NG：長崎　HK：日高　IN：引佐　OY：大屋
KM：神居コタン　HD：飛騨
a)：（飛騨産原石、42個の平均値±標準偏差）Ni/Fe=0.091±0.030
（日高産原石、14個の平均値±標準偏差）Ni/Fe=0.065±0.028

図１　ヒスイと原産地およびヒスイ製玉類の原材使用分布圏



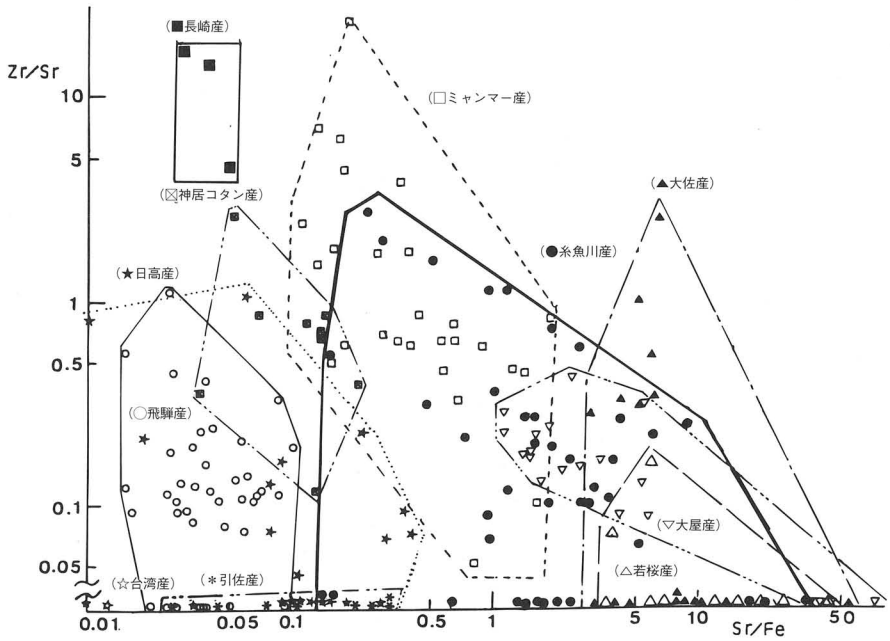


図２　ヒスイ原石の元素比値Zr/Sr対Sr/Feの分布および分布圏

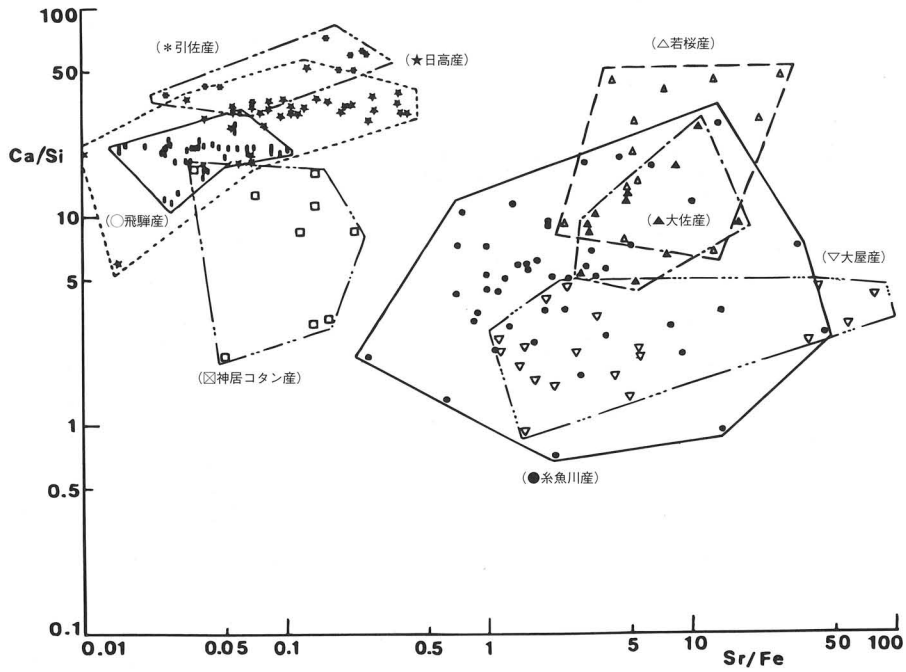


図３　ヒスイ原石の元素比値Ｃａ/Ｓｉ対Sr/Feの分布および分布圏

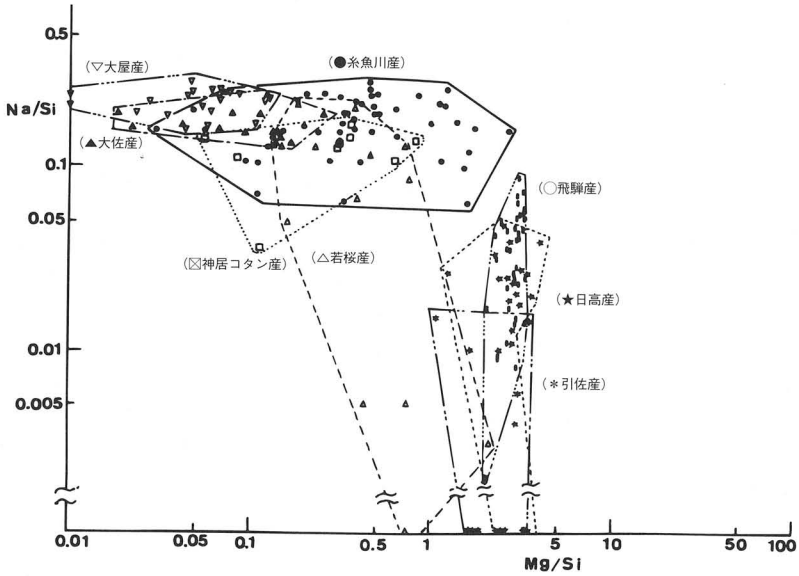


図４　ヒスイ原石の元素比値Na/Si対Mg/Siの分布および分布圏

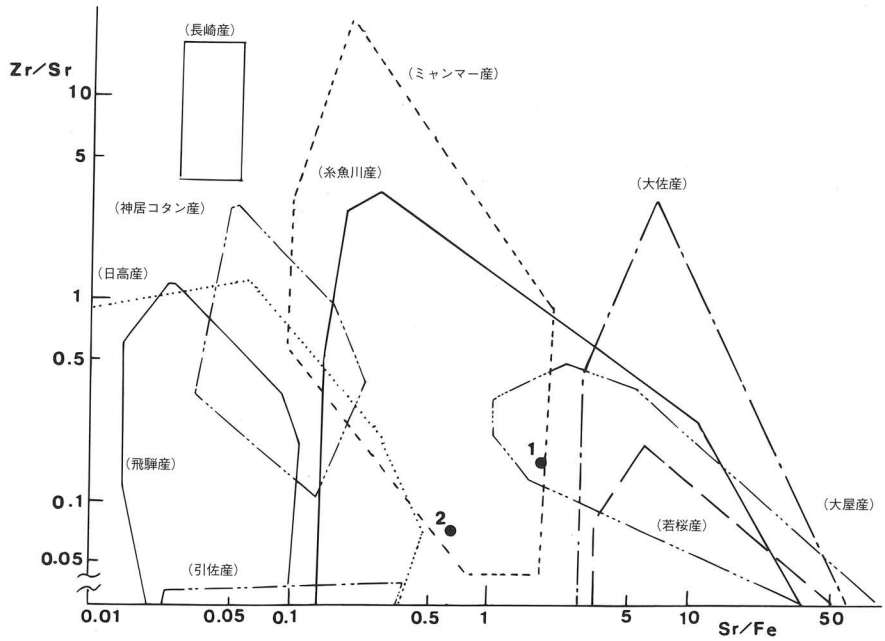


図５　大向上平遺跡出土大珠のZr/Sr対Feの分布

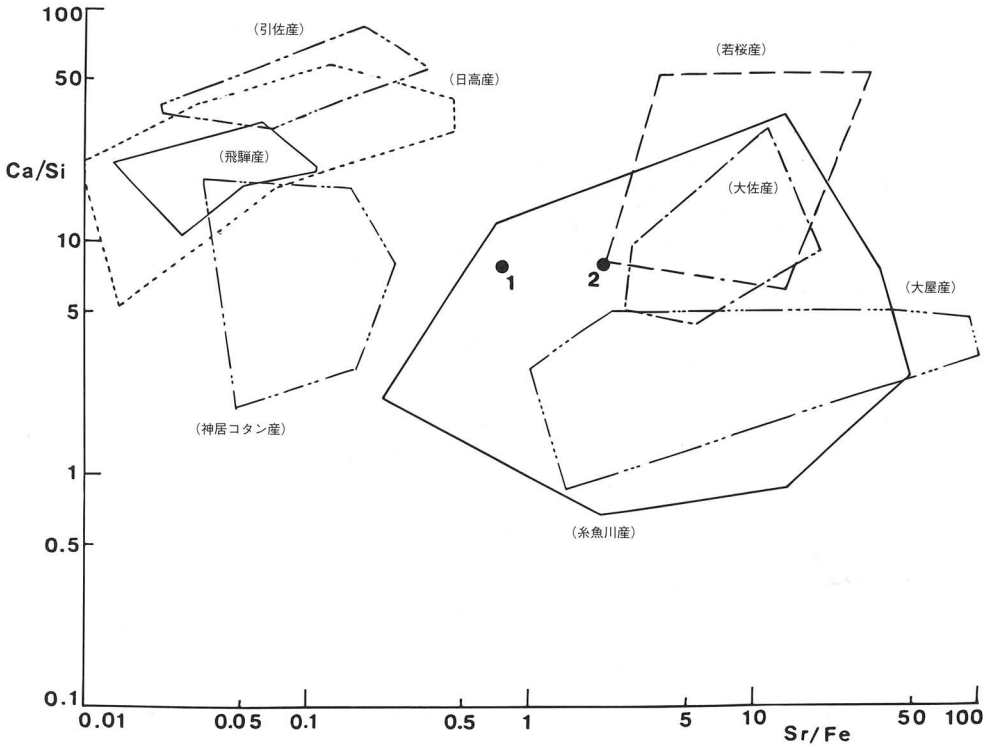


図6　大向上平遺跡出土大珠のCa/Si 対Sr/Feの分布

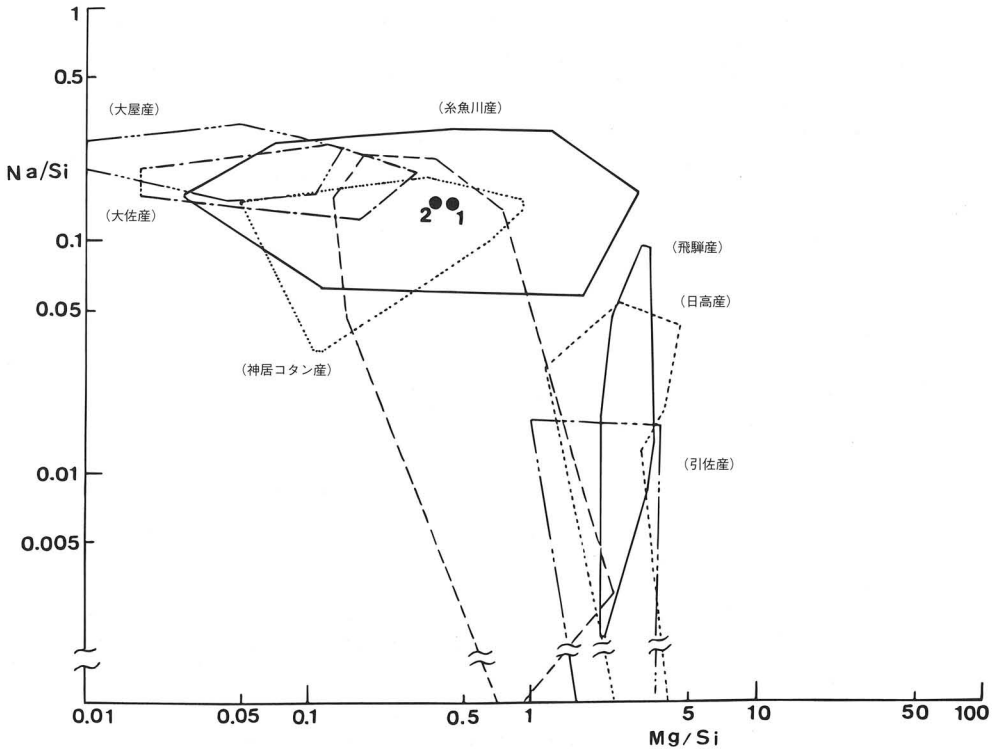


図7　大向上平遺跡出土大麻のNa/Si 対Mg/Si の分布

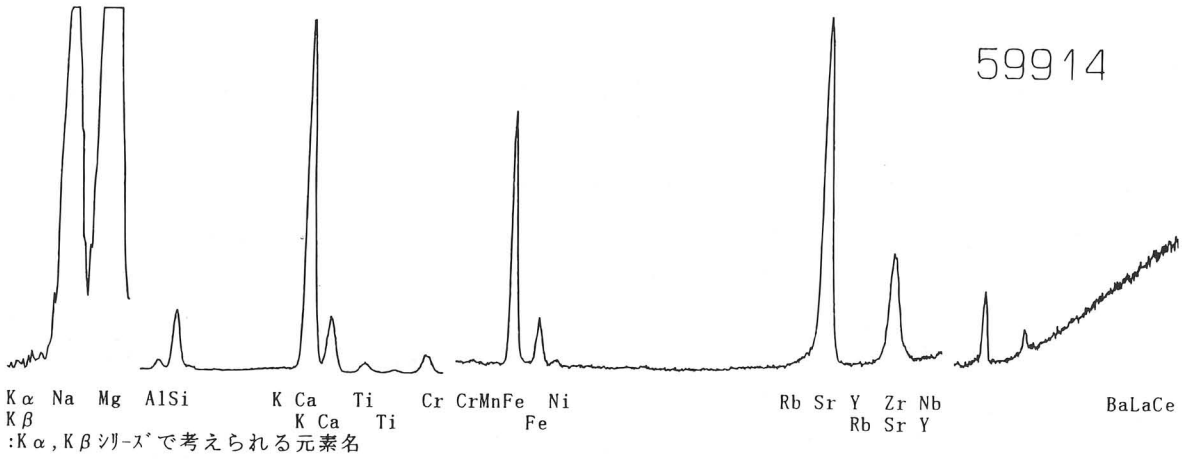


図８　大向上平遺跡出土大珠、１(59914) の蛍光Ｘ線スペクトル

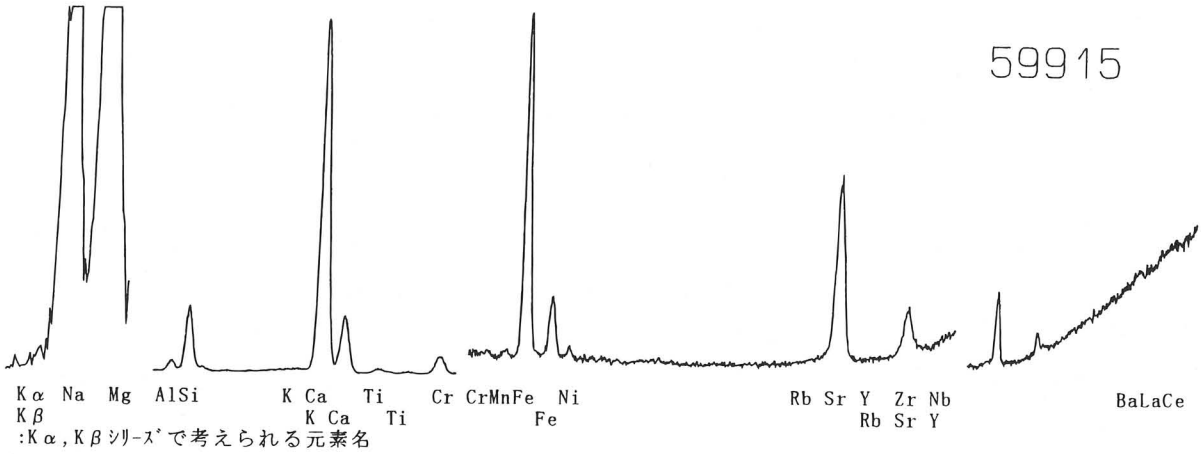


図９　大向上平遺跡出土大珠、２(59915) の蛍光Ｘ線スペクトル

平安時代の畑地跡に関する自然科学分析調査報告

はじめに

二戸市大向上平遺跡は安比川右岸の河岸段丘上（標高137～140m）に立地する。本遺跡が立地する段丘面と安比川との比高は約20mを測る。

本遺跡では、これまでの発掘調査により縄文時代後期および平安時代の遺構・遺物が確認されている。とくに平安時代（10世紀中葉～後葉）の集落跡が主体の遺跡と考えられている。平安時代の遺構として、住居跡のほか、数条の溝がほぼ並列する遺構も検出されている。この溝状遺構は軽米町皀角子久保遺跡（財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、1988）や北上市上鬼柳遺跡（財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、1992）などの調査事例などから畑地跡と考えられている。畑地跡の上層や溝状遺構覆土には、火山灰がブロック状に堆積している状況が認められている。

今回の自然科学分析調査では、畑地跡の構築時期に関する資料を得るために、溝状遺構覆土に認められた火山灰の指標テフラを確認するためにテフラ分析を行う。また、畑地跡で栽培されていた作物に関する資料を得るために花粉分析・植物珪酸体分析・種実分析を実施する。

1．発掘調査区の層序

発掘調査区の基本土層はⅠ層～Ⅶ層に分層されている。最下部のⅦ層は明黄褐色砂、Ⅵ層は褐色シルト、Ⅴ層・Ⅳ層・Ⅲ層は中振軽石を含む暗褐色土、Ⅱ層は黒色土、Ⅰ層は現耕作土の黒褐色土である。このうち、Ⅲ層では縄文時代後期の埋設土器や平安時代の竪穴住居跡など、Ⅱ層では畑地跡とされる数条の溝状遺構、Ⅰ層下部では十和田aテフラあるいは白頭山起源と考えられる火山灰ブロックが検出されている。

2．試料

試料は、１号溝状および３号溝状遺構に認められた火山灰、４号溝状遺構から一括採取された土壌試料、溝状遺構が検出された調査区西北壁土層断面（A-A’セクション面）から採取した土壌試料である。A-A’セクション面では、基本土層のⅡ層を掘り下げた時点で溝状遺構が確認された。溝状遺構の覆土は岩質や色調・混入物などから３層・４層・５層と分層されている。５層は火山灰ブロックである。畑地跡はⅡ層覆われており、その上位はⅠ層であり、現代の畑作土である。試料は、溝状遺構覆土と溝間の堆積物から面的に合計20点を採取した（図１）。この中から、植物珪酸体の分布を調べるために８点を選択した。また、４号溝状遺構から一括採取された土壌試料については、種実遺体の検出を試みるために種子水洗選別同定を実施する。さらに１号溝状遺構・３号溝状遺構から採取された火山灰については、指標テフラを確認するためにテフラ分析を実施する。（表１）。

表１　分析試料および分析項目一覧表

遺構名	試料番号	T	P	S	PO
１号溝状遺構	白頭山サンプルNo.6	●			
３号溝状遺構	南側To-a分布域	●			
４号溝状遺構	種子洗い出し用		●	●	
畑作跡	２：２層				●
	３：溝覆土				●
	４：溝間				●
	５：溝間				●
	６：溝覆土				●
	８：溝間				●
	９：溝間				●
	12：２層				●
		2	1	1	8

●は分析試料、Tはテフラ分析(屈折率測定を含む)、Pは花粉分析、Sは種実分析、POは植物珪酸体分析

3．分析方法

(1) テフラ分析

試料は、適量を蒸発皿に取り、泥水にした状態で超音波洗浄装置により分散、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂を実体顕微鏡下で観察、スコリア・火山ガラス・軽石の特徴や含まれる量の多少を定性的に調べる。

また、テフラの識別のために火山ガラスの屈折率も測定する。測定は、古澤（1995）の温度変化型屈折率測定装置（MAIOT)を用いて行う。

(2) 花粉分析

試料を湿重で約10g秤量し、水酸化カリウム処理、篩別（250μm)、重液分離(臭化亜鉛、比重2.3)、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理、(無水酢散：濃硫酸=9：1）の順に物理・科学的な処理を施して花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数を行う。結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。なお、表中で複数の種類をハイフォン(－)で結んだものは種類間の区別が困難なものを示す。

(3) 植物珪酸体分析

湿重５g前後の試料について過酸化水素・塩酸処理、超音波処理（70W、250KHz ,1分間)、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・科学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬(1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。

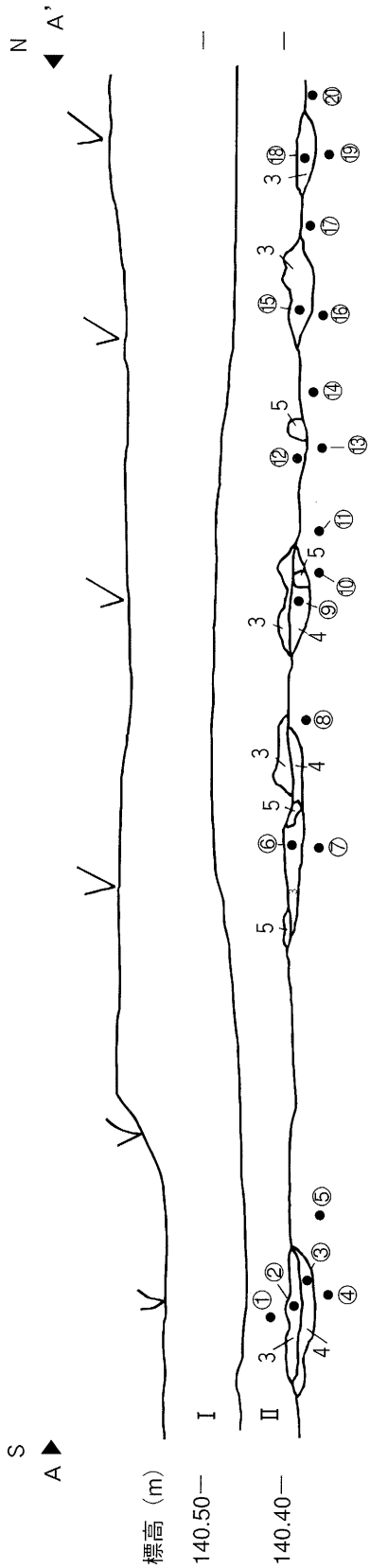


図１　畝間の試料採取位置（４号畝間状遺構）
Ⅰ・Ⅱ・３～５は土層番号、●は試料採取位置、
①～⑳は試料番号を示す。

(4) 種実分析

土壌試料約200ccを乾燥し、0.5㎜の篩を通して残渣を集める。双眼実体顕微鏡下で観察し、種実遺体を抽出・同定する。

4．結果

(1) テフラの産状

・1号溝状遺構

軽石が中量含まれ、細砂～極細砂径の火山ガラスが多量に含まれる。軽石は最大径約2.5㎜、白色または淡褐色を呈し、発泡は良好である。軽石の中には発泡により引き伸ばされた繊維束状のものもある。この繊維束状の軽石の中には淡緑色を呈するものもある。

火山ガラスは細かく発泡した軽石型が多く、これに薄手平板状のバブル型が混在する。バブル型火山ガラスの中には、淡褐色を帯びたものがきわめて微量認められる。

軽石と火山ガラスの他には、径1～2㎜の黒曜石片と灰色の岩片、斜方輝石、単斜輝石、斜長石の鉱物片が認められた。

・3号溝状遺構

軽石が多量含まれ、細砂～極細砂径の火山ガラスが多量に含まれる。軽石は、最大径約3.5㎜白色のものが多く、淡褐色を呈するものがわずかに含まれる。それ以外の特徴は、上記の1号溝状遺構と全く同様である。

(2) 花粉化石の産状

結果を表2に示す。検出される花粉化石は、保存状態が著しく悪く、外膜が溶けて薄くなっていたり、壊れている。

また、検出される種類数も少なく、木本花粉がマツ属・スギ属・サワグルミ属－クルミ属・ハンノキ属・ブナ属・ニレ属－ケヤキ属の6種類、草本花粉がイネ科・カヤツリグサ科・アカザ科・ヨモギ属・キク亜科・タンポポ亜科の6種類、シダ類胞子の合計13種類である。

表2　5号溝状遺構の花粉分析結果

種　類 ＼ 試料名	砂質土（種実用）
木本花粉	
マツ属	3
スギ属	2
サワグルミ属-クルミ属	2
ハンノキ属	2
ブナ属	1
ニレ属-ケヤキ属	1
草本花粉	
イネ科	3
カヤツリグサ科	1
アカザ科	1
ヨモギ属	38
キク亜科	15
タンポポ亜科	1
シダ類胞子	
シダ類胞子	77
合　計	
木本花粉	11
草本花粉	59
シダ類胞子	77
総計(不明を除く)	147

(3) 植物珪酸体の産状

結果を表3に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態の悪いものが多く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。また、試料番号4・9を除いて、検出個数も少ない。そのため、今回の産状から求めた植物珪酸体組成は歪曲されているおそれがあり、今回は結果を検出された種類とその検出個数の一覧表で示すにとどめる。

溝覆土の試料番号3・6、および溝内の3層より採取された試料番号2ではヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族などが見られ、ヨシ属とウシクサ族の産出が目立つ。

溝間の堆積物である試料番号4・5・8・9でも同様な種類が認められ、ヨシ属とウシクサ族の産出が目立つ。また、試料番号5では栽培植物であるイネ属の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体がわずかに認められる。

畑作跡を覆う2層より採取された試料番号12では、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族などが見られる。

表３　畑地跡の植物珪酸体分析結果

種　　類　　試料番号 採取位置	2 ３層	3 溝覆土	4 溝間	5 溝間	6 溝覆土	8 溝間	9 溝間	12 ２層
イネ科葉部短細胞珪酸体								
イネ科	−	−	−	1	−	−	−	−
タケ亜科	2	1	3	−	2	1	3	−
ヨシ属	5	4	80	15	11	10	104	20
ウシクサ族ススキ属	13	2	32	5	6	12	38	13
イチゴツナギ亜科	1	−	2	1	2	1	3	1
不明キビ型	17	5	59	19	10	10	42	21
不明ヒゲシバ型	5	1	33	2	1	−	18	11
不明ダンチク型	5	5	36	8	10	1	11	3
イネ科葉身機動細胞珪酸体								
イネ属	−	−	−	1	−	−	−	−
タケ亜科	1	−	7	5	7	4	16	3
ヨシ属	2	2	39	6	24	5	31	3
ウシクサ族	13	6	37	12	15	12	43	5
不明	11	6	29	21	25	11	47	4
合　　計								
イネ科葉部短細胞珪酸体	48	18	245	51	42	35	219	69
イネ科葉身機動細胞珪酸体	27	14	112	45	71	32	137	15
総　　計	75	32	357	96	113	67	356	84

(4) 種実用試料の検鏡結果

５号溝状遺構の岩質は砂質土であるが、本試料中からは種実遺体が全く認められず、軽石粒子や砂粒子、岩片が認められる。

5．考　察

(1) 遺構の構築年代

１号溝状遺構・３号溝状遺構で見られた火山灰は、ほぼ同様の特徴を有することから、同一のテフラに由来する。試料が採取された層位と遺跡の地理的位置から、十和田ａテフラ(To-a) または白頭山苫小牧テフラ(B-Tm) のいずれかに対比される。

To-aは十和田カルデラを給源とし、考古学的資料および文献史料などから平安時代のA.D. 915年に噴出したと考えられている（町田ほか、1984)。B-Tmは中国と北朝鮮の国境にある白頭山を給源とし、To-aの噴火より数十年後に噴出したと考えられている（町田・新井、1992)。町田ほか(1981) の記載にしたがえば、軽石を含むこと、軽石型火山ガラスに富むことから、２つの遺構で採取された火山灰の主体はいずれもTo-aであると考えられる。

ところで、前述のように観察した火山ガラスの中にはバブル型火山ガラスも混在した。B-Tmの特徴としてバブル型火山ガラスを含むことから、B-Tmの火山ガラスの混入も想定される。そのため、火山ガラスの屈折率を測定した。To-a とB−Tmの火山ガラスは屈折率によって比較的明瞭に区別され、町田・新井(1992) の記載ではTo-aはn1.496～1.504、B-Tmはn1.511～1.522という値を示す。測定の結果、バブル型火山ガラスの中には上記のB-Tmの値と同様の値を示すものが混在していた。両テフラの降灰年代が近接していること、どちらのテフラも細粒であること、さらに人為のおよぶ時代と場所であったことなどから、To-a堆積物にB-Tmに由来する火山ガラスが混入したと考えられる。

(2) 栽培植物の種類

今回の分析調査では、畑地跡から層位的および平面的に土壌試料を採取して栽培植物の痕跡を検討した。その結果、溝状遺構覆土および３層では栽培植物は認められなかったが、溝間の堆積物では、試料

番号５にイネ属の短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体が１個ずつ認められた。今回の植物珪酸体の産状を見る限りでは、イネ属が１個体ずつであること、ムギ類やキビ類などの植物珪酸体が認められなかったことから、畑地跡における栽培植物に関する資料を得ることは困難である。発掘調査の結果、溝状遺構の重複関係が見られることから、畑作は繰返し行われていたことがうかがえる。検出されたイネ属は栽培されたもの、あるいは現在の畑作地にも見られるように保温・保湿のための敷藁などに利用されたものかもしれないが、今回の産状からは判別が難しい。

なお、４号溝状遺構の砂質土中には種実遺体が全く認められず、軽石粒子などが見られた。また、検出された花粉化石には栽培植物を含む分類群がほとんど認められなかったが、保存状態が著しく悪い。このような種実遺体や花粉化石の産状を見る限り、４号溝状遺構で栽培されていた作物に関しても、自然科学分析調査結果からは現段階で不明である。

今回と同様な溝状遺構は軽米皀子久保遺跡などでも確認されており、皀角子久保遺跡ではイネ・オオムギ類の栽培が推測されている（古環境研究所、1988：パリノ・サーヴェイ株式会社、1988）。さらに北上市上鬼柳Ⅳ遺跡でも同様の成果が得られている（パリノ・サーヴェイ株式会社、1992）

今回分析を行った畑地跡では、イネなどのイネ科作物の存在は明確にならなかった。畑地跡の栽培植物に関する自然科学分析を応用した調査事例は本遺跡周辺地域では少ないために、今後同時期の畑地跡が発掘調査された時に同様な分析調査を実施し、分析調査事例を蓄積することにより今回の結果を改めて検討することが課題として残される。

ところで、４号溝状遺構覆土を対象として花粉分析を行った。花粉化石は種類により風化に対する抵抗性が異なっていることが知られている。分析調査で検出された花粉化石の保存状態は著しく悪いために、得られた花粉化石群集は統計的に歪曲していると考えられ、当時の植生を充分に反映していると言い難い。しかし、遺構周辺には少なくとも検出されたヨモギ属、キク亜科などが生育していた可能性が考えられる。また、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族などのイネ科の生育もうかがえる。とくにヨシ属は湿潤な場所に生育する種類である。発掘調査区は日通内沢の谷口付近に位置する。ヨシ属の産状を考慮すれば、畑作が行われる以前に水の影響を受けていた可能性も考えられる。また、花粉化石は有機膜で構成されているために、空気中の酸素に曝されやすい好気的な条件下では分解しやすい。そのため、検出された花粉化石の保存状態が悪いこと、さらに畑作では好気的な条件下で作物が栽培されることから、土壌微生物の影響や化学的な風化作用により遺構内に混入した花粉化石も分解・消失したと思われる。これらの点は、珪藻分析により検証する必要があろう。

図版１　軽石

１.To－a軽石（1号溝状遺構）　2mm

２.To－a軽石（3号溝状遺構）　2mm

引用文献

古澤　明（1995）火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別、地質学雑誌、101、p. 123－133

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(1988) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第129集「皀角子久保Ⅳ遺跡跡発掘調査報告書　一般国道340号改良工事関連発掘調査」. 180p

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(1992) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第160集「上鬼柳Ⅳ遺跡発掘調査報告書　東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡跡発掘調査」. 266p

古環境研究所(1988) 岩手県軽米町皀角子久保Ⅳ遺跡.岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第129集「皀角子久保Ⅳ遺跡発掘調査報告書　一般国道340号改良工事関連発掘調査」. p.116－128. 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

近藤錬三・佐藤　隆（1986）植物珪酸体分析、その特性と応用. 第四紀研究、25、p. 31－64

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス. 276p.、東京大学出版会.

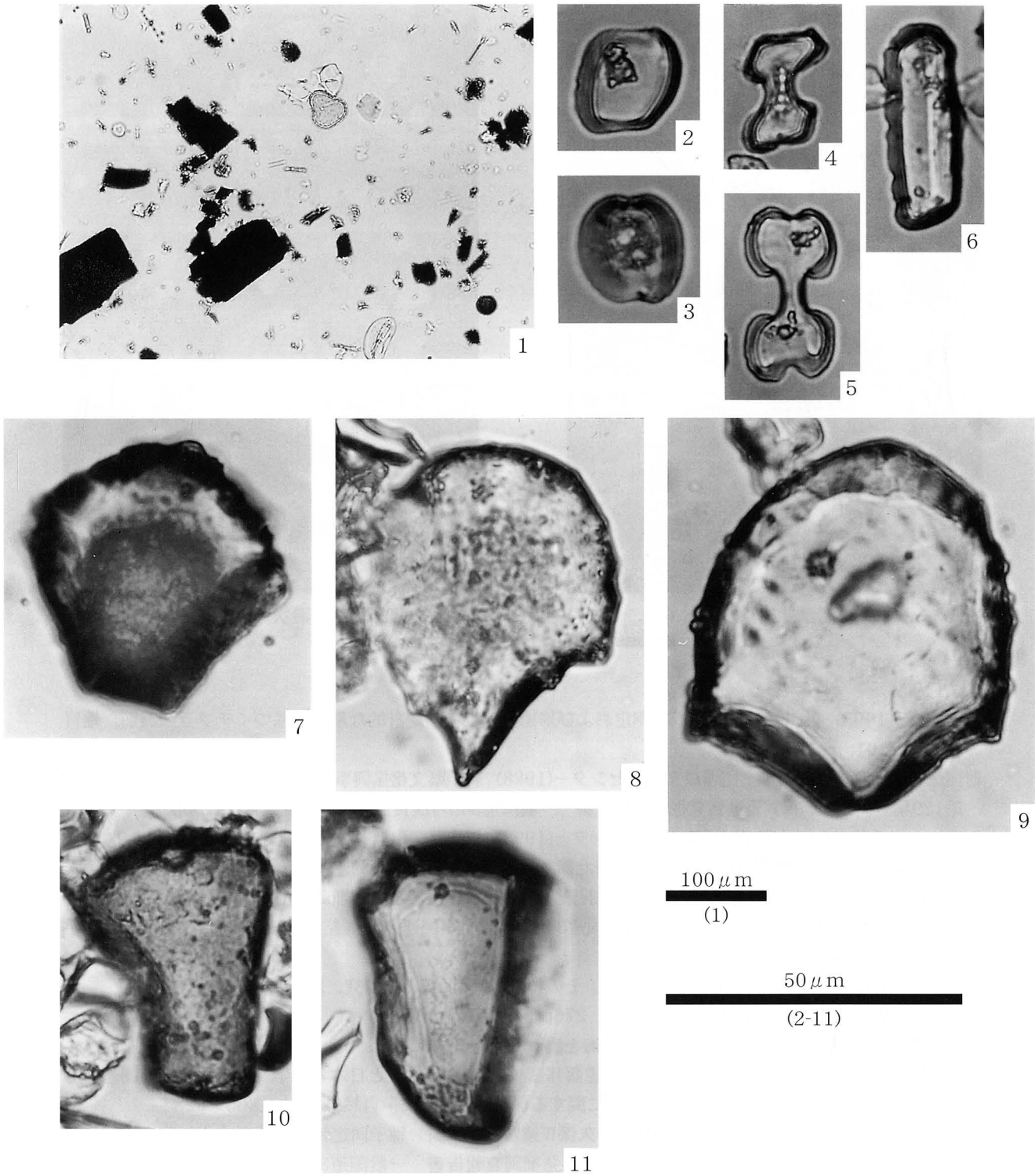
町田　洋・新井房夫・森脇　広（1981）日本海を渡ってきたテフラ.科学、51、p.562－569.

町田　洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦（1984）テフラと日本考古学－考古学研究と関連するテフラのカタログ－.渡辺直径編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」、p. 865－928

パリノ・サーヴェイ株式会社（1988）皀角子久保Ⅳ遺跡出土試料　種子同定報告.岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第129集「皀角子久保Ⅳ遺跡発掘調査報告書　一般国道340号改良工事関連発掘調査」、p. 129－134. 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1992）種子同定および植物珪酸体分析報告.岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第160集「上鬼柳Ⅳ遺跡発掘調査報告書　東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査」、p. 177－188. 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター.

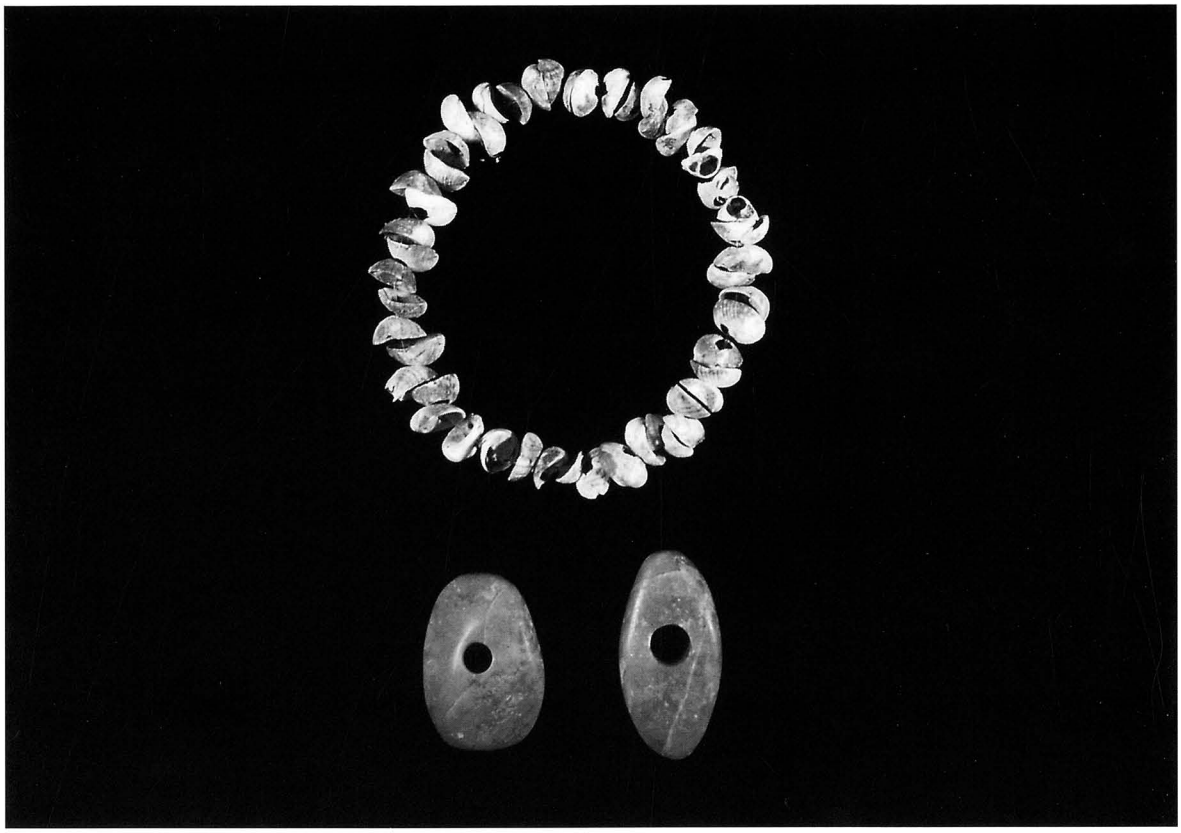
図版２　花粉分析プレパラートの状況写真・植物珪酸体

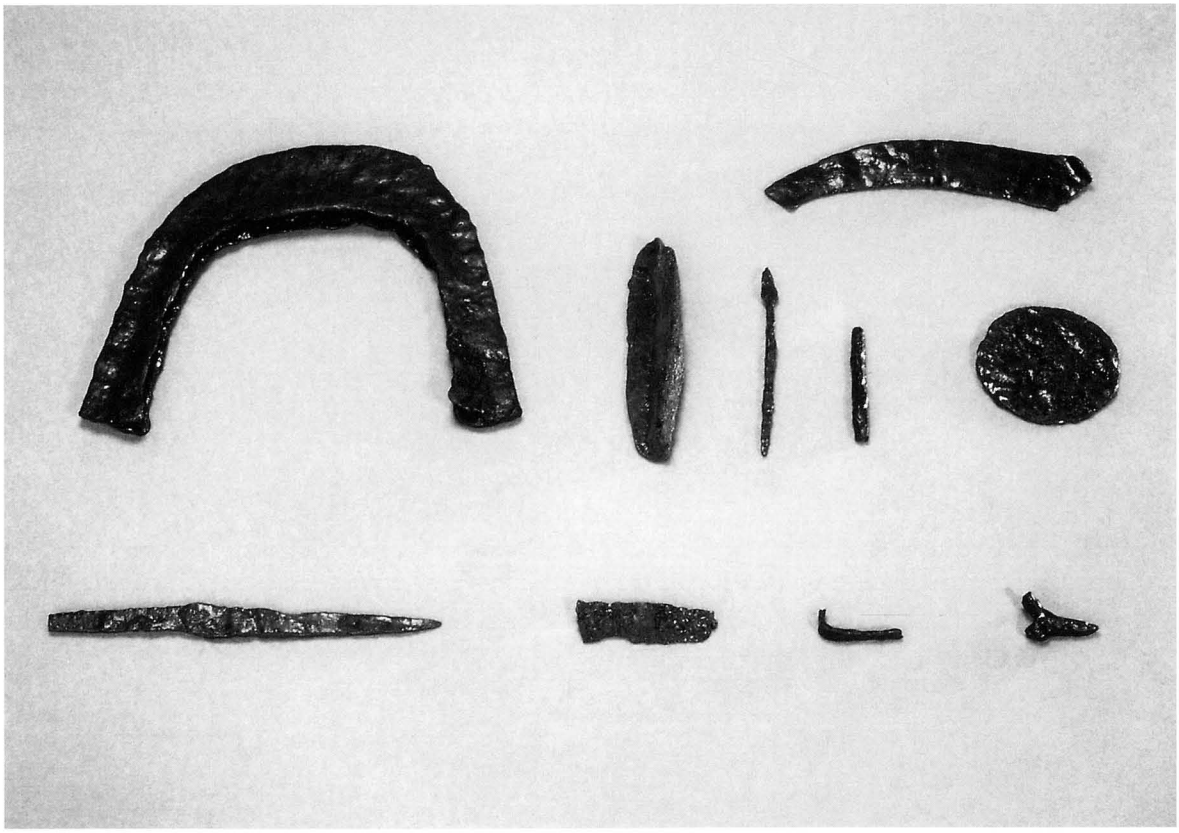


1.状況写真（５号溝状遺構）
2.ヨシ属短細胞珪酸体（畑作跡；９）
3.ヨシ属短細胞珪酸体（畑作跡；４）
4.ススキ族短細胞珪酸体（畑作跡；９）
5.ススキ属短細胞珪酸体（畑作跡；４）
6.イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体（畑作跡；９）
7.タケ亜科機動細胞珪酸体（畑作跡；４）
8.ヨシ属機動細胞珪酸体（畑作跡；９）
9.ヨシ属機動細胞珪酸体（畑作跡；４）
10.ウシクサ族機動細胞珪酸体（畑作跡；４）
11.ウシクサ族機動細胞珪酸体（畑作跡；９）

写真図版２　プレパラート

写　真　図　版





写真図版１ 出土遺物

調査区全景（東から）

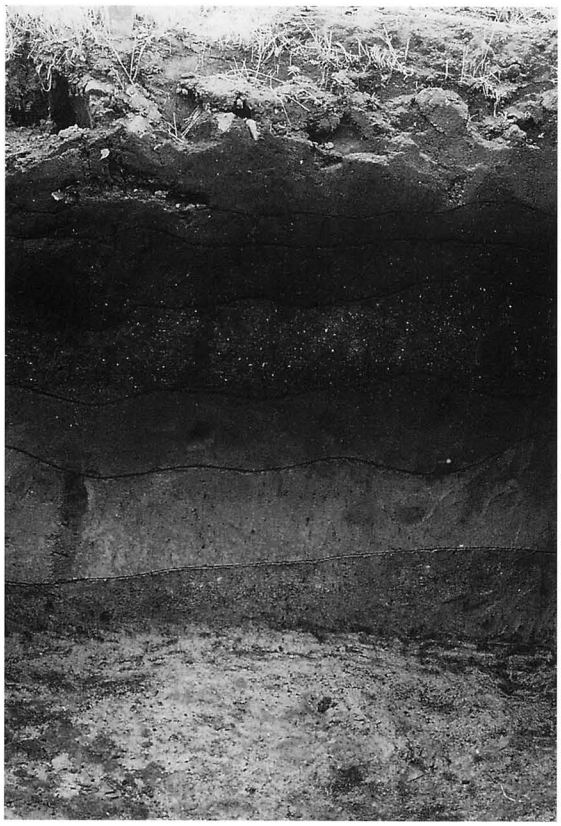
調査区北側近景（東から）

写真図版２　　空中写真１

調査区遠景（西から）

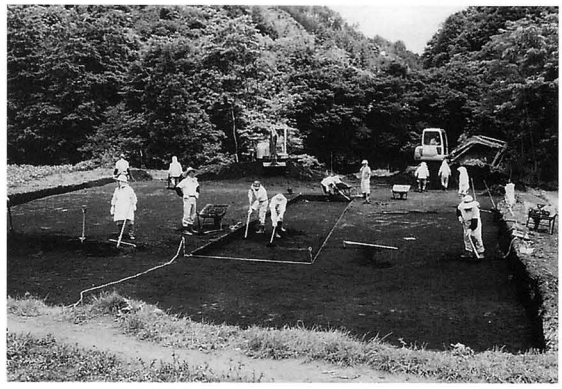
調査区遠景（南から）

写真図版３　　空中写真２



基本層序

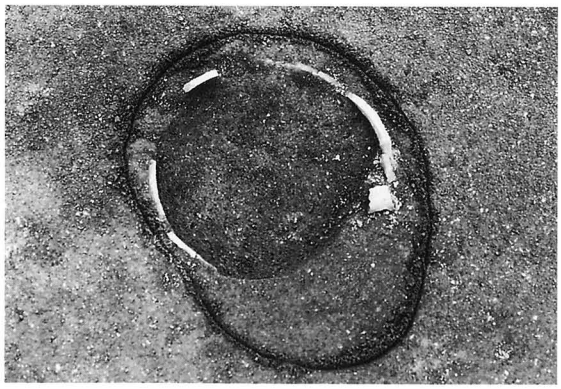
調査前風景



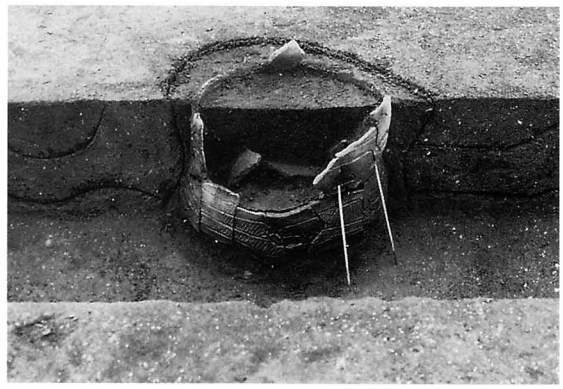
検出作業風景

1号埋設土器断面

遺物出土状況



2号埋設土器平面



断面

写真図版4　　基本層地・埋設土器

1号竪穴住居跡平面

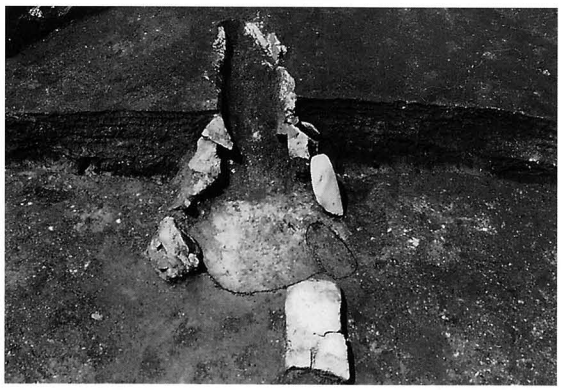
土 層 断 面

燃焼部断面

写真図版5　　1号竪穴住居跡

2号竪穴住居跡平面

土 層 断 面

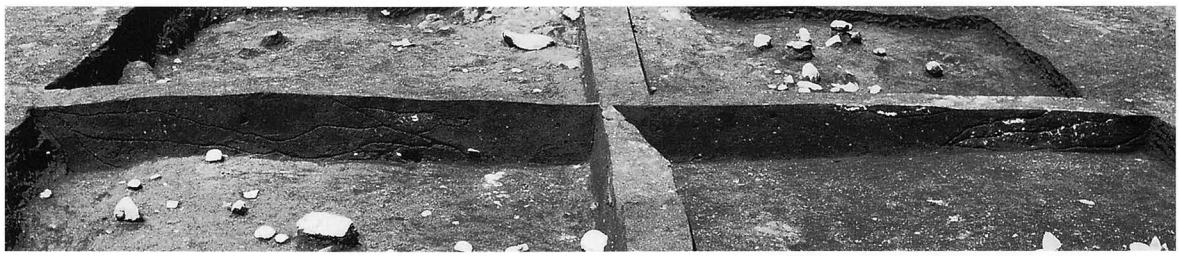


カマド平面

袖部・燃焼部断面

写真図版6　　2号竪穴住居跡

3号竪穴住居跡平面



土 層 断 面

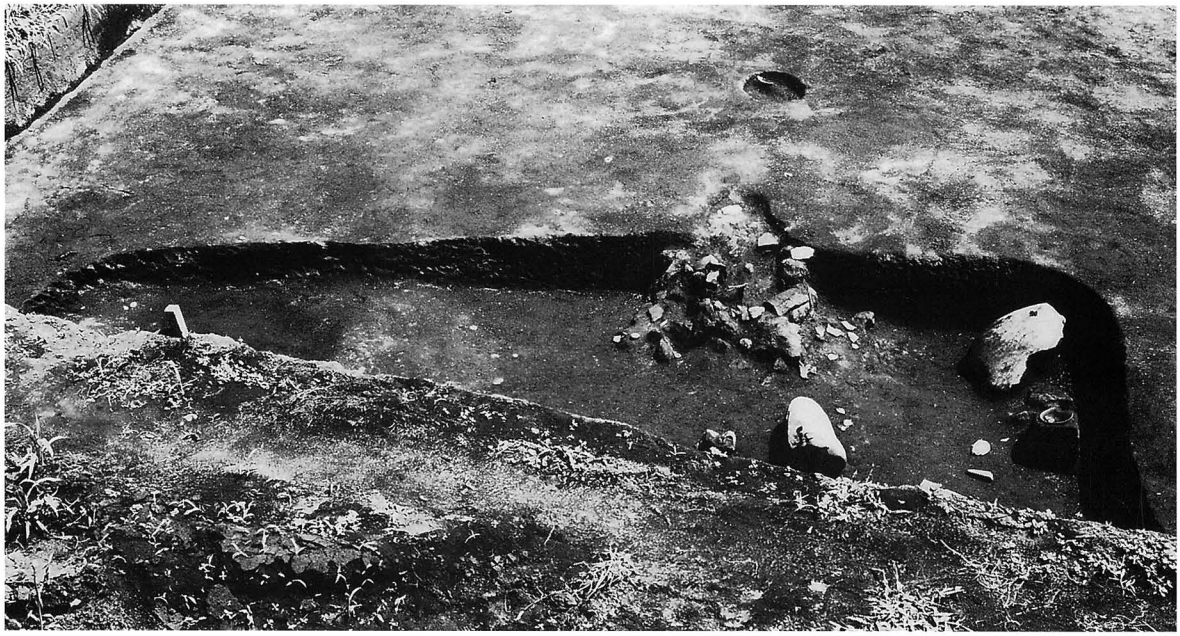
カマド平面

袖部・燃焼部断面

煙道部・燃焼部断面

柱穴完堀

写真図版7　3号竪穴住居跡



4号竪穴住居跡平面

土 層 断 面

袖部・燃焼部断面

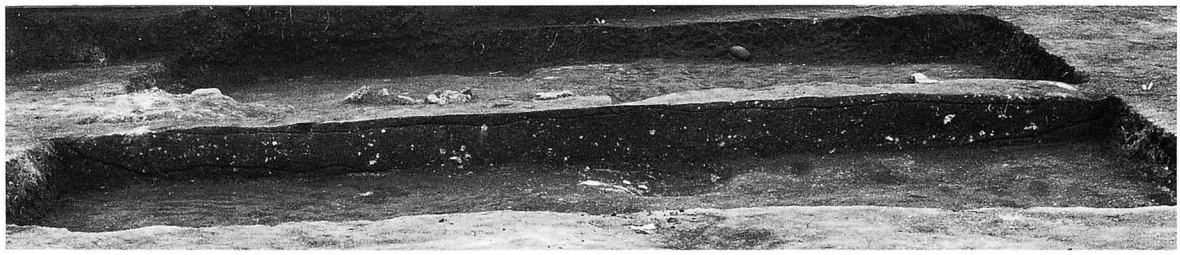
煙道部断面

住居内土坑平面

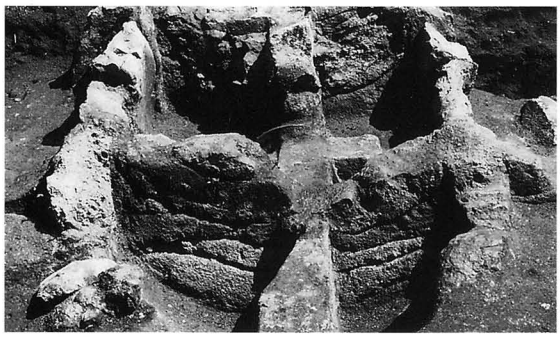
土坑断面

写真図版８　　４号竪穴住居跡

5号竪穴住居跡平面

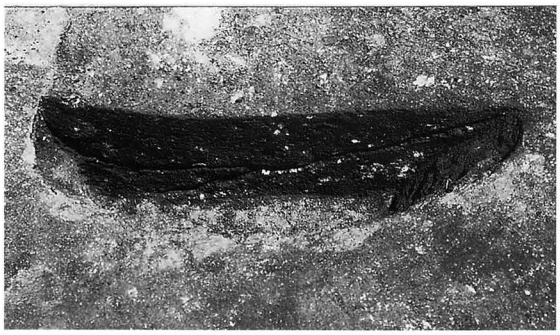


土層断面



袖部・燃焼部断面

煙道部断面(新)

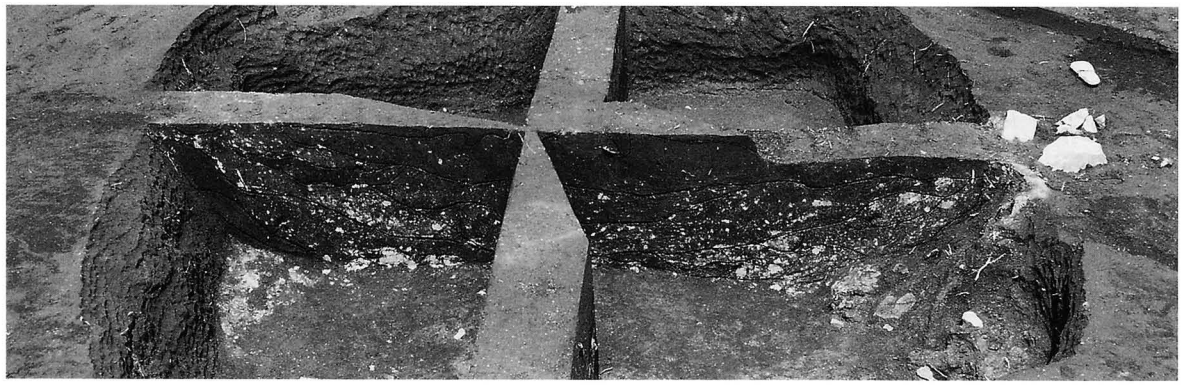


住居内土坑断面

煙道部断面(旧)

写真図版9　　5号竪穴住居跡

6号竪穴住居跡平面



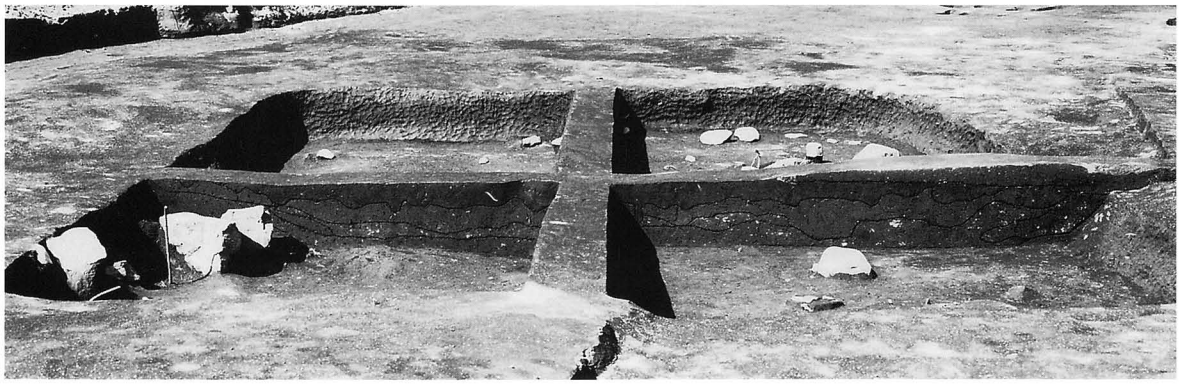
土層断面

カマド平面

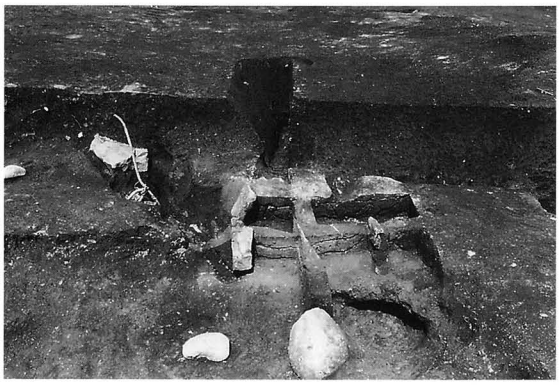
燃焼部断面

写真図版10　　6号竪穴住居跡

7号竪穴住居跡平面



土層断面

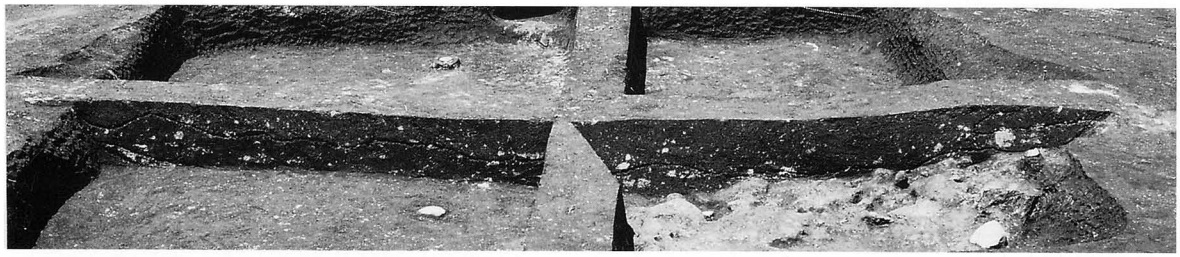


燃焼部断面

P3平面

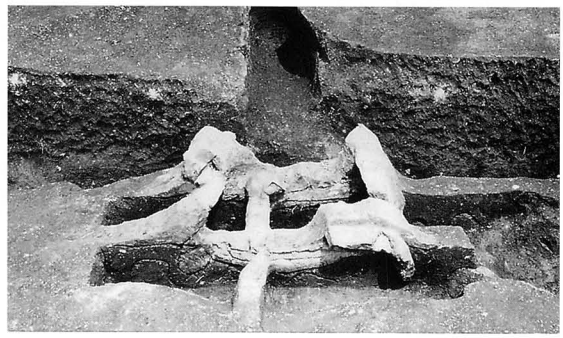
写真図版11　　7号竪穴住居跡

8号竪穴住居跡平面

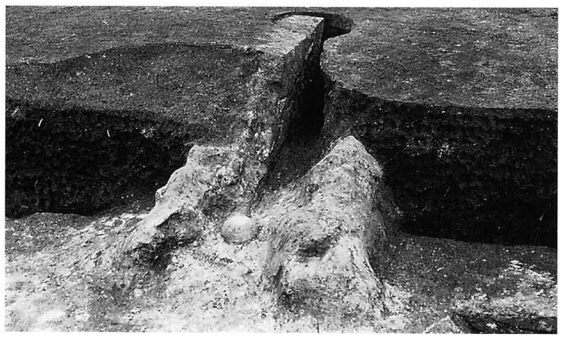


土層断面

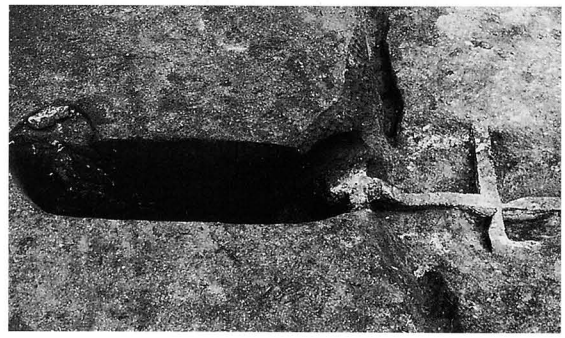
カマド焼土検出状況



袖部・燃焼部断面



煙道部断面(新)

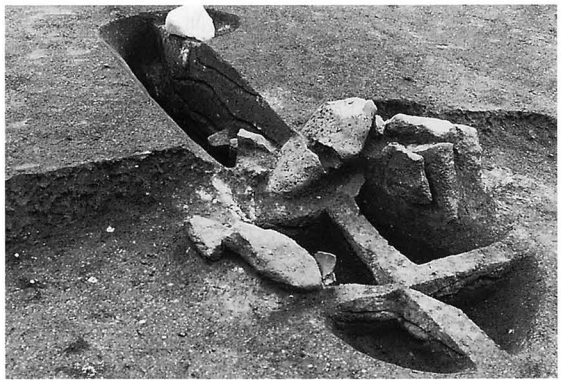


煙道部・燃焼部断面(旧)

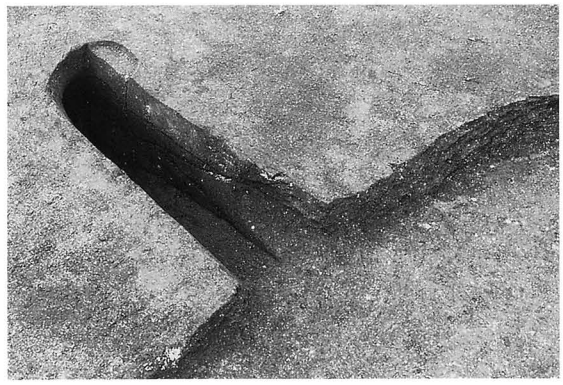
写真図版12　　8号竪穴住居跡

9号竪穴住居跡平面

土層断面

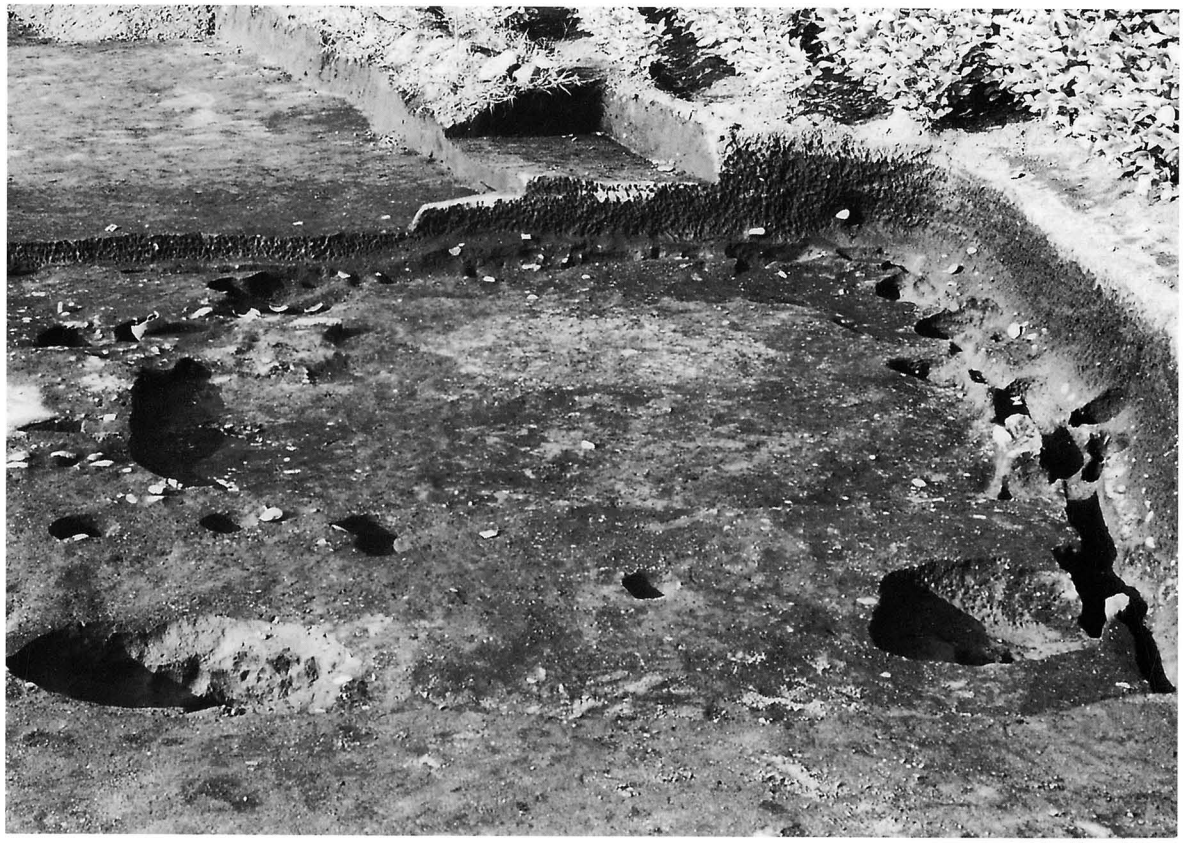


燃焼部・燃焼部断面(新)



煙道部断面(旧)

写真図版13　　9号竪穴住居跡



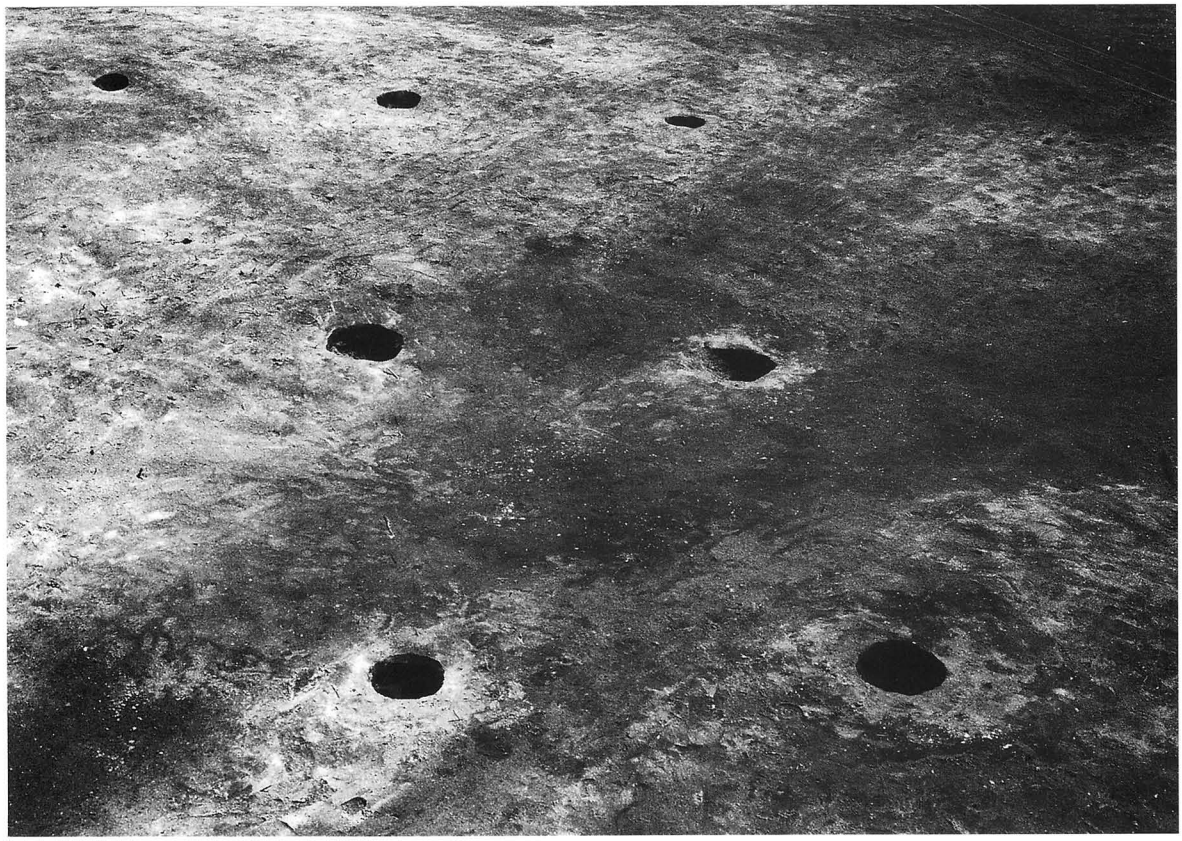
10号竪穴住居跡平面

土 層 断 面

袖部・燃焼部断面

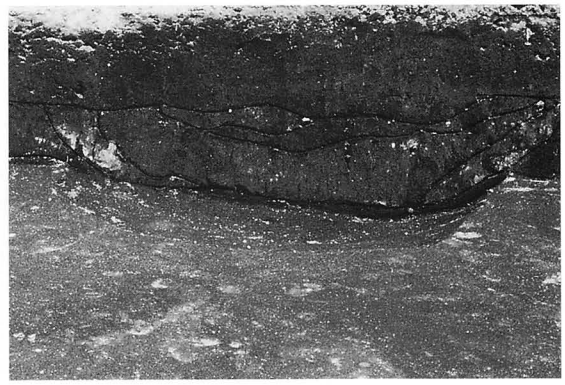
煙道部断面

写真図版14　　10号竪穴住居



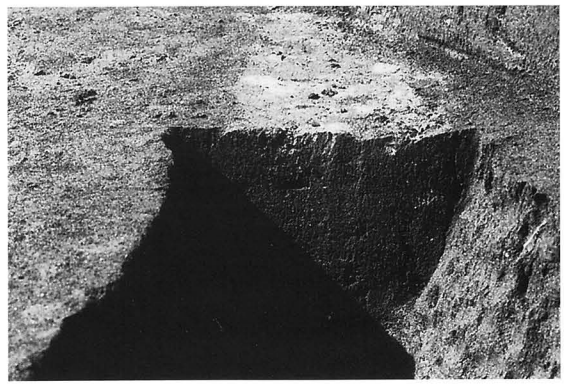
1号掘立柱建物跡平面

1号土坑平面



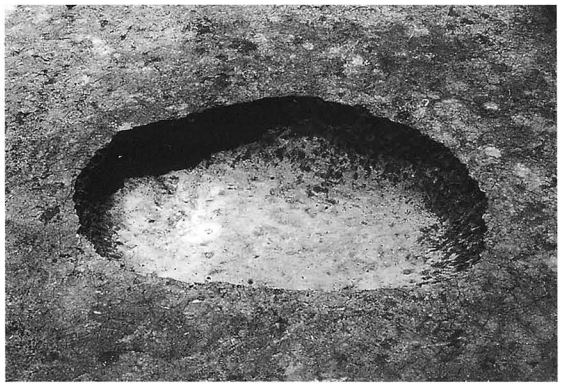
断面

2号土坑平面

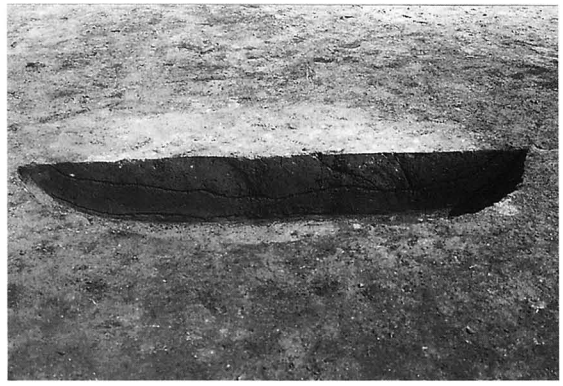


断面

写真図版15　　1号掘立柱建物跡・1・2号土坑

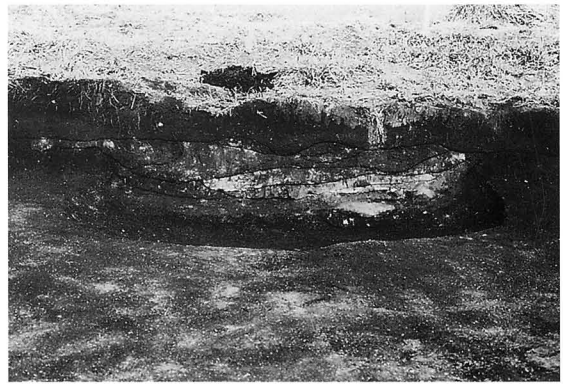


3号土坑平面



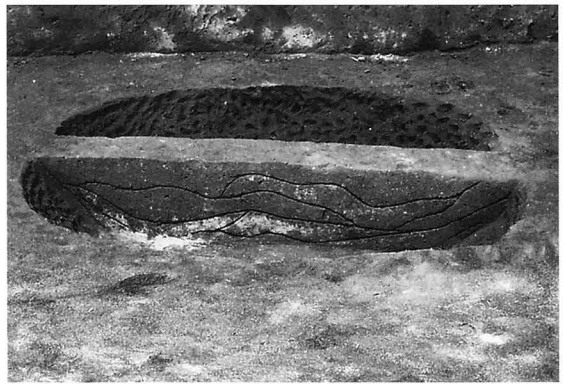
断面

4号土坑平面



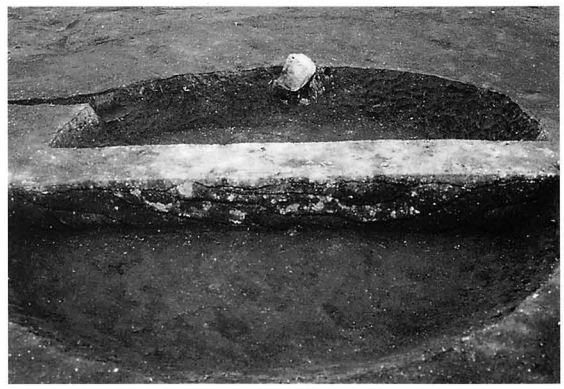
断面

5号土坑平面



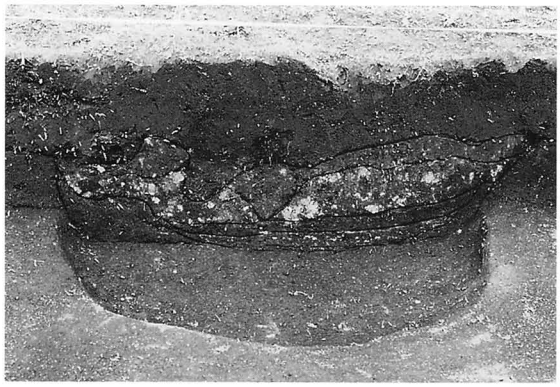
断面

6号土坑平面

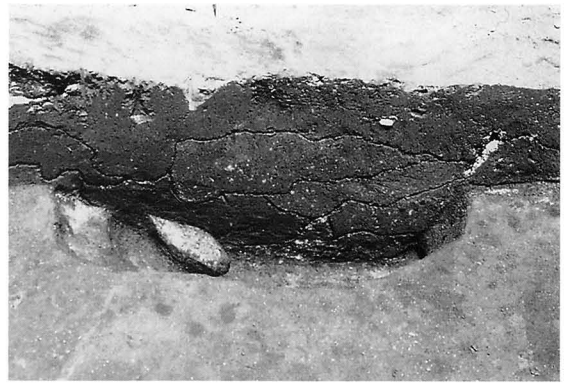


断面

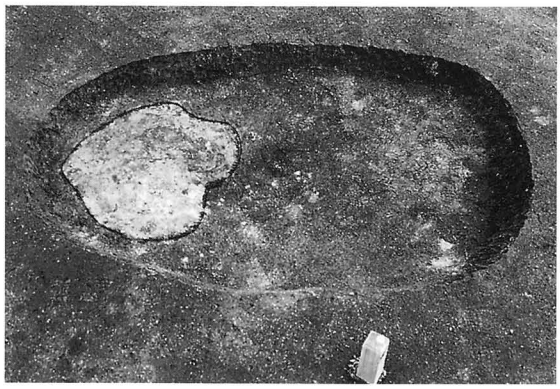
写真図版16　　3～6号土坑



7号土坑平面・断面

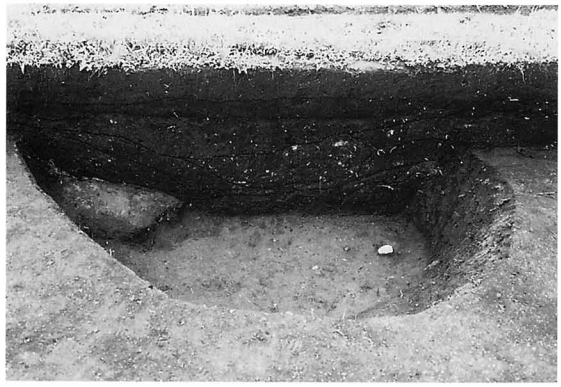


8号土坑平面・断面



9号土坑平面

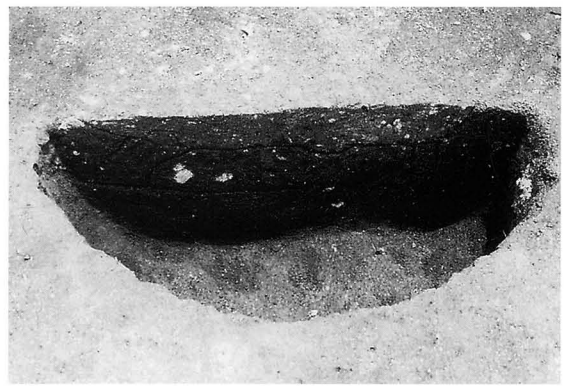
断面



10号土坑平面・断面

13号土坑平面・断面

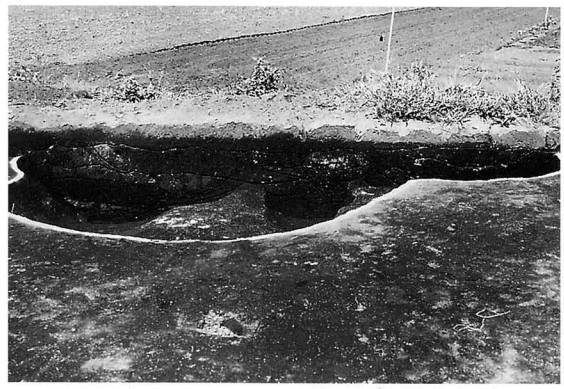
12号土坑平面



断面

写真図版17　　7～10，12～13号土坑

11・14・15・16号土坑平面

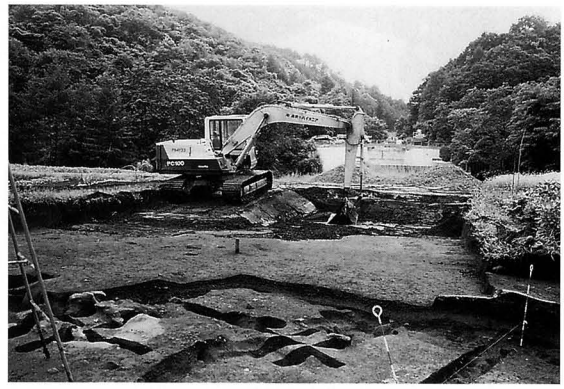


断面

17・18号土坑平面

17号土坑断面

18号土坑平面

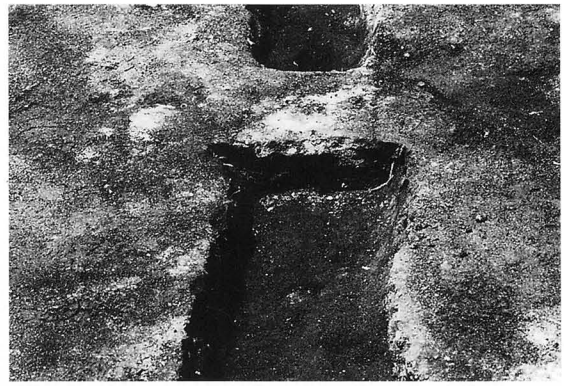


写真図版18　　11・14～18号土坑

1号溝状遺構検出状況

2・3号溝状遺構検出状況

写真図版19　　1～3号畝間状遺構



2号溝状遺構断面

3号溝状遺構断面

2・3号溝状遺構完掘

写真図版20　　2・3号畝間状遺構

5号溝状遺構完掘

断面①

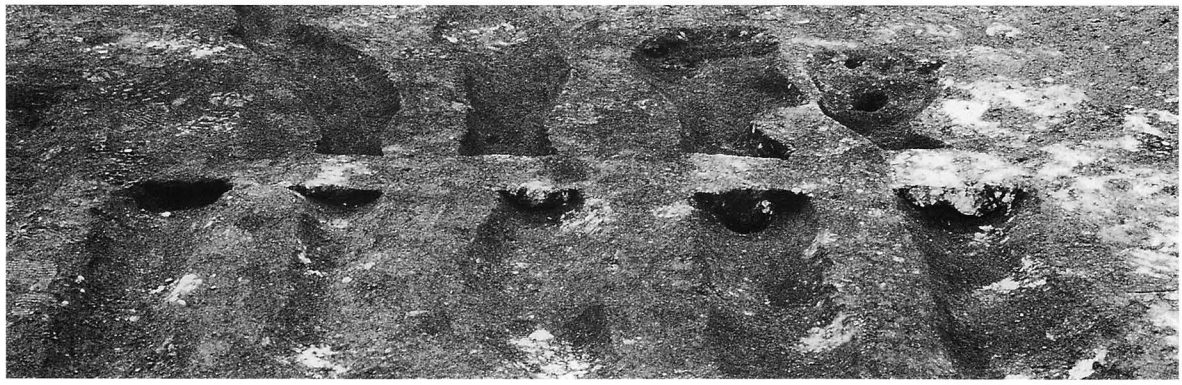
断面②

サンプリング風景

写真図版21　　4号畝間状遺構

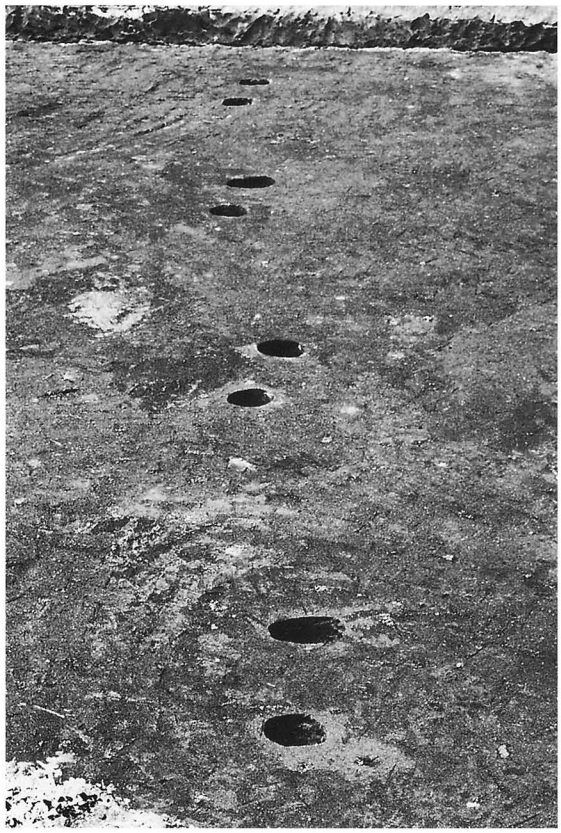
4号溝状遺構完掘

断面①

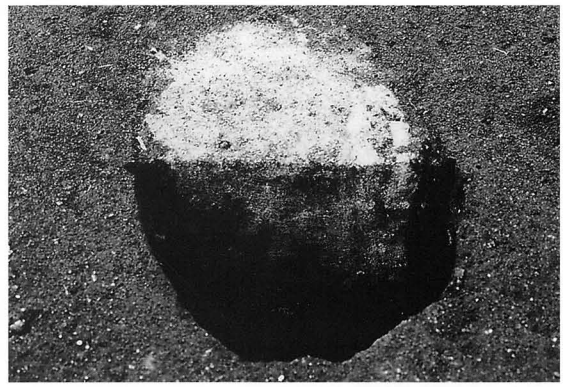


断面②

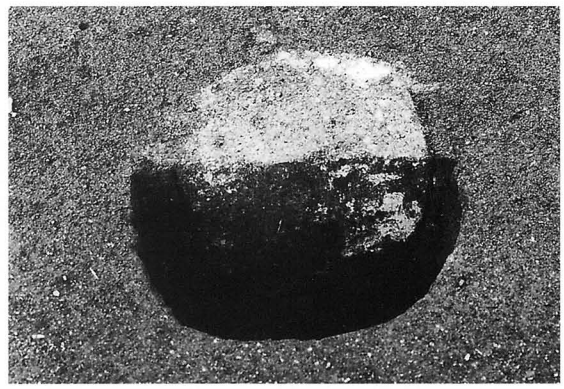
写真図版22　　5号畝間状遺構



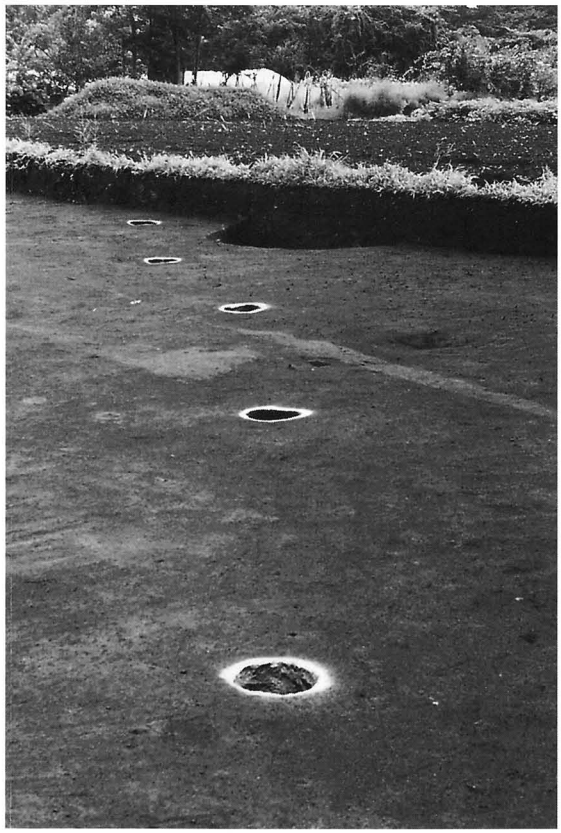
1号柱穴列　　平面



断面(1)



断面(2)

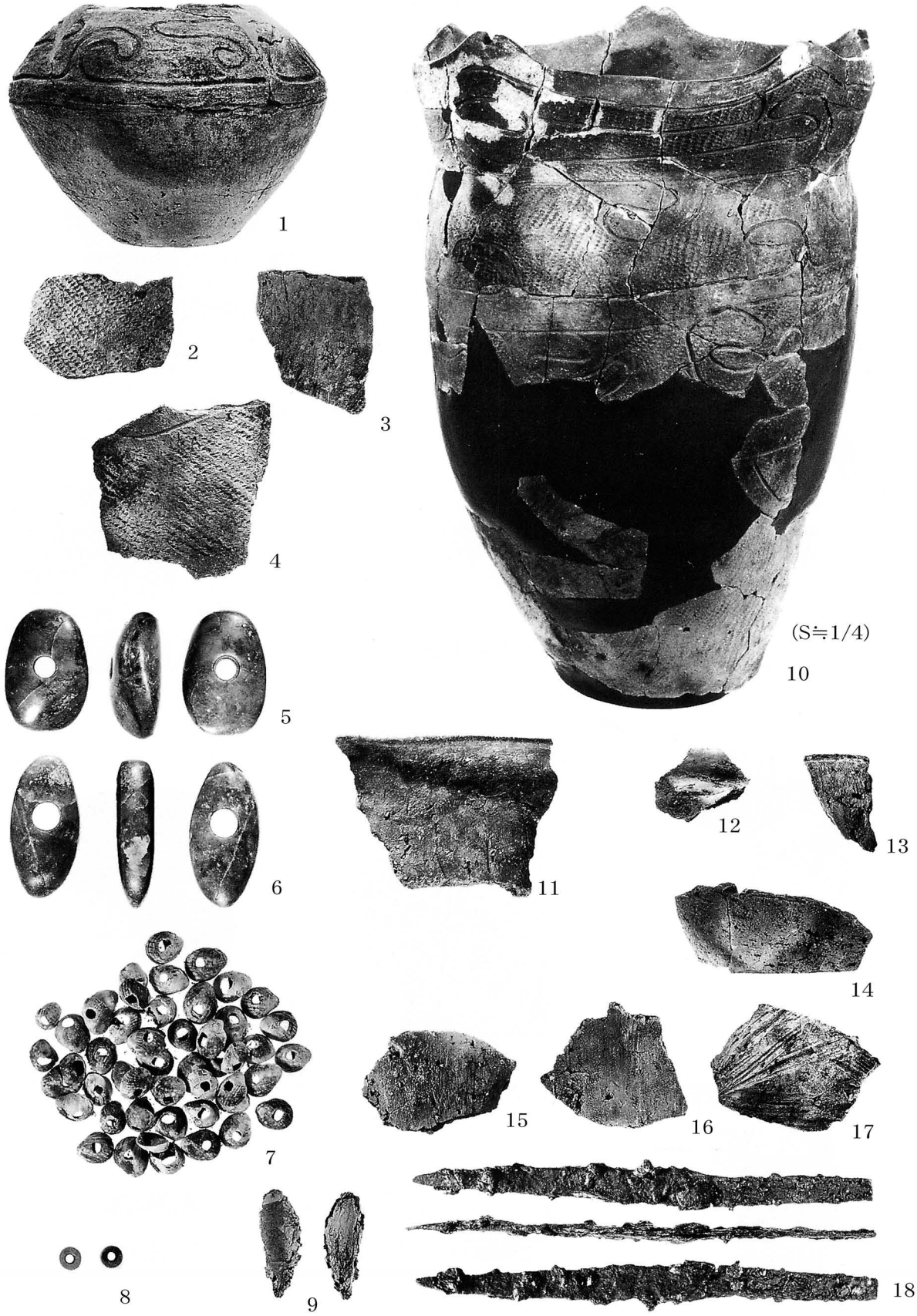


2号柱穴列平面

断面(1)

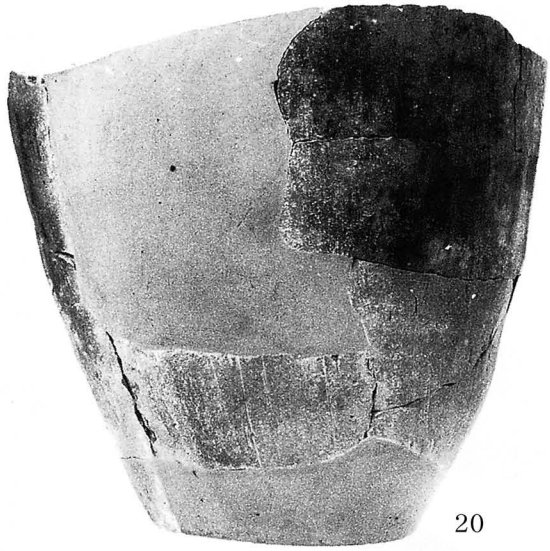
断面(2)

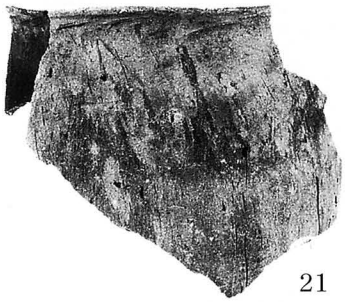
写真図版23　　1～2号柱穴列



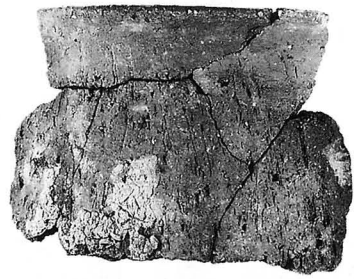
写真図版24　　1～2号埋設土器遺物・1号竪穴住居跡出土遺物

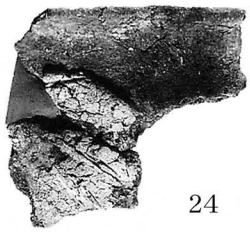
19


20


21

22


23


24

25

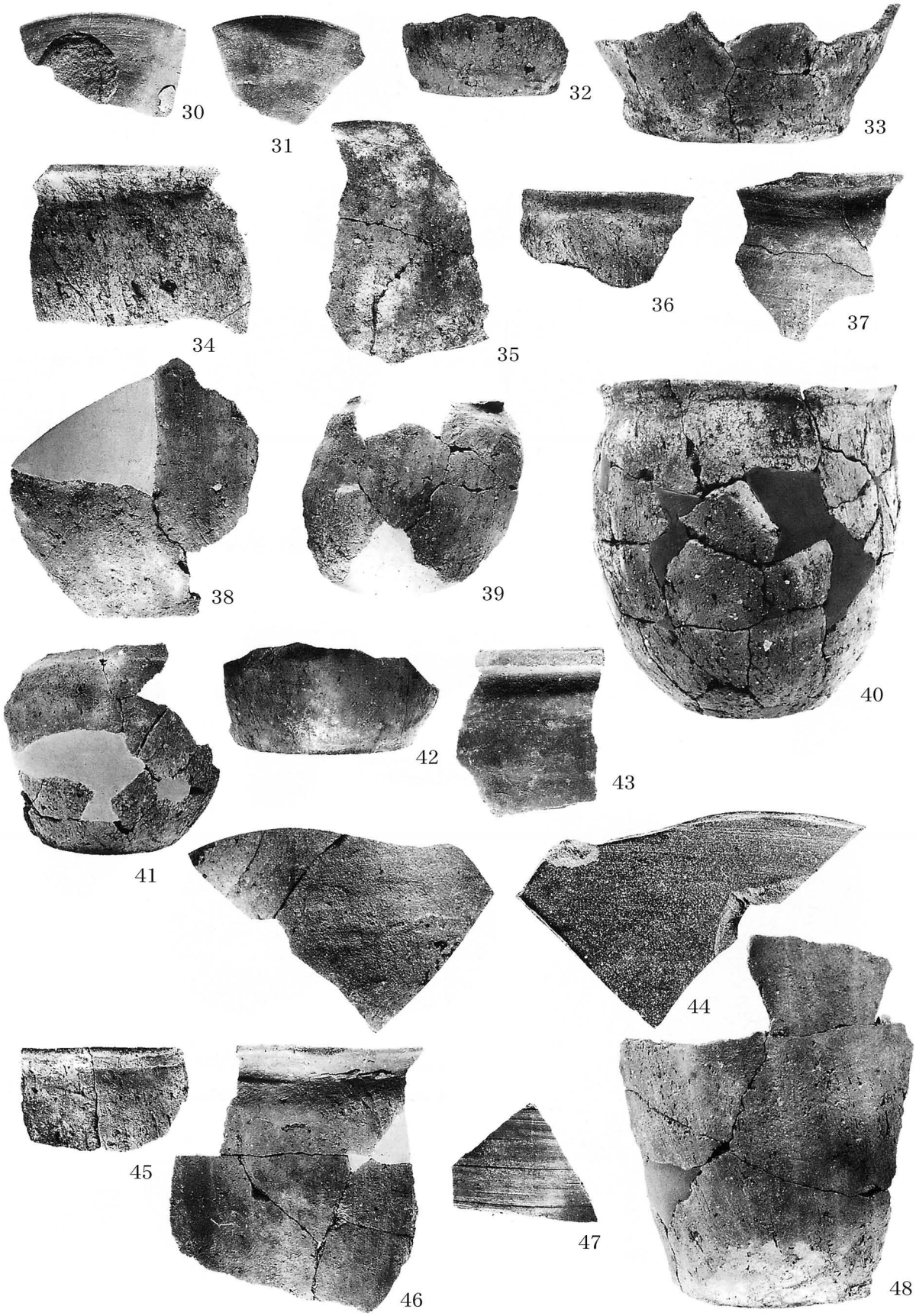
26

27

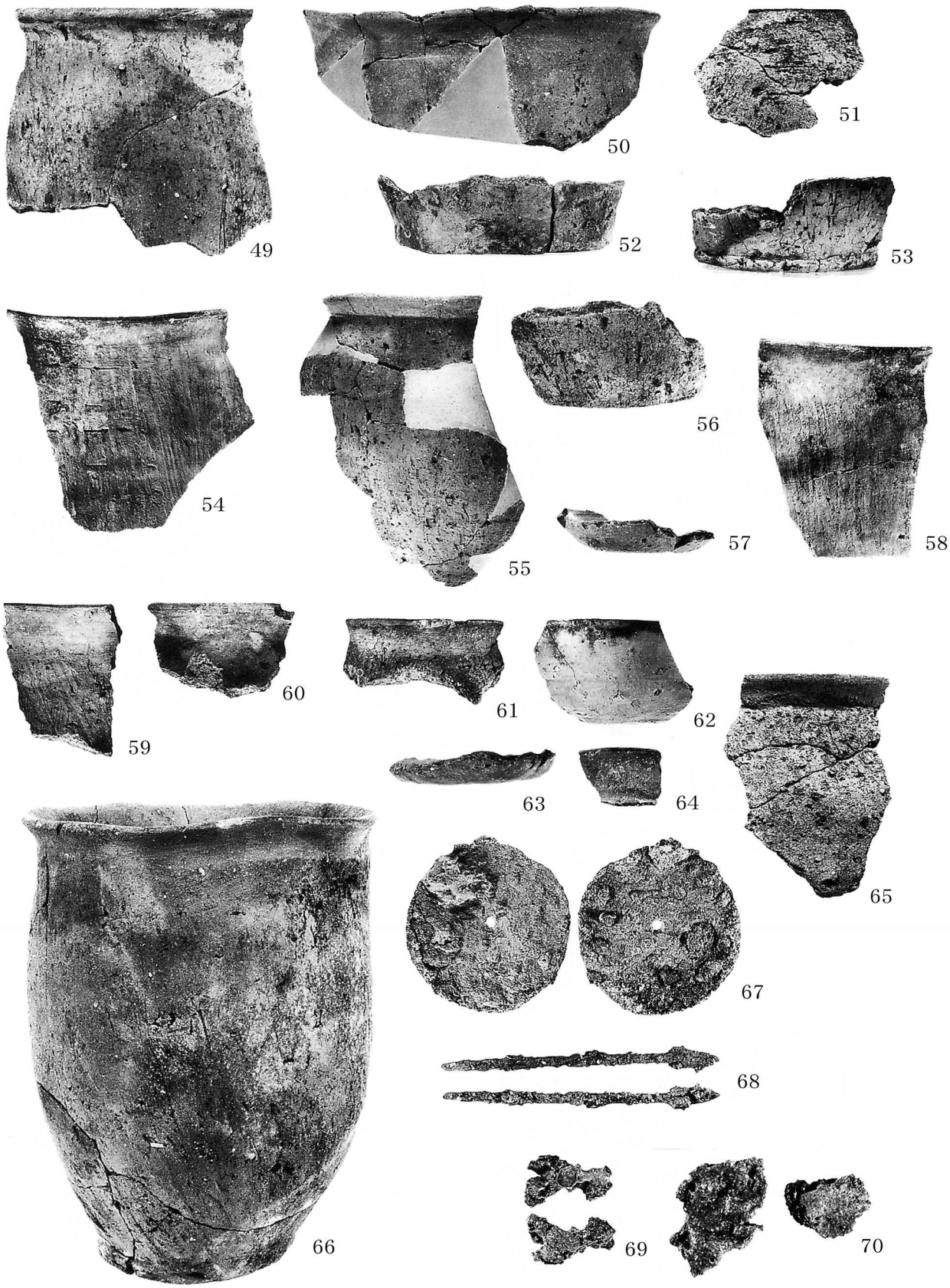
28

29

写真図版25　　２号竪穴住居跡出土遺物



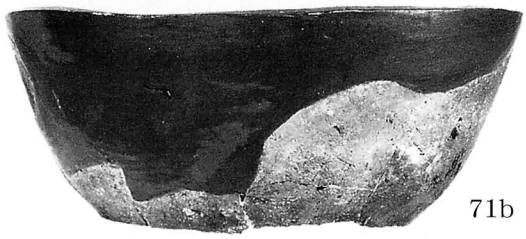
写真図版26　　3号竪穴住居跡出土遺物①



写真図版27　　3号竪穴住居跡出土遺物②

71a

72



71b

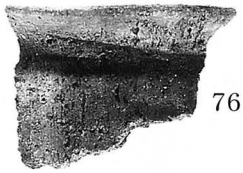
73

74

写真図版28　　4号竪穴住居跡出土遺物 ①

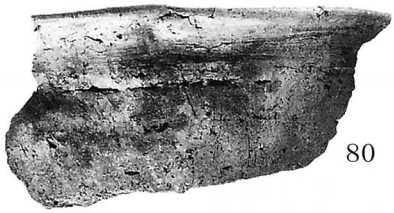
75

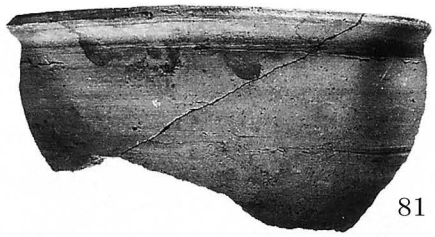
78


76

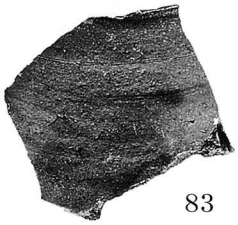
77

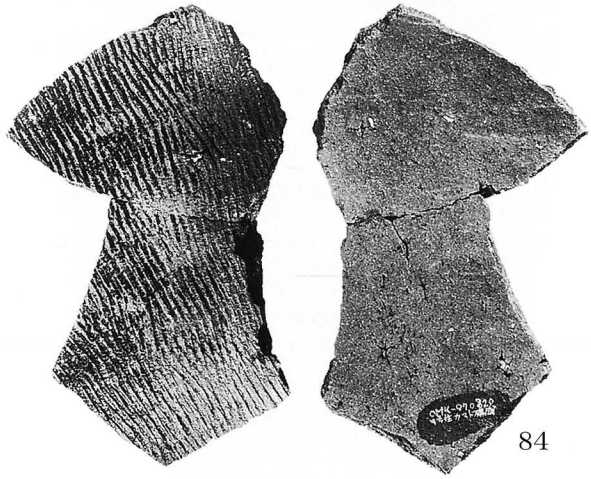
79


80

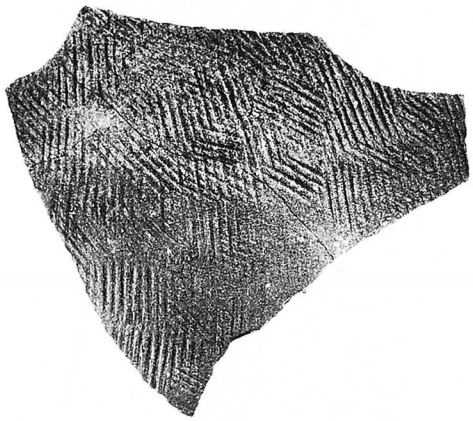

81

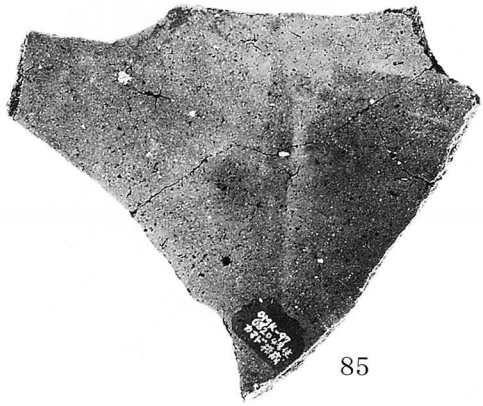
82


83


84

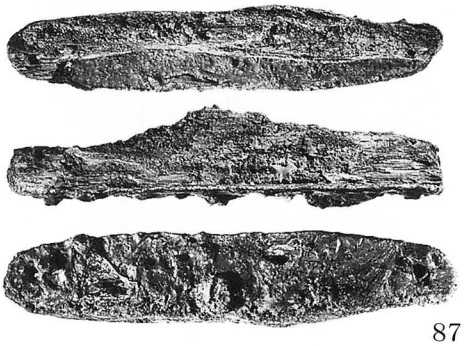
写真図版29　　4号竪穴住居跡出土遺物 ②





85

86



87

88

90

89

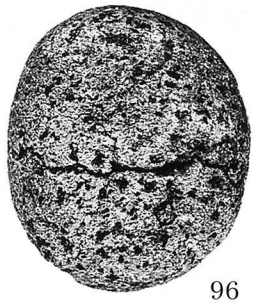
91

92

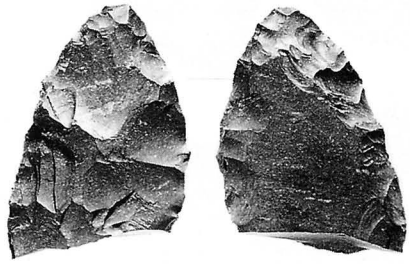
95

93

94

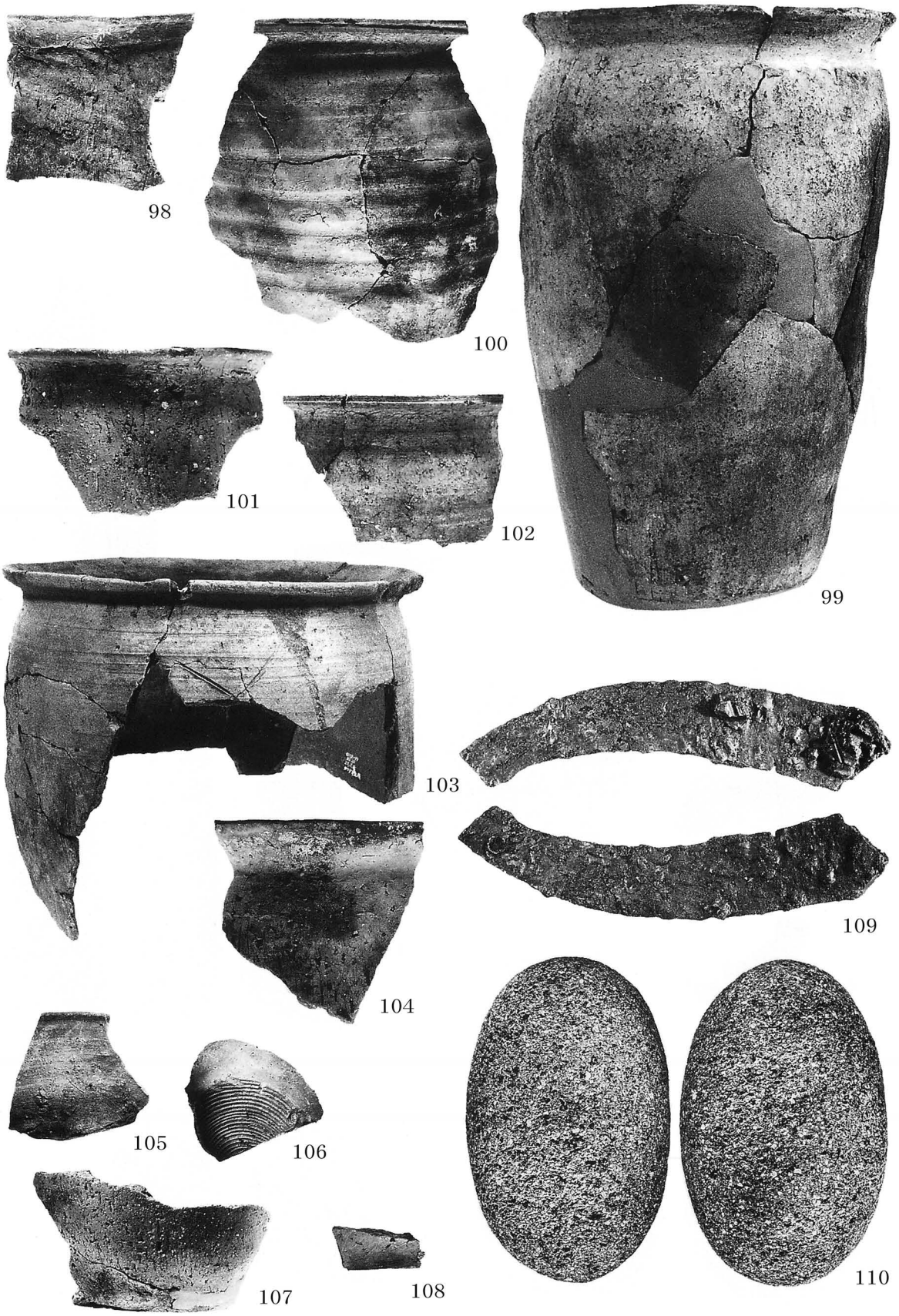


96



97

写真図版30　　4号竪穴住居跡出土遺物 ③

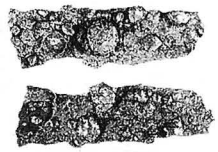


写真図版31　　5号竪穴住居跡出土遺物

111

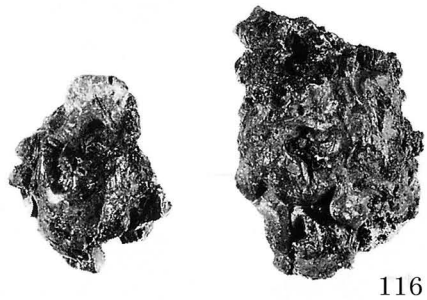
112

113



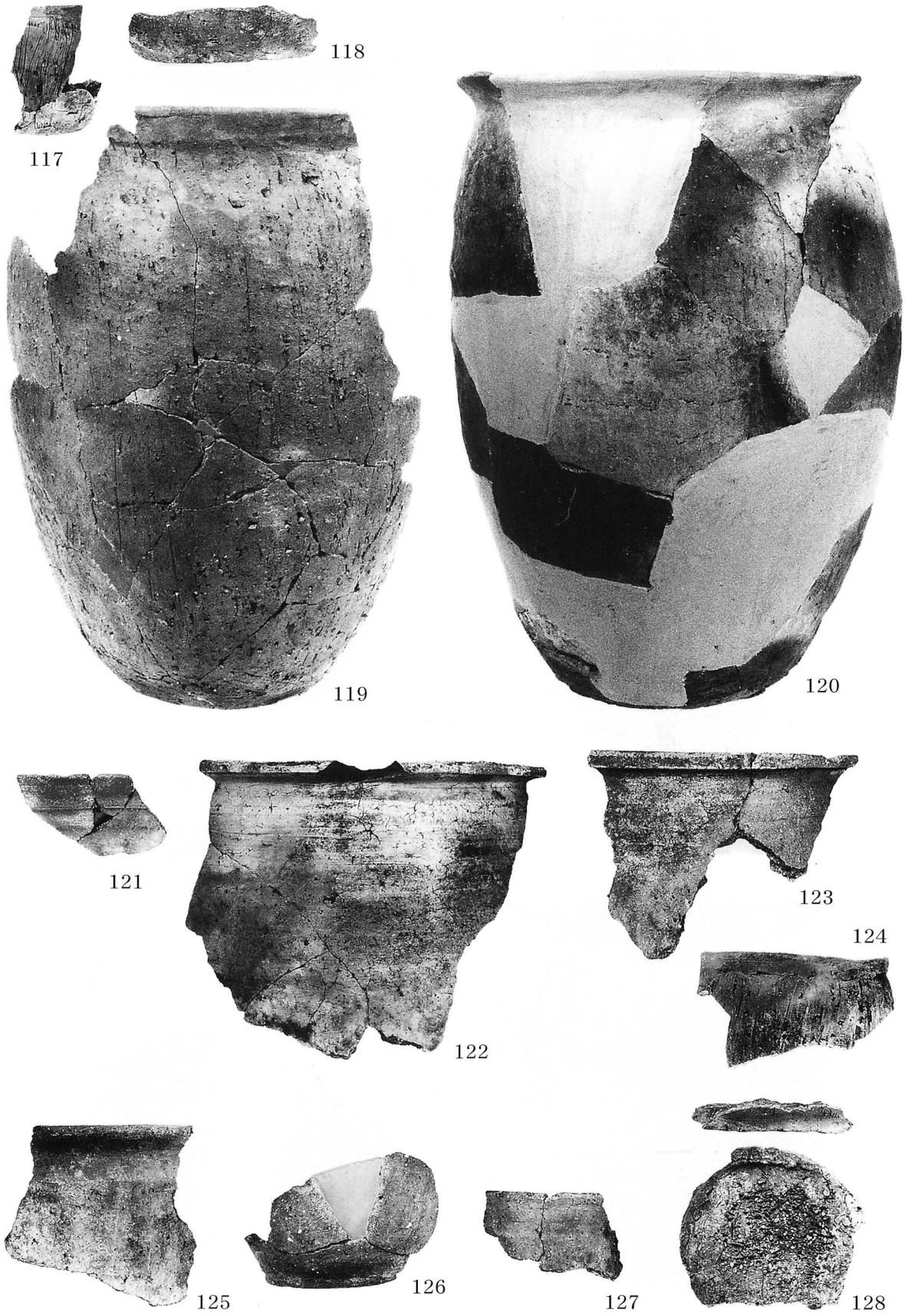
115

114



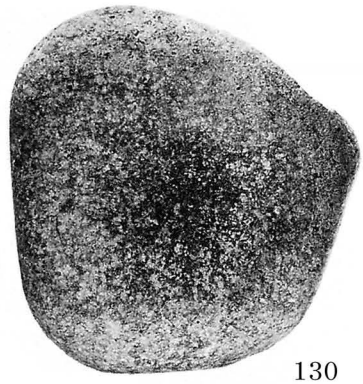
116

写真図版32　　6号竪穴住居跡出土遺物



写真図版33　　7号竪穴住居跡出土遺物
8号竪穴住居跡出土遺物 ①

129


130

131

132

134

133

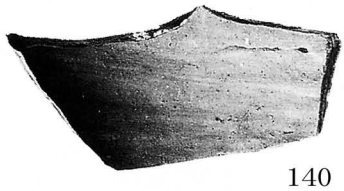
135

136

137

138

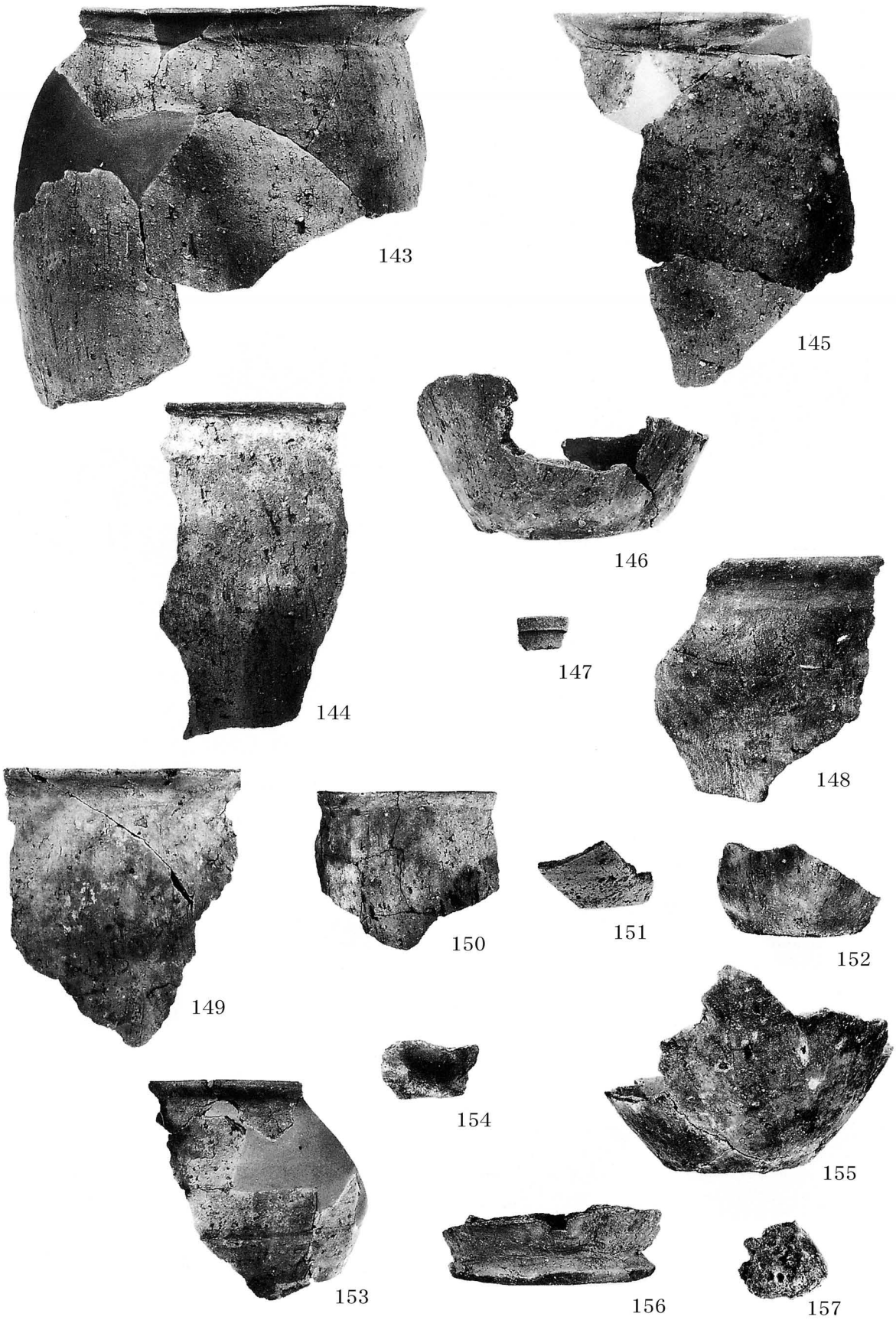
139


140

141

142

写真図版34　8号竪穴住居跡出土遺物 ②



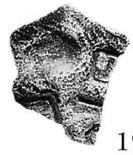
写真図版35　　9号竪穴住居出土遺物
10号竪穴住居跡出土遺物

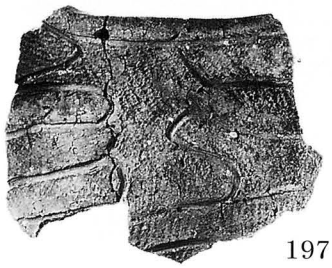
写真図版36　その他遺構内出土遺物

193

194

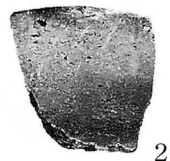
195


196


197

198

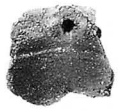
199


200

201

202

203


204

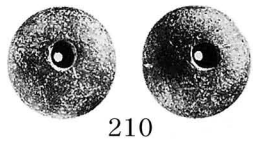
205

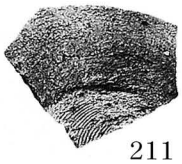
206

207

208

209


210

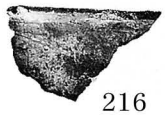

211

212

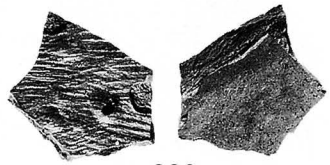
213

214

215


216

217


220

218

219

221

222

223

写真図版37　遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	おおむかいうわだいらいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	大向上平遺跡発掘調査報告書
副書名	広域農道整備事業関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第３３５集
編集者名	中村直美
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　盛岡市下飯岡11－185
発行年月日	西暦2000年１月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査機関	調査面積	調査原因
おおむかいうわだいら 大向上平遺跡	いわてけん 岩手県 にのへしにたどりあざ 二戸市似鳥字 おおむかいうわだいら 大向上平85ほか	03213	JE18-0199	40° 14′ 6″	141° 13′ 39″	平成9年7月1日～8月31日 平成10年6月1日～8月31日	平成9年2000㎡ 平成10年3000㎡	広域農道整備事業(二戸地区)

所集遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大向上平遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代	埋設土器 竪穴住居跡 堀立柱建物跡 土坑 畝間状遺構 柱穴列	硬玉製大珠２点 アマオブネガイ製小玉70点以上 土師器 須恵器 鉄製品(鋤・鎌・装着式手鎌・紡錘車・鉄鏃)	埋設土器中より硬玉製大珠とアマオブネ貝が出土した。

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所　　長　佐藤　基
副所長　伊藤直司

〔管理課〕

課　　長　川浪清徳
主　　査　立花多加志
主　　事　日影睦夫

〔調査第一課〕

課　　長　小田野哲憲
課長補佐　佐々木清文
主任文化財専門調査員　酒井宗孝
〃　小山内透
文化財専門調査員　中田迪
〃　吉田充
〃　鎌田勉
〃　小笠原健一郎
〃　鳥居達人
〃　濱田宏
〃　佐々木信悦
〃　安藤由紀夫
〃　木戸口俊子
〃　小野寺正之
〃　阿部勝則
〃　千葉正彦
〃　羽柴直人
〃　高木晃
〃　佐藤淳一
〃　菅原靖男
〃　半澤武彦
〃　浅倉雄大
〃　菊池貴広
〃　村上拓
〃　本多準一郎
〃　中村直美
〃　丸山浩治
期限付専門職員　佐藤綾子
〃　平めぐみ
〃　藤原賢徳
〃　江藤敦
〃　小林弘卓
〃　小原広幸
嘱　　託　藤島恵子
〃　新田トヨ
〃　佐々木光重

〔調査第二課〕

課　　長　高橋與右衛門
課長補佐　中川重紀
主任文化財専門調査員　高橋義介
文化財専門調査員　古舘貞身
〃　阿部眞澄
〃　松尾芳幸
〃　小原眞一
〃　工藤徹
〃　前田稔
〃　金子佐知子
〃　岩渕計
〃　早坂悟
〃　佐々木務
〃　晴山雅光
〃　星雅之
〃　佐々木琢
〃　杉沢昭太郎
〃　溜浩二郎
〃　北村忠昭
〃　金子昭彦
期限付専門職員　鈴木聡
〃　平澤里香
〃　布谷義彦
〃　山口俊規
〃　熊谷佳恵
〃　吉田里和
〃　北田勲
〃　吉川徹

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第335集

大向上平遺跡発掘調査報告書

広域農道整備事業関連遺跡発掘調査

発行　平成12年１月31日

発行　(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化センター
〒020-0853　盛岡市下飯岡11－185
TEL (019) 638－9001
FAX (019) 638－8563
印刷　第一印刷有限会社
〒020-0122　盛岡市みたけ４丁目６－40
TEL (019) 646－6001

©(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2000